別冊宝島183

「日本の教育」改造案

こうすれば日本の学校はガラリと変わる!

文部省も、財界も、
理念的平等主義も、熱心教師も、
もはや当てにはならない！
ならば、我れわれフツーの教師が
自らの手で学校改革のノロシを上げよう
現実的で無理なく
学校問題を解決する――
これが我れわれの考える学校改造案だ！







別冊宝島183

「日本の教育」改造案

こうすれば日本の学校はガラリと変わる!



日本の教育改造案



こうすれば日本の学校は**ガラリ**と変わる!

子どもより先生が大事！【宣言】

最初に、私たちはこう宣言する。

この本は、教育熱心な親や教育評論家センセイや教育行政官僚などを対象としたものではなく、あくまで、学校現場という泥沼で日々苦闘している教師に向けてつくられたものである、と。

私たちの結論はまったく簡単なものだ——**「速やかに公教育の機能を縮小せよ」**。

「そんな馬鹿な！」と怒る方、「何だ、そんなことか」と拍子抜けしてしまう方、いろいろあろうことかと思う。しかし、この結論こそ唯一正しい選択であるということが、じつはこの本を読むと自ずと明らかになるのである。

その意味で、自分たちで言うのもなんだが、これはじつによくできた本である。

まず目次をじっと見てもらえればわかることだが、ここには、学校現場をめぐる一見ミクロなテーマから最後の改造の提言に至るまで、現在の学校問題の本質に対する透徹した視点が貫かれている。それを理念的に語れば、たぶん〈自由〉と〈平等〉の対立という図式が浮かび上がるのだが、それをただ青臭く提唱するのではなく、もっとリアルに追求しようというのが、この本が最初から目指したものである。

この本の流れはつぎのようになっている。

改造すべき課題とは何か？　それはどこにあるのか？　これらを、まず学校**現場**の問題を細大もらさず洗い出すことで明らかにする。もの言わぬ教師たちのさまざまな「忍従と沈黙」のなかにこそ本当に考えるべきことがひそんでいる、というあたりまえの真実を共有したいのだ（**PART❶**）。

つぎに、戦後公教育を支えてきた**理念**の矛盾を根底からあばき出す。またそれをノーテンキに信じてきた平等論的理想主義者の言説や、それに対する反動から「今こそ戦前の教育の正道に戻れ！」とひたすら叫ぶ復古主義者の言説がなぜ無効かを明らかにする（**PART❷**）。

さらに、「すばらしい教育」の理想をふりかざして〈現在〉を撃つ**言説や実践**に鋭く迫り、本当にそんなものが成り立つのか、また、それが本当によいものかどうかを徹底的に検討する（**PART❸**）。

また、文部省を中心としたこれまでの**改革案**の主なものを具体的に検証することで、なぜそれがうまくいかなかったかを容赦なく明らかにする（**PART❹**）。

ここまでは、日本の教育の現状に対して否定語ばかり連ねていると見えるかもしれない。しかしそれは、そうするよりほかにこの錯綜した問題の本質に迫る道はありえないと確信しているからだ。さて、いよいよ、これからが私たちの出番である。

私たちの本が類書にはない独自の点があるとすれば、それはつぎのことだ。つまり「このままでは子どもがダメになる！」という平等論的理想主義者の立場や「このままでは日本がダメになる！」といった産業界や国家の立場には立っていないということである。

「**救われるべきは普通の教師**」――これが私たちの立場である。いうなればフツーの教師がフツーの教師として生きられる学校を求めるということ。教師に過大な責任と負担を押しつけるのではなく、公教育を小さくして、その外側にいかに多様な価値の世界を定着させるかということだ。それが結果的に子どものシアワセにもつながると私たちは信じている。

現場の教師が自らの生活の場である学校を変えるために考え抜いた提言は、必ずや読む者に勇気を与え、これから学校改造を考える人に充分に役に立つはずである。

私たちは、この本はおそらく十年はもつだろうと自負している。だが、本当は、この本の命数が速やかに尽きてほしいという思いもある。なぜならその時がやってきてこそ、私たちの学校改革構想が実を結びはじめたことになるからだ。

「日本の教育」改革委員会

別冊宝島一八三号「日本の教育」改造案　目次

【宣言】子どもより先生が大事！——2

PART▼▼❶ まず、いま学校の何が問題なのかを洗いだそう！

体罰……体罰はなぜなくならないのか？——夏木智……10
校則……校則はなぜ必要か!?——河原巧……14
制服……制服論議は現実の前ではすべて無効だ！——由紀草一……17
遅刻指導……遅刻はなぜ減らないか!?——佐藤通雅……21
アルバイト、バイク、校外指導……一律禁止は学校のアリバイ証明だ！——佐藤通雅……24
指導要録……指導要録公開論議はなぜ無意味なのか!?——夏木智……28
内申書……内申書をめぐる三つの無茶——夏木智……31
偏差値、事前相談、業者テスト……偏差値は果たして悪なのか!?——小浜逸郎……37
登校拒否……登校拒否はなぜ増えるのか？——滝川一廣……41
いじめ……それぞれの言い分だけがとびかい解決が見い出せない実態！——赤田圭亮……47
底辺校……底辺校で生きのびる知恵——佐々木賢……51
私立VS公立……公立は平等に縛られ、私立は生き残り戦略で特色を出す——米本和広……54

週休二日問題……疲れている先生のための学校五日制――夏木智……58
学校給食……食文化の現在からしか給食は語れない!――向井吉人……62
PTA……溶解するPTAという妖怪――辻創……66
塾・予備校教師、本音を語る……受験のノウハウだけ教えてればすむといったほどこの業界は甘くない!――副島隆彦 聞き手▼小浜逸郎……69
学校行事……学校が「学校」として存立する最後の防波堤――赤田圭亮……75
学校統廃合……ルポ・千代田区に見る学校統廃合の実態――村山和雄……79

PART▼▼2 つぎに、改造を考える基礎作業として教育論の混乱を整理しよう!

戦後公教育は終わった 小浜逸郎……84
戦後の公教育の理念の矛盾を根底からあばき出し、「左」「右」の言説の無効を証明する
塾・予備校は希望の星か!? 中山治……102
教育裁判を「裁判」する!
裁判所の二つの「賢慮」 山口宏……109
中野富士見中事件、校門圧死事件、戸塚ヨットスクール事件の検証
学校論の水準はどこにあるのか? 大月隆寛……118

PART▼▼▼3 「すばらしい教育」というウソ!

【「昔はよかった」批判❶】伝説の教師・無着成恭と斎藤喜博の実践 由紀草一……128

【「昔はよかった」批判❷】ユートピアン・林竹二と久徳重盛の功罪 佐藤通雅……135

「自由で民主的な」学校〝自由の森〟で子どもはどう育っているのか? 古橋健二……143

徹底検証・きのくに子どもの村学園
きのくに子どもの村学園は明るく楽しいドライな子捨ての場だ! 辻創……156

体験記・アメリカのハイスクールはどうなっているのか? 由紀草一……165

中高一貫校の知られざる姿を直視する!
中高一貫校という幻想 中山治……173

お助けスクールとしての功罪とは何か? 事件の本質はどこにあるのか?
元祖お助けスクール〝戸塚ヨットスクール〟事件〝十年目の真実 辻創……181

PART▼▼▼4 ところで、これまでの教育改革構想でうまくいくのか?

財界・文部省は何を考え、何をしようとしているのか？ 米本和広……192
諸井虔日経連副会長と文部省の寺脇研職業教育課課長に直接問い質す

教職適正審議会、初任者研修は本当に必要か？ 夏木智……202

臨教審・自由化論かく敗れたり 松田博公……209
安保全学連委員長・香山健一の闘い

第十四期中教審委員・西尾幹二氏に聞く
中央教育審議会は何を獲得し、何を失ったのか？ 西尾幹二 聞き手▼由紀草一……221
第十四期中教審の「暴れ馬」として終始、審議会をリードし続けた氏が赤裸々に語った！

入試改革案を採点する！ 小浜逸郎……236
亜細亜大学の一芸一能入試、慶応大学のAO入試、西尾幹二氏の入試改革案は果たして所期の目的を達成できるか？

PART▼▼5 さあ、いよいよ我れわれの改革案の出番だ！

大座談会
我れわれならこうする！……246
参加者▼松田博公（司会）・佐藤通雅・河原巧・小浜逸郎・佐々木賢・由紀草一
どんな幻想にも支配されずに、日常の実践を通じて見えるものを言葉にしようとするフツーの教師が泥沼の孤独な闘いの果てに見たものは？

教育構造改革の基本提言

誰を最初に教うべきか？　それは「子ども」でも「日本」でもない。フツーの教師こそが他ならぬその主体だ。そのはじまりの一歩として新しい「学校と教育」ヴィジョンを提示してみよう——

小浜逸郎……268

一億総キョーイク評論家 バカ語録

秋山仁の巻（東海大教授、数学者）——101
片岡輝の巻（詩人、児童文学者）——108
門野晴子の巻（思春期カウンセラー）——117
下村哲夫の巻（筑波大教授）——142
竹内克好の巻（埼玉県教育長）——155
寺脇研の巻（文部官僚）——164
平岡英信の巻（清風中・高校長）——172

福田雅章の巻（一橋大教授）——180
保坂展人の巻（教育評論家）——190
村崎芙蓉子の巻（医師、第十四期中央教育審議会委員）——201
森毅の巻（数学者、評論家）——208
梁瀬誠一の巻（毎日新聞社文部省担当記者）——235
主婦の投書の巻——244

ARRANGED BY
ITSUO KOHAMA
COLLABORATORS:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

筆者紹介——274

表紙立体イラストレーション　野崎一人　表紙撮影　任博　本文図版作成　柳真澄
本文イラストレーション＝かわぐちせいこ＋サイコ・オカダ＋佐藤竹右衛門＋下谷二助＋東芳純＋盛本康成
本文写真＝平山法行＋川島浩＋岡本友晴＋共同通信
表紙・本文デザイン＝S&P（中山銀士＋山田英春＋杉山健慈）

PART 1
まず、いま学校の何が問題なのかを洗いだそう！

体罰

体罰はなぜなくならないのか?

夏木智（公立高校教諭）

体罰をめぐる「総論賛成、各論反対」議論の不毛さ

体罰は絶対にあってはならないことなのであろうか。この問題については、奇妙な二重構造が存在している。

マスコミを通して、この問題を眺めるかぎり、結論ははっきりしているように思える。新聞やテレビの論調も、マスコミに登場する知識人と言われる人たちも、次から次へと出版される教育書も、文部省も教育委員会も弁護士も、みな口をそろえて、体罰はあってはならないことだと力説している。

それらを聞いているかぎり、ほとんどすべての日本人が、体罰に反対しているようにしか思えない。ところが、実際には日本人の多くは、体罰に関して、少なくとも絶対に反対であるとは思っていないらしいのである。

いくつもの調査がそれを示している。たとえば一九八六年に実施された『朝日新聞』の有権者に対する世論調査では、「体罰は場合によっては仕方がない」と答えた者が八一%に達し、一九八一年の『読売新聞』の調査でも「ぜひ必要」（八・六%）、「時には用いたほうがよい」（六九・八%）という体罰肯定派が八割近くを占めている。また、日本青年研究所の調査でも「体罰を与えてもきびしく指導してほしい」という母親が約五五%いるし、愛知県高教組による調査でも「体罰は必要」「場合によっては必要」という親が合わせて約七割いるのである。さらに一九八五年のNHKの公立中学校教師に対するアンケート調査では、体罰を親から要求された経験を持つ教師が五一%もいるのである。

このマスコミの論調と世論調査の奇妙なギャップを、どう解釈すべきだろうか。

教育とは最悪のエゴイズムである

まず、ひとつのことを認識しておかなくてはならない。それは、少なくとも一般に言われている意味において、「教育」とはエゴイズムの一種であるということである。しかも、それはある意味で、考えられるかぎりもっとも残酷なエゴイズムのひとつである。

そんなばかな、と言う人がいるかもしれない。しかし、事実である。

教育基本法を見てみよう。

第一条［教育の目的］ 教育は、人格の

完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

この条文にも明らかに見てとれるように、いわゆる「教育」とは、人間をある「理想的な人間」につくり上げることを目的とした行為である。さて、その「理想的」とは誰にとって理想的なのであろうか。

多くの人は、多かれ少なかれ、「教育」の当事者なので、冷静な判断ができにくくなっている。しかし、もし、そうしたしがらみを離れ、客観的な視点を持てさえすれば、誰の目にも、そうした「理想」が、教育する側の「理想」にすぎないことは、明らかなはずである。すなわち、「理想的な人間」とは、教育する側にとって都合のいい人間ということにほかならず、「教育」とは、結局、相手を自分にとって都合のいい人間につくりかえるということを目的とした、エゴイスティックな行為にほかならないのである。

教育基本法の条文を見ても、「真理と正義を愛し」とか「勤労と責任を重んじ」とか、どれをとっても、本人の意思とは無関係に、大人たちにとって都合のいい人間をつくり出すことを教育の目的ととらえていることは、よくわかるであろう。

誤解のないように言っておきたいのだが、私が言う「エゴイスティック」とは、人間が自分の幸せのためにある行為をなすという意味で「エゴイスティック」なのである。そういう意味においては、人間の行為はすべてエゴイスティックである。「教育」もまたその例外ではないということにすぎない。

むしろ肝心なことは、「教育」が、エゴイズムとして、もっとも残酷なものであることにある。なぜなら、「教育」とは、「あくまで相手のため」という偽りの仮面をかぶったエゴイズムだからである。

「真理と正義を愛し、勤労と責任を重んじる人間」をめざして教育することを、多くの人は、自分たちのエゴイズムであるとは感じていない。彼らは、むしろ逆に、それを「子どもたちのため」「子どもの幸せを願って」行なわれる、犠牲的で愛他的な、きわめて崇高な行為であると考えているのである。

相手に自分のエゴイズムを押しつけておきながら、それはすべて相手のためで、相手は自分に感謝の念を抱くべきだと考え、言うことを聞かない相手に対しては、自分勝手な恩知らずだと罵声を浴びせて、なんの良心の呵責をも覚えないとしたら、これほど、残酷なエゴイズムがほかにあるだろうか。

だって、教育によって多くの子どもは幸せになるではないか、と言う人がいるかもしれない。しかし、それは結果論にすぎない。今は結果ではなく、行為それ自体を問題にしているのである。教育とはまさに、人間のエゴイズムのなかでもっとも残酷なもののひとつなのである。

人びとは体罰に賛成であり反対である

暴力は、他人を自分の要求に従わせるための、きわめて有効な手段のひとつである。それが教育というエゴイズムの押しつけに

使われるとき、体罰と呼ばれる。

ここまでくれば、冒頭に述べた体罰に対する人びとの意識の二重構造の謎は簡単に解かれる。すなわち、人びとは、教育というエゴイズムの押しつけに関して、加害者であると同時に被害者なのである。

人びとが、体罰を必ずしも否定しないのは、子どもを自分にとって望ましいかたちに「教育」することのほうが、子どもに肉体的苦痛を与えないことよりも、彼らにとって重要であるからにほかならない。いちばん極端に言えば、子どもが自分の思うとおりにふるまってくれさえすれば（このなかには、しばしば子どもが自分の境遇を幸せに感じることまでが含まれる！）、子どもの幸せなどどうでもいいのである。だからこそ、先に述べたとおり、教師に体罰を要求する親が少なくないのである。

ではなぜマスコミは、あれほどに体罰を否定するのだろう。それは、彼らが基本的に教育の当事者でないために、子どもの立場に立ってものごとを見るからである。子どもの立場に立てば、教育というエゴイズムの押しつけだけでも充分にけしからぬことである。まして、それがうまくいかないからといって、暴力を使って相手を従わせようなどという行為が、とうてい許せるはずはない。

それは、一般大衆にも容易に受け入れられる。なぜなら、マスコミを通して見るかぎり、体罰は結局他人事であり、そうでありさえすれば、人びとは（教師よりも）子どもの立場に立ってものごとを判断するからである。

大ざっぱに言えば、人びとは自分が教育する立場のときは「体罰も必要」と思うが、子どもの味方という立場に立つときは、「体罰は絶対許せない」と思うのである。

これが冒頭に述べた、体罰に対する人びとの意識の二重構造の本質である。人びとがこのように自己矛盾していたのでは、体罰が是か非かという論争に決着がつくはずがない。

荒廃の責任は教師にあるのか？

ここでも貧乏くじを引くのは教師たちである。彼らは、「教育」を委託されて、実際に実行する立場にいる。もし、彼らが一切体罰を使わないとすれば、「教育」の効果は小さなものになる。好き勝手にふるまう子どもたちが増え、学校が「荒れて」くることになる（法と秩序、そしてそれを守らせるための警察のような暴力装置が存在しないところでは、人びとはそれぞれ好き勝手にふるまい、その結果、きわめて住みにくい国ができ上がることは、歴史が証明している）。そして、そうした荒廃の責任はすべて教師にあるとされるのである。

それならというわけで、体罰を用いれば、「荒廃」は妨げるが、こんどは体罰によって傷ついた子どもやその親の訴えが増加し、やっぱり教師は非難されることになる。

人びとが「子どもを自分の思うようなかたちにしてほしい」「体罰で子どもを傷つけてほしくない」という矛盾した要求を抱いているかぎり、どっちへころんでも教師は非難されるしかないのである。そして、また、教師をいくら非難してみたところで、矛盾した要求が両方かなえられるはずもない。問題は少しも解決することなく、体罰論議だけがいつまでも、なんの進歩もなく

繰り返されていくのである。

体罰論議に明日はあるのか

体罰否定論者のなかには、人びとの要求は少しも矛盾していない、と言う者もいるだろう。教師は、体罰を使わずに子どもに言うことを聞かせる方法を考えればいいではないか、と。

しかし、これは身勝手でないとしたら、妄想である。どっちにしたって、子どもたちに完璧に言うことを聞かせることなど不可能である。体罰以外の方法で効果を上げたとしても、体罰を使えばさらに効果は上がるのである。体罰を使わないことと、「教育」の効果を上げることとはどこまでいっても矛盾なのである。

この矛盾を解決するには、どちらかを取って、どちらかを捨てるしかない。体罰をなくすかわりに、生徒に言うことを聞かせられなくてもやむなしとするか、さもなくば、生徒に言うことを聞かせるためには、体罰もやむなしとするかである。

どちらを選ぶかは私には決められない。人びとが決めることである。後者を選ぶなら、どのような場面におけるどのような体罰が許されるのかといったことについての議論をすぐにも始めるべきだろう。

体罰否定論者は前者を選ぶであろうが、それならそれで、学校の秩序を保つためには体罰以外の暴力装置、たとえば警察が学校に介入することを当然としなければならない。体罰を否定しながら、警察を介入させてはならないといった意見をよく見かけるが、これはまったくの身勝手というものである。

私個人の意見を言わせてもらえば、私だったら前者を選ぶ。窃盗、暴力、恐喝のように一般社会でも許されない行為に対しては、なんらかの実力行使はやむを得ないとしても、それ以外の場面では、暴力を用いて押しつけるほど、「教育」が価値あることとは思えないからである。

「教育」とは、前に述べたとおり、結局、大人の身勝手な押しつけである。これはある程度やむを得ないし、必ずしも悪いことでもない。しかし、その押しつけがうまくいかないとき、暴力を用いてまでなんとか無理やりにでも押しつけてやろうと思うとしたら、それは少し身勝手がすぎるように思える。

重要なことは、「教育」とは、エゴイズムのひとつの名前であることを、はっきり認識することだと私は思う。教育がうまくいかないというのは、そのエゴイズムが子どもたちのエゴイズムと対立した状態なのである。体罰問題とは、結局、そうしたエゴイズムの対立を、暴力を用いて無理やり相手を屈服させることで解決するべきか、それとも別の解決を探すべきか、という問いなのである。人びとがこうした図式をはっきりと認識することから始めないかぎり、体罰に関する議論は、いつまでたっても不毛なままであろう。

校則

校則はなぜ必要か!?

公平を期すあまり硬直化するという逆説

河原巧（公立中学校教諭）

昭和五十年代、さかんに論じられた教育改革論議。そのきっかけとなったのが校内暴力だった。文部省が初めて全国調査した昭和五十七年には、対教師暴力が中学千四百四件（高校百五十九件）で被害教師が計千八百八十人、加害生徒は三千四十八人。生徒間暴力は中学二千三百四十件（高校七百二件）で、関係生徒は一万五千五百十七人に上り、全中学の二七%、全高校の一九%で対教師暴力、生徒間暴力および器物損壊が発生していた。

校内暴力がことの起こり

「教育の荒廃」を憂える声が巷に満ち、「全教師が一体となった指導態勢の確立。保護者、地域との連携の緊密化」が求められた。

その結果、校内暴力は徐々に沈静化していった。しかし「全教師が一体となった」指導態勢の確立のためには、指導する具体的な内容が共通理解されていなければならない。とくに、服装や髪型の適・不適など主観的な判断が入りやすい場面では、より具体的に色や寸法などを明記する必要が生じた。

また、生徒は不公平な扱いにもっとも敏感に反発するので、その指導が個々の教師の恣意的なものでなく、全校的な規範に基づくものであることを知らせるために、「明文化された規則」が必要となった。また、「保護者、地域との連携の緊密化」のためには、校外の生活の規範も明示し、協力をあおぐ必要があった。

これらのことは、いきおい「校則」の詳細な記述をもたらし、指導の仕方も「公正を期する」あまり、一律で硬直的なものに陥りがちであった。果たして、校内暴力がやや沈静化に向かいだしたとたん、「管理教育批判」がマスコミなどで続出しだした。

とくに「校則」に関心を持たれるようになったのは、昭和六十年に日本弁護士連合会（日弁連）が首都圏などの千校近い中学、高校の校則を調べた結果を、「校則と管理主義が結びつき、違反した生徒への体罰や、登校拒否、いじめをまねいている」と報告書（『学校生活と子どもの人権』）で批判してからである。

ついで翌六十一年に臨時教育審議会（臨教審）が、その第二次答申で「学校が過度に形式主義的・瑣末主義的な校則に頼る風潮が根強い」と報告した。

国会でも与野党の議員から集中質問を受けるようになった文部省は、昭和六十三年に都道府県教育委員会の担当者会議のテーマのひとつに、校則問題を急遽織りこんで、学校ごとに校則の内容の点検・改善を進めるように求めた。

「世間」と教師との意識のずれ

しかし、ある研究者グループ(放送大学深谷昌志教授など)が、同じ年に全国の公立中学校から抽出した二千四百七十八校の校長、生徒指導主任、養護教諭、いちばん若い教師、いちばんベテランの教師、三十代後半から四十代前半の女性教師を対象に調査した結果では、八割が「校則批判は教育現場を知らない人の意見。生徒への信頼だけで教育はうまくいくものではない」と考えており、しかも校長や一般教員間の差はなかったという。

それでも、昭和六十三年の文部省の「求め」に応えて、全日本校長会は、自ら発行する生徒手帳の校則欄の簡素化に乗りだし、同省が平成二年十一月に行なった全国調査では、中・高校の七三・八%が校則の見直しを行ないつつあるという。

しかし、平成二年七月に起きた校門圧死事件の際に見られたように、「子どもの人権を侵害し、学校を息苦しくしている校則こそ管理教育の根元である」という思いがマスコミを中心に根強い。たとえば、校門圧死事件の判決があった翌日の朝日新聞社説「改めて『管理教育』を問う」(平成五年二月十一日)を、言わんとするところを個条書にして見てみると、

①人を服従させる力としては権力と権威がある。権力は物理的強制力に支えられ、権威はそれを認める人びとの敬意をもとに成り立つ。

②学校という共同体にも、秩序維持のための最低のルールが必要なことは当然である。

③ルールがあれば、それを守らせるための罰則が必要になる。

④罰則を設ければ、それを強制する力がなければ意味はない。

⑤一般社会では、その力は警察や裁判の執行であったりする。

ここまでは誰しも異存がないだろう。

次の⑥それ(警察や裁判の執行)ができない学校では、教師による体罰や今回のような事件に行き着く。それはまさに権力の行使にほかならない。

これには、教師のなかに認めたがらない者もいるかもしれない。しかし、これは率直に認めなければならない真実である。

ウソと詭弁の管理教育批判

問題はそのあとである。

⑦世の中で、警察力などの行使に国民が従うのは、そのルールを私たちが守るべきものであると支持しているからだ。

とあるが、これはウソである。

ルールすなわち個々の法律について、すべての国民が「守るべきものであると支持している」わけではない。PKO法案のように国論を二分するなかで成立した法律もあるし、食管法のように大多数の国民から時代遅れと思われている法律もある。

支持するしないにかかわらず、多くの国民が法律を守っているのは「悪法も法」と

いう観念と、「罰則」が怖いからである。

⑧学校で教師が権力を行使するならば、そのルールの正当性が問われる。

ここでいう正当性とは、生徒自身が校則をつくり、支持していることが必要と言いたいのであろう。しかし、これも先の国民と法律との関係に置き換えれば明らかなように、法律は国民の手で作られているというのは形式上であって、個々の国民から見れば、自分が生まれてくる以前から存在する法律もあれば、国家権力の手で勝手につくられたと思われる法律もある。

校則も、たとえ生徒たちにつくらせても(法律と同様)すべての生徒が支持するものなどつくりえない。生徒というのは多様で「服装や頭髪など自由にしたい」と思っている者もいれば、「そんなことすれば学校がムチャクチャになる」と心配する生徒もいる。全員が納得し支持できる規則など、そう簡単につくれるものではない。

そもそも、法律は支持する者のみが守り、納得できない者は守らなくてよいものではない。それでは法律の役目を果たさないだろう。

⑨本質的には無意味なことを「決まりだから守れ」と強制するのは、権力への無批判な服従を教えるのみで、教育とは無縁の行為である。

というのも、詭弁の最たるものであろう。「何が無意味であり、何が無意味でないか」は、そう簡単に判断できるものではない。一見無意味に見えて、深い意味のある事柄もけっこうあるし、他から見て無意味なことも、当事者にとっては大切なことである場合も多い。ましてや、年少未熟なときに無意味に思えたことが、成長してからはずいぶん大事なことであったと悟った経験は、多くの人がしているはずである。

⑩権力をかさにきた指導は反発を呼び、さらに厳しい罰則とルールで臨むこととなる。

これは確かである。その点は多くの教師も自覚していて、昔から、「指導は指導される者に、指導されたと認識させないことが最善の指導だ」と言われてきた。どんな教師も最初から「権力をかさにきた指導」で生徒に接したいとは思っていない。

しかし、現実にはあからさまで高圧的な指導で臨まなければならない場合も出てくる。時には、指導に従わない者に「罰則」を適用しなければならないこともある。そうでなければ、弱い生徒にとって学校は「生き地獄になっちゃう」だろうし、「簀巻き事件」のときのようにいじめを目撃しても誰も教師に知らせないようになる。

そうならないためには、たとえ「反発を呼ぶ」ことになっても、教師は正義を貫く努力をしなければならないし、マスコミはそのような教師を支援しなければならないはずである。それを今のように「これが『管理教育』の思想である」などとおさまっていたら、自由主義教育の本家であるアメリカのように、登校時にはスクールポリスと呼ばれる学校警備専門の警察官が校門に立って金属探知機で生徒の所持品チェックをしたり、エックス線によるバッグ検査をしたり、カード式入校システムをするようになり、モニターカメラで校内を監視し、生徒が暴れだしたら校舎の出入口のドアすべてを職員室から開閉できる電磁ロック式にするようになるだろう。

⑪教育の場で子どもたちを良き市民に育

てていくのに、権力者として振るまう教師はふさわしくない。

それなら、校内で盗難事件や暴力事件が発生したとき、一般市民社会のときと同様、学校に（国家権力である）警官を派遣して事件の捜査と処置をゆだねるようにすべきである。しかし、これまでマスコミは学校が警察などに助力をあおぐことを非難し続けてきた。そのため、教師は捜査権も逮捕権もないにもかかわらず、自力で事件の解決を図らなければならなかったのである。

⑫子どもたちから敬愛の念を得られる人のみが、権威をもって指導者の役割を果たせるのだ。

マスコミ人最大の思いこみ違いが、こういう主張となって現れる。

教師は毎日、毎時間、何十人、時には何百人の「子どもたち」を指導しなければならない仕事をしている。そのすべての「子どもたち」から「敬愛の念を得られる人」が、果たしてこの世にいるだろうか。そういう論説委員氏自身は何人の人から「敬愛の念」を寄せられていると思っているのだろう。

教師の仕事は、「敬愛の念」どころか言葉も交わしたことのない入学したての生徒を、決められた時間に決められた場所に座らせるところから始まるのだ。そうでなければ授業は始められない。それが教師の仕事なのである。

制服

制服論議は現実の前ではすべて無効だ！

制服問題の本質は服装指導の教師や人権派の意識とも関係ないところで進んでいる。それはなぜ生じたのか？

由紀草一（公立高校教諭）

最初にはっきりさせてしまうが、私はどちらかというと、学校の制服なんてないほうがいいと思っている一人である。教師がそんなことにまで口を出すのは、個人的にかったるいし、またどう考えてもこれに生徒やその父母と争ってまで貫くべき正当性があるとは思えない。

しかし同時に私は、世の多くの制服廃止論者にも嫌悪感を抱いている。それは、教育現場にいれば当然わかるし、いなくても少し観察眼と想像力を働かしさえすればわかるはずの当然の前提をすっとばして、涼しい顔で「正論」を言いおって、という、多くの教師がマスコミなどに対して持つあまり高級ではない感情と同じものではあるけれど。

制服廃止論者の論点

ここで制服廃止論者の論点を要約すると、つぎの二点になると思われる。①制服を強

制することは、憲法の保障する「表現の自由」などに抵触することである。②制服があると子どもの表現意欲が阻害され、ひいては自立を妨げるものになる。

①に関しては、法律の条文解釈の段階にとどまるかぎり、そのとおりとしか言いようがない。つぎには、憲法はどの程度の適用範囲に、どの程度の強制力を持ちえるものかという問題がくる。これはあまりに専門的であるせいか、ほとんど議論されているのを見たことがない。けれどそれがなければ、制服をすぐに廃止する論拠に使えないのは明白であろう。

それから、①を少し発展させたかに見える②は、制服の話になると必ず聞くものだが、実際にはほとんどなんの根拠もない。この小文の目的のひとつは、学校現場にいなくても、誰でも容易に目にすることができる事実をもとにして、そのことを明らかにすることにある。

制服のファッション化・都会化の風潮

その事実とは要するに、とくに高校の制服のファッション化・都会化の風潮である。この十年ばかりの間に、男子高校生の制服で、黒に金ボタン、詰襟のいわゆる「学ラン」がどんどん減ってきていることにお気づきだろうか。代わって主流を占めているのは、主に紺系統のブレザー。窮屈で暗くて軍服を思わせる服から、明るくてゆったりしていて背広を思わせるものに変わってきたのだ。これは最初私立学校のファッションであったものを、メーカーが、これからの時代はこちらが主流になりますよ、と公立の教師たちを熱心にくどいて、変えさせることに成功したものだと言われている。さすがに餅は餅屋で、この見通しは鋭いものだったと思う。

これに関連した目に見える変化には、たとえばつぎのようなものがある。昨年修学旅行の引率をして、旅行社の添乗員と雑談したときの話である。彼は毎年二、三回は修学旅行に同行するが、昔はよく心配されていた旅先での他校の生徒との喧嘩沙汰が、最近ではほとんどなくなった、という。それには新式の制服がだいぶ寄与しているだろう。ああいうブレザー姿で喧嘩したりするのはいかにもダサい、カッコつかない、そう感じたら、今の高校生はもう喧嘩はやらなくなるのだ、と。

これが一〇〇パーセント正しいと主張したら言いすぎになるだろう。人間はそれほど服に規定されるものか。むしろ、喧嘩なんてつまらない、と感じる少年たちだからこそ、都会的なブレザーのほうが似合うのだ、という見方も成り立つ。

いずれにしろ、「内面」と「外面」を截然と分けようとする考え方はたぶん常に不毛だろう。私たちが自分について考えるときには、自然に「他人の目に映じる自分」も入ってくる。それを完全に逃れた純粋な「自分」がどこかにあるわけはない。人間が社会的な動物だという意味は、そういうことだ。

とくに、社会というもの、その中での自分というものを知りそめたばかりの中高生にとって、「他者のまなざし」の意味は大きい。彼らは、社会が提出しているさまざまな価値のうちの何かにアイデンティティファイすることで、アイデンティティを確立しようとする。人権派からは批判される教師た

ちの「服装の乱れは心の乱れ」「生活指導はまず形から」という論理の根拠がここにある。実際問題として、言うのもうっとうしいことだが、乱れた服装をもって自己表現としている生徒は、八割の確率で、少なくとも勉強はあまりやらない。彼らが取り入れているのは、そういう学校の正統的な価値観とは別の価値だからだ。

子どもっぽさと色っぽさ

しかし、私が言いたいのはそんなことではない。制服のファッション化が目立つようになってから、もっと奇妙な具合に事態は進展している。

これ以後はもっぱら女子高生の制服を問題にする。ファッションがより重要なのは、いつの時代でも、やっぱり女性だからだ。

だいたい、制服とは過度なおしゃれ感覚を抑制する機能もあったはずだ。それが近頃のように、森英恵や山本寛斎などの斬新なデザインを売り物にするようでは、学校自らが背理を演じることになる。ただ、制服を変えたために偏差値が上がった学校も現にある。森伸之の『東京女子高制服図鑑』(弓立社)は、昭和六十年以来毎年少しずつ改訂を加えて現在まで刊行されており、女子中学生の学校選びの資料として使われているという。資本主義の論理は、旧来の学校の論理を超えて貫徹するということだろうか。

もちろんそうなる素地はあった。制服はもともと決して「男らしさ」「女らしさ」の価値を否定するものではなかった。そうではなく、モノ・セックスの方向に進んだりしたら、それはそれで別の問題を引き起こしてしまうだろう。学校が制服によって抑圧しようとするのは、過度な性的魅力、いわゆるセックス・アピールなのである。だから、どんなに斬新なデザインでも、「清潔さ」のコンセプトは決して外されることはない。

ところが、教師としてはまことにやっかいなことだが、こんどはこの「清潔さ」や、それに結びつく、少なくとも無理なく両立する子どもっぽい可愛らしさが、性的嗜好の対象とされるようになっている。世の中には「制服コンプレックス」というものがあることは、あまり研究はされていないようだが、広く知られている。女子高生に聞くと、電車の中で痴漢にあう確率は、私服より制服のときのほうがずっと高いそうだ。この話を男性にすると、「うん、そりゃそうだろうな」とすぐ納得するのに、女性は怪訝(けげん)そうな顔をするのも面白い。これは男性の屈折した欲望のあり方に深く結びついた現象らしい。

今この現象を私なりに解釈すると、つぎのようになるのではないかと思う。第一に、制服を着ているというのは、ある権威に服従している徴(しるし)になる。服従している女性の姿は、男性から見るとかなりエロチックなのである。第二に、これに加えて女子高生の場合、体はもう大人でも、社会的には子どもとして、保護されるべき立場になっていることを示す。これによって、独立した女性にはない「禁止されたもの」の記号がその女体につくことになる。ジョルジュ・バタイユがつとに指摘したように、こういうのは男性の欲望を絶えず刺激するのである。

話が相当アブないところまできてしまっ

たが、女子高生のほうでは、こういった事情に、直観的にはどれくらい気づいているのか、ともかく制服を着たままのおしゃれに忙しい。たまたま目についたので買った学研ムック『制服おしゃれテキスト』には、まずスカートを短くするのがポイントだと書かれている。ふりかえるまでもなくミニスカートは、まず若い女性一般のファッションとして定着し、ついには制服にもふつうに見られることになったものだ。それは子どもっぽさと色っぽさを同時に表現するスタイルである。いや、ロリコン的嗜好が相当広まっている現代では、子どもっぽさがそのまま色っぽさへと横滑りする最大の契機になっている。

　ミニスカート制服の女子高生が、男の気を引こうとしているのだと言えば、化粧する女性は必ず男性の目を意識しているのだと言うのと同様、明らかに不当なことになるだろう。彼女たちはただ、マスコミが、『夕焼けニャンニャン』や『桜っ子クラブ』などのTV番組を中心にしてアピールした、魅力的な女子高生像に忠実であろうとしているだけだ。そこで追求されているのは「個性」などではない。もしそうなら、どう見てもミニが似合わない体型の子までミニをはいてくるはずはない。個性は結果として、たとえば各人の脚の太さなどで、現れてきてしまうにすぎない（当然、脚の太い子は、そんな「個性」は厭わしく思っている）。

　だからそれはまた、学校に対する積極的な反抗などではない。もしそうなら、私服を着てくるだろう。子どもっぽい可愛らしさなら、学校の価値観の範囲内にあるはずだ。それを強調しているだけなのだから、「学生の本分」を逸脱しているなどと言われるいわれはない。彼女たちはそう感じている。

学校制度の無理と子どもの変容

　我々教師を現在もっとも悩ませているのはこのような現象である。よほど古くて頭の固い者でないかぎり、制服と言えどもファッション性を今や完全には無視できないことは感じている。しかもどんなファッションであっても、制服であるかぎりは必ず抑圧するはずの性的な表象へと、いつのまにか横滑りしてしまう。それが教師に対するはっきりした反抗というかたちをとるわけではないので、まともに取り組もうとすれば、これほど苛だたしい事態はない。そこで教師たちは、スカート丈や髪型やソックスなど、細かいところにこだわって、必死になって性的なものの表出を抑えようとする。

　これは結局どういうことだろう。人間は知的な面と同時に性的にも発達していくという当然な事実のうち、後者を積極的に無視しようとする学校制度の無理が、いよいよ明らかに現れてきたということだろうか。いずれにしろ、服装指導をする教師たちの意識とも、個性を重視するのだという人権派の意識ともまったく関係ないところで、旧来の高校生像は大きく揺らいでいる。これは現在の文明全体の揺らぎに連動しているものかどうか、もっと本格的な考察が必要であることだけを指摘して、今は終わろう。

遅刻指導

遅刻はなぜ減らないか!?

"校門圧死事件"でも変革できない生徒の生活実感から遅刻多発の土壌の背景をさぐってみよう!

佐藤通雅（公立高校教諭）

遅刻指導が世の脚光を浴びるようになったのは、兵庫県立神戸高塚高校で生じた校門圧死事件以来である。

校門圧死事件は教訓として生かされたか?

一九九〇年七月六日、校門指導に当たっていた教諭が、八時半のチャイムと同時に鉄製門扉を押した。それにはさまれた一女生徒が死亡してしまった。一九九三年二月十日、神戸地裁で判決公判があり、教諭に禁固一年、執行猶予三年が言い渡された。

この事件は〈大事件〉として報じられたから、私たちの記憶にもまだなまなましく残っている。が、事件が凄惨だったから〈大事件〉となったわけではない。管理教育が何かにつけて標的となっていた、その情況にタイミングを合わせるかのごとく起きたから大々的に報じられ、それが大衆の過剰反応に火をつける結果となったのである。

かくして今まで見向きもされなかった遅刻指導は、白日の下にさらされた。学校の実態調査も行なわれ、併せて校則の点検をするところも出てきた。「管理教育は悪である。そんなのがあるから子どもたちは窒息し、個性も伸びない。自由にしたほうが、かえって一人ひとりが責任を自覚して行動するものだ」という反管理教育を標榜する側に軍配は上がったかに見えた。〈大事件〉に仕立てあげた報道も、その反管理を下地にしていたと見て間違いはない。

ところで判決公判を報じた日の新聞は、校則や罰則のゆるんだ結果、「遅刻者は増え、この冬には一カ月に延べ千人を超えた」（『朝日新聞』一九九三年二月二日）と記している。ところが記事全体は、圧死事件が管理教育見直しに一石を投じ、現に見直しは進んでいるという文脈になっている。そこにこの実態が、どう位置づけられているのかどうもよくわからない。何よりも記者自身が処理しかねたのにちがいない。すると何日か経って「声」欄に次のような意見が載った。

> こんな悲惨な事件があったのだから、生徒も自覚して、遅刻はなくなったのだろうと思っていた。しかし、実際は違っていた。いったい生徒たちは、事件から何を学んだのだろう。事件の責任の一端は、明らかに生徒たちにもあると私は思っている。

なぜかといえば、遅刻者があまりにも多く、校門指導をせざるを得ない状態を生み出したのは、生徒自身であるからだ。
（『朝日新聞』一九九三年二月二十日）

この論者は「規則が緩めば、それに反比例して、責任と自覚が強く求められることを知ってほしい」とも言う。じつにまっとうなことを言っている。しかし私の見方とはずいぶんズレがある。私は規則がゆるむことによってすべてがうまくいくなどと、少しも思っていなかった。長い間、公立高校にもかかわらず規則があってなきがごとき学校にいて、その実態をつぶさに見てきた体験からもそう言える。

この学校の場合でも、事件が生じて遅刻指導が槍玉に挙げられた当初、報道言説に爽快感を持った生徒は少なからずいただろう。学校の規則がゆるんできたとき、これでのびのびと通学できるとも思ったかもしれぬ。しかし「のびのび」から「自分たちでしっかりやろう」にいくとはかぎらない。むしろ「ゆったり、楽なほうに」流れる者が数のうえでは多い。

ところが〈大事件〉に仕立てあげた報道側は、反管理を打破してやったとどこかで自負しているから、これで改善されるものと期待する。大衆もまたその言説に乗っかって思考するから、神戸高塚高校の生徒は責任と自覚に目ざめ、しっかりやっているだろうというイメージをいつしかつくりあげてしまう。

ここに大きなズレが生じる。はじめ爽快さを覚えた生徒ですら、飽きもせず報じられる圧死事件にも、管理教育の記号として自分の学校が使われていることにもうんざりしてくる。そしてここに生活している自分たちとまるでかかわりのない勝手なおしゃべりだとすら思いはじめる。先の論者は、生徒に「そういう意識の変革をも生み出さなかったとすれば、この事件はあまりにも無残すぎる」と概嘆しているが、私はこれだけの〈大事件〉でも変革できない生活実感のほうに注目したほうがいいと考える。それに事件が起きてから三年は経とうとしている。なまなましく記憶している生徒は半数を割っているだろうから、事件の教訓のみが生き生きと継承されることはまずありえない。生徒たちが目下の生活実感からスタートしたとしても、たとえそれが不本意な実態を招いているとしても、不思議ではない。

学校は日常であり、日常は「楽しくない」

そこで生活実感のほうに注目してみるが、生徒にとって全生活に占める学校の比重は、だんだん希薄になってきている。しかし「生徒にとって」というと教師のほうは旧態依然たる位置にいるようなので、あらかじめ註記しておくが、教師もまた同じように変化してきた。ただ生徒のように明確に見えないだけなのだ。

こういう変化がいつから生じたかの線引きはむずかしい。私が教師になったのは一九六五（昭和四十）年だったが、このあたりでまず第一段階の激変を迎えたという実感がある。次に一九七〇年代半ばあたりで、さらにガクンと地盤変動は生じた。それ以前は生徒の全身全霊は学校に帰属するものと考えられていた。だから家に帰ってから外出するにも制服を着たり、校章を付けた

りした。教師もまた学校を出てからも〈教師〉であると受けとめられていた。ところがはじめは徐々に、やがて急カーブを描いて希薄化は進行していった。それと軌を一にして、かつて恥と感じられていた遅刻の〈恥〉感覚はなくなり、遅刻数は増加の一途をたどった。いきおい教師は遅刻対策に悩まされ、さまざまなペナルティを設けることによって防止しようとしてきた。それによって〈恥〉感覚を人工的に復活させようというのである。

だがこれは、相当にエネルギーの必要な仕事だ。なぜなら生徒の帰属意識は希薄になる一方だから、ペナルティを課せられるたびに、これからはきちんとやろうと思っても体が言うことをきかない。若い年齢ほど心と体は乖離し、体のほうが正直な姿をさらけ出すのである。

時々、こんなことを言う論者がいる。「生徒の遅刻が多くなったのは学校がつまらないからだ。魅力ある学校になったらこんな事態にはならないはずだ」――。これがまったく間違いというわけではない。もし自分の熱狂している歌手のコンサートに行くとなれば遅刻するわけがない。それどころか半日前からつめかけたりする。学校もまた魅力ある教師や魅力ある授業があったら、ダラダラ来たりはしない……と思いたい。

だがコンサートとは、いわば非日常のハレの場である。ところが学校は日常なのだ。日常の場では、どんなに目もさめるばかりの美人と暮らしても感覚が鈍磨するものだ。日常とは魅力の有無以前に空気のようなものであり、楽しいか楽しくないかの二者択一を迫られれば、大方は「楽しくない」と答えるほかない、そういうものだ。

とりわけ授業についていけない生徒にとっては、文字どおり「楽しくない」。楽しくなければ充実した時間は他に見つけ、学校では単位を取るための最低限のエネルギーを使おうとする。それが自然というものだろう。この考えがさらにつきつめられれば、試験をクリアして卒業資格さえ手に入れられればよい、そのほかのHR活動も掃除当番も部活も、要するに教育の名の下にしばられる一切はよけいなことだ、という考えにいきつく。もっとも授業はいやでも部活や仲間づきあいは楽しいという生徒もいるから、これが今の「生徒」だと一般化することはできない。

が、どの場合でも共通しているのは、学校に自分のすべてをあずけているのではないという感覚だ。個別的な要求に応えてくれさえすればそれでいいという、醒めた感覚である。こうなると、自分の生活を学校に向けて組み立てることからも手を抜く。学校よりも楽しい放課後の事々にエネルギーをさき、時には夜行性動物のように深夜に活躍する生徒も現れる。

「ルーズな雰囲気」を許せば学校はダメになるということを認められるか?

こうして遅刻多発の土壌は造られるが、生徒にとって目下の自分のみが主たる関心事なのに対し、教師は将来にわたる学校にまで責を負う存在としてある。遅刻多発を放っておけば、ルーズな雰囲気がはびこる。朝のHRに欠けるとさまざまな連絡ができないし、提出物もなかなか集まらない。とくに新学期は書類の数が多く、担任は集め方だけで、てんやわんやになる。さらに授業がはじまってから入ってこられると、せ

つかく盛りあがりはじめた授業の雰囲気がこわれる。とくに一時間目の欠課が多くなって留年しそうになったり、現に留年する場合もある。こういうとき本人は、遅刻魔を自認しているくせに「なんでアブナイと教えなかった」と食ってかかり、親も「こんなになるまでどうして放っていた」と、すべてを学校のせいにする。

さらにルーズな雰囲気に支配されると、学習効果も下がり、進学率にすら影響を及ぼす。そしてそのように低迷しはじめた学校に対して、周辺は「あの学校の教師は力がない」と評価を下すものだ。教師は自分のいる学校に責を負うから、なんとかしてよい学校にしようとする。

そのためにはまず生徒をきちんと登校させるところからはじめようと、遅刻指導にエネルギーを費す。その指導の強度は、生徒の学校帰属の希薄化と相関関係にある。もし、指導をゆるめたり、あるいは廃止して生徒の自主性にまかせれば、半数は放恣なほうに流れ、留年・退学も多発する。そうなってもいいのだという社会的了解が成立するか否かが最後には問われる。

佐藤通雅（公立高校教諭）

アルバイト、バイク、校外指導

一律禁止は学校のアリバイ証明だ!

親の責任逃亡からさらに逃亡する学校のこざかしくもわびしい手段

高校生の多くは金欠病にかかっている。買いたい物がどこにでもあふれている。しかし金がない。そういうときもっともてっとりばやく〈自分の物〉にするには、店からこっそり持ち出す、いわば万引きすることだ。しかしこれは犯罪だからつかまるとあとがたいへん。合法的な手段で可能性に近づけるのは、アルバイトだ。

生徒は学校のあちこちで〈うまい話〉を求めて情報交換に熱中する。毎日学校に来て退屈にすごすよりずっと開放感があり、おまけに金まで手に入るとなれば目がランランと輝くのも無理はない。ロマンと実益がそこにはある。なかには仕事が思いのほかつらくて、「金を自分の手でかせぐのがこんなにたいへんだったとは」と、概嘆する者もある。もっともいやになればいつでも逃げればいい。つまり生活を賭けない気軽さにいられる。そして、こういう高校生を頼りにするところもけっこうある。郵便局の年賀状処理だって、アルバイトが頼りだ。

なぜアルバイトを禁止するのか?

ところで学校では、長期休業に入る前に保護者あてに「生徒心得」を送る。その要点はつぎのようだ。

〝アルバイトは健康を損ねたり、学習の妨げになったりする。非行や事故につながることもある。だから極力しないように指導しているが、どうしてもやりたいときは許可願いを出してほしい。保護者はどういう所でやるのか確認してほしい〟

全面的に禁止している学校ももちろんある。また許可制にしても、たいがいはめんどうくさがってもぐりでやる。どちらにしても、結果は同じことだ。もぐりが多発する現状をわかっているのに、なぜこういう「心得」を出すのか。

それはまず、学習の妨げにならないようにというまっとうな理由がある。学校とアルバイト先を比べれば、どう考えても後者のほうが楽しい。正社員とちがって責任を引き受けなくてもいい身軽さにあるし、〈教育のまなざし〉にしばられることもない。そこでいつしかそこにのめりこみ、学校のほうはうわのそらになる傾向は現にある。「アルバイトを禁止すべきではない、むしろ積極的な勤労によって学ぶものも少なくない」という、ものわかりのいい論もある。校外のことはすべて親の責任だという了解の得られる社会になれば、それにこしたことはない。しかし現在の親のかなりの部分は、高校生ぐらいの年齢に達した子どもに対して無力あるいは無関心だ。娘がバーに勤めていたのも売春していたのも、事件が発覚するまでは「知らなかった」と決まったように言う。そこで親は無力な分、学校に抑止力を願う。もっと手のこんだ親なら、「学校というわからずやとちがって、お母さんはものわかりがいいのよ」という姿勢を見せたくて、もぐりを容認する。そのためには「心得」がなければならない。

他方、アルバイトに熱を上げて留年しそうになったり、事故、事件がつづいたりすると「学校はどういうふうに教育してるか」と非難するのが世間の常だから、「ちゃんとこのように指導しています、生徒が勝手に違反をやっているのです」という証拠にするために「心得」は欲しい。

親の責任逃れの結果からさらに逃れるための、こざかしくもわびしい手段というわけだ。

バイク指導は学校の責任ではない

バイクもまた、とりわけ男子生徒にとって熱狂の的である。十六歳の誕生日を迎えるとそわそわしだす。しかしアルバイトとちがって、バイクは死の危険性といつでも隣り合わせる。もちろん加害者になる可能性もある。そこでさすがの親もかなり渋るが、「同級生の誰それも持っている」としつこく迫られるとたいがいは根負けする。きつく禁止すると無免許で乗りまわしてつかまったり、他人のバイクを盗んできて秘密の場所に隠したりする。それぐらいならと親は許してしまう。

このように個人としての親は無力だから、抑止力を他に頼ることになる。全国高校PTA連合会が「三ない運動」推進を決議したのは、一九八二（昭和五十七）年だった。バイクを買わせない・乗らせない・免許を取らせないというのだ。しかしこれを完全に実施できた県はそれほど多くないし、たとえ実施しても他県に行って取得する者も多かったという。「生徒手帳」には「バイク

利用に関する規定」がちゃんとある。「高校生活においては、基本的にバイク等は不必要である。したがってバイク等による登校は厳禁する。ただし家庭の事情により運転免許を取得することは妨げないが、その際でも原動機付自転車とする」——これがもっとも平均的な規定だろう。

もっとも実情とはかなりかけ離れている。高校生活において不必要だと言うが、バイクへの欲求は必要・不必要とは関係ない。スピードが出、しかも楽のできるマシーンを欲しいのである。その欲求は大人が車を持つのとなんら変わりないし、人類が求めてきた方向とも言える。しかもいったん乗りまわしはじめると、原動機付自転車いわゆるバイクに満足できなくなる。そこで禁止されようが親が止めようがもっと大きいのを手に入れたくなる。いきおい交通違反も事故も増える。アルバイトとちがって結果が端的に明確に出る。高校に立ち会っている者にとって、これはなまなましい現実だ。去年(一九九二)はどういうわけか近隣の高校生が次々と亡くなったし、そのなかの一人は私の学校の生徒だった。親の悲嘆は言うまでもない。「バイクを買ってやらなければよかった」と号泣して息子にしがみつく親の姿は、まぶたから消えない。

こういう事態を世間でも知らないわけがない。世間もまた騒音と身の危険の被害者だからだ。そこで安全指導の強化を唱えはじめる。誰に対してか? 学校に対してだ。私は「アレレ」と思う。本気で安全指導を考えるなら、学校はすでに実効性のある場ではない。ドンと金をかけても、専門の分野がやるほかない。なんでもかんでも学校に押しつけていると、かえって事態が悪化するものだと、そろそろ世間の人もわからなければならない。

ここでもまた、ものわかりのいい論が出てくる。「十六歳以上は免許取得が認められているのだから制限を加えるのは違法である。登下校時も本人の責任でバイク使用を認めたほうが安全技術も思想も高まる」——筋は通っている。同時にこれを実行した場合のさまざまな障害はやる前から見える。登下校のバイクを認めたら相当数が使用するから、とくに学校近隣の騒音も事故多発も覚悟しなければならない。この時間帯は小中学校の登下校とも重なり、しかも学校が同じ地域にあることが多いから、人身事故の生じる危険性がある。また遅刻すれすれで登校するのが常態だからスピードも出すだろう。そうでなくても若い者は、町中に掲げられている制限速度をかったるいと感じている。事故が多くなれば、トラブルが多く出るのも必然である。

こういう事態になったとき、どこで対処してもらいたいと思うだろうか。学校の安全教育はなっとらんと言いはしないだろうか。息子が転倒死した原因を、学校の指導不足だったとして裁判沙汰にしている親を私は知っている。

校外指導は非行防止の防波堤になっているか?

生徒部(生徒指導部という学校もある)に所属すると、校外指導の役がまわってくる。私は数年前、何回かそれをやった。青少年指導室の一員となって、そこの職員と班を編成して街を巡回する。朝の登校時間帯、放課後の時間帯が主で、夜間のこともある。場所は繁華街や列車の中などだ。青少年指



導員手帳と生活指導員証を持参して提示すれば、パチンコ屋も喫茶店もゲームセンターも入れてくれる。たいていは「ご苦労さまです」と挨拶するが、内心は「営業妨害に来やがって」と思う。

　こちらは非行現場を見つけても、学校や住所・名前を聞き出す程度の権限しかない。相手もそれを知っていて、早く解放されたいためよく偽名を使う。生徒手帳の提示を要求すると、たいてい持っていない。いまどきの高校生が、身元の簡単にばれるようなものを持ち歩くわけがない。

　この校外指導の経験から、「こんなにひどい状態になっているのに、よくもまあ日本はもっているものだ」と実感する。私は現在の学校の機能の第一は一定時間若者をあずかっていること、つまり託児所や収容所の役割だと何回か言ってきた。この時間帯に青少年の犯罪の少ないのは、そのためだとも。しかし巡回していると、想像以上に多くの若者がすでに街に放出されていることに気づく。仙台のような中程度の都市でさえこうだから、大都市はほとんど手のつけようがないだろう。

　高校生だとわかっていても、酒・タバコを黙認する店がかなりあり、中学生も夜中のディスコに出入りする。小学生のグループですら、学校の時間帯にゲームセンターで遊んでいる。売春の現場をつかまえたことはないが、女子高生を買った人の話は聞いたことがある。「いまどきの女学生は、どうなってるんだろう」と自分のことはさておき彼は嘆いていた。「学校のランクによって値段がちがうんだよ」とも教えてくれた。偏差値がここでも生きていたとは！

　こういうことは実態がよくわからない。単なる誇大化された話だとも思いたいが、しかし教師が感触を得たときは実態のほうがずっと進んでいるものだ。社会の大人は、青少年の触法行為も見て見ぬふりをするようになっている。それどころか、それを食いものにする商売も増加している。

　心もささくれだって校外指導から帰ることも多いが、ひと息ついた後、「それにしても、こんなに若者が放出されて好き勝手なことをやっているのに、よく日本はもっているものだ」と、くりかえし不可思議な思いさえしてくる。たぶん、なおかつ学校制度が強固だからだろう。

　とはいっても、相当軟弱になってきている。日本人の知恵がつくり上げたこの制度も、あちこちからつつかれて穴だらけになってきた。あと少しで一気に陥没してしまうかもしれぬ。

写真と本文の内容は関係ありません

指導要録

指導要録公開論議はなぜ無意味なのか!?

もともとどうでもいい書類なのに、なんで大騒ぎするの?

夏木智(公立高校教諭)

学校教育に関する議論は、これほど世をにぎわしながら、なぜ、いつまでたっても、こうも噛み合わないのだろう。いくつかの原因が考えられるが、重要な原因のひとつは、人びとがあまりに学校という現場を知らないことにある。

教育論はなぜこうも噛み合わないのか

マスコミに登場する新聞記者を含めた「知識人」たちは、しばしば「どうして教師にはこんな簡単なことがわからないのだろう」と不思議がっているようである。だが、わかっていないのは、たいてい彼らのほうなのである。私に言わせれば、長い間、毎日のように学校という現場にいる数多くの教師たちをさしおいて、自分のほうが問題を解決する方法を知っていると思いこめるということのほうが、よほど不思議である。疑われなければならないのは、何日か学校へ出かけ、何人かの生徒の話を聞いただけで、もう学校を理解したような気になっている、マスコミ関係者の常識であろう。

私は学校に口出しするなと言っているわけではない。むしろ、おおいに積極的に口を出してほしいものだと思っている。すべての人が、自分にとって学校がどうあってほしいかということを表明することは、学校がそれぞれの時代のニーズに合ったものに変容していくためにも、非常に有益なことである。

私が言いたいのは、意見を言うなら、その前に、まずその根拠となる事実について、きちんと確かめるのが筋だろうということなのである。無知や誤解に基づく思いこみを根拠に自分の意見を述べたり、誰も確かめていないこと(たとえば「誰でもやればできる」といったこと)を事実であると言いはったりしていて、いったいなんの役に立つだろう。人びとが現場の声にきちんと耳を傾け、納得のいかないことは自分の眼できちんと確かめようという姿勢を持てれば、それだけで、教育論の混迷の霧の何割かは、確実に晴れるはずなのである。

次にその典型的な例を挙げよう。

指導要録公開という問題

一九九三年二月六日に、川崎市教育委員会が、本人から請求があった場合、指導要録を全面開示することを決定した。このこ

とはマスコミでも大きく取り上げられ、公開の是非をめぐって、さまざまな議論がマスコミをにぎわした。

指導要録の公開の是非を問う問題については、これまでにも、さまざまな議論がなされてきたが、いまだに決着がついていない。

こんな簡単な、はっきり言ってつまらない問題が、これほど重大視され、しかも紛糾してしまうということは、現場にいる者にとっては驚きである。事実をきちんと知っていさえすれば、こんな果てしない議論など起こりえなかったはずなのである。人びとは、自分の思いこみに振り回されているだけなのだ。

たとえば、こうした論議によく登場する「指導要録は内申書の原簿である」「指導要録は、教師の指導のための大切な資料である」「そこに書かれる評価は公正で客観的なものである必要がある」「教師はできるだけ客観的に評価している」「指導要録の開示は内申書の開示につながる」といった言葉は、すべて誤解である。

では事実はどうなっているのか。現場にいない人にもわかるように説明してみよう。ちょっと話が細かくなるが、我慢していただきたい。

指導要録とはいったい何か!?

まず、指導要録とはどういうものか、である。それは、生徒一人ひとりについての教育の記録が記された公文書である。いつ、どこの学校で学んだかを記す「学籍の記録」と、成績評価や総合所見などを記す「指導内容の記録」の二つの部分からなっている。

「指導内容の記録」は、基本的に二つの記録からなる。ひとつは、「学習の記録」といって、各教科についての段階評定、つまり、国語は5とか、体育は4とかいう評価を記載したものである。もうひとつは、「行動および性格の記録」というもので、いわば人物についての評価である。ここに所見欄という部分があり、担任教師が見た、その生徒の特徴を書きこむことになっている。

この所見欄が、公開をめぐる議論の中心であるらしい。つまり、公開を要求する側は、この所見欄が見たいと言い、それを拒む側はこの所見欄が見せられないと言う。

ところが、実際は、この所見欄は議論の中心になるほどたいしたものではない。だいいちせいぜい二十〜三十字分のスペースしかない。しかも、現実問題として、この所見欄は誰にとってもなんの重要性も持たないのである。このことはあとで述べる。

どうも誤解している人がいるようなので、ひとこと断わっておくが、「指導内容の記録」とは呼ばれていても、担任教師がその生徒をどう指導したかということを書く欄はない。あくまで、その生徒がどういう生徒だったかを書く欄があるだけである。

指導要録なんて どうでもいい書類だ

では、指導要録はどういう役割を果たすのだろうか。これについては、通常、次の三点が挙げられている。

①内申書あるいは調査書の原簿。
②裁判所や警察の照会があったとき、その生徒に関する記録として。
③担任が替わったとき、転校したときなど指導内容の引き継ぎの原簿として。

しかし、これは、いわばたてまえで、実際には次のようになっている。

①教師が指導要録を書くのは、まずほとんどの場合、内申書(調査書)を作成したあとである。教師にしてみれば、指導要録を作って、それをもとに内申書を書く、などとまわりくどいことをしなければならない理由がないのである。内申書を一回作っておけば、そのコピーを原簿に、いくらでも内申書を作れる。したがって、指導要録は、ほとんど内申書の原簿とはなっていない。

②警察や裁判所が、たとえば容疑者の中学校時代の成績や人物像を、学校へ照会してくるということは絶対にありえないとは言えないが、例外中の例外であろう。万が一照会してくることがあったとしても、学校側がその情報を教える必要があるのかどうかがそもそも疑問である。

③内申書には三年間の成績や、出席の記録を書かなくてはならないので、各年度の終わりにその生徒の成績や欠席日数の記録を残しておく必要がある。指導要録はそういう意味では、教育の記録として引き継がれなければならないものであると言ってもよい。しかし、そういう意味においても、「行動および性格の記録」は、ほとんど無意味である。なぜなら、内申書の「行動および性格の記録」は、三年のときの担任が、自分の目で見た、その生徒の記録を書くのがふつうだからである。また、指導の引き継ぎという点においては、所見欄に書くより、口で言ったほうがよほど早い。

こう考えてみると、指導要録の機能は、各学年における成績および出欠の記録を、三学年の担任に伝達することぐらいしかないことがわかる。開示賛成派の人たちは、指導要録を非常に重要なものと考えているようだが、実際は、指導要録は、誰にとってもそれほど重要な書類ではないのである。とくに、問題となっている所見欄に関するかぎり、教師がそこへ書きこんだあと、それを誰かが重要性のあるものとして読むことは絶対にないと言っていい。つまり、この教師の「所見」は、評価と呼ぶなら呼んでもかまわないが、誰にも利用されず、したがって生徒になんの利益も不利益ももたらさないものなのである。

教師はそれをよく知っているので、仕事としてそこへ何か書きこむにしても、公平で客観的になどと真剣に悩むことはまずない。記録として残るものだから、悪くも書きにくいので、「明朗快活」とか「まじめな努力家」といったあたりさわりのない言葉を適当に組み合わせて、この欄を形式的に埋めているだけである。

どうすれば最善の策となるのか!?

おわかりいただけただろうか。指導要録は「内申書の原簿」でもなく、「指導のための大切な資料」でもなく、「公正で客観的な評価」は誰にとっても不必要で、したがって教師は「客観的」であろうと努めてなどいないのである（余談であるが、文部省はなるだけ長所だけを書くようにという通達を出しておきながら、記載は公正で客観的であるべきだと言い、開示賛成派の多くも、公正で客観的でなくてはならないと言いながら文部省通達を歓迎している。これは明らかに矛盾である。同じ矛盾から、正反対の結論が出てくるのだから、不思議な話である）。

指導要録が重要でないのだから、その公開の是非が重要な問題であるはずがない。

私の考えでは、最善の策は、指導要録から「行動および性格の記録」の欄を削除してしまうことである。そうすれば、子どもは教師の評価を心配しなくてすむし、教師は所見欄を書かなくてすむので楽になる。

教師は仕事が少し減るのだから、その分、いくらか仕事が増えるのは我慢して、開示請求には応じることにする。指導要録なんてどうでもいい書類であることが、多くの人にきちんと理解されれば、実際には、開示を請求する者はまずいないだろうから、さして問題にはならないはずである。なんだったら、通知表がわりに、指導要録のコピーを渡してしまってもいい。

過渡的な問題として、すでに所見欄に記載のすんでいる指導要録の問題があるが、これについては、請求があれば開示し、親の側に異論があれば、なんでも親の要求どおりに書き直すことにすればいい。反対する教師はまずいないはずである。

細かい点で議論の余地はあるが、とにかく現実をきちんと把握しさえすれば、みながこの線で合意するのは、たやすいことだと私は思う。誰にとっても、そのほうが今よりはましなはずである。もちろん、ほかの選択肢もありうるが、いずれにしても確かなことは、きちんとした議論ができれば、この問題はわりと簡単にけりがつくということだ。現実をしっかりと理解したうえで、きちんとした議論を進めて、こういう問題は、さっさと片づけてしまってほしいものだと私は思う。

内申書

内申書をめぐる三つの無茶

内申書を粉飾し続ける教師の苦労と、実現しない理想に対するフラストレーションしか生じないばかげた幻想の実態！

夏木智（公立高校教諭）

内申書とは、中学校の生徒が高校を受験するとき、中学校から高校に送られる、その生徒の中学校での成績や行動の記録を記した書類である。正式には調査書という名前なのだが、なぜか一般には内申書と呼ばれている。これに対し、高校生が大学を受験するとき、高校から大学に送られる同様の書類は、なぜかそのまま調査書と呼ばれる。ここでは「内申書」についてのみ論じるが、「調査書」についても、かなり同様の議論が成り立つ。その共通点と相違点については、読者の検証におまかせしたいと思う。

第1の無茶

子どもにとって、有利になるような記述のみを内申書に書く、という無茶

中学時代の成績や行動を、合否判定の材料にすべきなのだろうか。多くの人びとは、そう主張しているようである。

「一回の入学試験で合否を決定したのでは、一面的な能力しか判定できない。中学時代にがんばった生徒や、勉強以外で優れたところのある生徒もいる。多面的な評価をするために、中学時代の成績や行動の記録も合否判定の材料とすべきだ」

だが、人びとが、この主張の実現を本気で望んでいるかどうかには、少し疑問がある。それはこの同じ主張を、否定的に書き換えてみればわかる。

「一回の試験だけでは、一面的な能力しか判定できない。中学時代に怠けていた生徒や、勉強以外で何か悪いところのあった生徒もいる。そういう生徒は、少々点数が高くても、不合格にすべきだ」

人びとがそれで当然だと言うなら、私も言うことはない。しかし、たとえば、有名な内申書裁判（注1）に対する人々の態度や、内申書におけるマイナス評価（生徒に不利益になる事実の記載）に対する批判を見ていると、どうもそうではないらしい。どうも人びとは、入学試験において、自分たちに有利に働く事実のみを念頭に置いて、「中学時代の成績や行動を合否判定の資料とすべきだ」と主張しているらしいのである。

もし人びとが、「本人に有利になるようなことのみについて、内申書に書くべきだし、それを合否判定の材料にすべきだ」と主張するのであれば、こんな無茶な話はない。入学試験とは定員の決まった選別であり、どういうやりかたをしても、すべての受験者に有利になることなどありえない。有利なことだけ書くということは、言いかえれば、何も書かなかったり、より有利さが少ないことを書いたりすれば、それが不利な評価を書いたことになる、ということなのだ。

たとえば、ある合否判定会議で、最後の一人を決める段階になったとしよう。点数の高い順に決めてきたので、順当に行けば最後の一人は、次に点数の高いA君だった。ところが、ある先生がこう言い出したとしよう。

「最後の一人は、内申書を重視したらどうだろう。このBさんは、点数ではずいぶん劣るが、内申書によると、ボランティア活動に熱心だったらしい。この子を合格させたらどうだろうか」

もしこの場に、A君の両親がいたら、いったいどう思うだろうか。A君が、中学校時代、とくに何もしなかったという理由だけで、合格圏内にありながら落とされるとしたら、それをやむを得ないことと思えるだろうか。もし、人がそれを当然だと言うなら、中学校で学生運動をやったことを理由に不合格になる者がいたとしても、それも当然のことだと言わなくてはならない。

「誰にも、何か必ずいいところがあるのだから、それを見つけて書いてやって、誰にとっても不利にならないようにすればいい」などと言い出す人もいそうだが、これは、もっと無茶である。誰にとっても不利でないということは、誰にとっても有利で

ないということである。それでは、「中学校の記録を合否判定の資料にすべきだ」という主張と矛盾してしまう。

選択肢は二つである。中学校時代の成績や行動を選抜の資料にするか、それともしないかである。前者を選ぶのであれば、内申書は本人に有利に働くのとまったく同じ確率で、不利にも働くということを覚悟しなければならない。後者を選ぶのであれば、一回の試験の成績で、合否が決定してしまうということを覚悟するしかない。

どちらも一長一短であるが、とにかくどちらかに決めるしかない。両方のいいところを取り入れたいなどと、虫のいいことを夢見ても、ジレンマに陥るだけだ。

人びとは、それぞれの選択肢について、その短所をも含めてよく検討し直すことから始めるべきだろう。そこがはっきりしないことには、内申書の問題に関する議論など始めようもないのである。

第２の無茶

内申書における評価は適正なものでなくてはならない、という無茶

内申書に記載される評価は、客観的かつ公平なものでなくてはならないと、誰もが言う。しかし、その適正な評価とは、いったいどういうものなのであろうか。とりあえず、話を「学力」に関する評価に限って考えてみよう。

入試とは、基本的に受験生を相対評価する作業である。入学希望者が、その学校の定員を上回ってしまったとき、受験生をなんらかの方法で順位づけして、上位者から順に、定員だけ取るのが入試というものの基本である。

だとすると、内申書の評価が適正であるかどうかは、異なる中学校から来た二人の生徒を比較したとき、内申における評価の高い者が、実際に高い学力を持っているかどうかにかかっている。

この点において、もっとも優れた評価は、今いちばん嫌われている偏差値である。偏差値とは、ほぼすべての中学生が受ける模擬テストにおいて、その人の成績が全体の中で何番目ぐらいにあたるかを、数値化して表わしたものである。今の目的に関しては、明らかに理想的な評価である（理想的すぎて、一切の幻想を受けつけないことで、かえって人びとに嫌われているらしいが）。

逆に、もっとも不適切なのが、最近、指導要録などに導入されつつある、いわゆる「絶対評価」である（注2）。生徒同士を比較する相対評価に対して、ある絶対的な基準を用意して、その基準に達しているかどうかで評価するのが「絶対評価」であるから、確かに、言葉のうえだけでは、これ以上の理想はない。しかし、それが実現できるなどと思うのは、あまりにも事実を無視した妄想である。

実際には、万人に共通な「絶対的基準」を見つけ出すことなど、まったく途方もない夢物語にすぎない。それは、それを実行しようとしてみさえすれば、誰にでもすぐわかることである。

かたちだけなら、「絶対評価」にできないことはない。しかし、その評価は、結局、

評価する者が、それぞれの基準で勝手につけた評価にならざるをえない。異なる基準を持った者たちが、それぞれ勝手につけた評価を比べることなど、どうやったらできるだろうか。合否判定に使うには「絶対評価」は、まったく不適切な評価なのである。

この点、まだしも「相対評価」のほうが優秀である。中学校同士の母集団の差異が問題になるが、それにしても、ひとつの中学校内での順位は、正確に反映している。母集団同士の差を考えに入れても、絶対評価よりははるかに正確に、その人の学力を反映していることが期待できるのである。

絶対評価の欠点は、評価する者の主観を排除しえないということなのだが、それがまた別の欠点を生み出す。つまり、評価する者が、「わざと」、高い（あるいは低い）評価をつけたとしても、それが、わざとなされたものであるかどうかを、他人には判断できないということである。

「わざと」なされた評価というものは、「客観的で公正な評価」の対極にあるものであろうが、絶対評価では、それを立証することは事実上不可能である。したがって、逆に、評価する本人にとっては「誠実な」評価であっても、それに対する疑惑を払拭することもできない。

内申書が大事な書類であればあるほど、不正が起こりうるし、評価に対する疑惑も消えることがない。そういう意味でも絶対評価は、まちがいなく、適正という点では最悪の評価法である。

ところが、人びとは、偏差値を悪者扱いし、相対評価の欠点をあげつらう。文部省は、内申書に絶対評価を導入することを検討せよと言い、実際に茨城をはじめとして、いくつかの県では来年度から内申書に絶対評価が導入されることが決まっているようである。内申書の評価を適正にするために、もっとも適正な偏差値を排除し、その次にいい相対評価を、もっとも悪い絶対評価に代えていこうというのである。まったく無茶な話だと思うのは、私だけだろうか。

どちらかと言えば「適正」を期待できそうな、学力についての評価がこのありさまである。まして行動や性格について、適正な評価が可能であるなどというのは、無茶以外のなにものでもない。

第3の無茶

内申書公開によってより客観的な評価ができる、という無茶

内申書公開に賛成する人びとは言う。「公開によって評価はより客観に近づく」と。これも無茶な話である。

彼らは、「評価」というものに対して、ちょうど裁判のようなものをイメージしているようである。今までは、教師は検事であると同時に裁判官であった。裁判は欠席裁判であり、教師は本人のいないところで勝手に評価を決定してきた。だが、これからは、教師はあくまで検事の立場にとどまって、被告である本人と、弁護士である親にも弁明の機会を与えるべきだ。そうして、ともに真相を究明し、どうしても妥協点が見いだせないときには、第三者を裁判官として、決定を仰ぐべきだ、というのが彼らの主張である。

しかし、このイメージは現実とはだいぶずれている。裁判によって真実を見いだすためには、検事と弁護士が反対の立場から、

意見を述べあわなくてはならない。ところが、今問題となっている評価に対して、教師と、親や本人の立場は同じである。どちらも、入試に有利なほうがいいのである。親や本人同様、教師だって生徒に合格してほしいのだ。

弁護士同士で裁判しても、被告に有利な結論しか出てこない。親や本人が内申書を見て、「この部分の評価を書き換えてほしい」と申し出たとすれば、教師は（もしそれが可能なら）言うとおりに書き換えることに、さしたる異論もあるまい。これが、客観的な評価の実現というものなのか？

現実問題として、親の要求があったからといって、すぐにそのとおりに書き換えてくれるとはかぎらないだろう。しかし、教師にとって書き換えを拒む理由があるとすれば、それは教師の「良心」だけである。書き換えることによって嘘をつくことになるとか、あるいはその生徒より明らかに優れた別の生徒よりも、高い評価を与えることになってしまうとかということへの、ためらいである。

しかし、もし教師がその「良心」を貫こうとすれば、彼はひどく困った立場に置かれるだろう。親の要求どおり書き換えた教師は、生徒を合格させ、親や生徒に感謝される「いい教師」になれる。一方、良心的な彼は、親との話しあいに疲れた末に、不合格になった生徒に恨まれるだけである。

結局、多くの教師は、親や本人が見ても、絶対に文句が出ないほど、評価の甘い内申書を、はじめから用意するようになるであろう。すると、高校側も自己防衛上、内申書を無視して合否を判定するようになる（現実に、今、内申書の記載のうち、評定以外の部分はほとんど合否に影響していないので、今さらこんなことを言うのもおかしいが）。そうなれば、こんどは、中学教師も、（どうせ何を書いても無意味なのだからということで）良心の呵責もなく、なんでも本人や親の言うとおり、内申書に書くことになる。

内申書公開の結末は、おそらくこんなところだろう。評価は客観に近づくどころか、むしろ遠いものになっていく。それでもかまわないと、人びとは言うのだろうか？人びとの言う「客観的」というのは、「自分たちの望むような」という意味にすぎなかったのか？

＊

どうも人びとは、何かとんでもない夢を見ているようである。内申書公開によって実現するはずの、自分の望むとおりの、自分にとって有利な評価こそ、もっとも「客観的で、公正」なものであり、それを誰もが認めることによって、試験の点数だけで判断されることなく、自分は望む学校に入れるようになるのだ、と思っているらしいのである。だが、すでに述べたとおり、これらはすべてばかげた幻想である。この幻想の生み出すものは、人びとの幻想を支え続けるためだけに、内申書を粉飾し続ける中学教師の苦労と、実現しない理想に対するフラストレーションだけでしかない。

人びとは、自分たちの主張をもういちど、よく考えてみなくてはならないだろう。そもそも内申書は必要なのか、そうでないのか。必要だとすれば、そこには中学時代の何が書かれるべきなのか。適正な評価はどのようにして可能なのか。根本からの議論を、一つひとつ積み上げていく必要がある。

さもないかぎり、内申書に関する議論は、袋小路をいつまでも堂々めぐりするばかりである。

（注1）**内申書裁判**

一九七一年に麹町中学校を卒業した生徒が、受験した高校すべてに不合格になったのは、内申書に記載されていた「マイナス評価」が原因であるとして、都と区を相手取り、このような記載は違法であるとして訴えた裁判。具体的な「マイナス評価」としては、「行動および性格の記録」の欄の三項目にC（とくに指導を要するという意味）をつけたことと、「備考」欄に、概略「麹町中全共闘を名乗り、機関紙『砦』を発行、本校文化祭会場に他校生徒と共謀して、裏門を乗り越えビラをまいた。過激な政治団体と関係を持ち、学校内においても指導に従わず手を焼いている」というようなことを記載したことであるらしい。

心情としては理解できるが、理屈の上ではなんとも不思議な裁判である。

①備考欄に関するかぎり、事実であるらしい。事実であれば、評価としては、これ以上適正なものはない。適正な評価を記載したことが問題になるのだろうか。

②しかも、内容から見て、原告はおそらく自分のした行為を正しかったと思っているのであろう。生徒のした正しい行為を、内申書に記載されて、それが不利益記載にあたると考える理由はいったいなんなのであろうか。

③自分のやった行為の正しさを、高校側が認めなかったのが不満だと言うならわかる。だとすれば、どうして高校のほうを訴えなかったのか。

④その記載が、学習権の侵害にあたるという主張なのだが、だとすると内申書が理由で不合格になった人が、すべて学習権を侵害されたということになる。そういう人は、たくさんいるはずである。

不思議といえば、この問題を論じるマスコミや教育学者たちが、ここに挙げたようなことを、ほとんど問題とさえ考えていないらしいことも、私には不思議でならない。

（注2）**絶対評価と相対評価**

たとえば、一クラス四十人の生徒が試験を受けたとして、その成績を得点順に並べたとしよう。このとき、上位三人に5、次の十人に4というふうに、人数で区切って評定を決めるのが、相対評価である。一方、八〇点以上は5、六〇～七九点は4というふうに、得点で区切って評定をつけるのが絶対評価である。

相対評価の欠点は、あくまでも母集団の中での相対的位置を評価するために、たとえ全員が優秀であっても、決まった人数にしか高い評価を与えられない点である。一方、絶対評価では、テストの難易度によって、同じ人間の評定が、5であったり3であったりと変化してしまう可能性があるのが欠点である。テストによって基準を変えることも不可能ではないが、すると、こんどは何点以上を5とするかを決定する手段がない。

偏差値、事前相談、業者テスト

偏差値は果たして悪なのか!?

偏差値を悪と決めつける態度は必然的に
戦後教育の目玉である徹底的な機会平等の精神を否定する道につながる。それを明らかにしよう

小浜逸郎（評論家）

昨年（九二年）の秋から今年の春にかけて、公立中学から高校への進学問題をめぐって嵐が吹き荒れた。いわずと知れた、業者テストの偏差値追放問題である。この問題は、そもそも高校進学における私立高の青田買いの激化を憂慮した埼玉県の教育委員会が、私立高校への推薦入学の事前判定資料に、業者テストの偏差値を用いることはまかりならぬと宣言したことに端を発していた。ところが、これを文部省が強力に支援するということになり、国と一自治体の二人三脚の相乗効果とでも言うべきか、あれよあれよというちに中学校からの業者テストの全面追放、偏差値による進路指導そのものを段階的に廃止する方針へと、一気に昇りつめてしまった。もちろん現場は戸惑いと混乱の阿鼻叫喚が交錯している。

「いったい何を基準に進路指導したらいいんだ!」「学校内で偏差値を否定したって、会場テストを否定しないなら、塾や予備校への依存が強まるだけじゃないか!」――いうまでもなくこれらの声は起こって当然と言うべきである。

ここには、いくつかのことがごっちゃに重なりあってしまっている。そしてそういう混乱を混乱として見えなくさせ、あたかも問題はひとつであるかのように思わせているのが、感情的ムードとしての「偏差値は悪である」という決めつけ論理である。ここでは、この間の一連の経過から、本当はどのように整理して考えなくてはならなかったのかを示し、あわせて、事前相談や業者テストや偏差値がなぜこれほどまでに定着してきたのか、その現実的理由について述べてみたい。

まず、問題点は次のように分けてとらえられるべきである。

①私立高校の青田買いは悪いか
②事前相談の資料に業者テストの偏差値を用いることは悪いか
③業者テストの偏差値を中学校が進路指導の参考資料として採用することは悪いか
④偏差値による輪切りを許している高校入試の現状は悪いか

これらはみなレベルの違う問題であり、一つひとつについて、その是非を検討してみなくてはならないことのはずである。そういうことを教育行政の専門家であるはずの文部省や教育委員会が少しもわきまえずに、ひたすら感情的ムードに乗って突っ走ったことは、お粗末（偏差値が低い）とし

か言いようがない。なお本当は、この間の経過がはらんでいた問題はこの四項目にとどまるものではなく、より根本的な価値意識の問題や教育構造の問題に発展させて考えてゆくことが必要なのであるが、それは紙数の都合でかなわないので、くわしくは、この本の別稿「戦後公教育は終わった」（84ページ）のほうを見ていただきたい。

私立高校の青田買い（早い時期の事前相談）は悪いか？

青田買いは、推薦入学制度の派生物として生じたものである。いうまでもなく推薦というのは、一般入試を経験させずに、生徒の中学校生活での業績を書類で審査して選別する制度であるが、あまり早くこれをやられると、中学校における真面目な勉学生活の意欲が失われるというのが行政側の言い分である。ところが、推薦入学というのは、もともと進学競争の緩和と選抜方式の多様化をめざす一案として、文部省が推奨していたものなのである。推奨した手前、事前相談自体がいけないとは言えない。そこで、あまり早い時期にやらないようにな

どとお茶を濁したことを言っているわけだ。

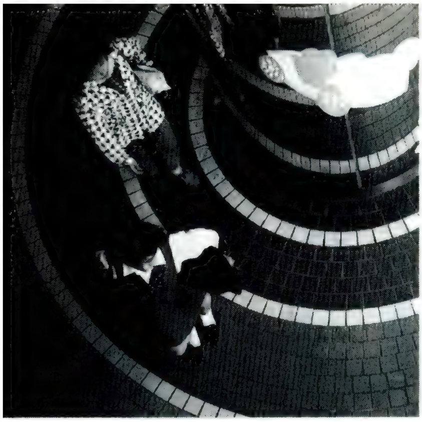
しかし私立高校には私立高校の事情がある。私立高校は、生徒獲得合戦にしのぎを削る私企業である。しかも、黙っていても優秀な生徒が集まってくる学校など一握りしかない。最近は少し様変わりしてきたものの、依然、多くの私立高校は公立の滑り止めとしての位置に甘んじなくてはならず、しかも公立合格者の私立入学辞退による生徒数の不安定をたえず予測しておかなくてはならない。

中学側としても事情は同じである。例外を除いて私立の複数受験が認められていず、しかも中学浪人を出さないようにするなら、許容された制度をなるべく利用するのが人情というものである。それというのも、事前相談の対象になる生徒のなかには、公立高の合格が危ぶまれるような生徒がかなり入っていて、彼らは自分の志望をはっきりと定めるだけの自信と気力に乏しいのである（これは無理もないことである）。こういう子たちの面倒をみておくというのは、全員合格をめざすかぎり、どうしても必要なことなのである。

というわけで、青田買いは単願推薦制度そのものの性格に深くからんでいる。文部省が自分で奨めた方針を撤回して、単願推薦制度なんてやめちゃえ、とでも言うなら話は別であるが。これは、教師の負担を減らすという意味ではいい面を持っている。したがってそれも一方法だが、その場合、すべての生徒を公平な入試で決めることになり、とくに学力の低い受験生が、不安を覚悟しなくてはならないのである。

事前相談の資料に業者テストの偏差値を用いることは悪いか？

これについての文部省の言い分は、要するに、学力以外の多面的な能力・個性を評価する推薦入学制度のたてまえにもとるということらしい。「公教育としてふさわしい適切な資料で」とかいうわけのわからない言い方がそれを指しているが、何をもって文部省は適切と考えているのか。学力以外の能力や個性で推薦するなど、あほらしい、非現実的な言い分というほかはない。いやしくも学校（現在の普通高校）というのは、



勉強を教えるところなのだ。推薦枠を認めているその高校自体が、学力以外の能力や個性を育てることを主眼とするような教育体制（たとえばスポーツ学校とかお料理学校とか福祉学校とかのように）を実質的に取っているのでないかぎり、学力評価を無視して合格させた低学力の生徒が入学後の勉強についていけずに、教室のうしろで騒ぎまわったり、昼寝ばかりしているようになることは目に見えている。それでも彼は、学力以外の能力や個性を入試のときに評価してもらったので幸せだと言わなくてはならないのか。

「開校当時、事前相談の偏差値を五六としたが、〝信頼関係でけっこうです〟と中学側に偏差値の提示を求めなかった。そしたら翌年、学校のなかはめちゃくちゃになり、生徒が壊した机や壁、天井の修理代が一千万円もかかった」（千葉県内の私立高。『産経新聞』一月十五日「業者テストと進路指導」より）

業者テストの偏差値を中学校が進路指導の参考資料として採用することは悪いか？

これも「悪い」と決めつけるのは、融通のきかないたてまえ論議で話にならない。実施日が学校によって違うことがあるため、問題が漏れるおそれがあり公正さを欠くという指摘があったが、そんなことは学校単位でこそこそやっているから出てくる問題であって、技術的に解決可能な話である。業者テストそのものの欠陥とは関係がない。

もし今、学力による選別と本番の入試前の進路指導の意義をいちおう認め、しかも中学校間の大きな格差の存在を前提とするなら、より客観的な情報を用いるほうが的確な指導につながるし、生徒にとっても安心感が大きくなると考えるのは当然である。内申書などはいいことばかり書いてあってまったくあてにならないというのがこの世界の常識なのだ。

「（中学校ごとの平均偏差値が）うちは四六、七ですが、五四、五の学校もある。通知表でいえば、うちの4が2でしょうね」（中学の進路指導主任。出所は前に同じ）

とすると、たぶん、行政権力の本音は、そもそも業者テストなどという民間の機能を公教育の場に持ちこむこと自体けしからんというところにあるのではないか。つまり、自分たちの支配領域が、民間の旺盛な力に侵食されるのが、権威をけがされるようで我慢ならないというだけなのだ。どこまでも公のたてまえを貫きたいということらしい。でもそれなら、神奈川県で実施されているア・テストのような公的テストを考えればいいじゃないかと思うのだが、それも「公が作る偏差値という性格を持っていることを否定できない」として、「学校が教育活動のなかで問題を作り採点するもの以外は、業者テストと同様に慎むべき」な

んだそうである（高校教育改革推進会議・入試部会最終報告・九三年一月二十六日）。なんてこった。公的テストもいかん、ということなら、どうやって進路指導しろというのか。客観的情報を手にする可能性を先生から取り上げておいて、あとは「汗をかいてもらって子どもの個性に応じた適切な進路指導を」というわけか。勝手なもんだ。

偏差値による輪切りを許している高校入試の現状は悪いか？

この問題が、じつはこんどの騒動における隠れた焦点を形成している。文部省のみならず、ほとんどすべての教育関係者が、「あるべき教育」なる見地よりして「悪い」と答えるのがこの問いである。じつは前三者の問いに対してよく考えずに漠然と悪いと答えてしまう傾向も、この第四を無条件に悪いと決めこんでいる奥底の感情に規定されているのだ。偏差値による輪切りこそ、今日の受験競争の激化の元凶のように思われている。しかし、それはまったくの錯覚であり、転倒した認識と言うべきなのである。

偏差値が現在の高校進学にかくまで威力を発揮してきたことの背景には、高校へほぼ全員が進学するようになったという大衆社会化現象が強力に存在している。かつては個別中学校単位で成績のよい者だけが入試に挑戦し、他の者ははじめからあきらめていたのだ。ところがほとんどの子がどこかの高校に入れる現在の状態では、誰もがなるべくよい席を取りたいのに、残念ながらよい座席の数は限られている。ちょうどコンサート会場のS席、A席、B席……というようなものだ。

この序列は人間の差異化欲求に基づく自然発生的なもので、どんなに抑圧しようと手をかえ品をかえ生き残るであろう。そこでどうしても誰がどこの席に座るかについて、個別中学校単位を超えたより客観的な尺度に基づく会場整理の必要が生じてくるわけである。また当然入場希望者の側では、どの席が取れるかについて、事前にある程度目安を立てておく必要がある。もしこれをしなければ、とりわけて知の探究に意欲を燃やすわけでもない普通の子どもが不必要に過熱した過当競争に巻きこまれて、今に倍する不安を抱えこまなくてはならないだろう。つまり偏差値は、競争激化などを生んできたのではなく、むしろ稀少な座席への殺到を回避し、いたずらな過熱を冷ます力として作用してきたのである。

そもそも受験競争が激化したという、何十年来言われているなんとかのひとつ覚えみたいな共通認識が誤っているのであって、激化したのではなく、機会平等主義が効果を及ぼした結果、高校受験が大衆化したために、多くの親子にとっての身近な問題になったにすぎない。偏差値は、教育に対する人びとのこのまなざしの転換への現実的対応として必然的に生じた整理手段だ。その事実を激化現象として否定的に問題視するなら、大衆化それ自体を悪いこととして、戦後教育の目玉であった徹底的な機会平等の精神そのものにメスを入れなくてはならなくなるはずである。

それでもよいと肚（はら）をくくったうえで偏差値追放を打ち出すなら、そこに私たちは一定の理念を見出すことができる。しかしそんな気骨などありもしないくせに、ただ感情的ムードに乗って現場を攪乱するだけの施策などは、やめてほしいものである。

登校拒否

登校拒否はなぜ増えるのか？

人びとの抱く学校幻想が大きく変わった現実を見ないで、登校拒否は語れない

滝川一廣（名古屋市立くすの木学園長）

文部省の学校基本調査は、長欠（年間五十日以上の欠席）をした児童生徒数を例年調査している。現在、不登校（登校拒否）の激増が騒がれるのもこれに基づくもので、調査結果が報告されるつど、増加ぶりが大きく報じられる。しかし、目の前の数字に驚く前に、さらに時を遡って調べるなら**図1**のようになる。長欠生徒（中学生）の全生徒に対する割合（長欠率）の推移を追ったものである。

昭和二十年代の長欠率は今をはるかに凌いでいたわけで、その意味では、現在の不登校増加をことさら過大視せずともよいとの見方もまた可能かもしれない。少なくとも、「昔はもっと皆が登校できる教育がなされていたのに……」とか「昔の子はもっとしっかりしていて、おいそれと休んだりはしなかったのに……」といった類いの論は、根拠に乏しい〈昔はよかった〉式の概嘆の域を出ていないとわかる。長欠率の推移を、もう少し広い視野の中で捉えてみたい。

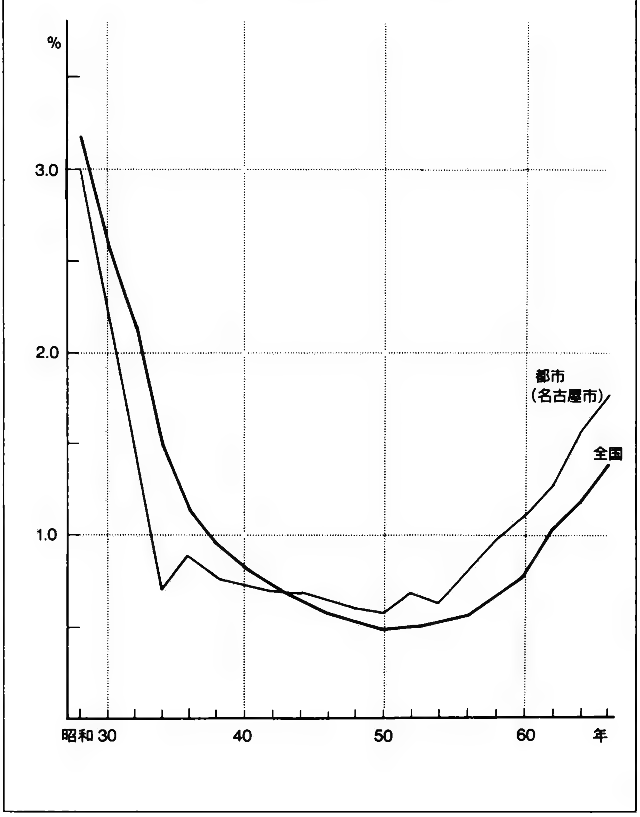
▼「古典的」長欠問題の解消と「登校拒否」の新たな出現

二十年代の長欠率の著しい高さは、戦後の社会混乱と窮乏、医療水準を含む衛生環境の劣悪さを背景としたものと推測できる。貧しく荒れた家庭や、病に伏す子が多かったのである。それが三十年代に向かって急減するのは、わが国の経済復興と健康環境の改善に負っていよう。その傍証に、エンゲル係数と乳児死亡率を重ねてみたのが**図2**である。また、都市での低下のほうが急勾配な事実も、この推測を裏づけている。

図2から、もうひとつの現象に気づく。乳児死亡率やエンゲル係数はその後も順当に低下をたどるにもかかわらず、長欠率のほうは三十年代半ばに低下の勾配を緩めている事実である。都市（名古屋）では若干の上昇傾向さえ見せる。これは高度成長時代を迎え、社会混乱や貧困、健康環境の劣悪さなどを背景とした「古典的」な長欠問題が社会一般としては解消したのと入れ替わりに、別の問題が長欠率を押し上げたためと考えられる。三十年代に大都市から始まった「登校拒否」の出現がそれである。

疾病や貧窮による欠席、あるいは学校生活にさしたる興味や意義を感じぬために登校意欲を持たないもの（これは「怠学」と呼ばれた）なら、公教育の開始以来たえず見られてきた現象だし、それなりに理にかなっ

［図1］中学生長欠率の推移



ている。ところが、病気も生活苦もなく、本人も家族も教育の意義や必要性を充分に意識して「登校しなければ」と念じつつ現実には登校できない現象が、都会の中産階層以上の子弟を中心に目立ちはじめたのである。これは一見理屈に合わぬ不思議な精神現象に見えたので、まずは精神医学者の研究するところとなり、「登校拒否」と名づけられた。

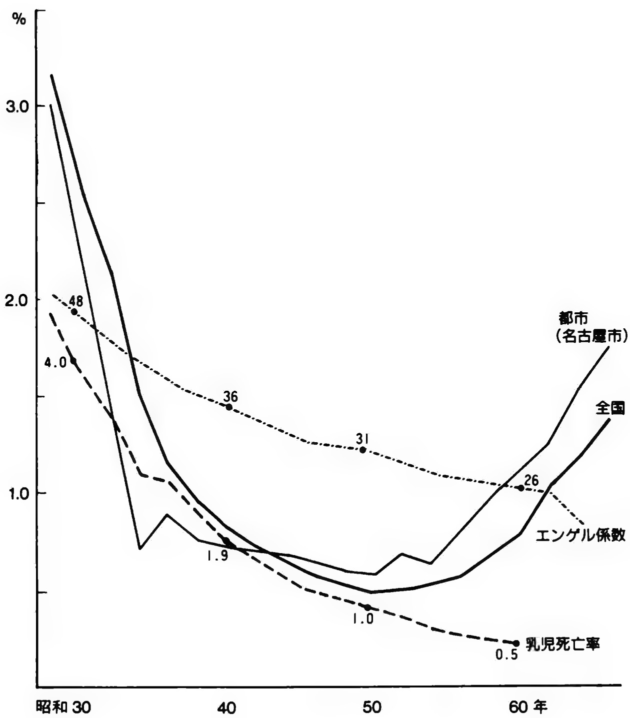
　この現象をどう説明するかは研究者によって諸説に分かれ、論争も珍しくなかったが、ここでは深入りしない。どの説が真かというより、登校できないという現象とそれを巡る葛藤状況を「登校拒否」の名で総称しているだけなのだから、おのずと多彩な内容を含み、その内容の種類だけ説明も諸説ありえたと考えれば足りるためである。

　論争ではこの現象の本質を、子ども本人の心性ないし家庭環境や親の養育態度の問題に求めるか、学校環境や教育体制の問題と捉えるか、が主たる争点となってきた。しかし、個別臨床的に見るかぎり、事例によって事情はさまざまで、実のない争点であった。ある調査による「登校拒否になった直接のきっかけ」を図3に示す。

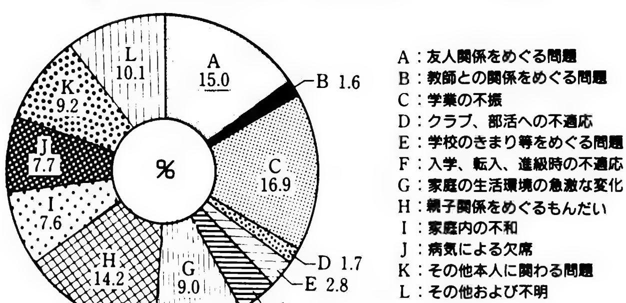
　ことほどに分散しており、現象の多様さは明らかだろう。にもかかわらず、しばしば争われたのは、〈事実〉のいかんよりも「教育（や養育）とはいかにあるべきか」の〈理念〉をめぐる論者間の対立が根底にあったためと思われる。

　現象の多様さは、五十年代以降、より明瞭になってくる。最初は大都市の中産階層からいくつかの定型的な類型群を示しつつ現れたものが、しだいに地域や社会階層をこえて広がり、定型も崩れていっそうの多

［図2］長欠率とエンゲル係数・乳児死亡率



［図3］登校拒否となった直接のきっかけ（中学生）

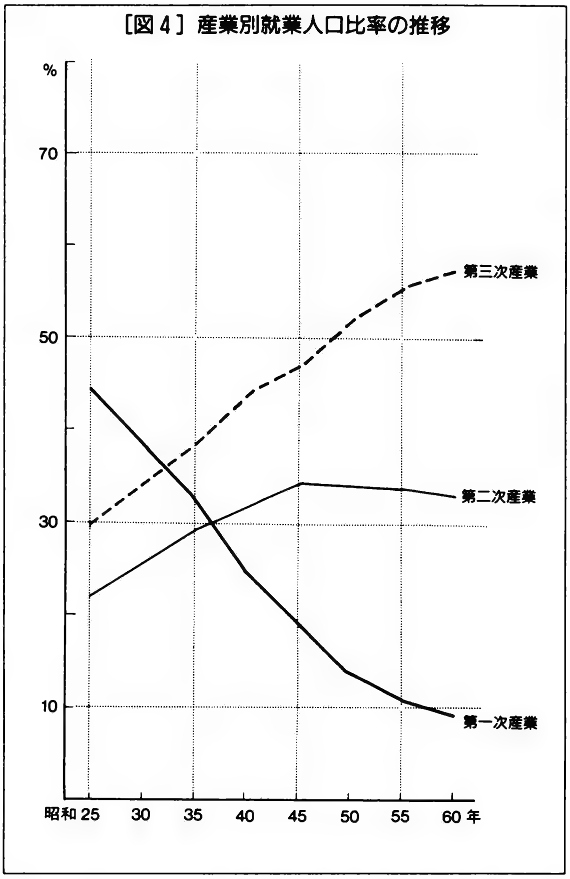


＊文部省「児童生徒の問題別行動実態調査」のデータより作成

様性を帯びるようになった。この質的な拡散こそが現在の長欠率増加の内容をなしている。ちなみに研究者が好んで用いる呼称が、「怠学」との区別から生まれた従来の「登校拒否」から、より包括的・現象記述的な「不登校」に移ってきたのも、この拡散（多様化と類型の不鮮明化）を背景にしていると思われる。

▼「どうしても登校しなければ」という絶対性を学校は失った

図3と長欠率の推移をダブらせると、浮かび上がってくるものがある。図に区分さ



れた諸問題は実際に多くの事例に接した者ならうなずけるもので、あくまで「きっかけ（誘因）」として抽出されてはいるけれど、個々の不登校を持続させる要因と働くものも少なくない。と同時に、かかる諸問題は子どもたちの学校生活・家庭生活において日常に起きうるありふれた事柄なのに気づくだろう。つまり、時代推移の中で、これらが（あるいは、これらのうちどれかが）特異的に増減しているとは考えにくい。長欠率の推移を、学校ないし家庭に内在する「問題性」に帰して説明しようとすれば、三十年代に現れ、その後五十年頃までは漸減し、それ以降急増してきたなんらかの「問題性」の所在が見出されねばならないが、そんなものがありうるだろうか。

そもそも「学校（公教育）制度」とは、どんな目的でつくられた制度だったか、を顧みたい。それは周知のごとく、国家の統一と社会の近代化（文明化）が目的であった。明治五年の「学制」序文を読めば、学校によって知識が万人に開かれ、それによって人びとが自らの幸福（立身）を平等に追求でき、またそれが豊かな文明社会を築き上げるはずだとする理念が謳われている。そして学校とは、個々人にとっては知識的・階級的な上昇のかけがえなき門戸、社会全体としては豊かな文明への門戸として民衆の夢を担い、その結果、此岸から彼岸へと導く場の持つ聖性や絶対性を民衆の側からおのずと付与されたのである。

高度成長時代とは、わが国の都会における近代化達成期、つまり、都会において前述の公教育の目的がほぼ果たされた時代にほかならない。制度とは、所期の目的が果たされれば、社会における役割や重要性を減じるのが自然である。それに社会的制度は必ず個人への負荷の側面をはらむが、その制度が社会全体の強い要請や目的を担っているかぎりは、耐えるべき（耐えうる）



負荷として受け入れられよう。

　だが、役割や重要性が減るにつれ、個人にとって耐えるべくもない負荷と意識される度合いが高まらぬだろうか。たとえば、集団で一斉一律に教える公教育の方法は、個々の生徒や教師にとっては無理のある原理的には不可能に近いやり方だが、かつては社会全体の効率の前に是認されたし（無理と認識されすらしなかった）、限られた子にしか教育機会のなかった過去を思えば、平等の原則にかなっていた。

　しかし、情報に溢れた豊かな文明社会が実現されてしまえば、この方法の無理な側面のほうが目立ちはじめるだろう（巷間の「教育の画一化」なる批判は、「画一化」が実際に進行したためではなく、この無理が意識されはじめた結果と思う）。三十年代に大都市を中心に不登校が出現した真の理由は、このような公教育の役割や重要性の社会的変容に求められるはずだと思う。

　そして現在の不登校の急増は、そのまま近代化（文明化）の全国規模での急速な拡大を反映したものである。指標に産業構造の変動を表わすグラフを示す（図4）。現代の情報社会で、公教育に頼らねば得られぬ知識があるだろうか。未知の知識や豊かな経済生活へ自分たちを架橋しうる貴重な門戸として公教育が民衆の切実な夢や願望を担い、それゆえに聖性や絶対性を帯びていた時代は、すでに過ぎ去っている。

　現代社会では、いつの世にもあるさまざまな負荷（図3）を契機に、たやすく不登校に陥る子どもが増えざるをえない。それらの負荷を押しても登校せねばならぬだけの聖性や絶対性を、現代社会は学校に付与しえないからである。そして、これが不登校の内容的拡散と量的増大の本質的理由である。

　「古典的」な長欠現象は社会の文化的・経済的後進性を背景としていた。しかし、それを脱した社会では（脱するに貢献したものこそが学校であったのだが！）、新たに「近代的」な長欠現象が必然的に——何かの問題性に起因する異常現象ではなく「自然現象」として——現れると考えればよい。今、目にしているのは、これである。全国平均を下まわっていた都市の長欠率が逆に全国平均を越えた四十年代が、その決定的な転換期だったろう。

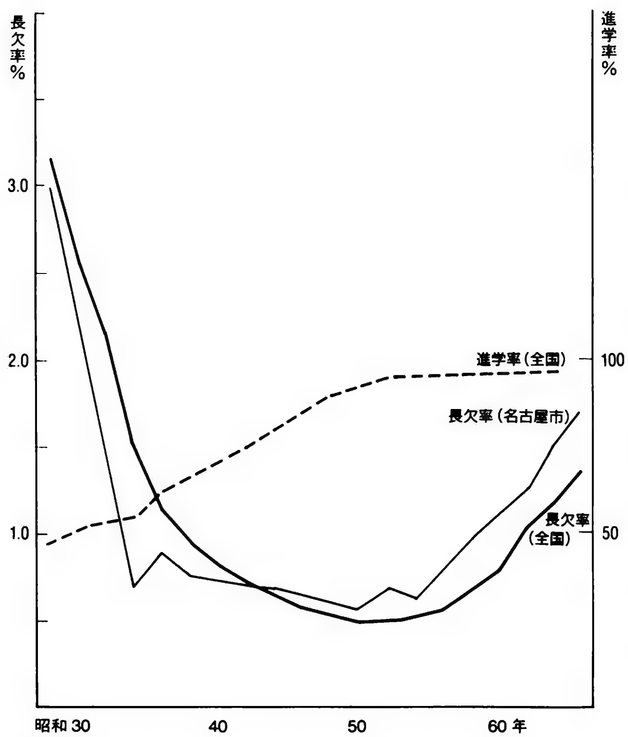
受験競争の激化が
▼登校拒否を生み出したというのはウソである

最後に、四十年代にかけての長欠率低下は何によるのだろうか。長欠率と高校進学率の推移を重ねてみよう（図５）。両者は逆相関を示し、進学熱（受験教育）を不登校増加の元凶とする昔からの通念的な主張が妥当でない事実を示唆する。むしろ、高校教育の大衆化によって、「高校進学」という新たな希望と動機が生まれ、子どもたちを能動的に学校へ向かわせる新しい力となり、これが近代化に伴う不登校の自然増を抑えてきたのである。

しかし同時に、進学率が九〇％を越えて頭打ちになった時点から、長欠率は反転上昇している事実に注目したい。ある目的が強い動機づけに働くには、それに対する能動性の意識が必要である。ほぼ全員が進学する社会になってしまえば、「進学」という目的は能動的な選択や希望という色彩を失い、もはや子どもたちを学校へ向かわせる強い力とはなりえない。

こうして「近代的」な長欠現象が、五十年代以降の長欠率急増としてはっきりその姿を現したのである。時代推移を大局的に捉えれば、学校教育の実体的内容の変化より、学校（公教育）に対する人びとの意識や社会の中での意義のほうが大きく変わっている現実にこそ、ことの本質を見るべきだと思う。

［図５］長欠率（中学生）と高校進学率



いじめ

それぞれの言い分だけがとびかい解決が見い出せない実態！

被害も加害も意識されず、「なんで俺だけ」という言い訳のオンパレード。結局は、問題は解決されず「処理」されるこの実態！

赤田圭亮（公立中学校教諭）

最近、外でお酒を飲んでいて気になることがある。時間は、たいてい十時過ぎ。ジーンズにトレーナーといったいでたちの若い夫婦。チューハイを飲みながら楽しそうに話している。彼らが連れてきた三歳か四歳ぐらいの幼児がお店の中を走り回っている。キャッキャ言いながらほかの客のテーブルに手を出したり、転んで泣きだしたり。もちろん若夫婦もたしなめるのだが、子どもは聞き入れる様子もなく走り回っている。

ぼくらのテーブルはひとしきりその子どもの話になる。「ねぇ、あの子が着ているミキハウスって高いんでしょ？」「あの、頭のうしろに髪の毛がちょっとだけ伸びているけど、あれおしゃれ？」「子どもはもう寝る時間だよね」「うちで飲めばいいのにね。子ども寝かしてから」などと勝手なことを言いはじめる。同じようなことが学校でもある。

たとえば入学式の受付に二人でガムをかみながら登場する親子だとか、入学式のブラスバンドの演奏が終わった瞬間、取り残されたようにおしゃべりの声が体育館に響いてしまうとか。

「今の親は常識がない」とか「礼儀を知らない」とかいうのではない。そんなことはぼくもずいぶん言われてきたし、今になってエラそうに他人を批判するつもりもない。それに若い親ほど率直にぼくらの話を聞いてくれたり、学校に親近感を持ってくれたりするわけだし、世代が同じなら話も通じやすい。でも、何か気になるのだ。一つひとつのことはどうってことないのだけれど、どこかで何かが変わりはじめているような気がするのだ。その変化が、じつはぼくら教員の仕事が以前に比べてやりにくくなっていることと関係があるんじゃないか、気になるというのはこのことなのだ。

こじれる学校「事件」

ここ何年間か、学校で起きるさまざまな「事件」が簡単に解決せず、こじれることが多くなっている。以前ならば一日ですんだことがこじれて何日もかかり、しまいにはかたちだけの決着をつけざるをえなくなり、同じことがあまり日をおかず起きてしまう原因になってしまうことだ。「事件」の中身はたわいのないことでも、とにかくすっきり終わらない。

たとえば数人で一人の生徒に暴力を振る

ってけがをさせた場合。当然、教師は現場を見ていないから、そこで何が起きたのかをまず確定することから始まる。「いじめ」という言葉はずいぶん使われすぎて陰惨な印象が定着してしまっているから、十中八九、子どもは自分たちが「いじめ」をしたとは考えていない。「いじめ」とは、なんの理由もなく（あるいはなんらかの理由で）特定の子をみんなで寄ってたかって排斥することで、絶対してはいけないものだ、ぐらいの認識は持っている。だから難しい。

とくに最近よく起きるのは、小グループ内の暴力だ。関係する生徒は、ふだんいっしょに遊んでいるせいか、決定的な排除の原因のようなものが見えず、そのうえ被害・加害の関係も意識されにくいので事後処理が難しくなる。具体的に想定してみよう。

まず、前ぶれ。家庭からの連絡で始まることが多い。たとえば母親からの電話。「うちの子の制服の背中に足跡がついているんです。本人に聞いても何も言わないんですが、学校で何かあったんじゃないでしょうか」。

担任はまずほかの教員に様子を聞く（クラスの問題は担任の責任、担任がきちんと指導していないから問題が起きる、なんてことが常識になっている学校では、担任はなかなかほかの教員には聞けない。そういう場合、あとあと「泥沼」になることが多い）。「よく遊んでいるのは見るけど、いじめっぽいという感じはしませんね」。同じクラスの生徒にも聞く。「知らない」「見てない」という反応の中に「プロレスやっててやられていることがあるよ」。まったく事実無根のことではないことが明らかになる。本人を呼んで事情を聞く。「そんなことないよ。いっしょに遊んでいるだけだよ」。あっけらかんと答える。最後にグループの生徒数人に話を聞く。「だれがそんなこと言ってんのお。プロレスはいっしょにするけど、べつにあいつだけやられるわけじゃないよ」。

いちおうの事情は聞き終わった。それぞれへの注意。本人には「何かあったら必ず言いに来なさい」。グループの生徒には「遊ぶのはいいけれど、あんまり乱暴なことはしないように」。母親には「事情を聞いてみました。いっしょに遊んでいてついた足跡ではないかと思います。学校でも注意して見ていきますので、また何かありましたらご連絡ください」。

前ぶれでの関わりがいくらかの抑止力を発揮することもないわけじゃないけれど、たいていその効果は一カ月もたない。本人がけがをすることで状況は一変してしまう。

母親は、「あのとき先生がきちっと指導していてくれれば、こんなことにならなかったのに」という不信感でいっぱい。担任は、もういちど対応を迫られる。

「〜だけ」「〜だけ」のオンパレード

ところが、ここで行きづまる。「加害」とみなされる生徒に事情を聞く。「プロレスごっこをしているうちに、けんかになっちゃったんだ。いじめたわけじゃないよ。それに、手を出したのはおれだけじゃない。どうしておれだけに聞くわけ」「じゃ、ほかに手を出したのはだれ？」「ええ？　よく覚えてないよ」。

まわりにいた四、五人の生徒に聞く。「その場にはいたけど、見てただけだよ。え？



たいしたことなかったよ。だってあいつ笑ってたよ」「背中をちょっとぶっただけだよ。何回？　一回だと思うけど」「終わりのほうで一回蹴っただけ」「頭をちょこっと叩いただけ」……「〜だけ」のオンパレード。「だけ」が集まってけがになる。

当然、本人にも確認する。ここでさらに行きづまる。「みんなで遊んでいたら、けんかになっちゃったんだ。べつにいじめられてたわけじゃない。帰りだっていつもいっしょに帰るし、血が出たら保健室に連れていってくれたし」。

大きな声を出して、「どんな気持ちでいたろうと、集団で一人の生徒に暴力を振るったんだ。やられたほうがなんと言っててもこれはれっきとした弱い者いじめだ」と断罪することはできるけれど、やった側の不満そうな表情を変えることは難しい。

一方、「けが」ということになれば、治療費の問題、極端な場合は慰謝料の問題まであるから、それぞれの親に集まってもらうことになる。謝罪の場を学校が設定し、今後同じようなことが起きないように確認するのである。それぞれの言い分。

被害生徒の母親「きちんと謝ってもらい、今後こんなことが起きないようにしてほしい」

加害生徒の母親「子どもに聞くと、先生はうちの子だけが悪いように言われたとか。みんなでやったことならみんなで責任を取ってもらわないと」

加害生徒の母親「やったことは認めます。でもね、子どもに聞いたらちょっと手を出しただけだと言うんです。それに子ども同士のことですし、こんなに大げさに呼び出しなどしなくても……って家でも話をしていたんですよ。子どものけんかに親が出るのはおかしいって」

加害生徒の母親「そうなんですよ。やられたお子さんも友だちだって言うし、いじめられたわけじゃないって言ってるんでしょ」

加害生徒の父親「うちの子は手は出していないって言ってるんです。たしかにその場にいたんだからまったく関係ないとは言えませんが、うちの子は先生に疑われたと言って、ずいぶんショックのようです。先生方も、もう少し生徒の動きをきちんと把握されていればこんな大げさなことにならずにすんだんじゃないでしょうか」

やられた生徒も被害意識がなく、やった生徒も「〜だけ」の連発。そして、親たちも熱心に自分の子どもの話には耳を傾ける。「事実」らしいものは、どんどんその内容を変えていく。生徒たちは、もう自分たちとは関係ないという顔つき。教員の側もこれではまずいとばかり、「けが」を盾に決着をはかろうとする。

「いろいろご意見はうかがいました。しかし、学校としても校内で暴力が振るわれ、けがまでしているということを放置するわ

けにはいきません。今後のこともありますので、この件はきちんと謝罪していただき、以後このようなことがないようにご家庭でも注意していただきたいと思います。われわれのほうも、二度とこのようなことが起きないよう生徒に注意を喚起していきたいと考えています。治療費については後日また連絡致します」

いちおうの謝罪。誰一人すっきりしないけれど、被害生徒の母親以外は、教員も含めてほんの少し安堵の表情を浮かべながらその場を去ることになる。問題のほとんどは解決していない。「処理」されただけである。

人間の善意ややさしさではいじめは解決できない

「事実」とはいったいなんなのか。事実とは結局のところ、それにかかわる人間たちの物語なのではないだろうか。そして「物語」とは、その人間が属する社会や環境が長いことかかって作り上げてきたもの、ひとつの問題の「解決」の仕方ではないか。

自分の子どもが、たとえどんな理由があろうと他人をけがさせてしまったとき、親が何も言わず頭を下げることで子どもの反省を促すといった旧来の親のあり方は、じつはその親自身の特性ではなく、そうすることが共同の意識として容認され、その中で子どもが育っていくという物語を親自身が経験的に会得していたからではないか。学校や教師もじつはその中に組み込まれ、子育てという「物語」の一部を支えていたのではないだろうか。

子どもも、そんなやり方に不満を覚えながらも、不満を主張することはなかった。そうした方法がひとつの装置としてリアリティを持っていたからだろう。教師は、「解決」の中心は教育という名の「権威」だと思い続けてきたが、それは、逆に言えば猶予機関である学校と、地域共同体の物語がうまくかみ合っていたからにすぎないのではないか。良いものだけを温存していたとは思わないけれど、地域そのものが壊れることによって地域が持っていたある合意のようなもの——文化と言っていいと思うが——まで壊れてしまったこと、そのことがぼくらの行きづまりと無関係とは思われない。長い時間かかって壊れ続けてきたものが、世代を超えて今ボディブローのように効きはじめている。

問題は、壊れてしまった物語に代わる新しい物語をどう作り出せるか、ということだ。

学校は今、ようやく近代化の時期に入ったとぼくは思っている。校則の自由化とか、人権問題への取組みだとか、環境教育だとか。しかし近代というものがひとつの物語として教育に貫徹しているとすれば、今まで書いたようなことは逆に起こりえない。問題は近代主義で解決できない部分が増えていることにあるのだ。

深夜に居酒屋を徘徊する幼児や、二人でガムをかみながら入学式に来る親子を、倫理や道徳で批判するのではなく、こんな時代だからこそ、新たな共同性や合意を作り出す基盤をともに探りたいと思うのだ。そんなふうに考えでもしなければ、毎日のしんどさに嫌気がさすばかりなのだから。

(文中の「事件」は、ここ数年、ぼくのまわりで起きたいくつかの出来事を再構成したものです)

底辺校

底辺校で生きのびる知恵

問題が山積する学校は諦めと無力感が支配する。過度の管理や制度の奴隷になるのではなく、確信犯的にほどほどにやる智恵、これが大事だ！

佐々木賢（日本心理センター研究員）

教師をやっていて、何が憂うつかといって、処分会議ほど憂うつなものはない。その事件に暴力やいじめなどがからんでいる場合はとくにそうである。現実には、事件の内容は多様であり、被害者だけがいて加害者がわからなかったり、加害事実だけあって被害者の申し出がなかったり、事情聴取の際、加害者と被害者との間で事実関係で食い違いが生じたときなど、延々と会議を続けたわりには、パッとした結論が出てこないことも多い。

底辺校の教師は社会の治安維持に貢献している

一般社会では、警察がいて検事がいて弁護士がいて、そして裁判官がいて、つまりその道の専門家がそれぞれいて、しかもかなりの時間をかけて処理しているものを、校内事件では、すべて教師が授業や校務の片手間にやるのだから、本来充分な調査や審理などできるわけがない。事件の多い学校で、管理主義や機械的な処分が流行るのは、むしろ当然のことなのかもしれない。

したがって、表に出た事件では（じつは表に出ない事件も多いのだが）おおむね被害者の立場に立った結論が出る。被害者の親御さんは怒っているし、近所から苦情がきているし、一般生徒が迷惑がっているし、事務室の人たちも解決を迫ってくるし、こういう圧力から逃れるためにも、結論が急がれる。高校における早期解決は退学処分だが、これは教育庁に報告しなければならないから、かえって面倒になる。そこで「自主退学」を勧めることになる。これは処分ではないから学籍簿には書かないし、そのことで教師の「良心」がかろうじて保たれる。

だが、非行事件で警察に行くと、少年係の人に「学校でそう簡単に生徒を辞めさせないでください」と言われる。少年たちは学校にいるうちはさほどたいした事件を起こさないが、辞めると坂をころげ落ちるように「悪く」なる例が多いのだという。そこで若干の使命感を持ち、もう少しがんばってみようかという気になる。そうこうしながら、けっこう教師たちは厄介な生徒を学校に抱えこんでいる。つまり、底辺校の教師たちは社会全体の治安維持に、かなりの程度協力しているのだが、非行生徒を抱えこんでいると、学校に対する世間の評判はすこぶる悪くなる。

非行問題の背景は複雑きわまりない

非行問題の背景を考えると、じつはかなり複雑な問題を孕んでいる。まずは、非行生徒とそうでない子を区別する線が明確にあるわけではないからだ。非行の定義だけでも延々と議論をして、なお議論しきれないものが残るはずだ。ふつうの生徒と言われる者がひょいと万引したり、いじめをしたりする。そうかと思うと、非行と言われる生徒が、温かい友情を持っていたり、金銭感覚がしっかりしていたりする。

　そこで、こうした生徒たちの傾向を現象面より仮に二つに分けてみたい。そのひとつは、本人たちが現在の学校の秩序に反感を持っている場合。これは授業妨害をしたり、校舎を破壊したり、教師に暴言を吐いたり、ことさら校内で事件を起こしたりする。いまひとつは、学校無関心。遅刻や早退が多くて欠席がち、学校に来ても教室に出なくて校庭でブラブラしていたり、ウンチングスタイルでしゃがんでいたりする。教室にいても虚ろな目で授業などはさっぱり聞いてはいないし、クラブ活動もやらないし、学校行事だと休んでしまう。友だちとおしゃべりしているときだけ、かろうじて人間らしい顔つきをしている。

　こうした生徒たちと長く接していると、教師としては、前者のほうがまだしもわかりやすかったりする。それもそのはず、秩序への反感は、秩序の質が変われば、容易に解決するものだし、本人自身も時とともに変化していくし、反抗にはエネルギーがいるので、概して長続きしないものだからだ。

　私の経験からして、荒れた時期には本当に学校を辞めようと思ったことがなんどもあったが、頭を低くしてじっと待っていると、長い場合でも数年で、短いときには一年か数カ月で事態が変わっていくものだということがわかった。

「仮目的取得の失敗」と「立場の不安」

　秩序への反感と学校無関心を比較すると前者のほうが処しやすいのは、それぞれの背景となっている意識の質が違うからではないかと思う。反感の背景にある意識は「仮目的取得の失敗」と「立場の不安」である。

　現在の若者たちは何者になるかという人生の目的を持ちにくく、どの学校に入るかというような仮の目的しか持ちえない。学校ブランドに囚われて志望校を決め、それがダメで不本意に入学したり、あるいはもともと偏差値が低かったり、どこかに入学しても単位が取れなくなったりする。そうした「仮目的取得の失敗」で周囲の人に自分のイライラをぶつけてくる。

　もうひとつの「立場の不安」は、教育過剰と学校空洞化の両現象に関係がある。現在の教育問題の大部分は、じつは教育過剰問題であって、大人たちがあまりにも教育に期待しすぎるために起こっている。若者たちは一人前として扱われず、いつまでも教育の対象にされていることに苛立っている。おまけに、学校の機能は衰えている。進学機能は予備校や塾に、就職機能は情報誌や電話情報による就職に、そして、学歴付与機能は職業資格の氾濫で、とくにブランド校でないかぎり、うすらぼんやりしたものに感じ取られている。

　親や周囲の大人たちは教育熱心で、「学校

こそ大切」と考えているが、現実の学校はなんの役にも立たないと若者たちは思っている。そこで学校に依存しつつ反発するというアンビヴァレントな態度が生まれてくる。生徒の学校への反感はこうしたアンビヴァレントな態度を理解すると、意外に対処しやすいし、時間が経つと本人の意識や周囲の状況が変化したりして、それで自然に問題が解消したりする。

そして、制度改革によっても、かなりの程度改善しうる。単位を取りやすくした学校ができたり、少人数制で多様な価値を認める学校ができたり、職業資格や検定等の学歴以外の仮目的を与えたり、要するに学校機能の分散現象を、そのまま認めた制度改革をしていけばよいのである。

「能力の出口」の喪失感と生活の「浮遊感」

より困難な問題は学校無関心である。学校無関心の背景にある意識はまた二つあって、ひとつは労働現場における「能力の出口」の喪失感と、いまひとつは生活の場での「浮遊感」である。エリートの職場ではどうなのだか知らないが、現在、中級技能以下の職種で、労働の質が極度に単純化し、下請け化し、無機質化し、細分化されている。かつての徒弟的な修業の場は少なくなりつつあって、苦労して技能を身につけるよりも、新しい機械に即座に対応する変わり身の早さだけが要求されている。

無論、昔の徒弟修業をそのまま礼讃するつもりはない。奴隷のような個人の拘束、ほぼ無制限な労働時間等々、いろいろ忌避すべき点があるのだが、カンやコツを自らの体内に溜めこんでいく充実感はあった。苦しさと抱き合わせで、自らが成長する喜びもあったのである。体得することがなくなり、変わり身の早さが要求される労働現場では、能力の出口が塞がれている。若者たちはアルバイトをしながら、この労働様態の変化に敏感に気づいている。あくせく教育を受けずとも、なんの努力もせずとも、できる仕事があるのであり、そのかわり、カッコいい仕事には、依然として学歴や資格が必要だということを知らされる。

そのうえ、日常生活の場で虚脱感がある。何をするのも面倒だという若者が増えている。生活が極度に虚構化され、実体がなくシミュレーションが氾濫し、体験がなくイメージが肥大化しているからであろう。学校で読み書きソロバンを教わるが、日常生活では読むよりテレビを見、書くより電話を使い、暗算するより電卓をはじいてしまう。要するに手応え歯応えのない生活があるのみで、偏平足が増えたり、拒食症になったりして、感覚の分野でも変容している。おまけに、地域や家庭が崩壊し、人間飢餓感だけが高じてきている。

能力の出口は技術の方向性の、浮遊感は消費社会の方向性の問題である。これはたいへんな問題であって、単なる学校や教育上の制度改革だけではすまないことは言うまでもない。だが、これが底辺校の教師に共通する諦めと無力感をもたらしている源泉である(このことに関して詳しくは、『怠学の研究』佐々木賢著、三一書房刊、『教育という謎』松田博公・佐々木賢対談、北斗出版刊を参照されたい)。

もしできるなら、学校等の制度改革はしたほうがいい。だが、それで事態が解決されると思われては困る。我々はこの近代社

会のなれの果てに、近未来での解決が不可能な問題を抱えてしまっている。少なくとも、その認識だけは持っているほうがいい。解決不能の問題を抱えた現場では、諦めや無力感が支配するが、それだけではやりきれないから、そこをつき抜けた意識と感覚を養うことが必要となってくる。

学校で我々に制度的に課されたあれこれの業務は、事務的にさらりとやるようにする。だが、あくまで制度の奴隷になったり、管理に夢中になったりしないようにする。生徒に与えたいとか言いたいことがあっても、極力抑えておく。授業も生活指導もその場を糊塗するだけで、それこそほどほどでよいと思う。これも確信犯的に、強くそう思いこむのだ。そうすれば気が楽になる。

しかし、生徒との関わりは大切にする。要求があれば、個人的な相談にのったり進路準備の手伝いはするが、そのものが目的ではなく、関わりそのものを大切にするからであることを、心に留めおく。そして、状況認識をするための情報に敏感になることが必要だと思う。その新しい情報は生徒自身の体や意識や行動が示してくれる。

米本和広（ルポライター）

私立vs公立

公立は平等に縛られ、私立は生き残り戦略で特色を出す

私高公低の背景を、公立学校を経験した私立の先生にホンネで語ってもらった

地方から上京し、大学卒業後もそのまま首都圏の会社に入った人が、親になってまず驚くのは、私立中・高の人気の高さである。

「オレたちの田舎では私立はバカが行くところだったのに……」

人気の高さは、もちろん大学進学実績にある。同時に、イジメ、校内暴力といった暗いイメージがないことも原因している。いったいなぜ私立はよくなり、公立とどこが違うのか、公立学校を経験した私立の先生にホンネで語ってもらった。

出席者は都立青山高の校長などを歴任し、現在調布学園の校長である安藤清吉氏、千葉の東葛飾高校の進路指導担当などを経験した渋谷教育学園・幕張高校付属中副校長の和田文男氏、埼玉県の名門高校の教頭、校長から私立の中・高一貫校の副校長に就任した門脇義雄氏（仮名）の三氏である。

公立は先生中心、私立は生徒中心

和田●渋谷・幕張に来てすぐのときに、教室に黒板がひとつしかなかったので、三面にしてもらいたいと校長に要求したんです。

私の担当は数学でして、答を書かせるのに黒板ひとつでは足りないのです。そうしたら、なんと全教室に、一週間のうちに三面の黒板が入ったのです。あれには驚きました。公立であれば、県の教育委員会が「予算がない」「他に前例がない」ということで、三年はかかりますからね。いいと思ったことをすぐに実行できる。それが私立のよさです。

安藤●都の教育委員会にいたことがあるので、それはよくわかります。できるだけ平等というのが公立ですから。

和田●人口の急増期に千葉県に公立高校がたくさんできましたが、校舎はどれもまったく同じ。効率的、画一的なものばかりでした。

門脇●七年前の三月三十一日まで、ある公立の校長をしていたんです。そして四月一日に私立に移った。そしたら、その日は主任クラスの会議の日で、いきなり夜八時まで会議ですよ。公立じゃあ、考えられないことです。よほどの緊急の何かがないかぎりね。入学式のやり方も個性的で、驚くことばかりだった。

安藤●公立には経営的観念がないのです。私立は生徒が来なければ学校がつぶれてしまう。したがって、生徒の集め方だって、必死にならざるを得ない。公立は先生中心の運営ですが、私立は生徒中心です。生徒の要望、父兄の要望をよく聞く。都立の校長をした人は、なかなか私立の校長が務まらないと言われています。それは、私学の理事長に問題があることも多いのですが、都立流の意識が抜けないからなんです。

公立の校長には権限がほとんどない

和田●学校の権限の問題ですが、私立は校長・理事長に権限があるが、公立は県教委でしょ。かつて、私は組合の立場でいろいろやったことがあって、教育委から睨まれた。そのため、教育実績があっても、校長に昇格させない。周囲からなぜかと不思議がられたが、睨まれたら最後ですよ。ところが、私立の場合はそんなことは関係がない。実績だけで見る。

安藤●逆のことも言える。公立で、組合が強いところでは、校長はそっちのけ。権限ねえ……、公立の校長にはないですよね。

門脇●人事権も予算権もない。予算は県からもらい、それを執行するだけ。途中年度に必要な経費が発生すれば、校長が県教委に頭を下げてお願いに行くしかありません。

和田●公立の校長には、当事者能力をもたされていないから。

安藤●そう。何かをお願いするときには、行政は平等主義ですから、複数の校長と一緒になって要求をまとめるしかない。

和田●公立の校長の権限と言えば、入学許可と卒業許可（笑）、それに教育課程の作成ぐらいですか。そのカリキュラムもですよ。ずいぶん前のことになるけど、教育改革の一環として、東葛高校で九十単位にしたいと県教委に申し出たら、認めないというんですよ。指導要領には八十単位以上となっているのにね。逆に、九十八単位にしろっていう。私の個人的感想かもしれないが、文部省よりも県教委が硬直化している。文部省のほうが柔軟で、話がわかりやすい。

安藤●公立の問題点は、校長の異動サイクルが三～四年と短すぎるということもある。三～四年で異動だから、できるだけ波風が

立たないようにする。次の人に迷惑がかからないようにして、バトンタッチ。

和田●それで等質になってしまう。教員もローテーション制度が導入され、二十年選手がいなくなり、独特のカラーも消え、画一的になってしまった。その学校に愛着をもつような先生がいなくなってしまった。

安藤●それは言えますね。もっともそれは難しい問題で、異動がないデメリットには学校の雰囲気が澱むということがある。私立の危険は唯我独尊になること。両刃の剣ですよね。

和田●先生の熱心さも違う。公立と比べると、私立の先生は二、三倍は働いているでしょう。五時になっても、帰らない。そうしないと、保護者の要望に応えられないですよ。

門脇●公立では、一部の熱心な先生は夜遅くまで残って次の日の準備をしていましたが、五時以前に帰ってしまう人もいましたね。私立のほうがはるかに熱心です。でも、働くことに公立の先生が不熱心かと言えば、決してそうではないと思います。

安藤●手当はあるけど、残業を何時間しても、公立は残業代がつかない。その点が大きいと思います。うちでは三六協定を結んで、手当を出していますが。

公立は学校まかせ、私立は親の要望が細かい

門脇●県教委は各学校は特色を出せ、と言いますが、それも公平という観点で縛ったうえでです。しかも、特色を出すうえで、特別の予算を保証するわけではない。金がなければ、頭を使えです(笑)。その点、私立は違いますね。生き残り戦争に勝ち抜かなければならないから、体育祭でも見応えがあるものにする。個性化・多様化って言うけど、公立で特色を出すのは難しいと思います。

安藤●やはり、私立の場合は死ぬ思いで生徒を募集している。こういう学校だから、ぜひ来てくれ、と。そこが、決定的に違うところですよね。

門脇●そう。募集にかける時間は公立にはないけど、私立はすごい。

和田●そこが決定的に違うところ。学校の説明会はなんどもやっているでしょう。見学にみえれば、きちんと案内して説明する。施設の案内、教育内容の説明……。公立はそんなことをしなくてすむ。

門脇●最近、公立も募集パンフレットを持って各校を回るようになったらしいけど、埼玉の名門と言われている学校にいたときには、進学実績のみで、そもそも学校なんか見に来なかった(笑)。

安藤●PTAの集まりにも、公立の親は来ませんね。公立は親がおまかせって感じでした。その点、私立は親と学校側とのコミュニケーションが密だし、親の要望も細かい。

私立vs公立という点で、私はこう思うんですよ。

教育の目標を富士山の頂上にたとえるのなら、公立には登り方はひとつしかないが、東京に二百三十五校ある私学の場合は二百三十五通りのコースがある。

和田●親の要望という点で、その頂上は大学進学です。父兄の大半の関心は出口(進学先)にあり、一〇〇%が大学進学を希望している。

安藤●そうですね。うちは当初、定員割れの状態にあり、〇点以外の子どもはみんな入学させた時期がありました。今では大学

に合格できるようになりましたが、大学進学という点では公立はかわいそうな気がします。東京の場合、小学校の成績上位三分の一の子が私立に流れ、残りが公立ですから。
　私立を希望した親の負担は公立に比べ、年間六十万円多い。その六十万円で何をするか、それが私学につねに問われているところでしょ。先生一人ひとりの力は公立が上だと思います。でも、私学は総合力がある。毎朝、校長と副教頭がその日のことを打合せし、月水金は理事長、事務局を含めた会議を行ない、学年会は週に二回、委員会は週に一回の打合せをしている。

画一的な行政を排せば 公立の将来は今より明るくなる

門脇●公立には、私立にないいい点もあります。まず、財政的に安定している。理事長・校長が経営に頭を悩ます必要はありません。それから、個々の教員は優秀です。そして、物、いわゆる施設が整っている。これらが、総合的に活かされ、各校が特色をもち、魅力のある学校になれば、私立にとって恐るべき競争相手になると思います。ただ、それが活かされていない。

和田●おっしゃるとおりですね。公立に将来性があるとすれば、それぞれの学校でカラーが出せるかどうかにあるでしょう。画一的な行政をやめればいいのです。極論すれば、県教委が各校に口を挟まなければいいのです。修学旅行の編成ひとつにも文句をつけ、各校の提案を前例がないという理由で認めない、そういう状態をなくせばいいのです。そもそも、県教委の人たちは教育のプロではないのですから、現場にまかせればいいのです。繰り返しになりますが、文部省より県教委がはるかに硬直している。それが問題なのです。

安藤●現場から教員委員会に入った人でも、どういうわけか、とたんに官僚的になってしまう。役人根性というのか。

門脇●千葉と同じで、埼玉でも〝十五の春を泣かすな〟ということから、ひたすら量の拡大に走り、画一的な学校を、毎年七、八校つくった時期があります。その結果が、大学に行けない公立ばかりになってしまった。問題はこれから特色を出せるかどうかですが、しかし特色をもったからといって、大学の進学実績が上がるかどうかはわかりません。

安藤●成績のいい子は私立というふうになってしまっていますからね。それにしても、公立のいい点はとにかく安定していることです。経営的観念がないという問題点とは裏腹の関係なんですが、経営上の心配はないし、私立のように理事長からクビを宣告されることもない。身分が安定している。逆に、私立の場合は不安定だから、みんながんばるということになる。すべての私立がすべてうまくいっているというわけではありませんがね。

和田●安定ということは大きい。だけど、これまでそこに安住しすぎてきたということも言える。とくに、最近の傾向ですが、教員同士がまあまあ主義になっている。新人であろうが、学校に入ればすぐに先生となり、先輩も新人も同じになる。先輩から指導してもらうという雰囲気がない。

安藤●そうですね。私立は先輩が後輩をきちんと指導するようになっているが、最近の公立は先輩から習おうということがない

ようです。うちでは、新人に担任をもたせませんよ。

公立は大企業病を脱せるか

先生のレベル、財政、施設、どれをとっても条件は私立よりも公立が上である。にもかかわらず、私高公低となっているのは、じつにオカシナ話だ。

三人の先生たちの話から連想するのは、大企業病である。べつに公立が低迷しようが、文部省、教育委員会の役人をはじめとする公立の構成員たちは、メシが食えるのである。定員割れをしても、特色のある学校づくりができなくても、責任を取る人は誰もいない。

塾業界によれば、東京、神奈川の公立は〝つぶれた〟という。つぶれたというのは、公立高校からは浪人しないかぎり、大学に合格できなくなったという意味である。次は千葉、そして埼玉で公立と私立の力関係が逆転すると見られている。それを見込んで、四谷大塚、日能研は津田沼に進出し、来年には浦和に日能研に続き四谷大塚が進出する。狙いは打倒千葉高、浦和高である。

週休二日問題

疲れている先生のための学校五日制

教員の週休二日を実施するためにはじまった学校五日制はコスト問題をネグる窮余の策だ！

夏木智（公立高校教諭）

学校の週五日制をめぐる論議がさかんであるが、そのひとつのキーポイントである「教員の週休二日制をどうするか」という問題はほとんど議論されていないようである。

教員を休みにするための週五日制か

週五日制の問題は、古くから論議されてきたにもかかわらず、一言で言えば、親の反対が強くて実現できないできた。それが、一九九二年になって突然、しかも九月という中途半端な時期から、（月一回ではあるが）導入されたのは、その前年に人事院が公務員の完全週休二日制を勧告したからである。

学校というところは、やることなすことに「子どものため」というレッテルを貼ることが習い性になっているらしく、今回の週五日制の導入にも、やたらにべたべたと貼りつけているようだが、少なくとも今回の導入に関するかぎり、本質は教員の週休二日制をどうするかという問題だったのである。

「なにか先生の休みを保障するために導入

されたみたいで、子どもたちのことを本当には考えていないような気がする」といった意見をときおり見かけるが、気がするも何も、まったくそのとおりなのである。だが、よく考えてみてほしい。子どもたちの都合だけがすべてに優先すべきなのだろうか？ 子どもたちにとって週五日制が良いものか悪いものか、結論が出ていないというだけの理由で、教員たちはいつまでも、果てしなく働き続けなくてはならないのだろうか？

　もし人びとが、自分は身勝手でないといい、週五日制の問題を真剣に考えるというなら、教員の週休二日の問題をどうするかという問題を、重要なキーポイントのひとつとして論じることに、異論はないはずである。まず、この問題から考えてみよう。

教員の週休二日をどうするか

　教員の週休二日をどうするかといった問題は、理念で議論するような問題ではない。教員は休みが多いほうがいいと言うだろうし、親のほうはなるだけ働かせたいと思うに決まっている。「教員には長い休みがあるんだから週休二日の必要はない」とか、「今の教員は忙しすぎるから、休みが必要だ」とかいくら議論していても無意味である。教員の休みの量の問題は、教員の待遇の問題であり、したがって、教員に対してどのぐらい高い資質を望むかという問題なのであるということを、まず理解しなくてはならない。

　ごく大ざっぱに言って、労働者がよりよい待遇を望む結果、待遇のいい職場には応募者が殺到し、結果としてそのなかから質の高い人材を選び出すことが可能である。また、そのことがステイタスシンボルとなって、より労働者をひきつける。逆に待遇が悪くなれば、労働者の質が低下し、その結果、ますますその職場の魅力を失わせる。

　公共機関を含む多くの企業が週休二日制に移行しつつある現在、教員の週休を一日のままにしておくことは、教員という職業の待遇の（相対的な）悪化を意味する。他の職業がより魅力的になれば、教師になるよりそっちのほうがいいと思う者が増えるわけである。したがって、（他の職業を選べるほど）優秀な者たちは他の職業を選び、全体として教員の質は低下する。[1]

　ここでは、「夏休みなど長い休みがあるのだから……」というような言い方はまったく無意味である。現在、すでに夏休みや冬休みがあって、それを前提に人びとはものを考えているのである。言い換えれば、今の教員の質は夏休みや冬休みがあることで保たれているのである。他の職業の魅力が増大すれば、現状より資質が低下することには、なんの変わりもない。

　選択肢は二つである。教員の休みを増やすか、質の低下を我慢するか。どちらを選ぶかは、議論のわかれるところであろう。ぜひおおいに議論して、どちらのほうが得か、賢い選択をしてほしいものである。

　この難しい問題について、これ以上細かい議論をしていることはできないので、とりあえず、前者を選んだとして議論を進めよう。私の考えでは、そのほうが賢い選択だろうと思う。教員にかぎらず、労働者の質は一朝一夕には低下しないかわり、いったん低下すると、短期間で向上させるのは非常に困難である。今、あれほど教員の質

の向上が叫ばれていることを考えても、とりあえず、教員の週休二日を保障するという選択をしておいたほうがよさそうである。

異論もあるだろうが、教員の休みを増やすという選択をしたとして話を進めよう。

学校五日制は必要か

教員の休みを増やすことにしたとして、学校はどうなるだろうか。週五日制にするしかないのだろうか。必ずしも、そうとばかりは言い切れない。

学校を六日制のままで、教員の休みを週二日にすることは、高校では現状でもできないことではない。現に、都立高校の多くで、すべての教員が週に一度研修を名目に休んでいる。▽2

これは小学校、中学校では難しいが、もし教員を増員する気があれば、六日制のまま、教員の休みを保障することもできないことではない。教員を増員して、全員が土曜日とはいかないまでも、かわりばんこにどれかの曜日に休みを取ることにするわけである。

しかし、もちろん、教員を増員するには、それなりにお金がかかる。したがって、ここにも二つの選択肢がある。お金を出して教員を増員するか、学校を週五日制にするかである。

どちらを選ぶかは、私には決められない。人びとが決めることである。もし、人びとが月に一万円だけ余分に支払う気があれば、六日制を保つのに充分な数の教員を確保できると思う。私立学校に通わせることを考えれば、不可能な額ではない。あるいは、もしできるものなら、行政にお金を出させてもいい。

しかし、それができないのであれば、学校五日制は避けられない選択である。とにかく確かなことは、学校六日制を保つには、お金か、教員の質か、とにかく何かを失わなければならない時代に、もはやなってしまっているということである。ぜひ、この事実をきちんと認識したうえで、学校五日制を論じてほしいものだと思う。

混乱する五日制論議

金も出したくない、教員の質も下げたくないとすれば、五日制を導入するしかない。すると問題は、五日制のデメリットがどれほどのものかということになる。それがあまりに大きくて我慢できないほどのものであるなら、お金を出すか、教員の質の低下を容認しても、六日制を続けるしかないことになる。

ところが、その肝心の「五日制のデメリット」を評価することが、途方もなく難しい。というより、現状では不可能であると言ったほうがいい。理屈で考えれば、そのデメリットとは、学校が人びとに提供しているサービスの量が減る、ということ以外にありえない。ところが、その「学校が提供している、あるいは提供すべきサービス」がどんなもので、どれほどの価値を持つかということについて、人びとはまるで見当がつかないらしいのである。それどころか、同じ人間が同じサービスに対して、まったく矛盾した意見を持っていることさえ、決

して珍しくないのである。

この問題は、今の教育をめぐる混乱の根本にふれる問題で、残念ながら、ここで詳しく論じるほどの余裕はない。学校五日制に関して、人びとがいかに矛盾した意見を述べているかの例を二つだけ、あげておくことにしよう。

まず、最初の例。人びとが学校に期待しているサービスのうち、もっとも重要なものは「子どもたちを賢くすること」であることは間違いない。このサービスは、学校が子どもたちに勉強を強要することで実現される。ところで、勉強は多くの子どもにとっては本質的につらいものである。したがって、つらい勉強を強いるという学校のサービスは、子どもたちにとっては重圧と感じられる。

この重圧がしばしば問題視される。あたかも、学校という悪者が子どもたちをいじめてでもいるかのように。それは、人びとが学校に望んだことの当然の帰結なのだが、人びとは「勉強は本来楽しいもの」などと夢のような仮説を持ち出して、それを実現できない学校が、諸悪の根源であるかのように思いこんでいるのである。

人びとが、「子どもたちを賢くすること」と「子どもたちの重圧を取り除くこと」という矛盾したことを、同時に期待している以上、どんな議論もまともなものにはなりえない。それは、学校五日制に関するものについても、むろん例外ではない。

五日制にしたとき、生まれるゆとりの価値と、失う学力との差が、五日制のデメリットである。しかし、人びとはそれらを冷静に評価しようとはしない。学校という重圧から子どもたちを解放するために、五日制はぜひ必要だと言いながら、そのために学力が低下するようなことは絶対にあってはならないと騒いでいるのである、これでは結論など出るはずもない。

もうひとつ、例をあげよう。学校はすべての子どもを学校に縛りつけておくというサービスも提供している。土曜が休みになると、このサービスの量も減少する。これに対して、「子どもが自由になることはいいことだが、塾通いが増えると困る」と言う人がいる。これも、明らかな矛盾である。自由がいいことであるなら、塾通いをしたい子どもが自由に塾に通えるのは喜ばしいことではないか。

学校五日制に関する論議を見ていると、こうした矛盾に出会うことは、決して珍しいことではない。人びとが、このように矛盾したことを平気で言っているようでは、五日制のデメリットを評価し、それによって学校五日制の是非を論じることを望むのは、当分は無理と判断したほうがよさそうだ。だとすれば、これほど議論が紛糾する以上、たいしたデメリットもなさそうでもあるし、とりあえず学校五日制を導入しておいて、教員の質の低下だけは防いでおくのが、現実的な選択と言えそうだ、と私は思う。

▼1　人びとが、教員の待遇が悪化しても、他人事だからと平気な顔をしていられるほど冷酷であるならば、教員たちも、同じ冷酷さを返してくるにちがいない。そういう意味でも、教員の待遇の悪化を黙認することは、教員の資質を下げると言ってよい。

▼2　時間割を作るときに、どの教員にも週に一日、授業のない日ができるように作り、その日を休むのである。ただし、これは全国的には例外である。ときどき「教員にはすでに、週一回の研修日がある」と思っている人がいるようなのだが、全国の大部分の学校には（小中はもちろん高校でも）そんな制度はない。

学校給食

食文化の現在からしか給食問題は語れない！

埼玉県庄和町の問題提起があらわにしたものは、学校がいかにサブカルチャーに包囲されているかということだ！

向井吉人（公立小学校教諭）

昨年（一九九二年）の六月十八日、埼玉県北葛飾郡庄和町が、全国で初めて、公立小・中学校の給食廃止の方針を打ち出した。その後、父母からの反対や、神谷尚町長の死去などから再検討の方針に後退した。しかし、この町の給食廃止論には、現在の学校教育のありかたを問うような問題提起が含まれているのではなかろうか。

給食のどこが問題なのか？

この給食廃止論は、「食糧難の時代に始まった学校給食の役割は終わった」とし、飽食の時代の現在、学校運営や家庭教育の面から、いくつかの問題があるとの認識にもとづいている。

①学校給食法は、「食事の正しい理解」や「望ましい食習慣」をつけることを目標にしているが、これらのことは家庭が責任をもって身につけさせることである。

②「明るい社交性の養成」も、準備や後片付けを含めて四十分くらいの給食時間では養えない。

③現在の食文化から考えると、児童・生徒全員に画一的な給食を強制することは、教育的とはいえない。

新聞に掲載された十九日以降の「社説」やいくつかの記事をまとめてみると、おおむね①から③の問題が指摘されている。

たしかに、学校給食については、これまでも、センター方式によるまずさ、残飯の多さ、先割れスプーンや合成樹脂の容器の問題などが指摘されてきた。これには、日本学校給食会という天下り人事による組織が、給食センターの設立ばかりか材料の仕入れに関与していること、そのため自校方式への切り替えが容易ではなく、ひとつの運動にまでなっていることなど、いくつかのことが指摘されている。日本学校給食会ばかりか、各自治体の学校給食会と関連業者との癒着と利権の構造は、知られざる学校教育の恥部ではないかと思えてならない。

私は、教員になって二十年を過ぎ、勤務先も四校目になるが、いまだに自校方式の学校には勤務したことがなく、パンとごった煮ふうのおかず、それに牛乳が定番の給食になじまされてきた。学校給食は学校設置者の自由裁量であり、だから中学校では給食を実施していない自治体もあるが、さらに、家庭の意思で、食べなくてもよいことは知っていた。したがって教員だって、

拒否しようと思えばできないことはないのだろうが、「給食指導」という大義名分と、弁当づくりへの躊躇から、そこまで踏ん切れないのが、私の事情である。

ところで、給食廃止論を比較的熱心に扱ったのは『毎日新聞』であった。家庭欄でも栄養面からとりあげているし、各地の「ユニーク給食」の取材記事も載せている(一九九二年六月二十二日、二十八日)。それだけに、読者の投稿ページにも賛否の意見が六月中だけでも十通ほど掲載されている。そこでこれらを素材に少し考えてみようと思う。

「親の権利の放棄」と言えることが、学校教育にはうんざりするほどある!

賛成の意見は、ほぼ①②の考えを延長させたもので、「親の関心を健康に向けさせる」とか「食べ物のありがたみは親の手づくり」とか「親子のつながりを大切に」などだ。また、③の観点から、「現在の児童のぜいたくな口にあわない」とか「食物は栄養とともに家庭の好み、また子どもの好みも大切に」などの意見があった。

ここまで言うなら、「給食は食べません」と拒否できるはずなのだから、そう言ってみたことがあるのかという疑問が、私にはある。元教師の投書には、「我が子の食物、好みまで行政にゆだねることは親の権利の放棄ではないか」と述べられている。ご自分の子どもさんは当然にも弁当を持たせたんでしょうねと聞いてみたい気もするが、それはさておき、この指摘は給食問題を考えていくうえで、重要であると思う。なぜなら、私の考えでは、「親の権利の放棄」と言えることが、学校教育にはうんざりするほどあるからだ。逆に言えば、「親の権利の放棄」なしには、学校教育は成り立たないとさえ言える。

たとえば、子どもの服装(ファッション)は、制服になっているし、体育のときには体育着を、水泳のときにはスクール水着を指定されたりしている。「健康」という点では、学校の行なう身体測定のほか、内科・眼科・歯科などの検診があり、予防注射まである。家庭は、学校からの通知で、あわてて病院へ行ったりするというありさまだ。

③の観点を食文化だけではなく現在のサブカルチャーにまで拡げてみると、学校がいかに「好み」を無視して、画一的なカリキュラムを強いているか明らかだ。学校行事として行なわれている修学旅行、遠足、演劇や音楽の鑑賞教室、運動会などについても、児童・生徒の「好み」があるのではないか。

学校五日制の実施に伴って、授業時間数の確保のために、これらの学校行事は見直されつつあるが、それは単に学校の教育課程編成上の実務的なことがらではなく、給食のありかたも含めて、学校教育の内実が問われていると考えるべきではないか。

給食廃止論を学校給食のありかたとしてだけ考えていくと、いずれにせよ「選択方式」がベターであるとの結論になりそうだ。『毎日』も『朝日』も「社説」ではそのような考えを表明している。すでにふれておいた『毎日』のユニーク給食の取材記事は、今後の方向性を示唆しているとも言える。

しかし、それは学校給食に自閉させた言説である。たとえば、「ユニーク給食」の取材記事の中に、「選択方式給食」の写真が載っているが、そこでは中学生が全員胸に名前を書いた布を縫いつけたジャージ姿なのである。給食の画一性を撃って生徒の「好

［学校給食のユニークな取り組みの例］

県名	内容
岩手	大野村で、特産の木工品を食器に使用
千葉	松戸市で弁当か給食かを自由に選べるメニュー方式を採用。給食はご飯、パンの選択もできる。 山武町で地元の有機野菜を使用
佐賀	有田町などで地元産陶器を使用
広島	熊野町で、弁当か学校が用意する給食弁当かを選べる方式を実施
鹿児島	特産のサツマイモを使った郷土料理をメニューに取り入れる
島根	八雲村で宍戸湖産のシジミやワカサギを材料に使用
奈良	御所市などで歯のためにニボシやスルメを混ぜる「かませる給食」
高知	魚好きな児童に育てようとカツオなどを使ったメニューを採用
福岡	志免町で空き教室をランチルームに改造し、学年間の交流給食

み」に就こうというのならば、ジャージ（制服）の画一性を不問にするのは片手落ちというものだ。

弁当づくりは母親の愛情というイデオロギー

さてここで、もういちど投書にもどってみたい。こんどは、反対の意見を眺めることにする。まず、弁当づくりということになると「親の負担が増える」と言う。これは働く女性が増えている現在、当然出てくる意見であるが、弁当づくり即母親の仕事という論調を批判した投書もあった。若い女性からのものだ。

「手作り弁当――母の愛情という図式にもうんざりだ。愛情表現は人それぞれ。他人から押しつけられるものではないはずだ」という意見は、面白かった。結論は、弁当と給食の選択みたいな内容だが、庄和町長に弁当づくりをすすめたりもしている。もっとも何もかも学校まかせにするのが愛情表現とは考えてはいないとは思うが、学校＝他人から押しつけられることも、すでに述べたように、けっこう多いことは肝に銘じておきたい。また、ある高校生は「弁当づくりに男性が参加する土壌づくりが必要」と述べている。家庭での弁当づくりがたいへんだとの実感に即した意見だろう。

私は、現在、弁当づくりに参加している男性の一人であるが、決して気楽にできることではない。前日の夕食から弁当のメニューを考えたり、ごはんを残したりしておく。低血圧気味なので、三十分ほどの早起きでもつらい。弁当箱や風呂敷を洗うこともしなくちゃいけない。などと、日常生活における余裕や気力も必要な気がする。

家庭に侵食する外食産業

余裕や気力がないとどうするだろうかと問うと、おのずと外食産業の「持ち帰り弁当」が思い浮かぶ。「コンビニエンスストアーででも買って行ってよ」ってなことになると思う。あるいは、サンドイッチやパン、場合によってはスナック菓子を、子どもの「好み」で買ってしまうかもしれない（「カロリーメイト」もあるぞ！）。

こんなことを考えると、センター方式のまずい給食でも、「栄養バランス」は持ち帰り弁当などよりましかもしれないと言える。その意味で、現在のような「飽食の時代」であるからこそ、成人病の予防という点からも、栄養指導として給食が必要だという、栄養学者の考えには一理ある（「毎日新聞」六月二十二日家庭欄）。



しかし、そうするには、いわゆる自校方式にしてメニューの充実を図ってくれないと話にならないと思う。センター方式のままで、少なくとも私が毎日食べている給食のようなものを出されては、学校での指導は、〝反面指導〟にしかならないと思う。

ところで、『料理の消えた台所』(草思社、一九八六年)で、江原恵氏は、すでに、ファミリーレストランと外食産業の急成長の背景として、日本学校給食会が効率化のために進めた給食センター方式による学校給食を想定し、「外食産業の一形態であることは否定できない」と述べている。卓見と言わなければなるまい。外食産業には、たとえば弁当屋、惣菜屋、外資系ハンバーガーショップ、宅配ピザなどをあげることができる。さらには、スーパーマーケットやデパートに惣菜屋や持ち帰り弁当などが常備されるようになったのもここ十年くらいのことではないか。

これらの既製品をそのまま食卓へ持ちこんだり、ファミリーレストランでの食事を楽しみのひとつにできるのは、いわば、学校給食のような味覚を習慣化してきたからではないか、との指摘である。そして、家庭料理もファミリーレストランふうのメニューになり、加工食品や冷凍食品が重宝されているのではないか。

このような食卓の状況の中で、弁当にも冷凍食品やレトルト・加工食品が使われることは、ごくあたりまえになっている。遠足のときなどに子どもが持って来る弁当のおかずには、冷凍もののコロッケ、ハンバーグ、エビフライ、そしてウインナーソーセージ、鳥のカラアゲなど、揚げ物・油いためが圧倒的に多い(詳しく調査したわけではないが)。

子どもの「好み」とはいっても、じつは、大量生産の工業食品によって似たりよったりになっていることは、はっきり認識しておくべきだ。また、誰がつくっても似たりよったりの弁当になる可能性がいっぱいの現実であることも、明瞭につかんでおくべきだろう。そんな食文化とやらの現在の中での学校給食の問題なのだ。

そしてまた、こういう食文化の現在も含め、「サブカルチャーに包囲された学校」という像を描いたうえで、給食問題は考えていくべきだろうと思う。

PTA

溶解するPTAという妖怪

親の学校ばなれのなかで、日の光を浴びたグレムリンのように溶解しているPTAの実態を京都市立K中学に探ってみた!

辻創（教育運動家）

京都市立K中学校に新しく着任した教師が一様に驚くのは、この中学には制服がなく、生徒たちが思い思いの私服で校内を闊歩している姿である。こんな例はさすがに京都でも私立の同志社系列中学を除いては存在せず、全国的に見た場合、都市部の公立中学で制服がないところは全部で片手にも満たないそうだから、この学校の服装自由方式は公教育現場ではまことに希有なのだ。

ではなぜ、かかる「自由の伝統」がK中学にあるのか。それは通学圏つまり校区が、いわゆる進歩的インテリゲンチャたちの棲息場所と代々重なってきたためだろう。K中のすぐそばには自由な学風で知られる京都大学があり、学術地区と呼ばれるこのあたりには昔から多くの大学関係者や学者、また自称他称の文化人が住みついてきた。

この連中はおおむね、朝日新聞を愛読し、選挙になれば共産党か社会党に投票し、日の丸・君が代には嫌悪感を示し、自民党政府のやることには反対さえすれば間違いないと考える単細胞の持ち主で、なんにせよ画一的な決まりは軍国主義につながるという被害者意識に（まさしく画一的に）凝り固まっているから、制服のたぐいにはひたすら拒否の態度を示す。公立学校が地域に根ざしている以上、生徒たちの保護者にあたる、こうした住民の性向を学校当局は無視できるはずもない。かくして、中学校に校内暴力が吹き荒れた時期を境にして隣のO中やT中は制服導入に踏み切ったにもかかわらず、ひとりK中だけは一貫して私服登校を守り抜いたというわけである。

こんな中学のPTAともなれば、当然「革新」色が強い。年によって濃淡はあるものの、共産党シンパが必ずPTAの要職を占める。とはいえ、彼らにしても文化ゾーンに住む紳士淑女に属するから、イデオロギーを振りかざして学校当局を攻撃するようなはしたないマネはできない。日の丸・君が代に対する反発が彼らの意思表示の最大のものだけれども、それとても正面切ってなされるわけではない。卒業シーズンになればいつも、卒業生・在校生を問わず保護者の家庭に「日の丸・君が代強行に反対する」旨のアッピール文書が送付されてくるが、差出人は「K中学校保護者有志」という得体の知れないグループである。間違いなくこれはPTA首脳がらみの行為なのだが、証拠はない。匿名、しかもこれまた責

任所在が不明瞭な「京都市教職員組合K中学校分会」との連名での発信とは、いかにも彼ら流のヤワな「革新」ぶりではないか。ちなみに言えば、もともと京都の「革新」の実体なんて反権力というより反東京感情をくっつけた超守旧にすぎず、この国のサヨク全体と同様何ひとつ新しいものを生み出さぬ不毛な存在でしかないのだが。

地盤沈下するPTA

このK中のPTAが、今崩れつつある。早い話、日の光を浴びたグレムリンみたいに、自己溶解しているのだ。

平成四年度末のPTA総会。PTA会員は全部で七百人以上いるはずなのに、委任状を寄こした人は百四十人にすぎなかった。いちおう会員の十分の一以上委任状が集まれば総会は成立するからいいとしても、この数字はやはりさみしい。そして、総会の出席者はたったの二十二人。出席者をイコールPTA役員とつないでも差し支えなく、一般会員となると、どうやらウチのカミさんただひとりの出席であったらしい。

一年前の総会は、いくらなんでもこの二倍の出席者はおり、しかも、そのときの親たちはよそ行きの服を着ていたし化粧もしていた。ところが、そうした華やいだ雰囲気というか若干の余裕は今回すっかり影をひそめ、見たところ着たきり雀で化粧っ気なく、さえない表情の人ばかり。総会では型どおり、広報、学年、校外補導など各委員会が活動報告を行なったが、報告者以外は誰も来ていない委員会もけっこうあり、おまけにその報告者自身が途中でいなくなるなど、「有終の美」とはほど遠いありさまだった。

それでもこの総会はなんとか格好がついたのである。感心にも、ウチのカミさんがそうなるよう気をきかせたせいだ。カミさんは質問するに際し、前置きとしてPTA役員の一年間の労苦に感謝の気持ちを表わした。「皆様に本当に熱心にご尽力いただきまして……」。PTAの会合ではまず聞かれないこのセリフにより、ずいぶんその場の空気が和らいだのだから、お世辞であろうと真っ赤なウソであろうと、人をねぎらい評価する言葉の大切さはもっと認識されてしかるべきであろう。だいたい学校という場にもっとも欠けているものがこうした世間的な儀礼であって、これがもっと教師にも子にも親にも行き渡っていれば、今ほど学校はギスギスした場所になっていなかったはずなのだ。共産党寄りであろうがなかろうが、ともかくPTAの役員はボランティアで皆のために尽力しているのだから、それに協力はしない、しかし苦情や文句は寄せる、といった一般会員の姿勢は明らかに不当であり間違っていると言えよう。

カミさんが質問したのは、二年学年委員会の事業報告のなかにあった「授業の進め方で会員より苦情の声があり校長先生に改善の申し入れをしました」という記述の具体的な内容である。じつはこの学校には、いつも授業時間を教科とまったく関係ない無駄話で費やすという、ひどく不真面目な年配の国語教師がおり、この教師に当たった生徒は事実上学校での国語の勉強はできなくなってしまう。何を隠そうウチの娘たちもこの気の毒な生徒に含まれるのだが、こうした事情は一切出さずカミさんは「あのう、どういうことでしょうか……」と穏

やかに尋ねたのであった。これには同席した校長が、さもいいことをきいてくれたと言わんばかりに、教師の実名は伏せつつ、学校側はこの教師に確かに手を焼いているものの指導を重ね努力している、と頬を紅潮させながら説明した。皆、教師の名を知っているから思わず失笑の出るひと幕もあったが、この質疑応答によって、総会はそれらしいかたちで少しは盛り上がったのである。

　事業報告で目を引いたのは、会員委員会が秋の文化祭に「にんじんケーキ試食会」を開き好評を博したことくらいであろうか。母親たちが学校の調理実習室のオーブンで大量に焼き上げたにんじんケーキを、文化祭の展示を見に来た人びとに振る舞ったものだが、同時にレシピも配布し「試食した方はご家庭で作ってみてください」とPRした点が、いかにも主婦らしい配慮だった。私も文化祭当日、実際に食べてみて、あまりにうまいので背の高い生徒たちにまぎれて何回ももらいに行ったほど。やはり食べ物をからめた催しは実利的だからPTA事業としてもっとも適切ではないか、と私はそのとき考えたのだが……。

　ともあれ、PTA総会は終了した。ウチのカミさんのおかげで(?)体をなしたとはいえ、K中学PTAのますますの地盤沈下を物語る低調な総会であった。

結集する必然性のないPTA

なぜ、こんなふうになったのだろうか。

　ひとつには、明らかにバブル崩壊による不況風が影響している。お母さんたちは以前にも増して子どもの学資や生活費を稼ぐためにパートで働きに出るようになり、PTAの集まりに参加するどころではなくなったのだ。さらに根本的には、今の親たちは学校に何も期待しないようになってきているため、PTAに結集する必然性などもうないのである。「PTA主催の講演会には人は来ないのに、学校主催の進路指導関係の会合だとたくさん集まる」とPTA役員はよく嘆いていたものだが、こうした現象も今や過去のエピソードになりつつある。K中学の進路指導説明会自体が、参加者は以前と比べてめっきり少なくなったのだ。

　総会でカミさんが質問した問題教師の件は、もう何年も前から話題になっていることなのである。親たちがいちおう順序を踏んでPTAに陳情し、PTAから何回も学校長と教育委員会に申し入れをしているが、結局、いまだに目に見えるかたちでは改善されていない。当局が教師への有効な監督すらできず頼りにならないとなれば、親は学校の授業をあてにしないで子どもを塾で勉強させざるをえないし、進路指導にしても塾講師の助言を優先する方向へ行ってしまう。これは当然の成り行きだろう。結果としてPTAの存在意義はなくなり、ウチの娘たちのように塾へ行かない子がもっともかわいそうな立場に立たされるのだが、この子たちには自助努力で頑張ってもらうしかほかに方法はあるまい。

　月一回の週休二日制が導入されて以来、K中学の親たちの精神面での学校離れはとくに顕著である。以前は買い物に出かけた親たちが道端で学校のことをもっぱら話題にしていたのに、今は塾がどうのこうの……ばっかり。仕事で給料を得ている教師と違い、親はいとも簡単に学校から身をず

らせてしまえるということだろう。
こんな現状では、Ｋ中学ＰＴＡの起死回生は相当に難しい。その溶解を食い止める有効な手段も見当たらない。せめて、少しは魅力ある人間がＰＴＡに登場すれば気分転換も図れるのに、よりによって、今年度のＰＴＡ会長はセミプロ的に会長職に就く面白味皆無の共産党ネクラ大学事務職員。
そういえば、このお父さん、私が数年前にわざわざ取り寄せた全国ＰＴＡ協議会発行『ＰＴＡ運営の指針』をウチのカミさんから借りっぱなしだが、果たしてきちんと読んだのだろうか。

塾・予備校教師、本音を語る

受験のノウハウだけ教えてればすむといったほどこの業界は甘くない！



●●●●● 副島隆彦（代々木ゼミナール講師）
聞き手＝小浜逸郎

――今日は「予備校講師　本音を語る」というタイトルでお話を伺います。副島さんが予備校の教師をして体験的に気づくこととか、公教育と予備校との理念や実際の違いにポイントをおいてお話しいただけたらと思います。はじめに待遇面などはいかがですか？

副島●私は予備校で教えて八年になります。そのかたわら、もの書き業もやっていますが、こちらのほうの年収は三百万円ぐらいで、予備校で教えていないと、とても生活できないというのが、私の個人的な事情です。勤めている代々木ゼミナールからは、一千三百万円ほどもらっています。「そんなにもらって」と驚く人もいるかもしれませんが、中堅講師の私でこんなものです。世の中の人びとが思っているほどの高収入ではありません。週刊誌などが、時々おもしろおかしく「年収五千万円」とか書くから、嘘が社会でまかり通っていますね。どこの業界もそんなに甘くはないですよ。社会に流布（るふ）する虚偽の言論を訂正する、糺（ただ）す仕事も、言論人としての責任だと考えますから、私はまず自分の内情から正直に言わなければ、と思いましたので。予備校業界のことでしたら、たいていのことは知っています。しかし、お金のことはこれぐらいにして、今日はもっと大切な公教育との関係について話しましょう。

――代ゼミの規模と生徒数についてお聞きしましょう。

副島●生徒数は約六万人で、全国に三十校ぐらいあり、首都圏で一校二千～二千五百人ぐらいの規模です。横浜、名古屋あたりですと七千～八千人かな。これに加えてこの三、四年の傾向で、高校二、三年生が受験生（現役生）というかたちで押し寄せています。おそらく全国で三万人ぐらい来ている。この浪人生と高校生の二種類です。

この五年間で、さらに寡占化が進んで、日本の予備校は、駿台と河合塾と代ゼミの三校で、ほぼ全国展開を完成させ、首都圏だけでなく地方の予備校もバタバタつぶれていきました。コンピューター専門学校などに変わったようですね。駿台と河合塾は、高校の教師

たちに食いこんでいますから、競争はなかなか熾烈です。駿台と河合塾が、おのおの四万人ぐらいずつ集めているのではないでしょうか。とくに、地方の出来のいい生徒には、やっぱり「東大に行くなら駿台」みたいな感じがありますね。それでも最近は、殿様商売もやってられなくて、ずいぶん〝代ゼミ化〟したようです。個性的な講師に、魅力的なドギツい授業をやらせないと、今の子どもたちには受けない、ということを経営者側も知っていますからね。「この英文を全文和訳せよ」みたいなことばかり教えても、九〇年代世代は食いつきませんよ。

――今はどうなんですかね。ずっと大手戦国時代みたいなのが続いてるんですか。

副島●私の感じでは四年前テレビとか週刊誌で騒がれた時期がピークで、今の実感で言うと「予備校文化」というのはすでに下り坂に入ったという感じですね。

あのとき有名になった佐藤忠志という人の個性は、やはり大きな意味があったと思います。予備校業界では、あれこれ言われている人ですが、私は、彼のような人がもっともっと本気で大学受験のことについてつっこんでくれると、世の中がもっと明るくなると思っています。彼の「受験生の母親としての心構え」みたいなテレビでの発言には、やはり説得力があります。もっとも予備校業界内では、あいつは教育的下層国民向けだ、ぐらいにしか言われていません。予備校講師というのは、世間的には学習塾の先生ぐらいにしか見られていません。ところが、自分たち自身は大学教師に近くて、学問をやる予定だったのに、ズッコケちゃったから予備校で教えてるんだ、というプライドを持っています。実際、大学で教えている人もたくさんいます。大学教授になってゆく人もいます。

生徒を魅きつけられなければ授業にならない

――クラスの人数というのはだいたい一定しているんですか。

副島●教室の規模によります。だいたい百五十人から二百人。

――ほう。これだけの人数が一堂に会して授業をやっておられて、たとえば、騒がしくてマイクの声が通らないとか、授業中にトラブルとか起きないですか。

副島●教室の後ろのほうで私語が絶えないとか、生徒がざわつくとかいうのは、これはもう簡単に言うと教師の授業管理能力の問題です。子どもたちを話芸で、あるいは人生観のにじみ出る力で管理できないようであれば、その教師は失格です。もし生徒を魅きつける力がないならば、それはもう授業にならないんです。もし、皮肉っぽい、あるいは軽蔑的な笑いが教室に起こるようならば、その教師は廃業しなければなりません。

――そういうことはどこでチェックされるわけですか。教師になるときの資格審査のようなかたちで模擬授業をやらせてみてとか……。

副島●予備校の側では、私たち講師の知らないところで厳密な能力評価をやっています。たとえば、モニターテレビで映しているとかもやってます。ただ、実際、私らのような中堅になりますと、ほとんど見ていないと思いますね。基本的には生徒のアンケートで決定するんです。

――アンケートがあるんですか。それはどういう内容ですか。

副島●年間四回ぐらいやってるようでして、表面上はたいしたことのないアンケートなんですけど、それが一種の統計心理学の技術を使いますと教師の客観評価にきちんとなってる。たとえば、「先生の話は聞きやすかったですか」とか、そういうたぐいですけどね。

――なるほど。そうすると新米教師なんかで非常に悪い結果が出てきたりすると、最終的には首を切られたりするということですか。

副島●そうです。

――それはかなりシビアにやるという感じですか。

副島●それがですね、代ゼミの理事長という人が持っている、人生哲学、経営哲学がありまして、人間に対して非常に厳しいんですけれども、その一方でおおらかさがあるというか、度量があるんです。ソフトとして人間を扱っているという感じです。人を育てるという

考え方を持っているわけです。ですから、最初は二十七、八歳ぐらいで入ってきた講師に対して、二、三年好きなようにやらせて教室で遊ばせるというぐらいの度量を持っていますね。下手でもいい、教え方なんかわからなくてもいい。ただ、その教師に素質があって、生徒から好かれて、そのうち使いものになるという感触さえあれば、そう簡単に首を切ったりはしません。授業の内容に干渉するということは絶対にやりません。講師の表現の自由を徹底的に尊重します。自分のダメなところは、お客様である生徒たちからの厳しい要求を受けて、自分で学んでいけと。私もひどい教え方をしてました。おそらくこれが河合塾や駿台との決定的な違いです。

――外から見てますと、大手予備校はみんな同じように見えますが、そうした体質の違いみたいなものはけっこうあるんですね。そういうノウハウの違いが全体のイメージの違い、特色として校風に反映しているわけですね。

副島●そうです。予備校産業としてやっていることは、そう大差ないのかもしれませんが、細かく見ると、ずいぶん違いますね。私は、代ゼミの鷹揚(おうよう)な、大人の態度が好きですね。生徒を子どもあつかいしません。もう大人に近いんだから自分の考えで判断しろ、と。我々は、情報産業として受験生、即ち若い国民のお客様方に奉仕しているという考え方ですね。

代ゼミには昔、小田実という「ベ平連(ベトナムに平和を市民連合)」の代表をしていた市民主義的反保守の評論家がいました。私が地方の高校生だった頃、「ヘエ、予備校ってずいぶんリベラルなところなんだな」と思って少しあこがれたことを覚えています。その小田実は、六年前に、子分どもというか、仲の良い講師連中を引き連れて河合塾に集団で移籍しました。彼らに言わせれば、「代ゼミは金もうけ主義で、教育理念がない」という不満だったと思います。そして、河合塾のほうには、名古屋を中心に、旧全共闘くずれ、と申しますか、昔日の反権力闘争のスタイルで教えている人たちが何人かおられて、彼らと合体したように、私には見えました。私は、彼らに対して反対の考えです。私は、ハイパー資本主義を実践している代ゼミのほうがずっと好きです。昔ながらの左翼的な思考で、くだらない理念をふりまわすのはやめてくれと思っています。しかも、そんな色のついた理念なんか、九〇年代世代の今の若者たちは、見向きもしませんよ。もう、ぜんぜん受けなくなってるんじゃないかな。こういう私だって、「岩波・朝日教養文化」にどっぷりつかって青年期を通過した人間ですから、本当のところ、もう、今の生徒たちに対応しきれなくなっています。人気講師にもなれずに、どんどんわきに追いやられています。今の生徒たちに、知識や思想や学問をわかりやすく説いても、もうまったく相手にされません。これが実情です。

公教育と予備校の違い

――先ほど、一教室百五十人から二百人の生徒をかかえて、話芸でこなしていけるということですが、公立の学校の場合には、それの三分の一から四分の一の人数ですね。それにもかかわらず、公立学校は今すごく評判が悪くて、生徒をきちんと指導することができていないと言われているわけですが、その違いはどこにあるのか。

ぼくが思うに、生徒のほうの目的意識の違いというのが大きいと思うんです。公立学校というのは、生まれて気づいたときから存在していてそこに行かなければならないものだみたいな、日常の感情になっているでしょう。そういうところで、朝から非常に長い時間、生活を拘束して、みんなで一緒の生活をしなくてはいけないし、部活もあるし、学校は年中行事なんかもあるしという。いわば子どもたちの生活の大部分を公立学校が押さえてますね。そういうところでは、徳育のたてまえを貫かなくてはいけないとか、生徒のナマな気持ちにそぐわないとか。ところが予備校の場合には、そういうのは極力少なくして目的は大学に合格することであるということで、

高額のお金をとって比較的短い時間で、教えることはそれぞれの個別科目の学習内容だけというふうに限定しているわけでしょう。そういう組織理念の違いというものが、予備校では生徒をなんとか抑えきれるけど、公立の学校ではなかなか抑えきれないという違いとして出てくるんじゃないか。そういう点はどうですか。

副島●そうですね。じつに深刻な問題ですね。現在の公立中学校なんか、まともに授業もできず、廊下で暴れ回っている少数の生徒たちを抑えるのが手いっぱいみたいなこともあるようですね。先日もNHKの番組を見ていましたら、県立の工業高校で、なんと言うんですかね、頭にソリを入れて、軽くパンチパーマにしている生徒たちを、懸命に教えている先生たちのことをルポしていました。まったく頭が下がります。私があの生徒たち五十人のクラスを任されて、ちゃんとそれなりのことを教えてゆけるか、と言うと、とてもできないと思います。いい子たちなんですけどね。しかし、実際に彼らと日々つきあうということになると、たいへんでしょうね。予備校だからやってられるんです。なんと言ってもまじめだし、なんとか大学に入りたいと思ってる子たちしか来てないわけですから。公教育の先生方のご苦労はわかる気がします。養護学校への異動もありますしね。

――さっきの問題に戻るんですが、予備校は純粋サービスにある程度徹しきれるというメリットがあって、たてまえを貫かなくてはいけない公教育との補完のし合いみたいなもので、現在の教育状況というのはかろうじてもちこたえているような気がするわけです。

予備校は公教育の補完物にしかすぎない

副島●予備校に公教育を変えていく力はありません。またそのような勢力でもありません。あくまでも公教育の補完物にすぎない。公教育というのは、私の考えでは、子どもたちに将来のキチンとした社会生活を営む力を身につけさせる国民基礎教育としての集団生活をする場であって、根本的には知識学習教育の場ではない。現在の小・中・高の先生たちは、学校行事や最低限度の集団しつけ教育、基礎的な国民教育で手いっぱいで、もっと勉強したい者は、その家庭の意思に従って、学習は塾や予備校に行ってやってくれと思っているのではないか。文部省でもそう考えているのでは。本当は、自分たちは、学習内容にまでいちいち立ち入って、管理して、しかも自分たちに手のとどかないところまで責任を負わされて非難されるのはかなわないと思っている。かつ、自分たちには「国民の教育権」や「大学の自治」に対して干渉する法律上の権限がほとんどない。今の文部省には教育制度を改革する法的手段など持たされていないというのが、彼らの言い分であり不満だと思います。

――それはそうでしょうね。現在では、権力をこれまで握っていた側が、もう持ちきれんということで、文部省なんかあんまり現場には干渉したくないという雰囲気があるというのはそのとおりだと思います。当面、公教育と私的な教育の役割分担というか、そういうバランスでやっていくよりしょうがないだろうと副島さんはお考えになるんですか。

副島●私は教室で教えていて実感で思うのは、出来のいい子というのはやはり生まれながらに出来がいいということです。そして、この子たちは国中に、きれいに分布している。両親も頭が良かったからとかいう理由はかえってあてにならない。優秀な生徒は、全国に均等に散らばっている。この子どもたちを、全国から試験制度によって中央に集めて人材として登用したので、日本の資本主義はうまくいったわけですよね。おそらく、このことは誰も否定できない事実です。

今日は私は、八四年の中曽根内閣の「臨教審（臨時教育審議会）」の「教育の自由化」答申や、一昨年の西尾幹二さんが結果的に大暴れなさって意義深かった「第十四期中教審（中央教育審議会）」については語らせてもらえないのですが、西尾教授が、審議会答申を出



したあとのテレビ討論会がおもしろかった。西尾さんはたいへんなご苦労をなさって「みんなの本音」をきちんと代弁なさったのに、瓢箪から駒で、出てきた現象的結論のひとつが、「東大合格者の高校別人数制限」というとんでもないものだった。これには、討論会に来ていた高校生たちからの反発が大きかったですね。それはそうでしょう。この高校生たちは、やはり出来のいい都会の秀才たちでしょうから。臨教審の委員のひとりが言っていた、公立中学校が「駅前ラーメン屋」なら、「高級フランス料理屋」に相当する私立中学校に行きたい人の意思も尊重されるべきだ、と。たしかにそうですね。

「国民の教育を受ける権利」というのは、そういうエリート教育を受ける権利でもありますね。何がなんでも平等、平等というわけにはいかない。

——しかし、実際の高校の先生たちは、予備校では落ちこぼしてしまうような子たちも相手にして毎日やっているわけですね。そこのところは予備校の生徒たちとは違うし、学力水準の違いによって、かなりの人間が分けられているというのがありますね。そうなると、公立校でのさまざまな、うまく指導していけないような問題を、いちがいに先生のダメさというかたちでは切れないような気もするんですが、どうでしょう。

教師の質の管理はやっぱり必要

副島●予備校の場合、私たち講師には、紙きれ一枚の契約書もないんです。健康保険もふつうの国民健康保険です。退職金もありません。昔、大学教授のアルバイトとして始まったという歴史があるからです。いつも心理的には追い詰められながらやっているんです。船板一枚、下は荒海と言うと大ゲサですけれども。ところが、それではこの先、五年も十年もここにいられるのだという生活保障が私たちに与えられたら、私たちはすぐに怠け者になるのです。すぐに授業の手を抜いて、いいかげんな教え方をして、ふてくされ教師に転落してしまうでしょう。人間という生き物は、本来、それぐらい怠け者です。予備校の場合は、お客様相手の企業ですから、経営者が教師の質の管理を当然キッチリとやりますよね。フランスやドイツでは、公立学校でも教育監督官が教師たちの質を管理していますね。ところが日本の場合、ご存知のとおり、戦後のリベラル憲法による「学問の自由」がのさばりすぎて、教師の質の管理の必要性みたいなことを言うと、今でも相当嫌われますね。文部省や保守的な教育行政家たちが、では果たして自分たちが上から管理するほどのさらに高い能力があるかと言われると、そこも腰くだけになりますから。しかし、それにしても今の

公立学校の教育現場の公務員的硬直ぶりはすさまじい。「春の異動」とかいう新聞の各県の教職員の一覧表なんか醜悪ですね。教育公務員の皆さん自身の真剣な反省も必要なんじゃないでしょうか。ですから、公教育の先生たちも、生徒の生活指導でたいへんでしょうが、それでもやはり、教師としての適正や能力の再審査を受けなければいけない。

　高等教育の大学などのほうはもっとひどいありさまだ、というのは、最近では有識者共通の意見ですね。コンピューターをさわったこともない老人たちが、大量に工学部の教授で、私立大学の場合、なんと七十歳まで居すわっている。なかには、たいへん優れた業績をあげた人びともいるのでしょうが、全体の二割ぐらいじゃないでしょうか。あとはちょっと、これでよくもまあ、という人たちです。お客様である若い学生たちがこうむるたいへんな教育被害というものを考えないといけない時期にきていますね。

――授業のなかでの具体的なイメージとして、たとえば、副島さんが人気講師としてやっていた頃の教室の雰囲気はどんな感じなのですか。

副島●これは予備校講師のノウハウなんですが、なぜ、子どもたちの気持ちを集中させ、目を輝かさせることができるか、と言うと、一人ひとりの講師が自分なりのノウハウを持っているからなんです。そこらのお笑い漫才師とは違うのですよ。それは、一人ひとりの子どもに精神的インパクト、鼓舞する何かを与えることです。ここがいちばん大事なんですね。これは単なる精神論ではなくて、英文の読み方、あるいは国語の評論文の読み方、あるいは数学の問題の解き方の、入口のほんの小さなキッカケ・糸口を一人ひとりの生徒に与えてあげることによって、その生徒がこの講師の言っていることは真実であって、自分は目からウロコが落ちた、はじめて勉強がわかったという体験を彼らがするわけです。そのキッカケというのは非常にささいなことではあるんだけれども、ある疑問を解いてやることによって、その生徒は非常に広々とした地平に到りつけるようになる。それが学習とか学問が持っている大きな意味なのではないか。それは、私が、小室直樹からM・ヴェーバーの読み方のほんのささいなキッカケを教わった、そうしたら、そのあとはどんどん読めるようになった、というのとまったく同じことであると思っています。優れた教育者にはこの才能がありますね。けっして秀才でも学者でもなくていい、しかし、自分が昔やった苦労を若い世代に伝える、という力がありますね。

　私は、ですから「教育の自由化」に大筋で賛成の人間です。しかし、ひとつだけ留意すべきことがある。教育が企業化・自由化されるという方向、簡単に言うと企業家たちによって運営される私的な教育機関にとって代わられざるをえないという方向に行くとすれば、それには弊害もあります。「学校屋」と言われる人間たちがいて、私立中学校、私立高校を経営して、表面上は、いちおうたくさんの生徒を社会に送り出している。この学校屋さんたちに任せることで質が非常に低下する、悪質に転化するという面と、それから社会の競争をもっとも敏感に受ける私企業の良さという、ふたつの面を持つんだろうと思うんです。もし、公立学校が完全に自由な状態、あるいは私的な教育機関との制度上の違いの外枠をはずすということになりますと、このいい面と悪い面のふたつが必ず出てくることを忘れてはならない。

オタク＝「最後の人」抜きでは教育現場は語れない

――最後に、副島さんの予備校講師としての矜持と言いますか、拠りどころみたいなものをお聞かせください。

副島●私が予備校で教えていて、浪人生たちを鼓舞するときによく、こう言います。「お前らは、なんの特権もなく、ここに集まってきている。なんの特権もないからコネや裏口入学の手も使えない。だから歯を食いしばって、頑張って勉強するしかないんだ」「親に財産もなく、なんの社会的特権もないだ

ろう。だったら、わずかばかりの学歴と自分の能力だけで、闘って、自分で世の中ではいあがってゆくしかないんだ」と。この人はどこどこ大学を出たという、その評価自体はおかしいんだけれど、この社会全体が持っている大きな意味での人間能力への評価は、やはり認めるしかない。だから私は、学歴偏重社会をいちがいに否定しません。だから私は、予備校の講師をやっていられるんです。

ところがです。ところが、こんなことを言ったって、最近の予備校生は、聞いちゃくれないですよ。

目下、日本で進行しつつあるのは、「任天堂ファミコン文化」ですからね。これが、これからの日本の国民文化の中心になってゆくでしょう。ファミコンの猛威を甘く見てはいけない。アメリカやヨーロッパの出版文化を脅かしているものも、マンガ、テレビよりもファミコンだと思います。今では、ファミコンで小学校・中学校時代を通過してきた子どもたちが多数派です。人間像そのものが変わってしまっているのです。この変貌に対する認識がなければ、教育現場は語れません。つまり、子どもたちの主流派が、オタクだということです。だから、「ドラクエV」にぶっ通し二十時間熱中できて、両眼をウサギの目みたいに真っ赤にして、その感動を生徒たちに伝えられる若い講師でないと、もうこの業界ではもたないかもしれません。このオタクという人種は、自分の直接的欲望と、自分のことにしか関心を払わず、好きなことにだけ熱中して、社会のことなどにはいっさい関心を示さない人びとですね。これは最近読んだ、フランシス・フクヤマの『歴史の終り』に出てくる「最後の人（ザ・ラスト・マン）」ですね。オタクは、人類史の最新段階で登場した最後の人びとです。だから、私など、この業界で、あとどれぐらい生き残れるか、というのが、本当のところなのです（笑）。

——それは非常に悲観的になっているということですか。

副島●悲観的でありながら、そこにひとつの可能性を見つけていくという考え方でもあるわけです。しかも、そうするしかほかにないんです。

学校行事

学校が「学校」として存立する最後の防波堤

日常そのものの揺らぎのなかで非日常によるインパクトで日常の崩壊を先延ばしする学校の現実！

●●●●●赤田圭亮（公立中学校教諭）

「授業で勝負！」という言葉を聞いたことがあるだろうか。

八〇年代の初めに「荒れ」る中学校がマスコミでフレームアップされたころ、「中学生」を前にした教員は果てしない私語と喧騒の中で、「やってらんないなぁ」とぼやきはじめていたのだが、そんなこととはかかわりなく極楽とんぼの著名な教育評論家が、「授業中にマンガを見ている生徒を教師が魅きつけられないのは、マンガのリアリティに授業が負けているからだ。授業にリアリティがあれば、生徒はマンガから目を離すようになるだろう」なんてことを言っていたことがある。ぼくらは「授業で勝負！」を求められていたのだ。授業がダメだから生徒たちは私語をするし、マンガも見るし、ラジカ

セをガンガン鳴らしながら教室中を走り回るというわけだ。

マジメな教師は二度挫折する

同じ時期、大学の偉いセンセが「ナントカの授業」と称して、全国の学校を行脚し、授業をするというパフォーマンスがはやった。あまりに授業が感動的だったので、ピアスをしていた生徒がそっとはずしたとか、授業が終わったときに拍手が鳴りやまなかったとか、はたまた、調子にのった生徒が、「こんな授業ならサボりはしねーよ」と言ったとか。こんな教育評論家や大学の先生の話を聞いて、「いい授業をすれば生徒はついてくるのかぁ」と思いこんじゃったマジメな教員は、二度挫折することになった。

ふつうの教員はここ十年あまり、マンガやおしゃべりに興じる生徒に「北風」のような力比べをしなくなった。そんなものではどうにもならないことを経験的に知ってしまったからだ。「太陽」とは言わないけれど、まず第一目標の「授業を成立させる」を達成するためにマンガを取り入れてみたり、ビデオを使ったりといった、かなり短絡した工夫を日々重ねている。もちろん、いっさい子どもには目を向けないという「工夫」もあるけれど。

こんなふうに書くと教育問題が大好きな人たちから、「情けないなぁ。昔の先生はもっと毅然としてたよなぁ」なんてことを言われるのがオチ。でも誤解をしないでほしい。ふつうに教員をやってる人なら、誰だってそこそこの手練手管は持っているのだ。

どこの学校にもいる両耳からひもを二本垂らした生徒や、夢中になっておしゃべりしたり、月曜日には『ジャンプ』を読みふけっている生徒に対しては、そんなものは役に立たない。注意をすれば「どうしておればっかり注意するんだよ」、怒れば「いきなり怒るなよ」。手練手管なんてはなっから勉強を拒否している生徒に対しては無力。「そこから始めるのが授業じゃないか！」――そのとおり！確かに正論。でも注意するだけで一時間が終わってしまうこともあるわけだし、どんなことをしてもイヤホーンをはずしてやる！なんて決意をしてしまうと、乱闘まで覚悟しなければならない雰囲気なんて、なかなか世間の人にはわかってもらえない。「やる気のないやつは出ていけ！って言えばいいじゃないか」、そういうことを言う人もよくいる。言いたいよねぇ。でもこれって第一級の「禁句」だってことぐらい知っててほしいなって思う。

誰だってこんな中で仕事をするのは楽しいことではない。辞めていく教員も増えている。でもどんなに授業がうまくいかなくても、ほとんどの教員は「教える」ことが仕事だと思っているから、どこかで自分の本分をまっとうしたいと考えるのだ。ねじれの位置。「子どもは学びたがっている」って言う人もいるけれど、ぼくは無責任だと思う。はっきりしているのは、学校を成立させてきた関係が根底のところで揺らいでいるということだし、学校に通い続けることに飽きはじめている生徒が増え続けているということだ。

学校の思い出は部活と学校行事だけ!?

学校の中には、授業以外に教員が燃えるところがある。ひとつは部活であり、もうひとつは、本題の学校行事。ずいぶん前に学校と縁が切れてしまった人でも、これらに対してはかなりの思い入れがある。学校の思い出と言えば部活と双璧。学校の中心は授業でありながら、思い出に残るのがこの二つというところに、学校のやっかいさがある。

学校行事にはいろいろな分け方があるけれど、わかりやすい分類をすれば①体育的行事――体育祭や球技大会など、②文化的行事――合唱コンクール（祭）や文化祭、③旅行的行事――修学旅行や遠足、自然教室や移動教室、④儀式的行事――入学式や卒業式、ということになる。

このなかで、④は最近「日の丸・君が代」が「主役」。世間は、教員はみんな日教組に入っていて、「ゼッタイ反対！」しているように考



えている人が多いけれど、そんなことはない。組合幹部も及び腰だし、現場を見ればそんなものぶっ飛んでいる。「職場に波風立てるよりもここは校長さんの言うとおり、学習指導要領で決まってしまっているのですから、まあ穏便に」ってなことで意外にすんなり実施されている学校が多い。それどころか、「儀式なのだから厳粛な雰囲気を大切にすべき」と考える教員が圧倒的に多いから、「日の丸・君が代」が、けっこういい舞台装置になってしまっているというのが実態。

「ふだんいいかげんでも、けじめだけはきちんと」という発想って学校からはなかなか抜けない。卒業式のことを「卒業証書授与式」って言ってしまうのも同じ発想。戦後民主主義教育って言ったって、「お上から厳粛に学業成就の証を授かる」っていう点では戦前となんにも変わっちゃいない。だからふだんはボンタンに短ランという格好で授業に出ていても、卒業式当日は「きちんとした格好で」なんて言い出して、引っ込みがつかなくなり「出席させない」という事件がよく起きる。問題は「日の丸・君が代」ではないんじゃないかっていうのが実感。

次に、③の旅行的行事。これがたいへん。どっか連れてって見学させればいいってことでは終わらない。昔はよかったと言っても仕方がないけれど、修学旅行の発祥と言われる「伊勢参り」なんか、見るもの聞くもの「ははあっ」てなもんで、連れて行くだけで感激してくれちゃう。そういうのってうらやましい。教員は語りべとしてそのご威光にすがるだけ。いまどきの生徒は、テレビでのべつ旅行番組を見ているし、家族で海外に行っているって子も多い。楽しませようとする企業サイドのお迎えがあって成立しているレジャーに対して、京都や奈良はいかにも弱い。誰かが楽しませてくれるわけじゃない。「ナニこれ、お寺ばっかじゃん!」ということになってしまう。そのうえ、学習だ、集団行動だ、風呂は十分で入れ、ドライヤーは班でひとつ、エレベーターは使用禁止だ、とくれば、いまどきの中学生は納得しない。「こんな高い金出してそんなものに行くより、その分で好きなところに行ったほうがいいよな」ということになる。確かにそのとおり。「どうか自分たちで行ってください」という気持ちは、二泊三日ほとんど眠る暇もない宿泊を経験するとイヤミでなくそう思ってしまう。でも、これがなくならない。「修学」旅行なんて信じられないくらい古い言葉がいまだに残っていて、「やめようよ」という声がかき消されてしまうのには、何か独特の意味合いがあるのだろうとは思っているのだけれど。

この③や④は、いわば季節行事。学校行事と言えば、体育祭、文化祭、合唱コンクールなどが中学校の定番。これらの行事はクラスが単位になる場合が多い。これがまたまたしんどい。でも、教員は熱心にやる。一般には考えられないことだけれど、ひとつの仕事がど

のくらい時間のかかるものなのかふつうは管理職が判断し、超過勤務が必要な場合は時間を区切って指示をするものだが、学校というところはそういうこととはまったく無縁。ヒラ教員がする提案そのものが勤務時間を無視して出される場合もあるし、逆に担任から「朝早く来てやっていいですか」という意見が出される場合もある。こんな教員の反応が出てしまうところにじつは、今の学校の問題がある。

授業は個人に返され、行事は集団に返される

ひとつは、学校の中では教科の授業が日常であり、行事は非日常であること。際限もなく続くように見える日常の中で、行事は生徒たちの目先が変わる重要なアクセントになる。もうひとつは、授業は最終的には個人に成績として返されるものだし、受験というひとつの「結果」に向けて行なわれる個人的なもの。それに対して、行事はクラスという集団での営みであり、結果は「クラスのまとまり」の象徴として返されてくる。つまり、授業は個人、行事は集団なのである。

日本の学校は、その始まりから集団性をひとつの軸にしてきた。クラス対抗はなにも戦後始まったものではないし、その元をたどれば軍隊組織の上意下達の徹底にその発祥を求めることができる。そしてそれらは戦後、民主的集団づくりとして衣替えした。

一方で個人の能力形成を行ない、一方で集団的資質を形成するという点では戦前も戦後も学校の意味は変わっていない。同一年齢同一学年を基盤とする日本の学校では、出身地という共同性の次に来るのが学校を軸にした共同性なのである。

このことを前提にしたとき、今なぜ教員が行事に熱心に取り組むかが見えてくる。行事は現在の学校が「学校」として存立する最後の橋頭堡になっていることを、教員たちは無意識に感じ取っているからだ。日常そのものが揺らいでいる中で、非日常によるインパクトでもって日常の崩壊を先に引き延ばそうとしているのではないだろうか。「荒れ」た学校が行事を軸に「正常化」をはかったという話は、全国いたるところにある。教員が「ハレ」の求心性をア・プリオリにつかんだのである。

以前、学校は世間とは一線を画された違う時間が流れているところだった。共同体の中で生きる親の経験主義的な発想とは違って理念が先行することが、逆に学校らしいところだった。親は、どんなにまどろっこしくても、学校が共同体から越境できる唯一の装置であることを知っていたから、それに異を唱えることをしなかった。しかし、地域共同体そのものが存立し得ない現在の社会の中で、学校は理念が先行するどころか、学校自体がもっとも古い共同性を残す場所になってしまった。能力を形成することより、とにかく何年間かそこに居続けることが求められ、時間が来れば放り出される場所としての学校が、「荒れ」という崩壊現象の前で「行事」による再生をはかろうとしたことは、その意味で当然のことだったのだ。入学・卒業式で、イデオロギーとしての「日の丸・君が代」がリアリティを持ちきれないのは、式そのものが共同性を保障する最大の儀式だからであり、旅行的行事が消費社会の攻勢にもめげず続けられるのは、同じ釜の飯を食うというかたちでつくられる共同性を捨てられないからである。

しかし、現実にそうした枠組みは今大きく揺らいでいる。たとえば高校生の修学旅行、アルバイト等々。子どもたちは、学校を軸とした共同性に昔ほど幻想を抱かなくなっている。「仲間内の気楽な関係」が好きなのである。その一歩手前にいる中学生もまたいずれそんな方向に動いていくだろう。行事大好き!という教員はあいかわらず多いが、学校は疲れるね、という教員が増えていることも事実である。

「ないものねだり」の見返りが、パターン化した学校・教員批判では、ぼくのようないいかげんな教員でも、報われないなと思ってしまうのである。

学校統廃合

ルポ・千代田区に見る学校統廃合の実態

いま千代田区に何が起こっているのか。
公適配構想による学校統廃合の最前線をルポする！

……村山和雄（フリーライター）

小学校の統廃合というと、東京都では青梅市、檜原村、奥多摩町などもっぱら山村部や島しょで行なわれていた。それが、昭和六十一年の新宿区の淀橋第二小をはじめ、港区、荒川区、台東区、中央区、足立区、千代田区と都心の中心部に移りつつある。六十一年以降、二十三区ではすでに四十一の小学校が統廃合されてきた。児童数の減少で全学年一クラスずつという単学級や二つの学年を一クラスにする複式学級が行なわれたりと、学校の適正規模が確保できないと隣接校と統合される。そこには地域住民やOBからの自分たちの学校をなくさないで、と反対があるものの、統廃合されてからも大きく反対運動が続くことはあまりない。その点で千代田区は特異なケースである。

公適配構想とは何か？

千代田区が区立小学校十四校を一斉廃止し、新たに八校の小学校を新設すると発表したのは、平成三年十二月二十日のことである。十四校一斉廃止というものの、実際は十四校を八校に統合するだけ。だが、これだけの規模の統廃合は前例がない。

「千代田区の学校の統廃合が他の区と大きく違うのは〝オール千代田〟として公適配（公共施設適正配置）構想の一環として行なわれたこと。通常、区立学校の統廃合は区の教育委員会主導で行なわれるが、千代田では区政全体の問題のひとつとして進められてきた点です」（二十三区内のある教育委員会学務課）

千代田区は、昭和五十五年に五万四千人いた人口が、平成二年の国勢調査では三万九千人台まで減少した。そこで再び人口を五万人台まで回復するために、定住人口を確保しようと区内の公共施設をすべて見直すというのが、公適配構想である。千代田区はその面積の約七割が皇居や官庁街、都庁跡地などの国公有地。さらに残りの民有地の七割強が法人所有であり、一般の個人が所有する土地が著しく少ない。そのような状況のもとで、教育施設も例外なく見直すことになったのである。

この公適配構想以前から、千代田区の教育条件検討委員会などで小学校の統廃合は議論されてきた。ただし検討委員会の答申などでは名前が上がっていなかった学校が、公適配構想では廃校されることになった。永田町小である。

永田町小はなぜ廃校の対象にされたのか!?

永田町小は、海外帰国子女の受け入れ校として文部省の指定を受け、また学校給食を日本で最初に導入し、校内に製パン工場をもつなど、特徴のある有名小学校である。

千代田区でも児童数が八十名ほどしかいない千桜小や今川小ならまだしも、二百二十三名もいる永田町小をなぜ廃校にするのか。PTAは「そんなことはぜんぜん聞いていない」と、ツッパル状態になってしまった。

教育委員会や区が「発表以前に区として地元の代表には説明会を行なった」と言えば、ＰＴＡ側は「説明会といっても六百万円を使って、町会長を熱海旅行に招待しただけ」と攻撃。さらに教育委員会は「それ以外にも発表以前になんども新聞の折り込みで広報活動を行なってきた。知らないというのは折り込みの入らない区域外就学だからではないか」と再び反論。千代田区では全体の四割もの児童が区域外就学で、永田町小は生徒の三分の一が海外帰国子女、三分の一がそれ以外の区域外就学で、残り三分の一が地元の児童という構成である。

千代田区には、かつて「番町小―麹町中―日比谷高校―東大」というラインがあり、絶頂期には日比谷高校から百九十八名の東大合格者をだした。すでに日比谷高校は、学校群制度の導入でその地盤沈下が著しい。だが番町小などへの越境入学は昔のまま続いている。またそれを三十万円から五十万円で仲介する議員の存在も、ＰＴＡの間では公然の秘密として話されてもいる。一方、昨今の私立中学入試ブームの点でも、東京都の平均が一六・三％に対して千代田区は三〇・二％とダントツの私立中学進学率を誇る。教員も他区から千代田区に転任すると、教育委員会で開口一番「栄えある千代田にようこそ」とうやうやしく言われるという。簡単に言えば生徒の質が高く、父兄は教育熱心で、さらに教育委員会も区の教育にプライドをもっているわけである。

「千代田区議会はあまりにもひどい」

公適配構想の発表後まもなく、急先鋒の永田町小のＰＴＡによる「永田町小の存続を願う会」が結成された。その後皮肉なことに、行政側が区民説明会を開くたびに番町小、麹町小、九段小、千桜小と統廃合に反対する会が結成され、翌平成四年二月の終わりには反対派十一団体が「公適配から教育と文化を守る会」という連合組織まで結成することになる。説明会で行政側が「あくまで決定なので、ご理解いただきたい」と繰り返せば、反対派は「納得できない。白紙撤回すべきだ」と主張。議論はかみあわず、平行線をたどっていった。

そして平成四年十月十四日、両者の対立はいっそう深まってしまうことになる。五月に「守る会」は区に対し、「『公共施設適正配置構想』に関する千代田区住民投票条例」を直接請求していた。その日、千代田区議会から話を聞きたいと呼ばれ、代表として千桜小のＰＴＡの看板屋と永田町小のＰＴＡの酒屋、そして錦華小のＰＴＡの和菓子屋の三名が区議会に出向いた。

当の三人は話を聞きたいので来てほしいと言われただけだったので、きちんとした準備もしなかった。だが実際に行ってみると、住民投票条例を本会議から付託された「企画総務建設委員会」に参考人として出席してもらいたいと言われる。委員会では、行政は条例についての住民投票は必要ないと主張。議員も、議会において全会一致で決定した公適配構想を再び住民投票にかけるのは間接民主主義による議会を無視すると反対。

正味六時間半にもおよぶ委員会では「条例は地方自治体にとっての法律であり、文言やその解釈も含めて厳格に審議されなくてはいけない」という大義名分のもとで、議員から徹底的な攻撃が行なわれた。さらには唯一、区を市とした誤植を取り上げ「市とはなんだ」と怒鳴るありさま。

看板屋は「我々は何も議会と対立する立場ではない。六千二百六十六名の署名を得て提出したものだから、前向きに審議してほしい」と懇願した。採決では共産党の賛同を得たものの、反対多数であえなく否決。帰りぎわに酒屋は「参考人とはまったく人をばかにしたものだ」と怒り、看板屋も和菓子屋も「千代田区議会はあまりにもひどい。このままでは……」と、その後の活動の意を決することになる。

そして十月二十二日には、和菓子屋を会長とする政治団体「明日の千代田を拓く会」を結成した。その幹部となった酒屋は、店が以前に金丸事務所のあった「パレロ



ワイヤル永田町」の目の前だったこともあり、小沢一郎に「なんとかならないでしょうか」と相談をもちかけたが、「心情的にはわかるが、区議のことには口を出せない」と言われながら、それでも根回しに動く。また和菓子屋は、麹町在住の財界人を通じて日本新党の細川護熙にコンタクトをとり続けた。

だが、PTAを中心とする「公適配から教育と文化を守る会」では、そのような政治運動に反対する人もいた。例えば「守る会」代表の元最高裁判事は、孫が帰国子女で永田町小に通っていたこともあり、運動の代表者となったが、「学校を守ることと政治は別」と、「守る会」と「拓く会」を切り離して別組織とするようにした。

議会にまで袋叩きにあって以降、運動は過激になる。十一月十一日には永田町小の児童の不登校が行なわれ、約二百名の父兄と児童が国会周辺をデモ行進した。さらに彼らは文部省を訪れ、「永田町小をなくさないで」という児童の作文を文部省職員に手渡すというパフォーマンスまで演じた。

永田町小の校長は全国小学校校長会の会長ということもあり、当初は校長会をバックにして行政にはたらきかけ、廃校を阻止してくれるのではとPTAの期待も集まっていた。だが、時間が経つにつれて、当の校長は行政の決定にはさからえないという立場であることがわかってきた。さらに「あの校長は以前多摩のほうで小学校を廃校にしたことがある。幕引き校長として永田町小にやって来た」とか、「校長会をバックに参議院選挙に出馬するらしい」という噂もたち、校長への期待は泡のごとく消えていった。

廃校反対派が、ついに区長選に出馬した―

住民投票は議会に否決されたものの、公適配についてはどうにか

住民の審判にかけたい、そんな想いで「拓く会」では平成五年一月に行なわれた区長選挙に候補者を擁立した。その候補者とは、区議会で袋叩きにあった〝三銃士〟のひとり、看板屋である。「我々にしてみれば、なんの政策もなしに区長選を住民投票に利用してぶつかっていった」と彼は言う。そのキャッチフレーズは、「ちょっと、待った」。ふつうであれば区議会で唯一住民投票条例に賛成した共産党と手を取り合って頑張ろうということになるが、「『拓く会』はバリバリの保守。幹部をはじめみんな共産党がだいっ嫌いなんです。また共産党が入ることで必ず色眼鏡で見られてしまう」とは、「拓く会」会長の和菓子屋の弁である。共産党からなんどとなくラブコールはあったものの、「拓く会」ではまったくとりあわなかった。

選挙結果は、現職区長八千百七十九票に対して看板屋区長候補は七千七百二十一票と、わずか四百五十八票差と迫り、「拓く会」としてはまさに善戦。選挙には負けたものの、勝利宣言を行なった。看板屋にしても、「実際に候補者にはなったものの、区政についてはまったくの素人。私が区長になっていたらたいへんだった」と本音をもらす。「拓く会」にとっては、僅差で負けることが理想的な選挙結果だったのである。

「拓く会」ではこれだけの区民が公適配に疑問をもっていることがわかれば、区長や行政も見直しを考えるはずと読んでいた。ところが実際には、区長は「一票差でも勝ちは勝ち。私を支持してくれた人たちのためにも、このまま公適配を推進する」ということになってしまったから、看板屋、和菓子屋をはじめ「拓く会」関係者は唖然となり、再び運動は振り出しに戻った。

平成五年三月二十五日、千代田区では小学校の卒業式と終業式が行なわれた。論議のきっかけともなった永田町小では、報道陣をシャットアウトしたまま式が挙行され、卒業する六年生全員が立ち上がり「私たちは永田町小が大好きです。母校をつぶさないでください」と涙声で訴え、式後には五年生が校長室で「廃校にしないでください」と訴えた。

その感動の冷めやらぬ、同日の午後。「拓く会」主催のシンポジウムが開かれた。そこには日本新党の細川護熙やシリウスの江田五月が出席。細川は「今後は住民自治の実現を目指す『拓く会』と手を取り合って運動する」と語った。それを受けるかたちで日本新党の小池百合子が『週刊ポスト』に連載中の「ミニスカートの国会報告」の中で、千代田区について「……廃校にした小学校跡地の払い下げをめぐるよからぬ動き、区域外就学の不正斡旋、コンビニ店に対する価格協定の強要など、一部の議会関係者のデタラメぶり……」を指摘し、「拓く会」の援護射撃を行なう。

創業昭和四年の和菓子屋、すなわち「拓く会」会長は自慢の茶室でこう語った。

「たしかに最初は自分の母校がなくなっては困るということで運動を始めた。でも運動をやっていくうちに、行政や議会があまりにもひどいことがわかったんですよ。彼らに委せておいたら、学校が潰されるだけでなく、ここに住んでいられなくなってしまう。たしかに政治運動になるのはおかしいと思われるかもしれませんが、まずそこから直していかなくてはいけない。そのためには都議選をはじめ、区議選、区長選にも再び候補者を出していきますよ。いちばん大事なのが区議会をとること。それが我々の目指すところなんです」

永田町小の児童は四十名ほどが番町小に行き、残りの児童のほとんどが麹町小に通っている。統廃合が行なわれた二カ月後、麹町小の門前で去年まで永田町小に通っていた四年生に会った。

「あのときは悲しかったけど、いまは新しい友だちもできた。ちょっと遠くなったけどいまの学校も楽しい」

大人の苦労をよそに、まったく無邪気なものである。

（文中敬称略、また関係者の一部を職業を使って表現させていただきました）

PART 2

つぎに、改造を考える基礎作業として教育論の混乱を整理しよう!

戦後公教育は終わった

戦後の公教育は、現在矛盾をあらわにしている。
それは戦後教育を支えてきた理念が
すべて間違っていたからではなく、
その理念の耐用年数が尽き、
制度疲労を起こしているせいである。
このことが認識されないかぎり、
現実の混乱や言説の不毛な対立や
明確なポリシーのない制度いじりをひき起こすばかりである！

小浜逸郎（評論家）



アメリカ型民主主義の自由平等の精神を模範にしながら出発した戦後の公教育は、現在いろいろな局面で矛盾をあらわにし、実質的にはその理念がすでに無意味なものとなりつつある。だが、私は、戦後教育を支えてきた理念のすべてが間違っていたとは思わない。間違っていたのではなく、日本国憲法と同じように、時代の変化に堪ええなくなってきたのである。それは、ひとつの使命をほぼなし終えてすでに形骸となりつつあるにもかかわらず、そのことがよく認識されないために、現実の混乱や言説の不毛な対立や明確なポリシーのない制度いじりを引き起こしているのである。

近代教育の目標のひとつは、すべての個人の自由と豊かさが満たされるような状態を実現するということである。ところが、どこまで教育がこの課題の実現にあずかって力を示したのかはわからないが、戦後日本は、資本主義的経営の巧みな発展と維持によって、少なくとも目に見えるかぎりでの個人の自由と豊かさとを相当程度達成してしまった。

◎転機に立つ公教育◎

戦後教育は、この近代的使命を、できるだけレベルの高い教育を誰もが受けることができるように最大限の機会均等性を実現することとして受け止めてきた。つまり、自由と豊かさを手にするためにまず平等な教育の普及ということを最優先の課題としたのであった。戦前の教育における複線的な学制の考え方は極力否定されたし、学科内容においても、一般的な基礎知識や教養をできるだけ身につけることが誰にとっても重要なことであると考えられてきた。

そしてこの機会均等性という理念は、少なくとも制度形式としてはほとんど文句がないほどに保証されるに至った。今日、経済的理由から高校進学をあきらめなくてはならない家庭というのは皆無に等しいし、また猫も杓子も大学や専門学校をめざすことが現実に可能になっている。

さて、課題の達成は、その課題の実現のために必要とされるはずの意欲の減退と衰弱をもたらす。課題がかたちのうえで達成されてみれば、さほどよいものでもなかったということがわかってきたのである。未達成の感覚、欠如の感覚が一般的であればこそ、その達成目的を夢多きものに見せもしようし、そこに至るまでの苦難の道を、それ自体として価値多きものと感じさせもしたのである。しかし、誰もが明日の食べるものに困らず、誰もが目を血走らせなくとも自分の生活をそこそこ自己完結させられるようになった状況では、今この努力をあえて選ばなければならぬ積極的な理由とか、これこれの統制に服さなければならぬ深い必要性とかを個人のなかに植えつけることは難しい。そういうことを押しつけられる必然性が個人的に存在しないのだから、そもそも身体がそういうことを納得しないはずである。

自由教育論者と秩序統制派の不毛な対立

たとえば中学校や高校においては、現在、生徒が教師の統制に従わず、授業を聞こうともしない状況がきわめて広く、また深刻に蔓延しているが、その背景にはこの社会心理学的な事実が厳然と存在している。彼らは、「せめて高校ぐらいは出ておかなくては」という世間全体の教育意識の水準に規制されて、いちおうそれを了解しつつ、形式的属性としては自分を「高校生」に仕立ててあげるのだが——なぜなら他に行く場所がないのだから——日常的意識、日常的身体は、長時間にわたる管理を受けたり、抑圧を耐え忍ばなければならぬ理由が理解できないのである——なぜなら将来の安定や幸福が保証されるためには今学校的規制を我慢しなければならないという論理は、彼らの快感原則をどうしても納得させないから。生徒たちが身にまとう社会的属性と日常的意識および身体との間に具現されたこの矛盾こそ、転機に立たされている公教育全体を象徴しているのである。

しかしこの問題を論ずる論者たちは、現在でもなお、ほとんどの場合、これを指導の仕方や教師の権力のあり方、家庭の教育のあり方などのように倫理問題に還元することしか思いつかない。

子どもの人権を強調し「自由な教育」を主張する論者は言う、子どもを管理で縛ることが子どもの心を教師から離反させ、教師と生徒の関係を悪化させるのだと。ところがこのとらえ方は、現に起こっている学校現象の解釈としては二重の意味でまったく逆である。まず子どもの心の離反があったために管理の必要が生まれたのであり、また、現在の学校体制では正しい意味での管理が不可能であるために、かえって生徒の放任が許されてますます関係が悪化するのである。

また、子どもの野放図を許すまいとする学校秩序統制派は言う、家庭の教育力の低下と社会の道徳規範の崩壊こそは学校の荒廃の原因であると。ところが彼らは、かつての家庭の教育力なるものが、じつは教育ではなく、貧困の現実から要請された必要やむを得ざる生活規制であったことに気づいていないし、彼らが学校において依拠している旧来からの農耕社会型の集団統制原理が、現在およびこれからの社会にとって本当に意味のあるものなのかどうかを反省してみようとしない。

自由教育論者は、子どもを被害者とばかり見て学校や教師をひたすら抑圧者と見なし、学校秩序統制派は、学校枠を無条件に前提したままで、外の世界の道徳的堕落をひたすら嘆く。どちらもけっして交わることのない不毛な対立であり、またどちらもその解決の戦略として、教師の個人的力量に問題を背負わせる以外にないところへ落ち着いてしまう。結果として、ふつうの教師はますます疲労感を募らせ、熱心教師はますます不必要な突出状態をさらしてしまう。いずれにせよ、このように倫理問題に還元してしまうのは、日本がかつてない豊かな社会を経験しつつあるという歴史的な変化の本当の意味を繰り込もうとしないからなのである。

具体的に論じているゆとりがないが、秩序統制派の主張する管理の必要のうちのいくつかのものは、現在では教師自らが手を

下してむりやり子どもに守らせるに値しないものである（それはけっして教師自身をも愉快な気分にさせない）。しかしそれを、視野の狭い自由教育論者がただ感情に駆られて考えているように、学校の組織形態や規模や授業形式を変えずに取り外すことは、単なる野放図を助長させるだけの結果を生む（現にそうなっている）。象徴的な言い方をすれば、問題は――いずれの論者も気づいていないのだが――《教育》をどうするかではなく、《学校》をどうするかなのだ。だが、この意味がおわかりだろうか？

ひとつだけ練習問題を出しておこう。校門圧死事件のような悲惨な事故が起きないようにするにはどうすればよいか？

《解答例①》遅刻管理のような抑圧的なことをやめて門をいつも開放しておけばよい。

《解答例②》もっと先生を動員して、さらに管理を徹底させればよい。

短期的にはどちらかを選ばざるをえないかもしれないが、じつはどちらも誤り。正解は「文部省に金を出させて、施設管理・安全管理の専門家を雇う」。

そんなことは不可能だ、とあなたは笑いとばしたかもしれない。だが私は考え方の基本的な方向性を指し示しているのである。不可能だと笑いとばす気持ちが、問題の真の所在をわからなくさせ、ことをすべて教師の責任におしかぶせてしまう認識構造をつくっているのだ。

◎理念なき文部省の及び腰◎

《学校》を現実にどうにかできる力を握っているのは、言うまでもなく、唯一文部省である。文部省は、《教育》理念のあるべき姿を打ち出す機関であるから、文部省を批判する場合は、そういう理念の間違いを批判すればいい、と評論家などは思っている。もちろんそれも必要なことだが、実際には今の文部省は、取り上げるに値するほどのたいした理念など持たないままにただ混乱を露呈させているだけである。

それはこれから論ずる偏差値問題を通じて証明してゆくが、今強調しておきたいのは、そうであるにもかかわらず、実際に予算を握って、教師の数や施設の運営方式や労働条件や労働形態など、要するに《学校》の経営スタイルを実質的に決めているのは文部省だということである。制度運用の権限を握っている機関が、たいした理念など持たずに実際に権力を行使している以上、何か新しい教育理念などを対置するよりは、自明とされている《学校》の形態そのものに再考の余地はないのかと疑ってみるほうが有効なのである。

「自由」と「平等」という価値観のジレンマ

さて、すでに「偏差値、事前相談、業者テスト」（37ページ）の項でもふれたように、この間の偏差値追放騒動のなかで示した文部省の混乱ぶりこそは、戦後教育の変わらざる理念であった平等主義が、今の段階で自らを貫こうとすればするほど、かえってその論理を自己破産させてしまう結果になることを証明していた。この問題は、

現在の教育が突き当たっている二つの価値意識のジレンマをきわめてよく象徴していると思うので、ここでもういちど、もっと突っ込んだかたちで考えてみたい。二つの価値とは、いうまでもなく自由と平等ということである（九一年に答申を出した第十四期中教審の場合も同じ問題を内包させていた）。

埼玉教育長が私立高の推薦入学資料として業者テストの偏差値を渡してはならないと言明したのを聞いた鳩山文相（当時）は、妙に元気づいて、すぐに全国の業者テスト利用状況の調査を命じ、その結果ほとんどの都府県が進路指導の資料として利用していることがわかったというわけで、「白昼堂々、公立の中学で業者テストが行なわれ、偏差値で生徒の推薦が決まるなど、絶対にあってはならない」などと言い出した。

受験競争を楽々乗り切ってきたボンボン政治家三世が、現在の教育現場のことなど何も知らないくせに何を悪乗りしているのかと思っていたが、鳩山が大騒ぎしようがしまいが、この問題が偏差値そのものの是非の問題に発展するであろうことは充分予想できた。というのも、現在の教育界では、「偏差値教育は諸悪のもと」というのが教育について何か発言するときの万人共通の呪文みたいになっているからである。そういう感情的下地があるところでは、それに少しでもかかわる問題が発生すればたちまちそこへ問題が飛び火していくのは目に見えている。事実、右から左までどの教育論議を聞いても「偏差値こそ悪者」の大合唱で、文部省と日教組までがこんなに一致してしまうのは戦後教育史上ありえなかったことである。不気味というほかはない。

偏差値追放はいかに進められたか

ここで簡単に事実経過を振り返っておこう。

92・10・12
埼玉県教委、県内中学校にたいし偏差値を出さないように指導、県内外の私立高校にも協力を要請。

11・17
文部省、業者テストの偏差値利用状況について緊急調査を実施。四十二都府県（のち四十四都府県）で進路指導の資料として利用、九都県（のち十四都県）で推薦入学の判定のために提供されていることが判明。

11・18
埼玉県教育長、偏差値は永遠に私立高校に提示しないと断言。合格をはっきり決めるような事前相談自体も問題だと言明。

11・22
文部省、業者テスト全面追放の方針を発表。偏差値による進路指導を段階的になくすと言明。

11・24
鳩山文相、私立学校代表に、テスト結果の提供を求めないよう要請。

93・1・27
文部省高校教育改革推進会議、最終報告で先の文部省方針をはっきりと盛り込む。業者テストへの中学校の一切の関与を禁止。事前相談は、公教育としてふさわしい適切な資料に基づいて行なうべきであるとする。公的テストさえも、公が作る偏差値という性格を持っていることを否定できず、学校が教育活動のなかで問題を作り採点するもの以外は、業者テスト

ともに慎むべきであるとする。

3・24

埼玉県教委、公立高入試の内申書に、生徒の努力の度合いなどを評価する「観点別学習状況」を盛り込む方針を固める。

4・5

文部省、全国都道府県教委などに業者テスト追放後の進路指導について、進学可能な学校の選択から進学したい学校の選択への転換を支持。

ここには、地方自治体のひとつのアクションをきっかけとして、たがいに矛盾する方向性を持った考えを強引にひとつの思想表現にまとめあげようとする苦しい意図が読み取れる。それは、「学力による選別をなるたけなくして、みんなが行きたい学校に行けるようにする」というのである。しかしちょっと考えてみればわかるように、こんなことはもともと不可能なことである。そもそも誰もが、できることならなるたけ学力レベルの高い学校に「行きたい」と考えている。レベルの高さはいうまでもなく、相対的な差異関係によって決まる。それを保証してくれるのは学力による選別である。一人ひとりの個人の「行きたい」がそもそもゼロサムゲームを前提として組み立てられているのに、「みんなが行きたい学校に行ける」などという平等主義の理想は、それ自体が論理的に矛盾した空想以外の何物でもない。

その「行きたい」の質を変える（学力中心志向から個性中心志向へ）ことをまさにめざしているのだ、と、得々として言う声が聞こえてきそうな気がする。しかし、あとで述べるように、学力選別の尺度を目の届く範囲から追放することで理想に近づいた気になっても、それは、個人の欲望実現の手段を公的な支配領域から逃がしてやったというだけの話であって、少しも人性の変革などにはつながらない。

たとえば、文部省はこの一連の経過のなかで、公的テストも偏差値で学力をはかることにつながるからダメで、学校内で問題を作って採点するならいいなどという無茶な論理を出してきた。自分で決めた論理の枠に自分で縛られているのである。高校入試が、複数の中学から集まってくる実力の定かでない子どもたちを、客観的に、主として学力によって選別するシステムをとっていることは隠れようもない事実である。それを一方で認めておきながら、そのシステムのなかで中学浪人をなるべく出さないような有効な指導を否定し、しかも一方では学校内の序列化は認めるというのである。だが、より客観的な指標に期待できないところでは、かえって日常的なレベルで成績序列を精密化せざるをえないのは目に見えている。なにしろ比較対象が自校の生徒たちしかいないのだから。これはアメリカの一部の学校のように、優勝劣敗が身近な関係のなかでシビアに演じられることを意味する。それでもよいのだろうか。

問答無用の悪平等主義モラル

ところで、高校入試における輪切り選別が具体的にどんな深刻な弊害を引き起こしているのか、明快な因果関係を示して証明しえた者はこれまで誰ひとりとしていない。ただ、高校中退者が増えたり、底辺校の授業にならない状態が報告されたり、無気力

な生徒が増えてきたりといった、教育現場の問題が浮上するたびに、悪者は、偏差値輪切りだ！と、なんの根拠もなく結びつけられてきただけなのである。そこには「ともかく学力で人を序列化することはけしからん」という問答無用の悪平等主義モラルがへばりついているので、始末が悪い。

高校中退者のなかに、偏差値を中心にした進路指導の結果、「行きたい」高校（この言いまわしにはじつはある限定をつけて語ることが必要であるが、それについては、あとで述べる）に行かせてもらえずにやる気をなくした生徒が何％かの割合でいることは事実である。しかし、大部分はそうではない。もともとふつうのレベルの高校の授業などについていけない生徒や、遊びやバイトのほうに興味があって、勉強などする気のない生徒が、「人並みに高校ぐらいは出ておかなくっちゃ」という世の風潮に乗せられて毎年大量に高校に押し込まれていく。そういう生徒が学校に自分の居所を見つけられずに、大小の逸脱行為を繰り返しつつやがて脱落していくというのは、全員が高校生を「しなくてはならない」状況では、ほとんど物理的な必然というに等しいのである。これは、輪切りをやったかやらなかったかには関係ない。そんなことは、輪切りをやらずに、低学力の生徒がハイレベルの授業をしている学校に通えるようになったら、中退者が減るかどうかを考えてみればすぐわかる。事実、アメリカの学校では、偏差値輪切りなどやっていないが、落第者や中退者の割合は日本の比ではない。

底辺校の問題も同じである。底辺校が授業にならないのは、勉強などに向かない生徒が一定の割合で存在するからであって、輪切りがもたらした結果などではありえない。輪切りをやめたところでその生徒たちはまとまりを解体されて少数の落ちこぼれとして拡散するだけの話である。つまり退学などの可能性がかえって増える。全体的現象としては目立たなくなるかもしれないが（そして目立たなくなることが、ちゃんと制度改革をしましたというアリバイになるのかもしれないが）、個々の生徒にとってどちらがよいのかわからない。

無気力生徒の増加もまた、輪切りが原因などではない。豊かな社会になり、消費文明が高度に発達したおかげで、若年層が早い時期に労働市場に出る必要がなくなり、そのために自分が何になるのかについて早急な答を出す必要がなくなった。誰もがさしあたり具体的な目標のない「人並み」の高等教育を身の程もわきまえずに求めるようになり、そのために、アイデンティティを欠落させた平均人が大量に発生した。そのひとつの表われが、何をしてよいのかわからない無気力生徒である。一般社会の側に子どもたちを生き生きと活動させるようなメニューがふんだんに用意されていないかぎり、この文明病的状況は簡単には変わらない。

◎偏差値追放を基底で支える情念とは？◎

ところで、先の事実経過の最後のところを見ると、文部省は鳩山の悪乗りを受けて

Illustration＝佐藤竹右衛門



しまった結果、実際にそのジレンマに自分からぶつかって困惑しているフシがある。業者テストや偏差値による事前判断を一切高校入試のシーンから排除してしまえば、内申書の記載などが信用できない以上、当然、当日の入学試験の比重が増し、一発勝負の性格が濃厚になるはずである。進路指導に偏差値を用いることを禁止して学校教師の情報掌握力を事実上骨抜きにするようなことを決めておきながら、今さら彼らは引っ込みがつかなくなり、「進学可能な学校の選択から進学したい学校の選択へ」などと言い出した。これは要するに、一発勝負を公認したということであり、混乱が起きても、中学浪人が出ても、中学校の先生はそこまで責任持たなくていいよと言っているように解釈できる。オカシイネ、もともと受験競争を緩和しようという趣旨で偏差値を排除・規制するのが目的であったはずなのに、これではいっそう競争が顕在化するし、またその不安の受け皿としての民間教育機関（塾、予備校）がよけい活気を帯びるだけではないか。それでもいいのかしら。日教組のような悪平等主義の欺瞞に染まっていないワタシは、それでまったくかまわないけれど。

　ただし、競争緩和策のつもりが、競争助長策になり、しかもその主導権を民間に譲り渡す結果になるという皮肉な成り行きを自ら招こうとしている責任者として、鳩山前文相や竹内埼玉教育長には、きちんとことばのうえでのオトシマエだけはつけてもらわなならん（早くも四月十七日付の朝日新聞紙上で鳩山は、「少なくとも私は、業者

テストや偏差値そのものの追放を言ったことはない」「十五と言えども競争社会、堂々と受けて勝負してもらうしか仕方ない」「会場テストがさかんになって悪いですか」などとうそぶいている。先ほど紹介した「白昼堂々、公立の中学で業者テストが行なわれ、偏差値で生徒の推薦が決まるなど、絶対にあってはならない」というカゲキなことばはどこへ行ったというのか。盗人猛々しいとはこのことである)。

偏差値を解消してもっと個性が尊重される教育を、などと人は簡単に理念を口にする。しかし入学試験制度そのものを否定するわけでもないのに、偏差値や点数による序列をなくして、これに代えるに何をもって選別の基準とするのか。入学試験による選別自体が、学力に基づく序列化以外のなんであろうか……。というわけで、もしこれらの疑問をも突き破ろうとするなら、ついに次のような過激な主張に到達することになる。それは、「学力で人を選別すること自体が差別であり誤りだ」というのである。

こういう単純な言いまわしを堂々とする人はよほどのバカでなければいないかもしれない。しかし、現在の偏差値追放の動きを基底のところで支えている情念は、明らかにこのルサンチマンなのであって、人はその情念に翻弄されながら、それをいろいろにソフィスティケートしているだけなのである。いわく、現在の偏差値中心の能力評価は、記憶力の優れた者だけが勝つような評価で、考える力を育てない。またいわく、どの子どもにも多様で多面的な能力や個性があり、ひとつのモノサシだけでなく、その部分を正当に評価するような尺度を考えるべきだ。さらにいわく、現在の日本の教育は、こざかしい知力ばかり育てて、人間として大切な徳育を忘れている。

〈学校〉を忘れた〈教育〉論議

一見これだけそろえられると反論の余地がないように思えてきて、みんな黙らされてしまう。ところが、これらの議論に共通した盲点は、およそ〈教育〉だけを議論していて、〈学校〉を議論していないというところにある。そもそも〈学校〉というところは、ここで観念されているような高級な達成目標を保証してくれることを期待すべき機関ではないのである。そういう熱い思いを国家の機関としての学校に寄せるのが私たちの間違いのもとなのだ。ここで、学校がそれを果たしてくれないといって述べ立てている不平は、まず不平者自身が自分たちで解決をはかっていくべき問題である。

考える力、などというと聞こえはいい。ところが、現在の高校に進学する子どもたちの平均的な能力と意欲では、教えるほうがどんなに努力したとしても、まず自分の生活に直接かかわりのないテーマについて、筋道立てて考えるようにさせること自体至難の技である。能力的にそうだというばかりではない。そこそこ明日を思い煩わなくてもすむ現代の子どもたちは、もともと自分の関心以外のよけいなことを考える必要性を身体的に感じていないのであり、そういう子どもたちの首根っこをつかまえて無理にでも「考え」させようとすれば、よほどの抑圧的な権力が必要になってくるのである。こんなことは若き日の教育理想に燃えて、やがて挫折した現場の教師たちがみんな知っているのだ。

エリート養成のために、特定の優秀な生徒にそうした教育を考えるというなら話はわかる。比較的無理なく彼らはそれに応えてくれるだろう。しかし、それはもとより選別的な教育をいっそう顕著におしすすめることにほかならない。私はその方向性にはおおむね賛成するが、それは現在の日本の高校生全体に一般化できない。全部面倒みちゃう日本の初等・中等教育の一般選別のレベルでは、記憶力や、せいぜい基礎的思考力の検査ぐらいにあっさり限定しておくほうが無難なのである。

偏差値追放という大同団結の危うさ

もともと知の伝達を主たる営みとするはずの学校という機関が、学力による選別そのものを否定すべきだなどというのは、矛盾も極まれりというべきである。そんなことは決して言っていません、と文部省は言うだろうが、偏差値に象徴されるような一律的学力選別への偏りをただすという方向性について一も二もなく飛びついてきたことはたしかなのである。

たとえば、ボランティア活動を評価してやって、などと文部省や一部の教育関係者は言っているようである。だが、ボランティアについて学ぶ学校ならそれで大いにけっこうだが、そうでもないのに、どうしてそんなことを評価尺度に持ち込む必要があるのか。そのことを知ってボランティアに励むセコイ子どもが出てきたら、それを人間的に高く評価できるのか。

さらに言うなら、そういう評価尺度そのものが含んでいる本質的な曖昧性を、学力評価の明快性とどう抱き合わせて克服しようというのか。学力テストで同点を取ったA君とB君のうち、A君のほうが活発に奉仕活動をやっていたので、A君を合格させ、B君を不合格とした。こんなのは、じつにうさんくさい話である。一見消極的なB君のほうが、はるかに優しい心を持ち、ものを深く考えるたちであったということだって、いくらでもありうるではないか。また百歩譲って、学力以外の人間的値打ちをはかることが技術的に可能であったとしても、そのような人格特性の評価尺度などを選別のなかに持ち込むことは、教師の主観的な感情で子どもを恣意的にさばく余地をますます与えることになる。そのほうがはるかに危険なことではないだろうか。

「評価」が存在しない教育機関という夢想

さて、偏差値的な評価の仕方を否定しつつ、なおこれらの疑問に答えることを必要としないような進学のあり方を考えるとすれば、まったく評価というものの存在しない教育機関を空想するしかない。だが、いいかげん冗談を言っている暇はない。そういう機関を教育課程の初期や中途に設定してもかまわないが、いつか社会へ出てゆく彼らは、どこかで社会の（それなりに意味のある）階層構造に適応した評価を受けなければならないのである。誰が医学的知識の貧弱な医者や、法律知識のない弁護士や、学力のない教師や実務能力のない役人のお世話になろうとするだろうか。

もしまた、中学から高校に進む段階で、選別を一切なくして、義務教育と同じようにフリーパスさせるとすればどうか。すでに偏差値による学校別ランクが厳然とある

から、当然高偏差値校から底辺校までの間に極端な人気の落差が生じる。その偏りをなくすためには、かつての東京都の学校群制度よりもさらに徹底した小学区制をとる以外ない（文部省に倍して現実に目をつむることが習慣になっている日教組は、およそ今でもこんなバカげたことを考えているらしい）。

だが、そのようにしたとき、それが自由の抑圧であるということや、優秀な生徒がみな私立へ流れるという自然な力学についてはしばらく問わないとしても、現実問題として極端な学力格差のある子どもたちをひとつの教室で教えることになるのは避けがたい。とするなら、そのときに現れる教師の想像を絶する指導上の困難を誰が解消してくれるというのか（言うまでもなく教育は高度化すればするほど、学力格差を埋めることが技術的に困難になる。現在の日本には、フランス現代思想の文献を原書で読みこなしてしまう天才的な高校生から、自分の名前を漢字で書くことさえおぼつかないような高校生までいるのである）。

人間の社会的現実を決めている条件には自然的なものから習慣・伝統的なもの、倫理的なものまでさまざまなものがある。それらをどうほど良くバランスするかによって、そのつどの最適解を求めようと私たちは努力してきた。しかし、およそ教育かくあるべしを論じる者たち（とくに日本人たち）がいつも見て見ぬ振りをするのが、個人の能力差という自然条件である。この条件は、じつは教育という営みにかかわる社会的現実をもっとも強力に決定づけている。この条件がどれほど日常の教育実践にとって大きな意味を持っているかは、いちど教師をやってみればわかる。またやらなければわからない。そしてわからないことをいいことに見て見ぬ振りを決め込むことのできる者が、問題を「教師の努力」などという空しいひとことに押しつけているのである。

◎学力序列は子どもを不幸にするか？◎

ところで最後に次のような強力な反論が残る。いわく、学力による序列にばかりこだわる日本の風潮は、下位にランクづけられた者ほど人間的にも劣っているかのような価値観を生み出し、彼らに救いようのない疎外感と劣等感を刻み込んでしまう。

これについては、およそ三つのことを考えておく必要がある。

ひとつは、果たしてこのことは、騒がれているほど本当かということ、もうひとつは、そうした疎外感と劣等感が仮に見られるとしても、それは日本人が教育において自ら徹底した機会の平等を求めた必然的な結果なのであり、それがいやなら機会の平等をある程度断念するほかはないのだということ、そしてもうひとつは、そうした疎外感や劣等感の解決の道を、ふたたび同じ国家制度的な保障に依存するかたちで求めるべきではないこと、である。

初めの問題について言うと、人びとはいつの頃からか偏差値教育は悪いものと信じてしまったので、それが具体的にどんな不

幸な感情をどの程度子どもたちの中に植えつけているのかということについて、検証する必要はないものと決め込んでしまった。人びとは、正義が行なわれているかどうかの実態よりも、くりかえし述べ立てられる〈正義〉の言説形式に弱いのである。

この〈子どもたちの不幸〉の指標としてよく持ち出されるのが、小さい頃からの塾通いや、学校の秩序に反抗的態度を示す非行生徒、校内暴力、いじめ、不登校、すでに述べた高校中退者の増加といった現象である。しかし、これらの現象が、偏差値教育の結果としての〈不幸〉であると結論づける論理的根拠は何もない。ただマスコミやこれに便乗した教育論者たちが、一見不幸に見える子ども現象を拾い集めてきて、それを偏差値教育批判の材料として情緒的文体で勝手に結合させているにすぎない。

非行や校内暴力は、教育の内容などにはおよそ関係のない、教師と生徒の日常的生活関係の解体という八〇年代以降の現象を一般的な下地として、その関係の破れが特定の生徒において突出したものである。またいじめや不登校は、多くの場合、学校空間の中での閉鎖的な集団性を基盤にした、友だち同士の性格的な葛藤から起こるものであり、成績が悪いからという理由だけでいじめられたり学校を休むようになったりということはまずない。最低水準の成績しかとっていない生徒がグループのなかで君臨しているなんてことはいくらでもある。

塾通いに至っては、そもそも不幸であるという決めつけ自体が恣意的である。むろん、親の勝手で、もともと机に向かうことになじまないような子どもを不必要に勉強に駆り立てている例というのはたくさんあるし、そこにつけ込んで塾産業が成り立っている面もたしかにある。つまり社会の風潮がもたらしている親の過剰な教育幻想が存在することは疑いがないのだが、一方に、塾を楽しいとかためになると感じている子どももたくさんおり、どちらかと言えばそのほうが多数派である。それはできる子に限ると思うだろうが、必ずしもそうではないのである。

とくに中学生相手の塾に言えることだが、成績が2か3くらいの子でも、親切にみてくれる先生がいて、生活の中に塾での勉強が定着すると、ある程度安心感が育ち、そこでの友だちづきあいもできるというわけで、けっこう楽しそうに通ってくるものなのだ。過熱ぎみの中学受験の進学塾においてさえ、合格を体験できるのはごく一部の子どもだけなのに、学校より塾のほうが楽しいと漏らす子どもが多いのは、今日ほぼ常識の部類に属する。いくら親に言われて通うようになるにせよ、子どもの日常感覚を深刻に不幸にしてしまうような産業がこんなに栄えるわけはないのである。

中三の二学期になると、子どもたちはできる子もできない子もほとんど一様に、「自分の行ける学校」を現実的に気にし出す。模擬テストの偏差値や一学期の成績と、過去のデータを比較しはじめるのだ。ここでも、そういうことに過度にとらわれれば、それは不幸なことだと言ってもよいだろう。しかし、私が長年塾をやってきて実感的に知っているかぎりで言うなら、勉強にあまり縁のなかった腕白どもがわずか数カ月のこの時期になんとなく殊勝になっていく姿を、不幸などというふうに形容することはとてもできない。

学力による選抜は教育の機会均等の実現である

もちろん彼らは内心高校受験なんてなければよいのにと素朴に思っている部分があるだろうが、そんな気ままな感情だけで彼らの全体を推し測ろうとするのは傲慢というものだ。学力による選別という初めての運命との出会いを、避け難い通過儀礼のひとつとして軽快な断念によって受け止めているのがほとんどの場合なのであり、多くの親もまた、「何しろたいして勉強もしないあの子の実力ですから、行けるところへ行ければいいですよ」と言ってのける賢明さを忘れてはいない。

くりかえすが、中学から高校に進むときの偏差値による振り分けは、過激な競争の様相などを少しも呈してはいず、ただ日常生活のなかに消化されたかたちでの塾通いや模擬テストがあり、それらを通しての自己適応作業が、多少の緊張感と感情的波立ちのなかで行なわれているにすぎない。「行ける学校」を気にはしていても、入試直前までのんびりしている子もけっこう多いのである。

いずれいくつもの運命の試練を受けなくてはならない彼らが、この時期にそういうものをひとつぐらい経験しておくのは、悪いことではない。むろんそれが偏差値的な学力というひとつのモノサシによらなければならない絶対的な必然性はない。しかしそれなら、やみくもに偏差値を悪者扱いする人びとは、学力による選別がこれほど普遍的でなかった時代に人びとがいったいどんな不遇感に堪えなければならなかったかをいちどでも考えたことがあるだろうか。身分や財産や不合理な掟などが、機会の平等を大きく阻んでいたのではなかったか。それらのものを制度から排除した土台の上に、「誰もが能力さえあれば教育という社会的権力を手にできる」という暗黙の社会的合意条項を打ち立て、それに基づいて社会の諸階層の秩序を肯定してきたという私たちの歴史的ないきさつを、簡単に忘れるべきではない。

また今後、予想される未来社会で、偏差値による学力評価が仮に現在のような力を示さなくなったとしても、それに代わる社会的圧力が子どもたちを今よりも不幸な状態や矛盾のなかにおとしいれないという保証はない。それというのも、学力による選別の客観性が成り立っていることは、今も言ったように、個人にとって教育の機会均等性がほぼ完璧に実現していることと不可分なのであって、もしそれになんらかの手心を加えるならば、直ちに機会均等性のほうが侵される可能性が生じるからである。この例で最近問題とされるのは、アメリカのいくつかの州で行なわれている、マイノリティ優遇政策である。大学の入学者のなかに、たとえ成績が悪くても黒人を何%か入れなくてはいけないといったルールを作ってしまったために、白人の側から、逆差別ではないかという不満がわきおこっていると聞く。当然と言えば当然の話である。

「行きたい学校」というウソ

人を判断するのに、ひとつのモノサシだけではかるのではなく多様なモノサシでという言い方そのものに異論をはさむ余地はない。しかし、そもそも多様なモノサシを

公教育の内部にすべて配備しておく必要がどこにあるのか。多様なモノサシを要求されるのは私たちの生全体であって、だからこそ、公教育などという本質的に画一的な世界のなかに、いくつものモノサシをくわえ込ませてはならないのである。



大事なことは、文部省が出すぎた親切心を示してやろうとしているように、自分の管轄内に多様な評価機能を用意しておくことではなく、公教育の外側にいかにして多様な価値の世界を定着させていくかなのである。その意味では、ふつうの子どもたちに、さらに公教育への幻滅を深めさせる必要すらある。どこかに生きる道を自分なりに見つけようとしている高校中退者や大学受験失敗者を、ひとくくりに日本の教育の犠牲者とか落ちこぼれの悲劇などと大袈裟に考えて、やたらと彼らに教育的救いの手などを差し伸べようとしないようにすることも大切なことだ（民間の実業教育的なものならば、職業に役立つかぎり歓迎されてよいが）。要するに、公教育が小さく見えるような視野を獲得するにはどうすればよいかを模索すること。

「行きたい学校へ」などという言い方も、いかにも個人の自由を尊重していて、一歩前進のように聞こえる。しかし、教育行政の担当者が、実際の中学生たちの心理実態にもふれずにそれを言うところに大きな欺瞞がある。たしかに、現在までの中学校サイドでの進路指導は、中学浪人を出すことを恐れるあまり徹底しすぎているところがあって、もう少し高偏差値の高校に行けそうな実力があるのに、進路相談の段階で「そこは君の点数では無理だ」などと決めつけられ、親子ともども早々と涙をのむという

光景が至るところで見られる。

べつに学校側は、絶対に受けちゃいかんとは言っていないのだから、受けちゃえばいいじゃないか、やってみなければわからないではないか、という一見まともに見える論理があるが、受ける当事者にしてみれば、まだ自立していない年少者でもあり、情報を握っているわけでもないのだから、権威筋の指導者にいったん言われたことを無視して押し切るという勇気はなかなか出ないものなのだ。

しかし注意すべきは、この場合の「行きたい学校」とは、あくまで「行けそうなところで、できるだけ偏差値の高い学校」という意味であって、子どもの側に、あの高校は、これこれの点で魅力が感じられるから、という強力で具体的な欲求があって、それに基づいて選択しているのではないということである。そんなはっきりとした欲求をふつうの中学生の心に喚起させるような高校同士の差異などは、現在ほとんど存在しない。せいぜい、制服がかっこいいとか、やりたい部活ができそうだというぐらいのものである。商品メニューのほうに（通う生徒の学力差以外には）たいした個性など見られない状況では、選ぶほうにはっきり欲求を持てというほうが無理である。もともとふつうの子どもは「どうしても高校で勉強したくて行く」のではなくて、「全員が行くことになっているのでしようがなく行く」のだからである。

「行きたい」ということばは、とても曲者（くせもの）のことばである。あたかもある選択をする当事者がいつも自由な主体であって、その対象についての純粋な欲望を持っているかのような錯覚を呼び起こす。しかし、実際にはある現実的な条件に促されてそうせざるをえないという場合がほとんどなのである。

中学生が高校を選ぶ場合、まず「行くことになっている」という時代的な規定が七割を決している。次に、自分の学力と努力の程度によって、二割が決定されている。わずかに残された一割の幅のなかで、「行きたい学校」という欲求のことばにリアリティが認められるにすぎない。どうしても回ってくる掃除当番ならばそれを引き受けざるをえないが、どうせならできるだけ能率的な掃除用具を選択したい、と人は思う。「行きたい高校」を選ぶというのは、その程度の欲求レベルの問題なのであって、心浮き浮きと積極的な選択意欲が駆り立てられるようなものではありえない。

そういう実態であるにもかかわらず、文部省や教育関係者は、まるで中学生みんなが本当は向学心に燃えていて、高校というところに自発的に「行きたくてたまらない」と思っているかのように私たちに思わせようとしているのである。つまり、彼らは自分たちの教育ナルシシズムを強引に振りまいているわけなのだが、そうしておかないと、自分たちの提供している教育メニューのイメージダウンの現実がいっそう露出してしまうからなのである。

文部省の苦しい論理の本音

この文部省の気持ちはじつはわからないではない。もともとこの「行きたい学校へ」というスローガンは高校中退者の増加や無気力生徒の増加への反省から出てきた苦しい論理に基づいている。要するに、行きた

い学校があったのに行かせてもらえなかったために、入学してから無気力に陥ったなどと不平を漏らす親や子どもが増えてきて、自由欲求の神話を信じている教育評論家や児童心理学者がこれを支持したために、高校中退者の増加は、行きすぎた進路指導の結果、子どもが「行きたい学校」に行けなかったせいであるということになってしまったのである。文部省としてはそれに負けるかたちで、「わかった、わかった、じゃあもう勝手にやってください」と言いたいのが本音ではないかと私は想像する。

　ところで、中退者のなかにはもちろんそういう子もいるだろうが、一般的理由としてこういうことを述べ立てるのは、甘ったれもいいとこと言うほかはない。まるでA高校といくらか偏差値の違うB高校に入っていれば、その後の人生が決定的に違っていたろうと言っているみたいである。つまり現在の高校生活に対する漠たる不満を、「釣り落とした魚」の大きさのせいにして自ら慰めているだけなのである。多少の欲求が満たされて「行きたい」学校に行けた場合でも、かえってそのために、入ってみたらその学校に託していた希望が満たされずに幻滅を深めてしまうということだって大いにありうる。

　なぜこういう意地悪いことをあえて言うかというと、くりかえすように、現在の高校というところは、どこであれ、過剰な期待を満たしてくれるほどすばらしいところではないからである。高校生活での幻滅や倦怠や不満を、個別の学校の性格や本人の仮定された純粋欲求のせいにするのが、そもそも欺瞞であり、「木を見て森を見ず」なのである。

　高校が、そのレベルさえ問わなければ誰でも行けるようになったということは、その相対的価値が下落したということを意味する。これは経済学上の鉄則である。今日の高校教育は、平均線で言えば、スーパーかコンビニの商品と同じ値打ちしか持っていないのである。そういう現実に対する認識を隠しておいて、「行きたい」欲求などがあたかも子どもたちの中に眠っていたり、芽ぶいていたり、たぎっていたりしているかのように仮定するところが、この世界のしようもないところなのだ。

　誤解しないでいただきたいのだが、このように言ったからといって、私は、現在の高校教育はこれほど魅力を失っているのだから、もっと子どもの自由欲求が誘発されるような進学様式や教育装置を工夫しろなどと言いたいのではない。まったく逆に、学校なんてもともと社会や国家の強制力によって初めて機能するのだし、機会均等性を否定するのでないかぎりは、しょせんどんなに改革しようがそんなものでしかないと言っているのである。ふつうの子どもが仕方なく通うものだという前提のうえにニーズが立てられている以上、あんまり「行きたい自由」が保証される教育をなどと、公的な枠のなかで麗しくもウソっぽい宣伝をしてほしくないのである。

賢明な態度とは

　偏差値をめぐる価値意識の問題を中心に、現在の公教育が突き当たっているジレンマについて述べてきたが、帰するところ、これは自由と平等が両立しえないという問題なのである。かつて、この世に圧政が支配

していた頃、この二つの命題は相たずさえて人民解放のスローガンとなりえた。ほとんどの人びとに平等な政治的権利が保障されていないところでは、個人の自由が追求できるはずもないからである。しかし事態は変わった。八割の人が自分を中流であると意識する時代（つまり実質的平等が基盤的に確立している時代）においては、平等の形式的理念を徹底させようとすればするほど、その力はふつうの人びとの自由の制限となって表われざるをえないのである。多くの人が、自分の持てる力を維持したり、もう少し伸長させたいと思っている状態のときに、それを打ち消すような価値意識を強引に外から押しつけようとすることはバカげている。

　同時に次のようなことも言える。私たちは、すでに公的な制度が配分する富のみに依存して自分たちの生活を構成しているのではなく、自由に自分の利害を処理してゆく領域を一方に大きく保持している。そのような発達した市民社会の様相のもとでは、公的領域における制度的な押しかぶせは、必ず私的な領域への欲望のはみ出しを生み出す。したがって、公的な領域で統制者が平等主義の理想を貫いた気になっても、そこで飽き足りない部分が、私的な領域で追求されるだけだということになるのである（私立中学への人気集中の例）。こうして、現在の公教育では、ひとつの理念を自分の統制圏内で貫こうとすることは結果的にその理念の破産をきたすのである。

　私たちは、ほとんどすべての子どもが高校まで通うことができる（通わなければならない）というような、戦後教育が確立した高度な機会均等性を今さら否定することはできない。したがってそこに必然的に現れた、偏差値的な価値意識も簡単にくつがえすわけにはいかないし、またくつがえすべきでもない。とすれば、基本線としては、その公的な制度が保障している機会均等性の部分を最低限の土台として踏まえつつ、そこから抜きん出てしまう個人の自由欲望の部分に関しては、無理な公的押さえ込みを考えずに、民間の需給関係にまかせるというのが、賢明な態度と言うべきではないだろうか。

学校をめぐる闘いの焦点はどこにあるのか

　この論稿で私は文部省の及び腰の制度改革志向を批判し、それ以上に日教組的な平等たてまえ主義の欺瞞性を批判してきた。私のこの半ば無意識の姿勢は、現在の学校をめぐる矛盾の構図がどのようなイメージによって組み立てられるものであるかを象徴している。文部省対日教組というような右―左の綱引き的対立のイメージはとうの昔に死滅しており、現在のそれは、ロート状の容器の底に吹きだまりのように学校現場があり、そこを中心として、社会全体が渦を巻いているといったイメージである。現場と、それを周りや高みから取り囲む現場以外の教育関係機関、教育関係者、教育関係メディアとがまさにもっとも鋭い対立を示している。そのリアリティのなかにこそ、学校にかかわるあらゆる闘いの焦点があるということを、よくよく考えておかなくてはならない。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

秋山仁の巻

〈東海大教授，元予備校講師，数学者〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

学歴なんかじゃないんです。貴花田（現・貴ノ花）関や宮沢りえちゃんをみてごらんなさい。彼らは中学しか出ていませんよ。でもそれぞれの分野であんなに立派にやっているじゃありませんか。（NHKラジオ九二年十二月二十四日再放送番組）

＊

エジソンも学校嫌いで有名だった、アインシュタインは学校の成績がすごく悪かった、なんていう大衆を愚弄したホラ話は昔からあとを絶たないが、これもそのたぐい。

だからどうだってんの。天才や特殊条件に恵まれた例外者を例に出して一般化するなって。

これは要するに次のようなとんでもない三段論法に基づいている。

「貴ノ花は中卒である」（大前提）
「俺も中卒である」（小前提）
「ゆえに貴ノ花は俺である」（結論）

またこの種の話にはたいていおまけがつく。この番組でも御多分にもれずやっていたが、「センセイご自身はどんな子ども時代を過ごされたのですか」てなインタヴュアーの質問があって、センセイ得意げに曰く、「僕はもう勉強なんてまったくしないで、自然のなかで自由に飛び回っていたんですよ」——まるで、だからこそ数学者になれたとでも言いたげである。またしてもブッ飛び三段論法。

「俺は数学者である」（大前提）
「俺は勉強しないで野山を駆け回っていた」（小前提）
「ゆえに勉強しないほうが数学者になれる」（結論）

それにしてもまだこんなレベルの低い子どもだましでみんながついてくると思ってる人がいるんですねえ。しかも彼はテレビでも顔を売っている人気センセイだというじゃありませんか。いやいや、そういう才人の口からもれればこそ、数学者にあるまじき没論理的なホラ話でもまわりがありがたがって聞くんでしょうな。でもホラ話は誰が吹いてもやっぱりホラ話だよね。

こんな論理で一般社会でも押していけるなら世話はない。だが、絶対というわけではないにせよ、また幸福か不幸かという尺度でならなんとも言えないにせよ、学歴・学校歴・すぐれた学力が地位、権力、収入、職種などの社会的立場をかなり有利に導く条件になっていることは依然として否定しえない現実である。

そういうことを欺瞞的に押し隠すような景気づけをいくら言っても、普通の人はちゃんと見抜くんですよ、秋山導師。

塾・予備校は希望の星か!?

塾・予備校はこれまで日本の教育に構造的に内在する矛盾・欺瞞を戯画的にまで拡大する役割を果たしてきた。その意味で、塾と学校は双子の兄弟だ!

中山治（心理学者）

マスコミ一般の論調からすると少数意見だということは自覚しているのだが、私は子どもに能力があるのであればやはり大学、ことに一流大学への進学を目指したほうがよい、と考えている。もちろん、子どもには向き不向きがあるので、能力のない子にそんなことを勧めるつもりは毛頭ない。では、なぜ一流大学なのか。

これを論ずる前に、一流大学の定義をさしあたり同世代の学生の上位七～一〇パーセントを吸収する大学、と定義しておこう。だから、べつに東大や早慶だけを念頭に置いているわけではない。

さて、私が一流大学への進学を勧める理由は、世間でいう「いい大学からいい会社へ」というありきたりの理由からではない。文明が変革期にあるから、というのが答である。

こんなことを言うと、何を大げさなことを、と嘲笑する向きもあろう。だが、私に言わせると、こうしたマクロの観点から物事が考えられない教育関係者の視野の狭さこそが、日本の教育を袋小路に追い込んだ元凶なのである。

今、文明は大変革期にある。コンピューター、遺伝子工学、宇宙科学から金融、経済の高度情報化まで、今世紀の科学技術の発展は過去のいかなる時代にもなしえなかったような革命的な変化を人間に与えている。しかも、この変化は二一世紀を目前に控えて、停滞するどころか加速する一方である。

こうした近未来社会では今の子どもたちが主役となるわけだが、そこでは良質で高度な情報をきちんと活用できる能力が今日とは比較にならぬほど求められるはずであ

る。もちろん、仕事においても自己実現においてもである。これは超高度情報化社会の宿命である。ところが、この種の情報というのは誰にでも利用できるというものではない。高度で良質な情報ほど、それを活用するためには幅広い教養や深い専門知識、言ってみれば広い意味での基礎学力が要求されるのだ。そして、この種の力を身につけるにはなんのかのと言っても一流大学のほうが有利なのだ。このことはべつに日本ばかりでなく、世界中どこでも同じである。

そうはいっても、私は日本の一流大学というところが、とくに欧米のそれと比べていろいろ問題があることは承知している。しかし、だからといって三流、四流大学に進学すれば問題は解決するかというとまったく逆で、よりいっそう日本の大学が抱える問題点が露わになるだけの話である。

脳の容量（キャパシティ）と情報とのギャップは開くばかり―

ところで、文明の高度情報化は、当然教育にも波及してくる。いかに学習内容を精選したところで、内容の高度化、複雑化は避けられないのだ。それであるから、事のついでに、人間の脳ももっと巨大化して、機能も大幅にアップしてくれればよかったのだが、残念ながら人間の脳の進化は数万年前から停滞したままである。その結果、脳の容量（キャパシティ）と情報とのギャップは開くばかりとなる。

実際、高校の教科書や一般書の中にさえ、過去の天才、偉人が思いもしなかったような高度な情報が溢れているのだから、これで我々凡人の脳ミソがオーバーフローを起こさなかったら、そのほうがよほど不思議である。だいたい、学校で学ぶことが、簡単な「読み、書き、ソロバン」程度なら、「落ちこぼれ」など生じるはずがないのだ。

能力差、努力差をどう吸収するか？

それはともかく、教育内容が高度化すればするほど、子どもの能力差、努力差がより顕著になってくる。あたり前である。そして、このあたり前のことから常に目をそらせてきたところに、日本の教育論議の最大の欺瞞と不毛性があるのである。

では、学習内容の高度化に伴って必然的に現れてくる子どもの能力差、努力差をどう処理したらよいのか。これには二つのやり方がある。ひとつは私が進度差置換主義と呼んでいるものであり、もうひとつは達成度偏重主義と呼んでいるものである。

進度差置換主義というのは、能力差、努力差を学習進度の差で吸収しようというものである。具体的には、「飛び級」と「落第」がそれである。つまり、一定の達成度に達したならば、年齢に関係なく次の学年の内容を学ばせる。あるいは逆に、一定の達成度に達しないのであれば、もう一年留年して同じ内容を学ばせる、という考え方である。現に、スイスのように小学生でもどしどし落第させるし、またそうすることが親切なのだ、という国がある。また、十五歳で大学入学とか、十八歳で理学博士、とかいうケースは欧米では珍しくない。

これに対して達成度偏重主義とは、要するに進度では差をつけないで、能力差、努力差を達成度の差だけで吸収しようというものである。戦後の日本の教育がその典型で、できる子もできない子もみんな一緒の

横並び、という構造から必然的に生み出されたものである。そして、日本の受験戦争の淵源はここにある。

つまり、達成度の差だけで能力差、努力差を吸収しようとしたら、どうしたって難問をどれだけ早く解けるかの競争になるのは必然である。かくして、受験に無駄なエネルギーを使いすぎるとか、大学入学後にあまり勉強しない（大学入学が達成度の高さを競う終着点なのだから、あたり前である）ことになる。悪名高い学校の序列づけもこれであり、君は難問が解けるから開成高校へ行きなさい、君は分数もわからないから底辺校へ行きなさい、となるのは必然である。偏差値はその道具にすぎない。だから偏差値追放などまるで茶番劇なのだ。悪平等という達成度の高さだけを競う構造はそのままにしておいて、偏差値叩きをするのは、「体温計を壊せば熱が下がる」式のメンタリティにすぎない。原因と結果を取り違えているだけなのだ。

塾、予備校の台頭という二重構造の成立

しかし、この形式平等主義にも長所がある。それは教育の大衆化を容易にしたことである。悪平等は天才、異才の芽を潰すが、反面、その達成度に応じた場を用意することで教育の機会均等を図る動きを生む。つまり、達成度が低ければ低いなりの高校、大学が用意されるのである。また、そうであれば、いかに勉学への意欲に欠ける者ではあっても、多少は勉強を強いられることになる。これにより、全体の教育水準は上がることになる。

反面、進度差置換主義は、天才、偉才を生みやすくする一方、高等教育は少数のエリートだけのものとなったり、はやばやと学業に見切りをつける子どもを生むことにもなる。つまり、一長一短なのである。だから、この両者にどう折り合いをつけていくかが日本の教育の大きな課題となるべきであったと思う。しかし、現実にはそうはならなかった。公立学校が、学力養成から人間教育へと力点を移したからである。「見えない学力の養成」などといかに美辞麗句を弄しようとも、今の公立学校では大学で学ぶにふさわしい基礎学力は得られない。これは確かである。

では、親はそうした現実に満足しているのだろうか。もちろん、否である。人間教育の大切さはわかる。しかし、その鍵を握るのはまず第一に家庭である。それに、学校が果たして人間形成にどれほど役に立つのか疑問がある。荒廃している学校では、マイナスの教育力しか持たないのは明らかだし、うかうかすると殺されてしまう危険さえある。

そうした公立学校への不満を肩代わりしたのが私立学校と塾、予備校である。かくして、学力に関しては、塾と学校という二重構造ができ上がることとなった。それに、各界のリーダーを見渡しても、かつての松下幸之助氏のような人物はいなくなって、みな大学、それも著名な大学卒の人びとが占めるようになっている。おまけに、よせばいいのに、自らは一流大学を出て、立派な肩書きを持っている「識者」が、そうした経歴の「権威」を借りて学校歴社会を批

判するものだから、親はシラけるばかりである。第一、これで「識者」の言うことを本気で信じる人がいたら、相当におめでたい人か、子どもに能力がなくて不本意な進学をせざるをえず、その現実を合理化したいと思っている親だけである（そういえば、第十四期中教審の委員のなかにもいましたっけ）。

今やみな、鳩山前文部大臣やクリントン大統領をしっかり見習って、公立学校の公平性、平等性を大いに称えつつ、わが子はしっかり私立の名門校へ入れる、というのが賢い親のトレンドとなってしまった。つまり、意識のうえでもシステムのうえでも、完全な二重構造が成立しているのである。こうして、塾、予備校は、今や学校と並ぶ教育機関となった。

拡大鏡としての塾、予備校

しかし、おもしろいもので、塾、予備校がわが世の春を謳歌しはじめると、必ずそれに悪乗りしてくるものが出てくる。たとえば、中学受験の大手塾である日能研がそうである。日能研は、公立学校の悪平等主義の欺瞞性をあげつらい、塾や予備校はそうした欺瞞性からさも自由であるかのごとき発言を繰り返している。しかし、本当にそうだろうか。

確かに、塾、予備校は能力別クラス編成、無学年制、飛び級、先取り学習、といった試みを積極的に行なっている。この限りでは、一見、形式平等主義を打ち破っているように見える。しかし、これはつきるところ同学年の子どもたちに対する学力優位を達成するための手段にすぎず、その限りにおいて形式平等主義の大枠を少しも打ち破ってはいないのだ。いや、打ち破るどころか、達成度偏重主義を極限まで強化、拡大することによって、形式平等主義を裏からしっかりと支えているのである。ここに、塾、予備校の本質的な欺瞞があると私は思う。

では、なぜこうした欺瞞が生じるのか。それは塾、予備校が日本の教育の一大イベントである受験合格ということを目的としており、それを商売としているからである。だから、イベントの中身が代わり、たとえば日本の学校が進度差置換主義を取るようになれば、こんどは「落第しないための傾向と対策」だの「めざせ飛び級」だのといったコースを作るに決まっている。

つまり、塾、予備校はこれまで日本の教育に構造的に内在する矛盾、欺瞞を戯画的にまで拡大する役割を果たしてきたのであり、その意味では塾と学校はじつは双子の兄弟なのである。だから私はこう断言したい。塾、予備校は日本の教育の「拡大鏡」である。それ以上でも、それ以下でもない。

塾、予備校のスローガンは羊頭狗肉だ！

さて、塾、予備校の構造的な矛盾、欺瞞が明らかとなったところで、もう少し具体的な問題点に移ろう。

私の目から見ると、ひとくちに塾、予備校とはいっても、はっきりと二つの群に分けることができる。ひとつは、受験合格を商売にしているという限界を知りながらも、達成度偏重主義の弊害を少しでも抑えようとしているところである。もうひとつは、受験合格だけしか念頭になく、達成度偏重

主義をいっそう推し進めるところである。後者はいうまでもなく、モーレツ塾、スパルタ塾と言われるものである。

達成度偏重主義の弊害とは、もちろん「燃えつき症候群」をはじめとする種々の精神病理であり、健康への被害である。首尾よく難関校に合格したものの、勉学への意欲をまったく失ってしまう子はうようよいる。これではいくら合格したところで親は困ってしまうから、受験合格という制約下で、最大限子どものトータルな発達や、あるいは入学後の伸びまで考えた指導をしてくれる塾、予備校が今強く求められている。

すると、塾も商売だから、どう見ても受験合格しか考えていないとしか思えない塾、予備校が、さも子どものトータルな発達も考えているかのようなスローガンを掲げて客寄せを始めるのである。羊頭狗肉もいいところで、いいかげんにしろと言いたい。やれ「四角い頭を丸くする」（日能研）だの「質の良い教育」（四谷大塚）だの「入試で燃えつきない頭脳」（ＴＡＰ）だのといったところで、こうした塾は相当ハードである。第一、システム自体が徹底した達成度偏重主義に基づいているではないか。こうしたなかで、ゆとりを持って自分の能力をトータルに伸ばせる子はほんの一握りなのだ。

だったら、そんなきれいごとなど言わず、うちは合格しさえすればよい塾です、そのためにはどんなことでもやります、子どものトータルな発達なぞどうなろうと知ったことではありません、といって宣伝してくれたほうがよほど親が勘違いしなくてすむ。日能研は機関誌「合格レーダー」で、公教育の欺瞞性や教育論議のきれいごとをさんざん批判しているが、自分たちだってずいぶんきれいごとを言ったり欺瞞的なことをしているではないか。

優秀クラスの影となって サービスを充分に受けられない 「引き立て役」の子どもたち

私がこんな厳しい批判をするのは、多くの「引き立て役」の子どもたちが気の毒だからである。確かに、多くの塾、予備校が主張するように、受験が必ずしも悪とは言えない。受験を能力開発のひとつの手段にしたり、発達のバネとしたりすることは充分可能である。その点では、私も受験勉強必要悪論というマスコミ一般の論調には反対である。私が言いたいのは、そうであれば、なぜ塾や予備校は一部の子さえうまくゆけばよい、という態度をとるのか。なぜ、自分たちの塾、予備校に通う子すべての能力開発ということを考えてやらないのか。等しく入会審査をし、同じく月謝をいただいているにもかかわらず、なぜ子どもの出来不出来によってサービスに著しい濃淡があるのか。

ここに塾、予備校の商業主義の限界がある。一部のきわめて優秀な子は有名校にいくつも合格する。合格実績こそ最大の客寄せである。だから優秀クラスは少人数制で、しかもとびきり優秀な先生をつける。こんな環境で生徒も燃える。ぐんぐん能力を伸ばす。有名校にいくつも合格して塾、予備校に感謝、感謝、となる。大学受験などでは、月謝免除の特待生やタダ模試などあたり前だから、そんな生徒にとっては塾、予備校は足を向けて寝れない存在だろう。

だが、そういう子はあくまで一部なのである。その他大勢はその「すばらしい合格実績」やら優秀な先生の「熱血授業」に惹

かれて入塾する。こういうたくさんの「その他大勢」で塾は儲けるのである。下のクラスにいくほど、マスプロ授業やバイト教師によってしっかり手抜きされることになる。同じ月謝を払っているのに、サービスの質がこれほど露骨に違う商売はほかにないだろう。かくして、塾や予備校では、一握りの「うまくいった子」とその他大勢の「引き立て役」が生じるのである。

もちろん、塾、予備校のような仕事の場合、同じサービスをしていても、そのサービスを受け取る側の努力いかんによって、結果としてサービスに濃淡の差が出ることはあるだろう。私もそこまでは要求しない。しかし、明らかにサービスそのものに差をつけているケースも決して少なくないのだ。

私の次男の場合、国立学院予備校という塾の夏期講習では、ドラえもんの皮の厚さについての話で授業時間の半分が消えてしまったし、日能研では、四教科のコースから二教科のコースに代わったとたん、息子の学力レベルとはかけ離れたクラスに入れられてしまった。というより、そういうクラスしか用意されていなかったのだ。

トラブルが起きた例さえある。私の親戚の子が日能研から駒場東邦中学に合格したのだが、その時期、日能研は優秀な子だけをこっそり選抜して、日曜日の公開模試のあと、無料の特訓をやっていたことがある。親戚の子はその特訓に選ばれたからよかったものの、この「こっそり特訓」の存在が、選抜されなかった子の親にも知れてトラブルになり、さすがに今は公開で選抜する仕組みとなった。

こうした例からもわかるように、塾、予備校は「できる子ほど得をする」という構造になっている。しかし、私がここで強く言いたいことは、その他大勢の「引き立て役」だからといって決して能力がないわけではない、ということである。もちろん、すべてがと言うつもりはない。しかし、単に晩稲(おくて)だったり、塾のシステムが合わなかったり、学習のやり方や塾とのつき合い方を間違えていたり、といった子も多いのである。そうであれば、塾や予備校は少なくとも入会させて月謝を取る以上、こうした子どもたちを適切に指導する責任があるはずである。にもかかわらず、そうした子にはことのほか冷淡で、他塾の優秀児をスカウトすることばかりに熱心な塾、予備校が多いのはどういうわけだろうか。

希望を託せる塾、予備校とは?

このように見てくると、希望を託せる塾、予備校が見えてくる。それは入塾者に対してサービスの濃淡のない塾である。同時に、受験合格という短期的な目標を、受験を超えて子どもを伸ばすという長期的な視野の中で位置づけて考えられる塾である。そのためには、あまりに巨大化したマンモス塾、予備校はだめだろう。こういうところで力を伸ばせる子はもともと能力が高いのだ。その他大勢の「普通の子」の親にとっては、普通の子に適切な指導をしてしっかりと伸ばしてくれる塾がいちばんよいのだ。

近年、大手予備校やエリートぶっている塾よりも、規模は大きくないけれども面倒見のよい塾に人気が出てきている。いくら塾の合格実績がよくても、自分の子が伸びなければ無意味である。親も子もそこに気がついてきたのだろう。

バカ語録
一億総キョーイク評論家

片岡輝の巻
〈詩人，児童文学者，元TBSプロデューサー〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

国民総背番号制の導入と同時に、資産額による偏差値によって生活のあらゆる場面でクラス分けが行われ、一生、その人が属する階級に許された行動しか取ってはならないことになったのだった。こんな悪夢のような世界に、今の子どもたちは生きている。……そもそも教育は、さまざまな個性と能力をもつ子どもたちとのぶつかり合いの中で成り立つものではなかったか。入試は受け入れ側が自らの教育理念に基づき、自らの尺度で合否を判断するのではなかったか。（『毎日新聞』九二年十二月二十五日）

＊

ああ、詩人よ、児童文学者よ、TVプロデューサーよ、さすがにクリエイティヴな肩書きを三つも持っているだけのことはある。SF的想像力はなかなかのものですな。だけど本当に今の子どもたちが悪夢のような世界に生きているか、あなたは現実世界をいっぺんでもきちんと覗いてみましたか。

それにしても文学者を自称していながら、「そもそも教育は、さまざまな個性と能力をもつ……」なんて、お上のほうの筋から何百回聞かされたかわからないような、日本国憲法前文まがいの個性のない文章を書かないでほしい。職業としての日常的な教育業務に携わったことのない人びとの、こういう定型的教育ロマンチシズムのたれ流しには、正直なところほとほと返すことばを考えあぐねてしまうのだが、端的に二つだけ言っておく。

①個性と能力が発揮されるのは、たいして際立った個性も能力もない普通の子どもとの相対的な関係においてであって、それは常に少数者にとっての概念である。普通の子どもを健全な社会人、まともな国民に仕立て上げようとするのが学校教育であって、全員の個性を伸ばすなどというないものねだりを学校教育に期待してはならない。

②公立高入試は、それらの普通の子どもを中心的なターゲットとしているので、できるだけ偏りなく、平均的学力で無理なく解けるような問題で選別することを強いられる。具体的なことを何も考えずに「自らの教育理念」「自らの尺度」などというわがままなことを言うのは簡単だが、何か言うなら、そういう制度的な不可避性についてももっと理解を持つべきである。勝手な尺度によって落とされた人の複雑なルサンチマンをきちんと引き受ける気があるかどうかについても反省してもらいたい。「自らの教育理念」「自らの尺度」で入試をやっている私立中学は、人気集中でかえって競争の激化を生み出しているではないか。

教育裁判を「裁判」する！

裁判所の三つの「賢慮」

中野富士見中事件、校門圧死事件、戸塚ヨットスクール事件、マスコミ報道で国論を二分した感のあるこれらの事件にたいして裁判所はいかに対応したか。気鋭の弁護士が検証する裁判の実態！

山口宏（弁護士）

教育現場ないしはその周辺で起きた死亡事故をめぐる最近の裁判事例のうち、代表的な三つの事例を取り上げて、少なくともマスコミ報道のうえでは国論を二分した感のある各事件について、裁判所が如何（いか）に対応したかを、概観してみたい。

ここで問題にする三つの事例は、①昭和六十一年二月一日、東京都中野区立中野富士見中学の当時二年生であった鹿川裕史が、クラスメイトのみならず「葬式ごっこ」などを通じて教師も加わったとされるいじめを苦にして自殺したと報道された事件（中野富士見中事件）、②平成二年七月六日午前八時三十分、兵庫県立神戸高塚高校において、遅刻防止指導にあたっていた教諭の一人細井敏彦が、勢いよく門扉を閉鎖したため、折悪しく登校のため校門を通過しようとしていた、当時一年生の石田僚子を、鉄製の門扉と門柱との間に挟んで圧死させたと報道された事件（校門圧死事件）、③戸塚宏を校長として開設された戸塚ヨットスクールにおいて、情緒障害児らを治療訓練中、昭和五十五年から昭和五十八年にかけて、戸塚宏らの暴行監禁などによって四人の訓練生が死亡したと報道された事件（戸塚ヨットスクール事件）である。

①中野富士見中事件については、鹿川裕史の両親が、弁護士八名を代理人とし、東京都、中野区それに同級生二人の各両親を相手どって、総額六千万円あまり（このうちには、弁護士費用として請求した五百万円が含まれているから、実質的な賠償請求額は、約五千五百万円である）の損害賠償を求める訴えを提起した。

②校門圧死事件については、神戸地方検察庁が、細井敏彦を「業務上過失致死罪」

で起訴し、禁固一年を求刑した。

③戸塚ヨットスクール事件については、名古屋地方検察庁が、校長であった戸塚宏および九名のコーチを、「傷害致死罪」、「監禁致死罪」、「暴力行為等処罰に関する法律違反」等で起訴し（十三の事件が、まとめて審理されることになった）、主犯格とされる戸塚宏に対しては懲役十年を求刑した。

なお、三事件のそれぞれの裁判の結論については、後に述べる。

裁判類型としてみれば……

裁判レベルにおける①中野富士見中事件は、不法行為に基づく損害賠償請求という民事裁判であるが、交通事故の被害者またはその遺族が加害者を相手に提起する裁判、各種公害裁判などもこれに依るので、読者諸兄にも比較的なじみのある裁判類型であろう。弁護士八名は、これをなんらかの犯罪に構成して、捜査機関に告訴するということをしなかった。したがって、この事件をめぐって刑事裁判が問題になったわけではなく、これは、つまり、誰も犯罪を犯したわけではないという前提で、民事上の請求権の帰趨のみが争われたものである。

②校門圧死事件における「業務上過失致死」とは、交通事故で人を轢死させたときに適用される、これもおなじみの罰条である。細井敏彦は、誰かが挟まれて死んでもかまわないと思っていたと考えられるから故意犯であり、捜査にあたった警察も殺人罪の適用に強い関心を示しているという報道も当時一部にあったが、現在の実務では、狭い田舎道を時速一〇〇キロで自動車を走らせて人を轢いても過失犯で処理する運用であるから、細井被告を殺人犯にするなど、もともとありえない話だった。

③戸塚ヨットスクール事件における「傷害致死」とか「監禁致死」とかは、暴力団関係者によく適用される罰条である。やくざが短刀で人をあやめたりして死亡させた場合、刺した部位がたまたま急所をはずれていれば、そのやくざには殺意があったとは言いにくい。だから、暴行や監禁の事実さえ立証できれば人が死ぬかもしれないことについての認識を不問に付すことのできる犯罪類型、つまり、死亡したことについての過失を立証しなくても死亡については責任を問える方法が刑事司法にとっては必要であり、それがこの「傷害致死」「監禁致死」などなのである。

ところで、①から③を並べた順番には、意味がないわけではないのであって、見ておわかりのとおり、司法界において、「法秩序」に対する侵害の度合が軽いとされている順序に番号を振ったのである。それぞれにおいて採択された裁判方法、適用されることを要求されている罰条を見れば、司法関係者が、この三事例を、とりあえずはどのように扱おうとしたかがわかるだろう。

このように、司法は、事件を類型化し、「結論」を一定範囲に絞りこんでしまう局面に関するかぎりでは、ことごとく単純なものなのである。①自殺は、その原因がなんであれ、基本的には本人が勝手にしたものである以上、犯罪ではなく、損害賠償の問題が残るだけであり、②外形的に見てわざと殺したのではないとしか言えないのなら交通事故と同じで業務上過失致死、③殴ったり蹴ったり閉じこめたりしたあとで人が死んだら、暴力団と一緒という発想である。

この単純な思考様式の前では、いくら①鹿川の両親が、子どもの心奥に投影された現代の病を告発しても、②細井敏彦が学校現場の荒廃の中の教師の孤独を嘆いても、③戸塚宏が、現代人の生存本能の危機を煽(あお)っても、もはや如何(いかん)ともしがたいのである。鹿川の親は、誰のことをも犯罪者にできないし、細井敏彦や戸塚宏が、起訴された以上、無罪になるということも最初から考えられないことだった。このことは、それぞれの事件を担当した弁護士も含めて、司法関係者がみんな疑っていなかったことなのである。



「生き地獄」と自殺した鹿川裕史君と自殺現場のデパートのトイレ

　事件処理を、裁判官や検察官、弁護士に勝手にやらせるわけにはいかないから、判断の枠組みを前もって用意しておき、誰がこれらの事件を扱っても同じ土俵で争うことを余儀なくさせることになる制度を準備しておくことは、たぶんよいことなのだろう。

司法関係者の共通の土壌とはなんなのか?

「同じ土俵」では、次のようなことが司法関係者の「論議」の中心になることが事前に予定されていた（論議をつくした後の裁判所の判断の内容についても、事前にわかっていたと言うべきなのかもしれない。しかし、それを言えば、あらゆる裁判は「儀式」にすぎなくなるだろう）のであり、事実、裁判の経過は、そのようになった。

　①中野富士見中事件の裁判では、担任教論や加害者の両親が、鹿川が自殺をしたことについて「過失」があったかどうかが争われた。

　これは、不法行為に基づく損害賠償という制度が、損害賠償を認容するためには被告に「過失」がなければならないとしているからである。過失とは、この場合、鹿川の担任教論や、いじめをしたクラスメイトの両親が、いじめが継続すれば鹿川が自殺するという結果を予見してそれを回避する（いじめをやめさせる）義務に違反したということであるが、その義務違反を言う前提問題として、担任教論やクラスメイトの両親が、いじめが続けば鹿川が自殺するという結果を予見しうる「可能性」の存在を要求するのが実務であり、裁判において具体的に争点となったのは、この予見可能性であった（予見しうる可能性がなければ、予見すべき義務もありえないというのが、司法関係者の共通の土壌なわけである）。

　②校門圧死事件の裁判においても、細井敏彦被告に、石田僚子が死亡したことについて「業務上の過失」があったかどうかがアポリアであった。そして、ここでも、業務上過失の有無とは、具体的には、門扉閉

鎖行為によって門扉と門柱との間に誰かが挟まれて死亡することを予見しうる可能性の存否およびそれを前提にした予見すべき義務の存否の問題に帰するのであるが、細井被告の弁護人は、門扉を閉鎖すること自体は、遅刻防止指導の一環として適法な職務行為なのであるから、細井被告に業務上の過失があったかどうかは、門扉閉鎖行為を開始した時点で判断されるべきであり


神戸高塚高校の校門と亡くなった石田僚子さん

(それ以前の細井被告の行為には過失を問題にする余地がない)、門扉を閉鎖する際に細井被告にとって門柱付近は死角になっていたのだから、門柱付近に生徒がいることを予見しうる可能性がなかった、また、細井被告の他にも二名の同僚教師が校門付近で遅刻防止指導に携わっていたのだから、他の教師が、門扉閉鎖によって挟まれるおそれのある生徒が校門付近にいることを細井被告に警告してくれるのが筋合であり、細井被告には予見する義務自体がなかったなどと述べた。

こういう言い方を聞いて、法廷で傍聴していた石田僚子の両親は、たぶん激怒したであろう。交通事故の事例で、対向車のライトで人が横断しているのが見えなかった、自動車を運転する行為自体は適法なのであるから、過失の有無は、対向車のライトで照らされる以前は問題にならない、助手席にいた友人が目を凝らして自分に注意してくれるべきだったと聞いて、怒らない被害者の遺族はいないだろう。

しかし、かかる弁解を堂々と弁護人に言わせられることが、刑事被告人の「人権」というものなのである。遺族にとっては幸いなことに、裁判所は業務上過失致死の審理において、通常はこのような主張を通さないが、それにもかかわらず、弁護人は、ひとまずこういうことを言うことになっているのである。

③戸塚ヨットスクール事件においては、そもそも、暴行行為や監禁行為が認定されれば足り、死亡とそれらの行為との間には、因果関係があればよく(しかも、原理的には、風が吹けば桶屋が儲かる式の因果系列でよい)、訓練生の死亡について戸塚宏の過失は必要ない(過失がなくても傷害致死罪や監禁致死罪は成立する)というのが土俵であるので、過失の有無は問題にされない。

そして、この土俵の上での裁判所の判断を言えば、①中野富士見中事件においては、鹿川が自殺することについては予見可能性がない(ただし、いじめが継続すれば、鹿川が「深刻な苦悩」に陥るであろうことについての予見可能性はあり、「深刻な苦悩」を体験させた点については過失がある)というものであり、②校門圧死事件では、校門指導にあたっていた同僚の教師二人との

間に、とくに門扉閉鎖をする際の見張りなどの役割分担について事前の連携はなかったのであるから、過失の有無は門扉閉鎖を開始する以前をも含めて判断されるべきであり、当然、校門付近に生徒がいて、自分の門扉閉鎖行為によって門扉と門柱との間に挟まれるかもしれないことを予見しうる可能性があった。したがって予見義務もあったというもの、③戸塚ヨットスクール事件では、そもそも、死について過失を要求しない事案であるので、裁判所は、因果関係だけを取り上げ、「傷害致死罪」との関係では、訓練生二人の直接の死亡原因は、暴行による外傷性ショックではなく他の要因によるものであるが、それにもかかわらず暴行との間の因果関係はある、「監禁致死罪」との関係では、訓練生二人の死体は発見されていないが、フェリーボートにおいて監禁中海に飛びこんで死んだものと考えられ、この訓練生自らの意思による海へのダイビングによる死と監禁行為との間にも因果関係がある、というものであった。



閉廷後,会見する戸塚被告

裁判所はシニシズムをもった職人の世界である

各人の死亡について、①過失非認定、②過失認定、③過失不問と、それぞれ判断は異なっても、判決書を読んでいて思うのは、いずれの場合においても、裁判所は、ただ淡々と判決しているということである。この局面において、裁判官は、完全に職人であって、丁寧に事実を証拠によって認定する作業と伝統的な法理論を正確に適用することにだけ腐心しているように思える。

裁判官は、ここでは、権力者というよりも、まるで伝統工芸の伝承者のように振る舞っているのである。私は、この淡々さが好きである。大人の男の仕事たるもの、常に淡々としたものでなければならないだろう。それは、exclamation mark や大きな活字が躍った、これらの事件をめぐる各種マスコミの記事に潜む精神とは対極にあるものである。

③戸塚ヨットスクール事件の判決書の冒頭部分において、裁判官は、かつて朝日新聞が、「情緒障害児ヨット訓練で自立心」「戸塚宏さんが立証」「風と戦い、元気がでたよ」「登校拒否にヨット療法」などという大見出しを恥ずかしげもなく掲げて戸塚宏を讃えていたことがあることにさりげなくふれている。大人の男はシニシズムも得意なのである。

法律的論理とは事後的なレトリックなり

次に、裁判の「結論」を見てみよう。ここで結論というのは、①中野富士見中事件については、認容された損害賠償額、②校門圧死事件③戸塚ヨットスクール事件では

量刑のことである。

裁判の「結論」は、証人尋問を含む厳格な証拠調べに基づく「事実」の認定と、それに対する法の適用によって、あたかも論理的にもたらされるものと巷間信じられている節があるが、実際にはそうではない。最近では、法学者自身が、「法律的論理は、数学的論理とは異なり、レトリックである。法律学においては、デカルトよりもヴィーコが正しい」などと語って憚(はばか)らなくなっているので、話はだいぶわかりやすくなってきているが、裁判の「結論」は、最近の法学者によるもっともらしい言葉を借りれば「賢慮」、はやく言って直観の類で決まっているのが現実なのである。そして、じつは、先に述べた共通の土俵の上の「議論」なるものは、この「賢慮」によって直観的に到達した結論を正当化するための事後的なレトリックであることが多いのである。

①中野富士見中事件においては、平成三年三月二十七日、東京地方裁判所は、六千万円の請求のうち四百万円について、各被告に対し支払を命じている（ただし、四百万円のうち百万円は、弁護士費用として認めたものであり、また冒頭に述べたように請求額六千万円のうち弁護士費用として請求したものを除いた金額は五千五百万円であるから、請求額五千五百万円に対し認容額三百万円というのが正しい見方であろう。しかも、裁判所は、通常ほとんどの事案で認められる仮執行宣言（控訴中でも強制執行できる旨の決定）を付さなかった）。

鹿川の自殺を予見することはできなかったから、鹿川の死亡については過失がないが、しかし、いじめられて「深刻な苦悩」に陥ったことについては過失があったという判断を前提にして、「深刻な苦悩」をもたらした代価としての金額が三百万円と評価されたことになる。そして、なぜそれが三百万円なのかについては、この判決は「事実経過の一切に照らして、裕史の精神的苦痛に対する慰謝料の額としては、三百万円をもって相当とする」と語るだけである。

この判決は全体で約四万字（言うまでもなく、四百字詰め原稿用紙で百枚である。ちなみに、余談になるが、最近の芥川賞受賞の小説がだいたいこの程度であり、少なくとも東京の民事裁判官は、年に二十本程度は、このような中編小説的な判決を書くことを余儀なくされているのである）にのぼるものであるが、結論部分はわずかにこの四十八字でできている。

この判決におけるもっとも重要な部分がこの二行であるとすれば、あとの約四万字は、その冗長さそれ自体が、この四十八字をもっともらしくするためのレトリックだったということも可能なのである。裁判官の「賢慮」は、まず、いかなるいじめがあろうと、一般的に言って自殺の原因が不可知の領域に属するものである以上、鹿川の死亡についてまでの責任を被告たちに負わせることは妥当でないという常識を捕捉した。

問題は、「深刻な苦悩」についての慰謝料三百万円であるが、それは、離婚裁判における慰謝料（婚姻中に作られた実質的な共有財産を清算する趣旨の財産分与のことではない。不貞等によって被(こうむ)った精神的な損害についての損害賠償である）の上限が実務上は三百万円程度であるのと比較すれば、ひとつの相場に依ったものとも言いうる。じつは、裁判所の「賢慮」の実体が、この

手の相場感であった可能性は大きいのである。この際に採用された思考様式は、我々が親戚の子どもにやるお年玉の金額を決める際に用いるものと同一のものであろう。

②校門圧死事件については、神戸地方裁判所は、平成五年二月十日、細井敏彦を禁固一年執行猶予三年に処した。交通事故の業務上過失致死の事案を基準にして考えれば、禁固一年執行猶予三年という宣告は、情状の比較的よい事例の量刑として通常ありうる範囲内にあるものであろう。酔っ払い運転のうえ、制限速度違反で前途有為な青年を轢いて死亡させても、せいぜい実刑（執行猶予がつかないで刑務所に収監される場合）で二〜三年というのが、今の裁判官の一般的な量刑感覚であり、たとえ、石田僚子の遺族が厳罰を求めていること、および細井被告が慰謝に関し特別の措置をしたことが証拠上認められないこと（つまり自腹を切って金を遺族に払ったことがないこと）などの不利な事情を勘案しても、細井被告に執行猶予がついたからといって、とくに軽い量刑ということにはならないであろう。

裁判にも相場がある—

有罪判決は、たとえ、執行猶予つきのものであっても、マスコミによる大げさな報道を通じて、被告人に絶大な社会的制裁を与えているのが現実である。細井被告は懲戒免職となっており（したがって退職金は支給されず）、従前のキャリアを生かした再就職にも困難がある以上、今後の生活は経済的に非常に苦しいものになろう。じつは、司法による直接の制裁などたかが知れており、それが結果的にもたらす社会的制裁のほうがはるかに重いものなのである。交通事犯の刑務所を見学すればわかるが、仮に実刑になっても、その刑務所生活たるや想像を絶して快適であり（冷暖房完備で、テレビも見られる）、収監者にとっては、出所後の人生にこそ、むしろ苦難が存在する。

一方、石田僚子の両親は、神戸市から、六千万円の損害賠償を裁判を経ずに受領している。この金額は、①中野富士見中事件で鹿川の両親が中野区等に請求した金額とほぼ同額であり、中高校生がこうした事故で死亡した場合に、その中高校生にまったく過失がなければ、被害者側が受領する金額として、相場のものである。仮に、①中野富士見中事件において、裁判所が鹿川が自殺したことについてまで、担任教諭やクラスメイトの過失を認め、自殺したことについての鹿川側の責任を一切不問に付したとしたら、鹿川側の弁護士の請求金額は、そのまま認容されたであろう。命の値段は、年間一万数千件発生する交通事故による死亡事故の大量処理（戦後における交通事故の犠牲者は、すでに、広島長崎の原爆で死亡した人間の数を超えている）を通じて定額化されており、中学生や高校生が事故で死亡した場合の賠償額は、交通事故による場合にかぎらず、彼らが十八歳から六十七歳まで稼げることを前提にして機械的に計算することが可能なのである。

石田僚子の父親にとって、これが、まぶしく成長していたであろう娘を失った代償になりうるものであるとは思われない。しかし、②校門圧死事件について、執行猶予を付した裁判官の「賢慮」に、今後の細井被告の「貧しい不幸」と、石田僚子の父親

の「豊かな不幸」との対比が影を落としていなかったとは言えないであろう。

③戸塚ヨットスクール事件については、平成四年七月二十七日、名古屋地方裁判所は、戸塚宏を懲役三年執行猶予三年に処した（なお、この判決は、四百五十枚の長編である）。冒頭に記したように、検察の求刑は十年の実刑であったのであり、これに対する裁判所の、三年しかも執行猶予つきという量刑は、これだけをとってみればきわめて異例のものである。懲役十年の求刑がおかしいのかと言えば、四人が死亡した傷害致死・監禁致死の主犯格の事案としてとらえた場合には、むしろ通常の求刑であろう。

この意味では、検察庁は相場の世界でこれを扱ったと言える。しかし、裁判所の「賢慮」にとって、戸塚ヨットスクールは、相場が支配する領域を超えたものであった。戸塚宏が本当に言いたいことは、「戦後民主主義」それ自体が、情緒障害症状をもたらすマインドコントロールであったということであり、情緒障害児と烙印を捺された子どものみならず、戦後日本全体が、集団的情緒障害なのだということである。だから、③戸塚ヨットスクール事件とは、じつは、きわめて政治的な背景をもった事件であった。

戸塚ヨットスクール事件は相場の世界を超えた政治的事件だ

その意味では、①中野富士見中事件も、②校門圧死事件も、決して「戦後民主主義」をはみ出したわけではなく、むしろ「戦後民主主義」教育の現場に生起した不幸なエピソードにすぎないものであろう。

話が前後するが、③戸塚ヨットスクール事件では、「正当業務行為」なる主張がなされた。傷害致死あるいは監禁致死の外形にあたる行為の存在自体を前提にして、それでも、この行為は「情緒障害の治療」という業務そのものなのであるから（ある行為が正当防衛であるというのと同様に）、実質的な違法性を欠き、犯罪は成立しないという主張である。これが認められれば、業務上過失致死の適用の可能性が検討され、過失の有無がやはり問題になったであろう。

しかし、殴ったり蹴ったりすることが教育ないしは訓練という正当な業務であるというレトリックを裁判所は認めるわけにはいかなかった。それは、土俵を割る議論だったかもしれなかったからである。だから、裁判官の「賢慮」のすべては、ここでは、「量刑の理由」と題された一章に捧げられた。

「家庭内暴力等の問題を抱えた子を有する父母らからの依頼を受けて、何もせず傍観するという立場をとらず、敢えてその治療、教育の問題に関わっていったその心情については、利益の追求とするだけでは説明ができないものがあり、また、被告人らの知識、能力にとって分を越えたふるまいとして批判することは容易ではあるが、家庭内暴力、非行、登校拒否等の問題を抱えた子を持ち、悩んでいる親、さらには自らの行動、状態に同様に悩んでいる児童等が現に存在しているという事態において、このように片づけてしまうだけでは、被告人らの行為に対する正当な評価とはいえない」

これは、戸塚宏の弁護人の弁論要旨ではなく、判決書中の一段落である。ここに燦然とする「賢慮」は、しかし政治的なものであることを免れない。

バカ語録

一億総キョーイク評論家



門野晴子の巻

〈思春期カウンセラー，フリーライター〉



Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

親と子であっても教師と生徒であっても、教育っていうのは、コミュニケーションでしょ。……だから、お互いがコミュニケーションを取り合いながら、両方で育っていく。それが本当の教育だと思うのね。（『別冊宝島95号 ザ・中学教師「親を粉砕するやりかた」編』）

「オレはプロだ、といえる教師ならば、子どもの閉ざした心を開く技術こそ見せてほしいと願う」（『うちの子に手を出さないで』学陽書房）

＊

ウンウン、ワカルワカル！ などと思わず喝采を送ったオカーサンはいないだろうか。でも一方で彼女は「教師はただ一生懸命生徒に勉強を教えていればいいんだ」（『愛するもののために』学陽書房）とも言っているんだよね。心から喝采を送ってあげるためには、どっちかにしてくれないと困るんだよな。

ただ一生懸命勉強だけ教えていて、お互いがコミュニケーションを取り合いながら両方で育っていく「本当の教育」や「子どもの閉ざした心を開く技術」を見せる教育がどうしてできるんだろうか。

やっぱり教師に神様になれと要求しているわけで、それもいいけど、それだけ勝手な言い分をぶつけるなら、その神様になる方法ぐらいは責任を持って示してくれなくちゃね。

第一、親子関係と教師・生徒の関係はまったく違う。一方は血のつながったかけがえのない一対一の生活共有者、他方は限られた期間だけ偶然つきあうはめになった社会的な関係。しかもひとりで四十人相手では、「本当の教育」も単純に考えて親子の場合の四十分の一ぐらいになることは避けられない。そこには同じコミュニケーションでもぜんぜん質の違った秩序やスタイルが取られて当然なのだ。

だいたい門野のオバサンの発言ては、物事のバランスとか、社会的な関係の中で考慮しなくちゃならない一定の分別といったことがまるでわからなくて、自分の子どもがただ可愛いだけの、もっともワガママな部類に属する親の感情を代表しているんだな。もちろんこれがすべての親の意識だなんてことはないが、少なくともこういう声が親の気持ちのひとつの表現として出てくると、先生のほうは、そんなのにまともに対処できないからいきおい口を閉ざすようになる。それこそ「お互いがコミュニケーションを取り合う」ことがますます不可能になってしまうだけだと思うのだけれど。まあ、あんまり話にならないから、ただのノイズだと思って無視していればすむのかもしれないがね。

学校論の水準はどこにあるのか？

かつて「教育」を語ることは天下国家を語ることであった。
ここ数年の間に登場した一群の「学校」論は、戦後の「教育」と「学校」を縛っていた神話を解き放ち、
われわれにパラダイム転換を迫る！

大月隆寛（民俗学者）

編集部のOさんから送られてドカッと眼の前に積み上げられた、いずれも「教育」や「学校」にまつわる本は、ここ十年の間に出された都合十冊。具体的には以下のようなものだった。とりえず初版刊行年代順に並べてみる。

林　竹二『教育亡国』（筑摩書房　一九八三年）
小浜逸郎『学校の現象学のために』（大和書房　一九八五年）
諏訪哲二『反動的！――学校、この民主主義パラダイス――』（JICC出版局〈現・宝島社、以下同〉　一九九〇年）
河原　巧『学校はなぜ変わらないか』（JICC出版局　一九九一年）
佐藤通雅『学校はどうなるのか』（學藝書林　一九九一年）
佐々木賢『怠学の研究　新資格社会と若者たち』（三一書房　一九九一年）
夏木　智『誰が学校を殺したか』（JICC出版局　一九九二年）
西尾幹二『教育と自由――中教審報告から大学改革へ』（新潮選書　一九九二年）
由紀草一『学校はいかに語られたか』（JICC出版局　一九九二年）
河原　巧『学校についての常識とウソ』（宝島社　一九九三年）

このなかには、これまで個人的に読んだことのある本も含まれてはいた。けれども、このようにある脈絡を設定したうえで集中的に読んでゆくというのはまた別の作業だ。それになにより「教育」とか「学校」とか

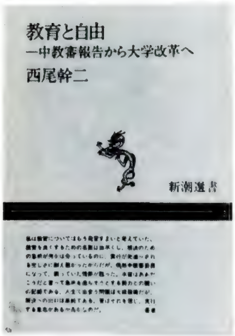
って方面についての概観を僕は持っていませんよ、と言うと、いや、その素人の立場から読んでみてほしいんですよ、とOさんはのたまった。えい、ならば仕方ない、書評の仕事はこれまでもなるべく引き受けるようにしてきているし、これもまた勉強だろう、と肚をくくり、腕まくりして読みはじめた次第。

　というわけで、あらためてお断わりしておくが、と言って、お断わりしたからとて世間並みの謙虚になどなるつもりもないのだが、しかしひとまず事実として、僕は「教育」や「学校」にまつわる領域についてはズブの素人である。このズブの素人ということの中身は、「教育」や「学校」にまつわる領域でこれまでどのような議論が繰り広げられてき、そしてそれらについてどのような毀誉褒貶があり得てきたかについて、専門的な知識を持っているわけではない、ということである。そういう人間がこれらの本をどう読んだか、という前提でしばらくおつきあい願いたい。

◎「戦後」言語空間の「教育」と「学校」のパラダイム転換をはかる

ひとまず、個別にざっと眺めてみる。「教育」と「学校」についての問題が、今どういう状況にあるのか、総論的な概観を得るのにいい本から見てゆこう。一番手は、**西尾幹二『教育と自由――中教審報告から大学改革へ』**である。

　西尾氏とはいちどだけ、『朝まで生テレビ』でご一緒したことがある。早くから控室でメモに目を通す姿や憂いを含んだもの静かな人当たりなどはいかにも誠実なインテリといった風情で、なるほど中教審でもあのように誠実につきあったのだろうな、と思わせるに充分だった。ただ、そのたたずまいは素直に尊敬に値するのに、しかしいざ議論の場になり、あのヤカン頭を振りたてて激昂したときのテンションの高さがその他の俗流保守反動学者並みで、原理原則としてはかなりまっとうなことを言っているのに、そのことでこの御人、かなり世間的には損してるんじゃないかな、という印象だった。



　ただし、その印象は本領の活字の場合、かなり割り引かれる。びっしり書きこまれた濃密な文体だが、読み手が腰据えてつきあえば存分に役に立つ。

　内容は四章にわかれている。第一章「中教審委員『懺悔録』」、第二章「自由の修正と自由の回復」、第三章「すべての鍵を握る大学改革」、そして終章「競争はすでに最初に終了している」の四つである。中教審委員としての経験をつぶさに記述してゆく第一章などは、この国の官僚的世界観の中である主体性を持って発言しようとすると、どのようななめされ方をされてゆくか、という、いわば言語人類学的な報告としてもかなり興味深い。

　言うまでもなく、著者にとってそのようななめされ方はもっとも葛藤を生じさせる

ものである。そしてその葛藤のよって来たるところを、著者は良質の観察者の態度と文体とで内省しながらつぶさにほどこうとしている。

「いったいなぜ人は学校間の『格差』と『序列』の問題になると、半ば諦めたかのごとくに言及を避けるか、当たり障りのない教訓を語って終わりにするか、いずれでしかないのであろうか」

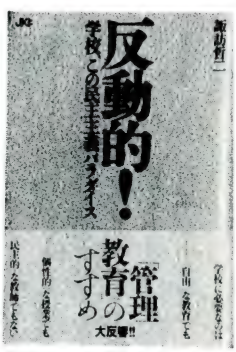
大学改革が必須の作業である、それなくして偏差値的世界観に規定された「教育」問題の改革はあり得ない、という態度は原理原則として正当であると思う。そしてその問題は、そのようなこの国の「戦後」が作り上げてきたある価値観、「序列」意識といった部分に関わってくる、という洞察も深くうなずける。もちろん、個別に異論はあっていい。だが、総論として「教育」と「学校」をめぐる問題が「戦後」の言語空間の内側にあり続けてきたこと、そしてその言語空間が現実と遊離したところである自律性を持って回転しており、その空中楼閣のさまがよりいっそう「教育」と「学校」をめぐる問題を厄介なものにしていることを、中教審という具体的な局面を通じて描いた説得力は素朴に味わうべきだろう。



もうひとつ、西尾のものと発行年はずれるが、早い時期からそのような「戦後」の言語空間の中の「教育」と「学校」をめぐるもの言いのありようそのものに光を当てようとした本が、**小浜逸郎「学校の現象学のために」**である。

第一部「教育論批判」でいわゆる教育問題の評論家たちの言説を個々にとりあげ、小気味よく蹴倒して回っていることで一部で評判になったが、しかしこの本の本領は第二部「学校の現象論」のほうにある。「教育」から「学校」へ問題の焦点を移していったとき、必然的に、ではその「学校」の現在はいったいどんな具合になってるのか、という問いが発されてくる。その場合、それまでの「教育」論のような制度としての「学校」という部分に無媒介に重きを置いた立場からではなく、教師と生徒の日常的関係性とそこに立ち上がる相互性という視点から「学校」の輪郭を描こうとしたものとして、時期的にかなり早いものだ。いわゆるいじめや落ちこぼれといった八〇年代に顕在化した問題や、付論ながら子どもとセクシュアリティの問題などにも萌芽的に触れていて、現場の当事者はもちろん、それ以外の一般の人びとが「教育」と「学校」について考えようとするときの基礎文献として好適だろう。

もう一冊、**諏訪哲二「反動的!――学校、この民主主義パラダイス――」**は、おそらく「教育」と「学校」についての問題を語るもの言いのパラダイムを転換させるにあ



たって大きな影響を与えた本と言っていい。先の小浜らの先行的な仕事があり、時代としても八九年あたりを境に、それまで当たり前に呼吸してきた「戦後」の言語空間を相対化せざるを得ないような事態にたち至りはじめたこととあいまって、この九〇年という時期にこのような本が出されたことは、象徴的だったかもしれない。

「教育は、ひととひととの争いの一種である。生徒たちが教師の歩いたあとをついてくるなどという、牧歌的な教育認識自体が犯罪的なのだ。このことをすべての教師が深く深く理解しなければならない。こういう教育認識が教師を無限に救い、生徒を地獄に突き落とすのである。学校では一年のときから生徒に『生活の型』を押しつけて、彼らの荒ぶる魂を安定させてやる必要があるのである。だが近代主義者は、自己の人格性を過信するあまり、その大切さが理解できないのだ」

時にもの言いがややファナティックに流れるきらいはある。タイトルの「反動的！」というのも、刊行当初はその「反動」というもの言いが「戦後」の言語空間で無条件にネガティヴなものとされてきた経緯を前提にした、あえてムチャをやる高揚感のようなものに支えられていたはずだ。にしてもそれは、「私が教師になっていちばん嫌だったのは、教師が生徒に対して威張っていることだった。ひととひととは『平等』だと教えられ、そう思い込んでいたのに、実際にはちがっていたのである」と吐露する著者のある種のナイーヴさのまさに反動であることも理解できる。教育大学で学び、長年現場で高校教師をやってきた著者のそのナイーヴさ自体、いわゆる「戦後」の教師のナイーヴさであるかもしれないことを考えれば、この著者は決して「特殊な人」ではないし「ヘンな教師」でもない。むしろ逆だ。とすれば、そのような「反動」という呪縛解除装置を設定することで解放され、教師としての自己回復へと踏み出せたはずの著者の経験は、かなりの部分、ある世代の現場の教師たちに共通する普遍性を持つものだったはずだ。そして事実、事態はそうなっていったようだ。



「戦後」を疑う内省的な職業人の態度

以後、「現場の教師」という立場を前提にしながらの「教育」と「学校」をめぐる問題についての発言は、ある意味でこの諏訪氏の提示した仕掛けに連なるものになってゆく。

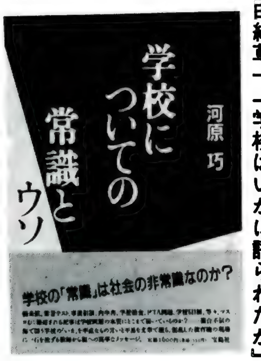
河原巧『学校はなぜ変わらないか』は、「現職の中学校教師の立場から、（中略）『世間』と学校・教師との間にあるギャップを、少しでも埋めたいと思い書いたもの」だという。奥付によれば著者は五十代後半の中学校教師である。

進路指導についての詳細な実際の記述が興味深い。そこから発して、偏差値、通知表、内申書、指導要録などを素材として、それらが社会の中でどのように語られていったのかといった角度から、新聞記事など

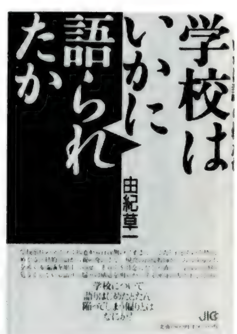
を使って紹介してゆく。
「我が国においては、戦後、生徒にその行為の責任を求める慣習がすっかりなくなってしまいました。戦後の教育はアメリカのそれを手本として、再出発したのですが、この点では本家とはずいぶん異なるようになってしまったと思います」

この著者は、いかに新聞やテレビで「学校」や「教育」が語られてもそのとおりにならないのは、べつに教師が結託してそうならないようにしているわけではない、親やその背後にある世間といったもの言わぬサイレント・マジョリティの「意思」が良くも悪くも教師たちを規定していると言う。これは、現場で具体的なものとして立ち上がるもの言わぬ「意思」、目に見えない共通理解といったもののコントロールによるのだ、ということだ。ともすれば責任逃れのようにも聞こえるが、しかし大文字のもの言いとしての「学校」や「教育」の水準とは別の、語られぬ常識とでも言うべき水準の「学校」も「教育」もある、という現場のリアリズムを汲み取ろうとするかぎりにおいて、この苦渋に満ちた教師という仕事のありようはきちんと伝わるはずだ。

同じ著者による**「学校についての常識とウソ」**のほうは、著者の立場をよりコンパクトにまとめたものになっていて、一般向けの手引書としてはこちらのほうがいいかもしれない。ただし、そのためかやや図式的に過ぎる部分がないでもない。



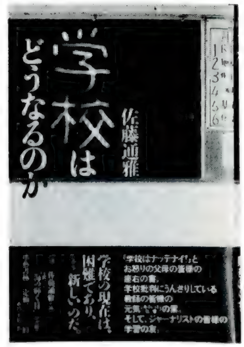
由紀草一「学校はいかに語られたか」も、そのようなあるもの言いのモードとしての「教育」と「学校」についてほどいてゆこうとする。それを彼は「教育言語」という表現をしている。著者は三十代後半の公立高校教師。学生時代から西尾幹二を尊敬してきたという。その著者の、西尾が軸になって執筆したと言われる中教審報告をめぐって展開する「公的な教育言語」の章などはかなりよくまとまっている。



夏木智「誰が学校を殺したか」の著者も、三十代後半の公立高校教師。三章立ての第三部「エゴイズムのディレンマ」は、制度と個人との関係が半ば必然的にもたらす矛盾を「選別」を媒介に整理しようとする試みで、なかなか興味深い。

佐藤通雅「学校はどうなるのか」は、タイトルから受ける印象とはやや違う雰囲気を持っている。書きおろしでなく、自分で発行している個人誌や生徒の父兄にあてた





通信に書いた文章をまとめたものという事情もあるのかもしれない。著者は今年五十歳になる公立高校教師だが、児童文学関係を中心にこれまでにも著作のある人らしい。問題を問題として外側にえぐり出してゆくような文体ではなく、むしろ日々の備忘録風に自分に向かって書いているような文体である。とは言え、教師としての基本的な姿勢としては、先にあげた著者たちの系列上に位置するものととらえていい。ただ、先の数冊に比べて淡々とした印象を受けることで、これまでの教師本特有の背中の丸まり方を思い起こさせるところがあり、それがある種の匂いとなって不必要に疎んじられる可能性はないでもない。

　これらは、「教育」と「学校」をめぐるもの言いを縛っていた神話についての解体を志しているという点において、おおむね共通している。それは、ひとくくりに言ってしまえば「戦後」を疑うという態度であり、別な角度から言えば、「戦後」を規定してきた気分としての「民主主義」の現れについての違和感に忠実になってみる、ということでもある。そして、あえて図式化すれば、そのような態度がようやくある幅をもって可能になってきたのがいわゆる団塊の世代であり、著者たち個々の実際の年齢はともかくとして、彼らの共有したある世代経験と気分とがそのための重要なドライバーになっているように思われる。

　ただし、ここ数年続けて出されるようになったこれら現場の教師という前提からの一連の発言は、そこに彼ら自身の職業人としての自己回復への欲望が仕込まれていることはまちがいないし、それが圧倒的に正当であることも認めるが、と同時に、世間の読み手がどうしようもなく抱いてしまう「じゃあどうすればいいんだ」というこれまた圧倒的に素朴な疑問に対して、ほとんど具体策を提示できないという弱点も持っている。もちろん、そのような「じゃあどうすればいいんだ」という実効性至上主義の世間の存在そのものが、河原の言うようなサイレント・マジョリティの不気味さとも重なるものであることは言うまでもない。しかしそれでもなお、これらの最近の教師たちのもの言いが程度の違いやスタイルの微妙な違いはあれ、共通項として内省的であり、その内省的であることがある種両刃の剣となって「実践」へと連なる契機を素人の眼から見えにくくしている面があることも事実だろう。もの言いのパラダイムの輪郭を描き出してメタの議論を展開するために、思索としてある一定の水準が要求されるということと、人を巻きこみ、なんらかの実践（＝世間の人が一般的に思いこんでいるようないわゆる「実践」のイメージに即した具体的な動きや運動性を伴った実践）を展開してゆくためのノリというのは、ともすれば相容れない側面があったりするらしい。もちろん、これが同時に両立する必要はないのだが、にしても、ここから先を考えた場合、これは避けて通れない課題になる。

「する」文体でなく「見る」文体なのだ、

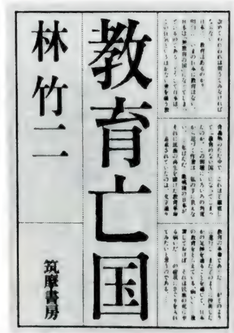
という言い方がある。これらの本を僕の手もとに送ってくれたときのOさんも、確かそのように説明してくれていた。なるほど、そうだ。

　その意味で、これらのもの言いを擁する人たちが実際に教師という仕事の現場でどのように身を処し、またどのようにまわりの同僚や生徒たちやPTAの親たちや、その他もろもろの現場の視線にさらされているのか、そこらへんの事情というのが僕にはとても興味がある。もちろん、中学と高校とでは同じ「学校」でもまったく違う事情があるだろうし、その学校による事情というのも常に個別具体的だろう。なにより、主体のあり方というのも千差万別であることは言うまでもない。しかし、これら「学校」についてのパラダイム転換を志す人たちの文体というのが、たとえばこれまでの「進歩的」で「民主的」とされてきた、「戦後」の神話の内側に眠りこんだ人たちの文体に比べて、よく言えば自省的、悪く言えば運動神経の鈍さといったものを色濃く宿しているのは偶然ではないだろう。パラダイムに同調してゆく立場とそれに対してメタの次元から疑義を投げかける立場とは、同じ地平に立つ局面だけでなく、むしろ本質的な主体のタチの違い、わかりやすく言えば趣味の違いといったものも含んだ差異を織りこまざるを得ないようなものなのではないだろうか。

「戦後」言語空間の呪縛

　これらに比べて林竹二「教育亡国」は、むしろ「戦後」の言語空間の範疇で「教育」と「学校」をひとまず誠実に語ろうとしたものと言える。

　著者は宮城教育大学の学長を二期務めた人らしいが、全共闘の時期に学生たちと対話した経験から発して「教育」を語ろうという純朴さが、しかし今となっては「教育」に携わる人間が当時どのような最大公約数の意識を持っていたものかについての証言となっていて、個人的には面白かった。小浜氏などは先の著書の中で林氏を「おめでた教」と一刀両断している。そのいら立ちには僕も基本的に同調できるが、しかしここはあえてもう少し視線を引いたところで言えば、そのようなおめでたさとしか言いようのない資質がつい最近まで「教育」の現場に必要とされ、事実それがある程度機能もしていたという歴史的経緯について、それらの延長線上とは違った位相に現場の文脈がずれはじめてきている現在の位置からあらためて考えてみようとするときに、ひとつの叩き台になり得るテキストかもしれない。教師の自己回復作業には、このような社会的な想像力の磁場の中に歴史的に宿らされ、また自身その宿らされたものに規定もされてきた教師、という角度からの自己省察も今後必要だと思う。



　佐々木賢「怠学の研究――新資格社会と若者たち――」も、その足をつけている言語空間としては諏訪氏や小浜氏以降の共有する場よりも、むしろ林氏のほうに近い印



象を持った。著者は今年六十歳になる定時制高校の教師。教師との人間関係のトラブルから自殺した（と著者は説明している）ひとりの少女の事例から説き起こし、そのような関係をはらんだ学校という場に対する嫌悪感（著者は「怠学」と言う）の背景を解きほぐそうとした本である。

冒頭の事例に対する姿勢からして、僕には違和感があった。自殺という結果はともかくとして、ことのきっかけは著者の説明に従うかぎり、単に思春期のガキの難儀がちょっとこじれた程度のこととしか思えないのだ。ただ、その「死」を無限に重いものと見、その背後にある彼ら彼女らの内面を理解しなければならない、と一直線に向かうその論理の手さばきに、正直、ここでも「戦後」の言語空間の呪縛を見てしまわざるを得ない。

しかし、中盤になって第三章「労働と教育」、第四章「新資格社会の俯瞰図」あたりの分析は見事なものだ。定時制高校という仕事の場に即した経験がここでは生かされている。現代社会における労働論であり仕事論であるという水準を獲得している。ではそのような水準を獲得しながら、なぜ「教育」を語ると「戦後」の呪縛に沈みこむのかという問いは残るにせよ、ひとまずこの点は高く評価していい。

「見る文体」のアポリアをどう超えるか

十冊を読んでみて、素人としてあらためて抱いたのは、かつて「教育」を語ることは天下国家を語ることであったんだなぁ、という感想である。

民族の未来と国家の存亡を賭けた壮大な大文字のビジョンがあって、初めて「教育」は発熱することもできた。戦後急激にふくらんだ「子ども」の幻想がそこにターボをかける。社会教育を語ることは、「社会」についての責任を自覚する主体の存在が前提になる。我田引水すれば、一九二〇年代から三〇年代にかけての柳田國男が執拗に説いたのも、そのような「教育」のモティーフだった。

他人の生に夢を託す、なんらかの規定をあえてする、「教師」の業とも言うべきこのような意識のあり方は、しかしその後の戦後の過程で、とりわけ団塊の世代以降の現実にとっては、単なる抑圧の主体としてしか意識されなくなっていった。おおざっぱなもの言いをすれば、急激にしかも過剰に進行する大衆社会の現実の中、それだけ価値の相対化がおこり、世俗化されていったのだと思う。

そこで、「教育」をいきなり語るのではなく、その「教育」が現実に生きて作動している場において考察するという態度が出てきて、そうなると必然的に「学校」が問題になってくる。この場合の「学校」とは、制度としての「学校」ではなく、具体的な人間が関係を結ぶ場としての「学校」という意味になる。制度としての「学校」を制度として問題にするならば、言葉の水準は大文字の「教育」となだらかに連なってゆ

くようなものでかまわないだろう。だが、それではもうどうしようもないというところから発するものであるかぎり、その場合の「学校」を語る言葉は、それまで神話に覆い隠されてきた現場のリアリティを回復しようとする運動への傾きが濃厚になる。

だが一方で、神話に依拠した側のほうがひとまず元気がいいように見えてしまう、という難儀な問題が残ったりもする。たとえば保坂展人のもの言いのほうがいまだ世間には耳ざわりがいい、という現実だってあるのだ。そんなもん元気だけじゃどうしようもないということは今や圧倒的に真実なのだし、そんな元気じゃもはやなんの解決にもならないというのもまた事実だ。まただからこそこのようなパラダイム転換への試みも出てくるわけだが、しかし人が自分が当事者ではないような問題について腰を上げようとするときは、何かそのような勘違い的な元気が媒介されないとうまくゆかないという側面も、情けないことにある。

そのあたりを考えれば、まさにサイレント・マジョリティとしての世間のありように思い至るわけだし、そうなればまた具体的な「親」という立場において共有されている幻想にも焦点を合わせていくことになる。いずれにせよ難儀は継続するのだが、「見る」文体の泣き所をこの先どうにかしようと思えば、たとえばそこらをほぐしてゆくやり方は、ひとつあるだろうと僕は思う。

教師の自己回復運動というかたちをとりながら、「学校」という具体的な場を媒介にした「教育」を語る作法の形成ということが少しずつ行なわれはじめている。それは必要なことだと思うし、どれだけささやかなものであってもそれを僕は支持する。しかし、と同時に、同じく「学校」という場に関わる立場として、親の立場からの自己回復がいまだ遅々として進んでいないという印象は否めない。その意味で、ここで発言してきたような現場の教師たちが具体的な現場でどのように父母と対面し、どのような言葉をかわしているのかということが僕はとても気になる。それは現場でものすごい葛藤をはらんでいるはずなのだ。具体的な父母を相手にした場合の事例をもっと出してもらえれば、葛藤や軋轢はあるにせよ、「見る」文体の矜持をもう少し先のほうにまで保ちながら、読み手の側にとってはもっと具体的実践につなげてゆけるはずだ。困った生徒と困った保護者についての記述をどれだけしてゆけるか。そこまで踏みこめるか。「見る」文体の批判力を保証してゆこうとするかぎり、そのアポリアを避けて通ることはできないだろう。そして、そこを引き受けて初めて、「教育」問題が言葉本来の意味での一般的な問題となってゆくことができるのだろう、と素人のあつかましさで強く思う。

教師が親を語る本。まさにサイレント・マジョリティの凄味（すごみ）をもって存在していると教師自身が告白する、その凄味を含めた親という存在の現実を淡々と記述する本。それが「学校」という場で描かれねばならないのだろう。個々の教師の多くが、また親でもあるという意味も含めて、西尾が言うような総論としての構造批判に「見る」文体とその文体の保証する自省の効果、今の時点で必要な鋭敏な批判力を確保しながら、なお少しでも実践に寄与する具体的な策があるとすれば、たとえばその作業はひとつの方策ではあるはずだ。

PART 3

「すばらしい教育」というウソ！

伝説の教師・無着成恭と斎藤喜博の実践

「昔はよかった」というとき、人は無意識のうちに「今はダメだ」ということを語っている。無着成恭と斎藤喜博――このスター中のスターの軌跡をたどることで、かつて学校に何が期待され、それがどう変化したかを検証してみよう！



由紀草一（公立高校教諭）



「昔の教師はえらかった」と言うとき、人はどんな教師をイメージしているのだろうか。なんということはなく、「今の教師はダメだ」と言いたいための単なるマクラとして、こう言われる場合も実際少なくないわけだが、そんな場合はこの際相手にしない。昔も今も、偉いと言われる教師はいる。戦後の日本教育史を瞥見しただけでも、ずいぶん多くのスター教師がいたものだなと感心する。そしてそれは、まだ現職で活躍中の教師より、辞めたか物故して、もう過去の人になったとみなすべき人びとのなかに多いようである。

これは必ずしも、過去は美化されるという周知の事実からきているのではないようだ。スターというのは、どの分野でも、結果として時代の要請に応えた人びとである。かつてある教師がスターとなりえたのは、彼らのいわゆる「教育実践」が、同時代のある部分の期待に添っていたからだろう。それが現在いなくなったのは、個人的な資質の問題より先に、人びとが学校や教師に望んでいるものの変化を考えるべきだろう。

この小文では、以上の目的から、無着成恭と斎藤喜博の二人を取り上げる。彼らこそ、教育界の枠を超えて名声を博した、スター中のスターである。その軌跡をたどることで、かつて学校に何が期待され、それがどう変化したのかをうかがうことができる。

無着成恭の栄光のスタート

昭和二十六年、山形県山元村の中学生たちの詩文集『山びこ学校』は、青銅社から上梓されるや、日本中の注目をあびた。佐

野眞一『遠い「山びこ」』（文藝春秋）によると、本書は二年間で十二万部を売りつくす、当時としては大ベストセラーとなり、書評その他でこれを取り上げた新聞・雑誌は二十六年だけでも軽く百を越えるという。

人びとは『山びこ学校』の何にそれほど注目したのか。文部大臣賞を受けて、当初からこの詩文集中の代表作として知られていた江口江一の作文「母の死とその後」から考えていこう。

江一は五歳のとき父を亡くし、家は貧乏な山元村の中でも一番ぐらいの貧乏だった。やがて中二のとき母も死に、彼は自活しなければならなくなった。幼い弟と妹は親戚にもらわれていったが、祖母と二人の生活の目処はなんとかつけなければならない。彼の担任教師――この当時は全科目を教えていた――の無着は、常々「数字を頭に入れて考えなくてはだめだ」と言っていた。そこで江一は、家計の収入と支出を緻密に計算してみる。その結果、葉煙草による収入では、運がよくてもかつかつ食うのがやっとという状況であることがわかった。貧乏の最大の理由は、江一の家には田がなく、米を買わなくてはならないからだ。彼は将来田を持つことを願うが、そうなると田を手ばなした人がこんどは困るのではないだろうか。驚くべきことにこの少年は、母の死の直後にそこまで考えている。

勉強は大切だと思うから、中学にはぜひ行きたいと思うが、無着に言われて仕事の計画表を作ってみると、二学期はほとんど学校へ行けないことがわかった。これを見た無着が、級長の佐藤藤三郎に「なんとかならんのか」と問うと、藤三郎は「できる。おらだの組はできる」と力強く答える。その週の土曜日、級友たちが江一の家に集まり、彼一人では何日もかかる仕事を、皆で協力して一日で終わらせてしまう。こういう教師や級友たちの暖かい心づくしに感激して、江一は今後一所懸命勉強することを誓う。「私が田を買えば、売った人が、僕のお母さんのような不幸な目にあわなければならないのじゃないかという考え方がまちがっているかどうかも勉強したいと思っています」これがこの作文の結びである。

生活と社会を見つめるリアルな目

以上簡単に要約しただけでも、少しできすぎじゃないかと思えるほど、圧倒的な感動を呼ぶ作文であることはわかるだろうと思う。感動の理由を分析すると、次のようになるかと思う。

(1)わずか十四歳の少年にのしかかる困難な生活の、有無を言わせぬリアリズム。

(2)江一を助けてやる中学生たちの暖かさと力強さ。どんなに苦しいことでも、皆で力を合わせればなんとか克服できるという頼もしさと希望が伝わってくる。

(3)江一が無着の指導によって、自分の生活を客観的に見る目を養っていたことはもちろん、その目はやがてこの社会全体の構造にまで及ぶのではないかと予想させるところ。教育は、また子どもの持つ可能性はすごいものだなと実感させてくれる。

山元中学校の生徒たちと指導者無着成恭の名が天下に鳴り響いた理由としては、以上で充分であろう。そしてそれは、アメリカ伝来の新教育の理念が行きづまりに達し、

り方が多方面で模索されたこの時代に、明確な回答を示したものとも受け取られた。作文教育ということで言えば、綴方運動そのものは戦前からあり、無着もそれを学んでいたが、彼が作り上げた『山びこ学校』、およびその母体となったクラス文集『きかんしゃ』は、単にそれを復興させたというばかりでなく、まったく面目を一新させたものであった。

無着が綴方を通して教えたのは、ひとつの作品としての完成度の高さをめざす文章力ではなかった。自分の生活をリアルに見つめる目を養い、やがては現代社会の諸矛盾にも気づき、社会変革を志すようになること――こう言えばいささか露骨にすぎるが、無着も、『山びこ学校』と同年に『新しい綴方教室』を出して戦後綴方運動の理論的指導者となった国分一太郎も、現在の党派的なイデオローグたちよりずっと純粋だったことは信じよう。彼らはそれが社会進歩の当然の道筋であり、その方向に導いてやることが本当に子どもを幸せにすることだと、心から信じていたのだった。

現在の目から見てこのような教育実践の限界をあげつらうのは心ない行為だろうか。そんなのは誰にでもわかることだからである。生活をリアルに見つめるのだと言っても、昭和二十年代の山元村と現代とでは、子どもの生活の質自体が変わりすぎている。たとえ裕福ではなくても、中学生なら生産の現場から切り離されているのが普通だし、まちがっても家計が彼らの肩にかかってくることなどはない。今彼らの目に映るのは消費されるべき社会だけであり、そうであれば江口江一のような道筋で社会の矛盾に気づくことはありえようもない。

こういう社会を、悪いと言うことはできないだろう。国分は昭和三十一年刊の『教師』で、すべての中学生が生活の不安から免れて安心して学校へ通えるようになるのが理想だと述べている。その理想に近い社会が、政府と財界の主導によってできあがったのだ。なるほど、そのことは一方で山元村を廃村寸前にまで追いこむような歪みも発生させてはいる。けれど、国分やいわゆる民主的教師の多くが支持した革新政党が政権についたとしても、これ以上にうまくできたとはとうてい信じられない。そうであれば、『山びこ学校』は、無着が少なくとも表面上はあまり重視しなかった「作品」としてなら、今なお人を感動させる力を失っていないが、そこに込められた無着の教育的理念や方法論は、過去のものと見えてくるのもまたやむを得ないだろう。

蹉跌、そして教育の限界

私などに言われるまでもなく、無着にもその教え子たちにもこのことはずっとつらいかたちでのしかかってきていたようだ。ひとつには『山びこ学校』は有名になりすぎた。彼らの名は好むと好まざるとにかかわらず、絶えずこれと結びつけられてきた。そんななかで江口江一は、これ以後いっさい何も書かず、語らず、文字どおり身を削るような献身ぶりで地域の林業の振興につくした挙げ句、三十一歳の若さでこの世を去る。一方佐藤藤三郎は、農民兼評論家となって、愛憎こもごもの執拗な追及を、山形を去って明星学園に奉職したかつての師に対してしていく。

『朝日ジャーナル』昭和三十五年三月二十六日に掲載された無着・佐藤の「師弟対談」は、『山びこ学校』から約十年後の二人の位置が、どうしてもすれちがってしまいながら、それでもお互いにこだわらずにはいられない、ひどくもどかしいものになっていることを伝えて興味深い。この中で「教育の限界（性）」という言葉は、無着と佐藤の両者によって、それぞれ一回ずつ使われている。佐藤のほうはこうだ。

　教え子たちが成長したら村も少しは変わると期待したかと編集部から問われて、無着はいったんは否定するが、佐藤に追及されて、「君たちの時代に変わらなかったら、その子どもの時代に、それでも変わらなかったらその孫の時代に……」とは言ったと認める。それに対する佐藤の言葉（ダイジェストで）。

「あの頃は五年後には革命が来るんだと言ってもおかしくない時代だった。今なら笑われる。そんなふうに時代が変わったのだから、自分たちが変わるのも当然だ。そこからして、教育の限界性とか、教育だけでは解決しない社会（問題）があるんだという論理を展開させてもいいはずだ」

　この対談が行なわれた昭和三十五年とは、あの安保闘争の年である。「革命前夜」とさえ言われたと聞いていたが、それは都市部だけの話であって、地方では、世の中は決してそんなに大きくは変わらないという、現代ではどこでもありふれているけだるい認識が、もう浸透していたことが、佐藤の言葉からわかる。皆で力を合わせれば困難な現実も動かすことができるという明るい希望は、嘘ではないにしろ、いつでも通用するわけではないことが、かつての頼もしい級長の目にはもう明らかだったのだ。

　こんなことの責任を、無着個人にきせるわけにはいかない。それは、どうにもならない現実もあることも、教育には限界があることも、認めることができなかった――認めたら成立しなくなる――「教育」の責任なのである。

　無着のほうは、こういう佐藤に対し、相変わらず生活綴方（生活記録）運動からくる連帯と社会変革の可能性に向かうように説くのだが、説得できず、結局個人の生き方にまでは関与できないからな、という意味で「教育の限界」が言われている。それはそうにちがいない。

　それでも無着は偉大な教師にちがいない。十年もたってから、以前の生徒に、その教育についてこれほど絡まれた教師は後にも先にもいない。彼ほどの偉大さは期待すべくもない我々平凡な教師の前には、彼をはじめどんなすぐれた教師も手をつけかねたまま残していった「教育の限界」が横たわっている。

斎藤喜博の存在感

　無着成恭が山形県を去った昭和二十九年頃から、政府・文部省による学校教育の統制が具体的に始まる。教育二法（二十九年）、教育委員会の任命制（三十一年）、勤務評定（三十二年）、全国一斉学力テスト（三十六年）と続く一連の施策がそれで、これを「教育の反動化政策」と名づけた進歩的・民主的教師たちは、日教組をよりどころにさまざまな闘いを挑み、そして敗れていった。しばらく前まで教育というと真っ先に思い浮かんだ文部省対日教組の対立の図式はこ

こから始まる。そしてこれは、もはやほとんど話題にもならなかった本年三月の家永教科書裁判の最終的な決定によって、完全に終わったと私には思える。今後文部省に反対する勢力が再び台頭するにしても、それはかつての日教組とはまったく違う論理によるのでなければならない。

なぜなら、従来の論理を仮に民主（的）教育と呼んだとして、それではもはや展望が開けないからである。政府と文部省側は学校教育を統制し、どういうつもりか日の丸・君が代を強制するようにもなったけれど、国家主義的な色彩など、よほど意地悪く細かく探すのでなければ現行のカリキュラムの中に見つかりはしない。この統制は、学校をできるだけ純粋な能力主義が貫徹する場として、知識獲得と選別の能率化を図るためのものだったとみなすのが至当であろう。

それが完全に正しいものだったなどと言うつもりはさらさらないが、しかし民主主義も当然その一部である近代化の大筋から見て、決してはずれたものとは言えない。だから民主主義の旗印のもとにこれに対抗しようとするのは、最初からポイントがずれていたのである。

それでは、「子どもの学習権と教育の自由」は「国家の教育権」に勝るとした、教科書裁判に関する有名な杉本判決（四十五年）はどうなるのかというと、これはもう思い出したくもない人が多そうである。教育の自由と言っても、ここでは子どもが学校へ行かない自由が認められたわけではない。だから教師が子どもを自由に教育する自由が認められたような結果になっている。

これでは教師不信の嵐が吹いている昨今、父母が喜ぶはずはない。このような思想が実のあるものとなるためには、教師が学力テストでよい成績を取る能力開発以上のどのような教育が行なえるのか、具体的な実践をもって示さなければならない。

このような期待に応えうる教師としてもっとも脚光を浴びたのが斎藤喜博である。彼が県教組の文化部長の任期を終えて群馬県島小学校の校長になったのは昭和二十七年、満四十一歳のとき。『山びこ学校』出版の年（この前年）で無着成恭が二十四歳だったことを思い合わせると、やはりよい仕事をするためには若いほうが有利なようだ。

着任した斎藤は、さっそく思いきった職場改革を断行する。形式的な教案（指導案）の提出を廃止したり、教師の早退を自由にするなど、待遇面では管理をゆるやかにする一方、月にいちど校内研究授業を開いて、そこでは遠慮なく教師の力不足を叩いて、彼らの意識開発に腐心する。昭和三十年の最初の公開授業以来、島小と斎藤校長の名はしだいに全国で有名となり、教師や文化人の授業参観が相次いだ。

「未来につながる教室」

そのなかの一人に大江健三郎がいる。彼が『文藝春秋』の企画したルポルタージュを書くために島小を訪れたのは昭和三十七年。このときのルポ「未来につながる教室」は第一エッセイ集『厳粛な綱渡り』（文藝春秋）に収録されている。

これによると、島小の六年生の国語の授業は次のようなものだった。教材は神西清訳のチェホフ「カシタンカ」という童話。すでに語句や文章の一般的理解の段階は終

わり、より突っこんだ、文学的な解釈の段階にまで踏みこんでいる。犬のカシタンカを虐待していた主人公の指物師がふと自分をみすぼらしく感じ、おまえは虫ケラみたいなものだが、もっとも犬と虫ケラの違いは指物師と大工の違いくらいのものだ、と言う。この比喩をめぐり、子どもたちの活発な意見が飛び交う。知的に優越している子も、していない子も、同じ土俵で発言し、しかも反駁されてもそれを自分の考えを深める材料とするから、対立は生じない。何も発言しない子でも、ニコニコと成り行きを見守っており、決して疎外されているのではない。同じ土俵に載っているのは先生も同じことで、この比喩の曖昧な二重性がうまく解釈しきれず、困惑している。それがまたじつに自然だ。「教室で困ってしまい考えこんでいる先生を、美しく感じた体験はこれがはじめてだった」と、大江は書いている。

ソクラテス的問答法

以上ほめすぎかな、とも思えるが、斎藤自身の、気恥ずかしくなるほどの自賛に満ちた文章を紹介するのはいやなばかりに、いちおう第三者の立場から書かれたものを取り上げたまでである。斎藤は、それぞれの授業の最高の瞬間を参観者に見せるようにしている、と言っていたそうだから、島小の授業もいつもこれほどではないにしろ、しかし最高の瞬間には非常に魅力的だったことは素直に認めたほうがよい。

　これでもある程度わかるように、斎藤が、とくに専門の国語の授業で採用したのは問答法とでもいうべき方法だった。あくまで一人ひとりの子どもの発想を大切にして、それを有機的にまとめあげていって、より高次な理解へと導く。それを子ども自身に発見させるのを第一とする点に着目すると、ソクラテスの問答法に似ていなくもないだろう。大江も子どもたちのさまざまな発言によって授業が展開していくのを、弁証法的、と形容している。生徒は自由であるように見えながら、実際は授業の主導権は教師がきっちりと押さえているところなんぞも、ソクラテス的だ。

　ここまで言えば斎藤が偉いことは疑問の余地なく明らかになると思うが、土屋文明に師事したアララギ派の歌人でもある斎藤は、自分の理想を「授業は子どもの無限の可能性を引き出してやることである」「授業とは瞬間瞬間の創造としての芸術である」というような美しいことばで表現した。彼は死んだが、ことばだけは今も残っていて、教師の能力差はともかく、子どもたちや学校の置かれた状況の違いまで無視して、ときどきまるで当然の要求のように教師に突きつけられるのは参ってしまう。

授業を人間修業ととらえるうさん臭さ

　そこで斎藤的な理念が、現代の状況に置かれるとどう見えるか考えよう。彼はずっと組合員だったが、授業そっちのけで組合活動に専念するような教師には当然批判的である。また、平和教育とやらをことととする一部の教師の無内容な言葉にも悪罵を浴びせている。彼らには実践がない、実践の場で己れを鍛えていない、と彼は言う。教師の実践とは、すなわち授業である。それも、無着がしたような、しばしば脱線し、

生徒の家庭のことにまで話題がおよぶような授業ではなく、自由で伸びやかなようでも、「高次な段階」に向かってぴんと張りつめた一本の糸が絶えず張ってあるような授業である。

彼は、授業がそのようなものであるとき、生徒の学力などは自然につくから、そんなことはとくに心配しなくてもよい、現に島小の生徒は学力テストでも県のトップクラスにいる、などとも言った。しかし、だから彼の授業はすぐれているのだ、などと言われることは決して喜ばなかったろう。教師にとってはよい授業がすべてなのであって、その授業がなんの役に立つのかという問いは本来二次的以下でしかないはずだから。「授業が芸術」とはそういう意味である。

それでは、そういうすばらしい授業を成し遂げるためには教師はどのようであらねばならないか。斎藤がその著作『授業入門』(同人社)で、よい教師の条件として「頭がいいこと、育ちがいいこと、美人であること」を挙げているのは有名である。そんな小和田雅子さんのような人が教師になんぞなるもんかと思いながら先を読むと、素直で、謙虚な心を持ち、すぐれた実践をしている人なら必ず美人になるはずだ、と書いてある。ここまでいくとはっきりうさん臭い。内面の美しさは外面に反映するなどとは決して実証できないという以上に、授業を人間修業の場ととらえようとする姿勢そのものがうさん臭い。

先に述べたとおり、また斎藤も別のところでは認めているとおり、学校教育は結局個人の生き方には最後までかかわりえないのである。斎藤に関しては、まるで新興宗教の教祖のようだという悪口があるが、いくら似たところはあっても、学校は寺院でも道場でもない。そこで人間を磨くことを平気で要求するのは、明らかに不当である。

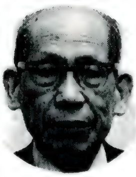
斎藤喜博は林竹二と並んで、小学校の教師のなかにいまだにファンが多いそうだ。けれど、斎藤のようなことを言ったりやったりする教師は寡聞にして知らない。いても信用されないだろう。

斎藤ファンのなかでもっとも注目に値するのは、なんと言っても『斎藤喜博を追って』(明治図書)を処女作とする向山洋一である。彼は斎藤が「すぐれた授業があれば学力向上など自然にできる」とごく簡単に書いたところをとらえ、斎藤の美意識には反することだと思うが、このことばを逆にして、学力が自然につくようなすぐれた授業とは何か、そのためには何が必要か、という具合に問いを立てる。そして自分の発見したものを、倫理色を払拭した純粋な技術として人びとに提示する。人格の垢のついていない、清潔このうえない技術。よかれ悪しかれ、現代ではこういうもののほうが広く受け入れられやすい。

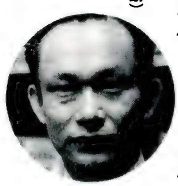
願わくは、このような時代認識を踏まえたうえで、我々教師を批判していただきたい。

ユートピアン・林竹二と久徳重盛の功罪

林竹二の語る生命への畏敬、久徳重盛の語る人間の本然の育児、それらはあまりにも立派だ。
しかし過去への幻影を基盤に現状を嘆く、現在への回路をもたない言説は反動の役目しか果たさない！



佐藤通雅（公立高校教諭）



私が高校の教師になったのは一九六五（昭和四十）年であり、高度経済成長期に入って社会が激変をはじめた時期だった。経済が急成長する夢を一方に置きながら、足元に生じる地殻変動に翻弄され出してもいた。高校紛争はこの変化に身体で拒否するかのように昂揚していった。それも七〇年代になって沈静化し、一見虚脱の後の〈夕暮〉に入ったかに見えた。

　たしかに経済は成長し、豊かさも手に入れることができた。だのに私たちが日常的に見聞するようになったのは、今まで遭遇したこともない子どもたちの反乱や病だった。高校でいえば、それがもっとも凝縮されたのはいわゆる底辺校である。高校進学率は年ごとに上昇し、ついに九〇%を突破した。全入運動のかけ声が父母の心をつかみ、日教組もまたその後押しをした。新設校が次々とでき、全入がかなり実現された結果の数字であり、念願どおり若者の多くが公平に高校に入れる機会ができたというわけだ。

　だが公平に入るためには輪切りをしなければならなくなり、そのしわ寄せは底辺校に行くことになった。入学したい、しかし学力がないというだけで入りたくもない最低の学校に身を押し込まざるをえない。この屈辱感を持った若者が同じ場所に集まれば、勉学放棄や非行が次々と発生しても不思議はない。それが底辺校である。

高校全入のパラドックス

　私は一九七五（昭和五十）年からそういう実業高校に立ち合うことになった。長い伝統を持つ高校で、かつての卒業生たちは地

元の経済界を支える重要な層となっていた。その伝統を慕って入学する生徒も少数はいたが、おおかたは輪切りの勢いにひしがれてここに吹き溜まってきた。いきおい伝統など見向きもされず、スカスカに荒んだ空気が流れていった。目を離すと校内における暴力・破壊・盗難が続出した。学校に来なくなって自然退学する人もいたし、そのほうがこちらとしては楽でさえあった。私はそういう雰囲気の場で生徒指導部の一員となり、ちょっと大げさにいえば〈前線〉に立つ数年を送った。したがって学校荒廃といわれるものをじかに見聞したばかりでなく、疲労が心身を直撃する様も実体験した。

　そこでまっさきに感じられたのは、この荒廃現象は一学校、一教師の能力をはるかに超えたところに起因しているということであり、したがって根本的解決を学校に要求されても、まず不可能だということだった。対症療法ならやれる、しかしやらないよりはましだという程度の気安めにすぎなかった。

　もういちどいうなら、事態は次のようにして生じた。世の中が豊かになった、せめて高校ぐらいは入れたいし、入りたい、それに誰でもが公平に学ぶ権利があるというではないか——高度経済成長以来のこの欲求はやがて行政を動かし、高校増設を実現させた。その結果全入をほぼなしとげたが、気づいたときには入りたくない者まで強制するパラドックスが生じていた。もっと正確にいえば、ただ入りたくないのでなく、入りたいけれど入りたくないのである。ほとんどの同世代が高校に行くから自分だって入りたい、しかし勉強はしたくない……。

　夏木智は『誰が学校を殺したか』（小社刊）で「彼らは勉強はしたいけれども同時にしたくない、学校へは行きたくないが、行けなくなるのは絶対にいやだというわけなのだ」といい、さらに「どちらの望みもあきらめられないということが、どちらの望みもかなわないことを意味する。彼らはエゴイズムのディレンマの中でもがくしかない。彼らは、叫び、泣き、怒り、絶望する。だが、彼らがそこから出たいと望めば望むほど、ディレンマはいっそう彼らをがんじがらめにするのだ。この耐えがたい苦しみこそ、今の底辺校の荒廃をもたらしているものなのである」と書く。

　この〈耐えがたい苦しみ〉を身体に直接的に表現するしかすべのない様を、私はじかに見ることになったというわけだ。

的はずれな学校・教師批判

　こういう情況に対して、ジャーナリズムも教育評論家もまた一般の人びとも、あたかも憂国の士のごとく次々と発言した。それらのほとんどが私には的はずれだと感じられた。なぜならこちらは学校能力を超えたところに起因すると実感しているのに、彼らは学校・教師にこそ責任があると見て疑わなかったからだ。

　このような一方通行の批判を向けるとき、彼らは決まったように過去の学校体験や子ども体験を思考の基盤に置いた。つまり、昔の学校はこうではなかった、生徒と教師は信頼のきずなで結ばれていた、子どもというのは成績などにしばられない、のびのびとした個性豊かな存在だった……。

過去が本当にすばらしかったかどうかは、タイムスリップする方法があれば誰でもすぐさま実証できる、じつは自分の思い込みだったと。時間がたてばたつほど過去が美化され、美化された幻影のみが固着するものだということも。しかも現在が混迷すればするほど、美化の度合は強くなるものだ。

子ども体験もしかり。のびのびして個性豊かな子ども時代を純粋に生きた人は、めったにいない。子どもは子どもなりに世界があり、そこには大人社会に匹敵するほどの残酷さもある。しかし時間の経過はそういうことを忘れさせ、ユートピアとしての子ども時代だけを濾過してしまいがちなのだ。

そういう幻影を思考の基盤に置いたとき、現在の情況は我慢のならない荒廃状態に見える。しかもその因は何よりも学校や教師にあるのだと。しかしこれは〈現在〉対〈過去〉の短絡的な思考によってとらえられた因果関係にすぎない。だのに彼らは容易にこれを手放そうとはしなかった。手放した瞬間、自己を支える思考が崩壊してしまうからだ。

現在目の前に起きているのは、過去の体験によっても、今まで積み上げてきた人生経験によっても解くことのできない未曾有の事態だ。もし本気で解こうとするなら、それらすべてをいったん捨てて、自分をゼロにしてから始めるほかない。それこそが本当の創造の態度というべきなのだが、人はゼロとして立つことに恐怖心を覚えるものだ。だから体験にすがりつき、ユートピアとして濾過した幻影を思考基盤とする。すでにさびついた鈍刀になりはててしまっているのに。

その鈍刀を振り回して学校や教師をやっつけようとしている風景、これが七〇年代の終わりから八〇年代にかけてとりわけ苛烈に展開され、今なおいささかの趣を変えながらもつづいている。

その中から胸にこたえている二例を取り上げてみようと思う。胸にこたえているのは、単なる無責任な放言でなく、その本人がなんらかのかたちで自分のこととして発言していたからだ。にもかかわらず〈前線〉に立ち合っていた私には決して納得できなかった。

救世主・林竹二の登場

林竹二──荒廃する教育情況の中で林竹二の授業行脚や言説は、救世主のように迎えられた時期がある。国立大の学長の座にある人が、各地の学校の教壇に立ち、底辺校にさえ入り込み、自ら授業し、生徒たちのいきいきとした表情をよみがえらせた。この行為は、少なくとも学長の座にふんぞり返って好き勝手な言説をまき散らす人物よりはるかに立派なことはまちがいないし、現職教師の多くをひきつけたのもそのことによる。

私自身、授業の写真集を見、また講演会で林本人の話を聞き、〝授業という行為にこんな力があったのか〟と純粋に驚き、また気を取り直したこともあった。だがそれは一時の奮起にしかすぎなかった。

なぜなら学校に帰ってきた自分を待っていたのは、学びたがっているどころか、学びたくないくせに単位だけ欲しい生徒の群だったからだ。授業によってよみがえる姿はどこにもなかった。最初のうち、これも

自分の力がないせいだ、林ほどの力量があればどんな生徒でも覚醒させられるにちがいないと自己をさいなんだ。

しかし私はある時点でごくあたり前のことに気づいた。ほんのたまに高名な教育学者が授業する非日常的な行為と、日常として生徒の前に立つ行為ではまるで条件が違うのだと。また、まだ教育のロマンを求められる小学校と、ロマンのかけらもない高校（とりわけ底辺校）では違うだろうと。

林だとてこの条件の違いは知っていたと思う。にもかかわらず強引なまでに自分の論を展開できたのは、小学生から高校生までを〈生徒〉＝〈子ども〉＝〈無垢〉ととらえる思考経路を持てたからなのだ。もちろんこれは林固有のものでなく、ジャーナリズムにもまた他の評論家にも共通していた。

その中でも林の発言は、とくに晩年になるにしたがって過激になり、教師に向かう言説はほとんど呪詛に近いものにさえなっていった。

〈子ども＝無垢〉〈教育＝学校〉という単純な方程式

一九七九（昭和五十四）年に刊行された灰谷健次郎との対談集『教えることと学ぶこと』（小学館）から二カ所引用してみる。

> 私は生命に対する畏敬だけが教育を可能にする、ネガティブに言えば、生命に対する畏敬のないところには教育はあり得ない、と考えています。（中略）ほんとに若い生命――嬰児や幼児はヘルプレスなんです。人に支えてもらわなければ生きていけない、成長を遂げることもできない、生きることもできない。自分だけでは生きていけない、成長もできないその子供たちに対する配慮が教育の一番根底の事実だと思うのです。
>
> だから何かを教えようという意志だけでもって子供に近づいていくと、子供の持っているものはみんな消えて、積極的なものはみんな消えて、ないものだけが見えてくるということがあるんですね。学校の教師には、そのないものばかりが見えている人が多い。だから子供はだめだということになる。そういうアプローチをしているかぎり、子供の持っている実に豊かなものは見えてこないわけですね。

前者には林の人間観がよくあらわれている。生命への畏敬が教育を可能にする――に異論をはさむ余地はない。嬰児や幼児がすくすくと伸びるのを願わない人もまずいない。その成長への助力こそが教育である――にも賛同できる。だが〝学校はすくすく成長させるどころか、さまざまな面でダメにしている〟と学校批判に転じるとき、よじれが生じたと思う。

学校という機関は、そういう教育の延長上に自然とできたわけでなく、社会的必要のほうに契機はあるからだ。もし、子どもはすくすくと豊かに伸びるべきものという観点に固着するなら、学校制度はもとより教師そのものも、〈下手人〉になってしまうだろう。実際林は多分に固着し、〈学校〉だというだけで、つまりそれぞれにある差異

には目を向けないで、ほとんど呪詛に近い批判を口にするようになる。

> 私はもう日本の教育は破産してしまったと思います。懺悔と洗礼がなければよみがえることはないでしょう。

このようにさえいう。広義の教育と学校という装置はまったく同じものとして語られ、それゆえ学校を破産したと見、教師には懺悔を求める。教師は灰をかぶれと呪ったことさえある。

　はじめ、私もまた懺悔しようとした一人だった。しかし彼の講演会にはどことなく信仰集会のにおいがあり、それが違和感としてあったため私を没入させはしなかった。違和の正体を考えるようになって私に見えてきたのは、次の二つの落とし穴だ。

　第一は生命への畏敬の観念を嬰児から高校生に当てはめ、すべてを無垢なる〈子ども〉としたこと、第二は教育と学校を無条件に同一化してしまったこと。こうなると子どもの犯罪も病も、〈無垢〉を汚した教師の責任だという単純な方程式ができてしまう。

　生命への畏敬ということばは使わないにしても、〈子ども〉＝〈無垢〉とする子ども観は、私たちを長くとらえてきたといってよい。現実がひどい状態になったとき、〈子ども世界〉というユートピアに逃避する、またはそこを基点に現実を射る、そういうパターンが学校を論じるとき何回も繰り返されてきた。そうしているうちに肝心の問題を取り逃がしてきたことは肝に銘じるべきだろう。

久徳重盛『母原病』の意味

久徳重盛（きゅうとくしげもり）――一九七九（昭和五十四）年刊行の『母原病』（教育研究社）の著者である。名古屋大学医学部の小児科の医師であり、専門は気管支ぜんそく、心身症、育児学だ。彼は外来の子どもに自閉症のような子、登校拒否児、カゼをひきやすい子、ぜんそく児、甘えやぐずの極端な子どもが増えているのに気づき、その原因を探りはじめた。その結果、次のようなことがわかったという。

> 極めて残念なことですが、わが国が高度経済成長をとげ、文明の進んだ社会になったために、こうした文明時代の不健康児が国中に満ちあふれているのが現状なのです。
>
> 　さらに私の心を暗くするのは、文明時代の不健康児が生まれる原因のほぼ一〇〇%が、親が子どもを、幼児期から心も体もたくましく育てることができなかったことにあるということです。しかも、われわれ専門医から見れば、ぜんそくや自閉症や登校拒否児になる危険性があることは、症状がはっきりする何年も前からわかっているのに、親がそれに気づいていなくて、親子ともに不幸になってしまっているということです。

文明時代の不健康児の原因のほぼ一〇〇%が、親の育て方のまちがいにある、育児の中心は母親なので「母親が原因の病気」といえる、そこで「母原病」と久徳重盛は名づけた。

現在への回路を持たない言説

この発言に驚きおののいたのは母親たちにほかならなかった。自分の育て方のまちがいが子どもをダメにしたと、正面から宣告されたに等しかったのだから。世の家族構成はすでに祖父母ぬきの核家族が主流になっていたから、上の世代の知恵を受け継ぐことはできなくなっていた。また女性の社会進出も常識になっていたから、朝から晩まで子どもの面倒を見ることも不可能になった。頼る他人のいないまま、孤立して育児に当たり、おかしな兆候が出ればなすすべもなくうろたえるというのが常態だった。それを断罪するかのごとく「母原病」発言はやってきたのだ。

冷静になって考えれば、原因の一〇〇％近くが本当に育児のまちがいのみにあるかどうかは疑わしい。しかし久徳が日本の精神土壌崩壊の上に変容が生じたとするところには説得力がある。彼は当時流行していた『スポック博士の育児書』の直輸入も批判している。欧米人の個人主義を基礎とした育児の仕方と日本人の集団主義を基礎とした場合は違うのだと。それも当を得ている。つまり久徳のとらえ方には一定の説得性がある。しかし母親たちへのアドバイスとして、

> また家庭というものは、しっかりした働き者の父親と、やさしい母親がいてはじめて成り立つこと、子どもはいつも両親に温かく見守られてはじめて正常に育つことを、ここでもう一度理解し直すことが大切です。

と語り、祖父母同居時代の大家族のメリットや地域社会との連携の必要性まで求めていくとき、私たちはほとんど茫然とせざるをえない。それは要するに「昔に帰れ」ということである。昔といってもせいぜい一世代前の時代へ。

たしかに、育児に特殊な方法があるわけではない。働き者の父とやさしい母、要するに安定した家庭があればたいていうまくいく。が、そういう家族構成が根底から揺らぎ、女性の社会進出の欲求も抑えがたくなったからこそ現在の現象は出ている。もし無理にも〈昔〉に戻ろうとするなら、それは〈演戯〉としてしか成立しない。それでは真実味のなさがやがてばれてしまうのが落ちだ。それに久徳が語るほど〈昔〉は理想的だったわけではない。大家族であることも地域社会との連携にもそれぞれデメリットはあり、現代人はそれらに決して耐えられはしないだろう。

だからここに描く〈昔〉は、都合の悪いところには目をふさいだ一種の幻影であった。「母原病」の提唱があるレベルまでの説得力を持ちながらも、ついには納得させることのできなかったのは、現在への回路を持つことができなかったからにほかならない。

違和を解くために何が必要か？

以上二例は学校の荒廃が社会問題になって世を騒がせていた一九七〇年代終わりに出現した。もちろん他にも多くの言説は横行していた。いずれにしても当時〈前線〉に立っていた私にはある面で胸をつかれは

しても、最後のところでは納得することができなかった。林竹二の語る生命への畏敬、久徳重盛の語る人間としての本然の育児、それらは共鳴する部分だった。

にもかかわらず、そこを理念として固着させ、現在を切るための武器にしていったとき、違和は生じた。私はむしろ既成理念の一切を捨てなければこの事態は見えてこないと思いはじめていた。まず事実を見ること、それだけが私たちに残されている方法だと……。

以来十数年の時間がたったが、学校や教育を語る言説はなお同じ落とし穴を抱えている。過去への幻影を基盤にして現状を嘆く、あるいは現状を嘆くゆえに過去へと退行するパターン……。その中で、最近とくに目についた例を最後にあげておく。それは教師宮沢賢治を過度に持ち上げようとする言説だ。

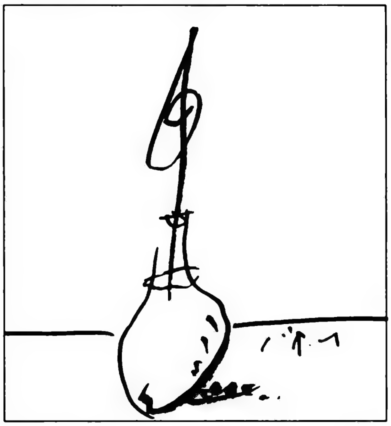
畑山博の『教師宮沢賢治のしごと』（小学館）は、花巻農学校時代の教え子たち数人のインタビューをもとに構成されている。畑山は「詩人としてばかりでなく、教師としてもまた天才的であった」教師賢治像を再現することを企図しているが、この背後に畑山が抱いているのは教育の現状への強い不満にほかならない。「後記」で「学校の教師という仕事は、それとほんとうに誠実に取り組んだら、音楽や絵を描くことよりも、もっとすばらしい芸術行為なのだと、私は信じている」という。だのに「教育の理念も、方法も、システムも、今や極限近いまでに管理され、巷にはただ無気力、無感動、無個性な教師があふれている」。こういう教育砂漠の中で、ルネッサンスの切り札としてこれだけすばらしい先行モデルを持っていると賢治を持ち上げる。

畑山の教育観・学校観・教師観は、実状をよく知らないまま自分の頭で思い描いている種のものだ。こちらはあまりにもかけ離れた〈時差〉に、気恥ずかしささえ覚える。が、内実を知らないくせに多少進歩的な人は、この程度の教育観で現状を切ることが多い。ここに再現された教師賢治像もまた、相当に歯の浮くものだ。いかにもある場面では賢治は信頼に値するすぐれた教師だった。

同時に教師であることに深い裂け目を抱いてもいた。「台川」や「イギリス海岸」を注意深く読めば、裂け目の在りかが見えてくる。つまり賢治は本質のところで激しく裂かれながら数年間をすごし、過去形となった時点ではじめて「いちばんぼんやり甲斐のある時」（一九三〇年四月四日沢里武治宛書簡）といいえたのである。

今私たちに欲しいのは、現在を嘆くことによって過去を美化することではない。その美化によって現在を切ることでもない。まず身に付着した理念を捨て、ゼロの目で現在を見据えること——そのように私は考えてきたし、今なお考えている。

Illustration＝サイコ・オカダ



バカ語録

一億総キョーイク評論家

下村哲夫の巻

〈筑波大教授・教育経営学〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

少子化の進むなか、公立高校では、入試で志願者が定員前後の場合には、無試験にしてしまうなど、すべての進学希望者を受け入れられるような、思い切った施策を考える時期ではないか。（『朝日新聞』九三年一月二十七日）

＊

教育経営学というので、さぞかしプラグマティックにきちんとものを追求できる人であろうと期待するわけだが、言っていることは、公立高校入試の基本の力学もわかっていないバカげたことだ。

この人もまた、偏差値をやめさせたくてこういうことを言っているらしい。しかし、なぜ公立高校では序列が歴然としているのに、多くの場合に志願者が定員前後となるのか、少しでも考えたことがあるのだろうか。

それは、偏差値や学校の成績などによる整理作業があるからこそなのである。これをやめれば、高倍率の高校と定員割れを起こす高校とのアンバランスが露出することは必至である。したがってそこでは無試験入学を認める前提自体が崩壊する。

また現在の状況下で実際に志願者が定員前後であれば、試験をやろうが無試験で入れようが、実態としてその学校に入ってくる生徒に質的変化はないわけだから、べつに「思い切った施策」でもなんでもない。翌年その学校の人気がガタ落ちになるぐらいが関の山だ。

じつはこの人の初歩的なミスは、もうひとつあって、それは、志願者が定員前後の高校が多くなれば、なんとなく人間の学力差が平準化されたみたいに考えていることである。だから偏差値振り分けをやめたうえで無試験にしても同じだと思っているらしい。

しかし説明するまでもなく、トップ校の志願者と底辺校の志願者とは、同じ定員前後でもその意味がまったく違う。たとえば試験のかわりに地区割りによる強制的な振り分けなどによって、極端な成績優秀者と極端な成績不振者とが同居することになったら、その新しい事態に向けた指導体制をどのように編成してゆくのか。そういうことを冷静に考えることこそ、「教育経営学」の名に値するのではないか。

思うに、大学の教育学は、理想の教育を思い描くことばかり繰り返してきたので、現実の作用の中に見られるごくあたりまえの機能的関係を正しく測定することができなくなってしまったのである。

したがって、まさに「思い切った施策を考える時期」にきているのは、こういう思考習慣から抜け出られなくなった人たちの頭の中に関してである。

「自由で民主的な」学校"自由の森"で子どもはどう育っているのか?

管理もなく、授業への強制も点数序列もない全く自由な学校——自由の森学園。既存の学校制度に対するアンチテーゼとしての存在意義を云々する前に、まずそこで学んだ子どもと学ばせた母親の生活と意見を聞いてみよう!

古橋健二(フリーライター)

卒業生 十八歳▼八七年中学入学、今春高校を卒業。現在、国立大学進学をめざして予備校に通っている

ルーズな「自由の森」が嫌で仕方なかったけど、価値観が変わったことがよかったことかな…

——まずは自由の森を受験しようと思った理由から教えてください。

●母親が朝日新聞に載った自由の森の記事を読んで共感したらしくて、公立中学は管理的だし、クラブの上下関係も厳しいから行かせたくないって。僕は小学校の頃から特殊なのが嫌いだったから、最初はイヤだったんです。で、気乗りのしないまま受験したんですけど、試験自体がかなり面白くて。二日間にわたって、ペーパーテストに表現活動、あと授業を受けて感想を書くのと面接があるんです。とくに授業が印象に残ってて、社会科の授業で木の実を食べたりしたんですね。小学校のときはそんなことしないですから、すごく珍しくて。それで僕自身も入りたいなと思ったんです。

——入学してからの授業もやはり面白かった?

●公開研の授業は面白かったですよ。一年に一回、十一月に公開研究会っていうのがあって、そのときは父母はもちろん、教育関係の人とかいろんな人が見に来ますから、先生もやっぱり力を入れて準備するんだと思います。授業時間もふだんより長くて、各先生の授業の意図だとか構成を文章化したものをまとめた冊子も配られるし、いつ

もの授業とはぜんぜん違うことをやる先生もいました。自由の森が本来目指してる授業っていうのかな、生徒も教師も生き生きして、わくわくするような授業になることが多いんです。毎年そうなんですけど、「こういう授業がいつもできたらいいね」ということで公開研が終わるんです。僕自身は、面白い授業が一年に一回あるだけでも嬉しかったですけど。

——ふつうの授業はどんな感じなんですか？

●とってもうるさいです。中学の頃は、みんなまじめっていうか、小学校の六年間でついた癖が残ってて、授業にはいちおう出てるんです。でも、大騒ぎしてたり、マンガを読んでたり、ウォークマンで音楽を聴いてたり……。先生が怒るってことがまずありませんから。みんなが勝手なことしだすのに、入学して一カ月もかからなかったですね。

——先生は注意もしない？

●たまにはしますけど、先生は生徒が自分で気づくのを待ってたんだと思います。あんまりうるさいと授業を真面目に聴いてる生徒が注意したり。生徒のほうが積極的に働きかけていくと、先生も授業を楽しんでやるし、いい関係になるんですね。授業で何を教えるか、その内容に関しては、ほんとに先生たちは一生懸命でしたし、やる気のあるいい先生たちだと思うんです。

——それはそうでしょうけど、自分の授業に生徒が乗ってくるように仕向けるとか、生徒の気持ちを勉強に集中させるのも、教師の仕事のうちというか……。

●僕も、ずっとそう思ってたんです。でも、それを先生だけに要求するのは酷で、先生たちも、立場の違いはあっても、生徒と変わらない人間だから、騒いでる人がどうしたら静かになるかは、生徒と同じくらいわかってないと思うんですね。それで先生たちもすごく悩んでたというか。

——中学の頃は授業には出てると言いましたけど、そのうち生徒は授業にも出なくなる？

●それは中三ぐらいからですね。授業中に騒いでたような人たちから、だんだん出なくなりはじめて、高校になったら、四十二、三人のクラスなのに二十五人ぐらいで授業をしてました。それでも、けっこううるさかったですけど（笑）。

——みんな自分の好きな授業にだけ出てるということですか？

●出る人はどの授業にも出てるし、出ない人はどの授業にも出てないという感じですね。授業中にも出たり入ったりしてますから、そんなにハッキリした区別があるわけじゃないんですけど。ただ、英語とか理科とかって、嫌いな人は大嫌いじゃないですか。そういう授業はもっと人数が少なくて十人とか、ひどいときは五人なんてこともあったと思います。

——出席は取らない？

●取る先生も取らない先生もいましたけど、出席しないからって、叱られたり進学に影響するとかはないですから、出席人数とは関係ないです。授業に出ない人たちは、食堂にいたり、芝生でゴロンとしてたり。授業に出なくても、クラブとか行事とか友人関係で充分楽しめるんですよ。なかには、あんまり学校に来ない人たちもいるにはいましたけど、だからどうだってことはなかったと思います。僕自身は、小学校のとき

の癖が高校三年まで抜けなくて、授業にはほとんど出てました（笑）。

――授業の中身はどんな感じなんですか？

●自由の森の授業は、先生から与えられるだけじゃなくて、自分から求めていくというか、自分で考えることをしないとダメなんです。授業でやったことを自分で深めていく努力をしないと、すごく浅いままで終わっちゃいます。取り扱う内容がかなり少ないんですよ。たとえば、高一のときに〝日本近現代史〟っていう社会科の授業でやったのは十五年戦争ですか、満州事変から大東亜戦争のあたりのことだけですからね。日本がアジアの人びとに対していかに酷いことをしたかという話に、天皇制の問題とかも絡めてたと思いますけど、ふつうの公立学校の授業と同じように受けてたら、その時期の知識が多少頭に入るだけでしょう。

――十五年戦争を中心に取り上げる理由は、先生が説明したんですか？

●授業の場ではなかったです。ただ、高三のときに、校内研究会っていう学校のことを考える会みたいなのを生徒が企画して、二日間授業を潰してやったんです。僕は社会科の分科会に出たんですけど、そのときに、先生からどういう意図で授業をやっていたのかという話を聞いて、ああそうだったのかと気がついたんです。先生は、自分の考えを先入観みたいにして生徒に入れてしまうのはまずいと思って、授業中には何も言わなかったんじゃないですか。その話を最初に聞いていれば、よかったのかもしれませんけど。僕は、なかなかそういうことに気づかないタイプですから、ほんと漠然と授業を受けちゃって。もったいないことをしたなと思ってるんです。

――先生の意図を理解して授業を聞いてる生徒のほうが多い感じでした？

●それはごく数人だと思います。なんとなく受け身で聞いてる人のほうがずっと多かったですね。僕なんかは、最後の年になって気づけたからよかったんでしょうけど。でも、それが自然なことだとは思うんですね。全員が全員、同じことをつかんだら、かえって変じゃないですか。僕は自分で深める努力をしなかったから、すごくもったいなかったと思ってますけど、そう思わない人もいるだろうし。気づいた生徒は気づいたし、そうじゃない生徒は、自由の森の六年間では気づかなかった。先生は生徒全員に対して授業を開いてますから、受け取らないのは個々の生徒の問題なんだと思いますけど。

はじめに謎ありき

――社会科以外の授業はどうでした？　さっき、英語とか理科は出席人数が少ないと言いましたよね。

●僕自身は英語が好きで、ラジオの基礎英語を聴いたりしてましたから、けっこう得意でいられたんですけど。授業だけで英語に接してた生徒は、たぶん力がついてないと思います。自由の森はテストがないんですよ。テストがないってことは、まず覚えないってことでしょう。とても悲惨な状況です。

――どんな授業内容なんですか？

●『ニュークラウン』っていうふつうの教科書を使ってましたけど、文法をやったのは中二までで、それ以降は文法をやった記憶はないです。ふつうは先生といっしょに

教科書を読んで、そのあとで、先生が訳したり、生徒に訳させたり。ただ、指名しても生徒はほんとにわからないことが多いですから、答えられないと先生がすぐ援助しちゃうんです。わからないことを卑屈に思ったりするようなこともない代わりに、単語や文法も覚えようとはしない。英語だけは、基本的なことを覚えないと先に進めないですからね。

——理科や数学だって公式とか覚えないとダメでしょう？

●自由の森の授業は違うんですよ。理科だって、先生は毎回出てないとわからないって言うんですけど、実際には、実験とかが多いからふだんサボってる人でも面白く受けられるんです。数学の場合は、公式を覚えて問題を解くわけじゃなくて、その公式が導き出される過程をすごくじっくりやってるんですね。そのことに気づいたのも、じつは高三になってからで、僕が受験勉強を本格的に始めたからなんです。

受験勉強をやってると、公式もいろいろ覚えないといけないですよね。理由もわからないのに、公式を覚えるのはイヤなことで、どうしてそういう公式が導き出されるのか知りたいと思ってるところに、ちょうど授業で三角関数を取り上げたんです。それまで意味もわからずに、公式をただ機械的に当てはめて問題を解いてたのに、その謎が解けたっていうか、それがすごく面白くて。

——まわりの生徒たちの反応はどうでした？

●面白がってたのは、たぶん自分で三角関数を勉強してた人だけだったと思います。知りたいという欲求のない生徒には面白くはないですよね。結末を知らないのに謎解きだけされてるようなもんでしょう。推理小説だって、最初に殺人事件が起こるから、犯人を探したり、密室のトリックを推理したりするんで、殺人事件が起こったことも知らないで、犯人探しの過程だけ聞かされても、きっと面白くないですよね。それと同じことだと思うんです。僕だって、受験勉強を自分でやってなかったら、三角関数の授業にも興味を持てなかったでしょうから。

——三年の数学では、三角関数と何をやったんですか？

●すごくゆっくりのペースなんで、三角関数だけでした。自由の森の授業と受験勉強とはまるで別のものなんですよ。公式が導き出される過程を知ってたって、公式自体を覚えないことには、結局、問題も解けないでしょう。その意味でも、受験には役立たないですよね。僕は、高一の終わりに、英、数、国の三教科だけ進学塾の入塾試験を受けたんですけど、結局、国語しか入れなかったんです。合格ラインが四十点だったんですよ。国語だって、古文はまったくダメでしたから、現代文だけで四十二点取ってギリギリですよね。英語は三十八点かな。数学は恥ずかしい話、二点しか取れなくて、進学塾の先生にまで驚かれました。これじゃあんまりひどいと思って、少人数指導の塾に通いはじめたんです。とくに数学は高三までずっとマンツーマンで教えてもらって、かなり基礎学力をつけてもらいました。それでようやく、人並みにできるようになって、受験勉強は受験勉強で楽しめるようになったというか……。

——やればできるということは、小学校の

Illustration＝佐藤竹右衛門



成績は優秀だった？

●ハイ（笑）。父親の仕事の関係で何校か転校したんで、五段階評価と三段階評価のところがありましたけど、国語、算数、理科、社会の四教科はたいてい五か三、いちばんいい成績でしたから。

――自由の森での成績は？

●「評価表」って呼んでましたけど、べつに数字で成績をつけられるわけじゃないんです。前期と後期の終わりに、各教科の先生から項目を指定されて、まず自己評価をします。「自分の取組についてどうだったか」、「学んだことわかったこと」、「その他」っていう感じで自分なりに書いて、それを先生に提出するんです。それに対して、先生の評価を書いて返してくれます。言葉で評価を返してくれるというのは、すごくいいですね。先生が自分のことを見てくれてるんだなというのがわかるじゃないですか。アドバイスとかもあったりして。ただ、授業に出てなかった人は自己評価も出さないことが多いですから、その場合は、先生からの評価も来たり来なかったりですね。授業に出てた人の評価表は厚いし、あんまり出てなかった人の評価表はすごく薄かったです。

自由の森で価値観が変わった！

――授業以外の部分では、自由の森の学園生活はどうでした？

●荒れてるとか、すさんでるという雰囲気じゃなくて、とにかく常識がないんです。中学に入って、まず驚いたのは盗難ですね。入学してすぐに、おカネを盗まれたんです。新入生は何も知らないから、体育の時間と

か、カバンにおカネを入れたままで教室を離れますよね。たぶん上級生の仕業だと思うんですけど、みんなおカネを持っていかれちゃって。僕は小銭と千円札で千数百円。それ以来、貴重品はぜったい教室に置かないことにして、高三までずっと持ち歩いてました。

あとは、器物破損ですね。蛍光灯を割っちゃったり、壁を削ってみたり、落書なんかもすごいですし。直しては壊され、直しては壊され、「ほんとにどうしようもない」って用務員のおじさんが嘆いてました。廊下もすごく汚れるんですよ。上履きはいちおうあるんですけど、土足でそのまま教室まで入っちゃう人が多くて。毎日、朝、用務員のおじさんが掃除して、帰りにまた掃除をする。朝七時に学校に来て、帰るのは夜の八時だって言ってました。

タバコだって、注意する先生もたまにいましたけど、ほとんど放任状態だし。「止めなさい」と先生が注意するのは意味がないから、それ以上の策を考えるのはなかなか難しいことだと思うんですけど。僕は、最初、そういうルーズな自由の森がすごく嫌で、辞めたいと思ったことも何回かあるんです。でも、高三になってから価値観が変わったっていうか、そういうルーズな自由の森を認められるようになってきて、いまはそれが自由の森に行ってよかったことなんじゃないかと思ってるんですけど。

――価値観が変わったこと自体がよかった？

●ええ。授業に出ない人がたくさんいるとか、授業中うるさいとか、タバコを吸ってる生徒が多いとか、そういう状況を僕が嫌いだということは変わらないんですけど、そういうことをしてる人たちまで毛嫌いしなくなったというか。行為自体は認められませんけど、その行為をしてる人たちは認められるようになったんですね。彼らには彼らの理由があるだろうし、自分だってそうなる可能性はあるわけですよね。他人の価値観を認められると自分が楽になるような気がしたんです。人のことを毛嫌いしたり、非難してるときは、自分も苦しいじゃないですか。

――そう思うようになったきっかけは、何かあるんですか？

●高三の社会科の授業で、企業社会のことを扱ったんですね。過労死の問題とかで、日本の社会がものすごくがんじがらめのシステムになってることを知って、なにも自分がそういうシステムの中に好んで入ることはないなぁと思えてきて。それまで僕の頭には、自分の将来像としてサラリーマン以外の姿は浮かばなかったんです。そのためにはそこそこの大学を出て、そこそこの企業に就職してと、当然のことのように考えてたんですけど、そういう高三まで僕が絶対だと思ってた価値観が、その授業をきっかけにあっけなく崩れちゃったんです。

安定した生活っていうか、おカネをある程度稼がないといけない、稼ぎたいという欲求からも解放されたんですね。べつにおカネだけが人生の目的じゃないということに気がついて、もっといろんな可能性のなかから自分の仕事を選べばいいと思えるようになれた。その意味でも、すごく楽になったんです。自分を縛ってたものから解き放たれたことで、価値観の違う他人も認められるようになれた。そういうことだと思うんですけど。

「自由の森」って、親の活動が保証されていますから、親にとってもかなり面白い場だと思うんです

母親 四十六歳▼長女は今春高校を卒業、次女は現在中学三年に在学中

いまの学校っていうのは、子どもを育てるどころかスポイルしてる部分がすごくあるんですよ。偏差値による輪切り進路指導にしてもそうでしょう。自分が興味を持ってる分野では本当にいいものを持ってる子でも、試験科目の総合点だけで評価されて、「あなたは、偏差値四五ですよ」みたいな言われ方をされちゃう。そうすると、子どもは、「私なんかダメなんだ」と自信をなくしてしまいますよね。上の娘もそういうタイプだったものですから、自信回復というか、自分のいい面をもういちど再確認させてやりたいなと思って、高校受験のときに自由の森を勧めたんです。

自由の森の場合は、評価もレポート中心でしょう。テストのために一生懸命暗記して何点取れるかという勉強のパターンではないですから、自分のペースで勉強できるっていうんですか。娘の苦手な物理とか数学の授業でも、レポートなら、新書判の入門書とかを何冊か読んで、どんな発見があったとか、先生が授業中に話したことが、「あっ、こういうことだったんだ」と、あとからわかったとか、そんなかたちで授業と自分との関わりを書いて提出すればいいわけですよね。その意味では、理数系だからということでスポイルされないで、娘も自分なりに授業に参加できたんだと思いますけど。

「授業に出なければ」という感覚がない

ええ、何回も授業は見ました。いつでも公開されてますから、父母会の前に誘い合わせて何人かで見たり。自由の森の授業は大人が聞いても面白いですよ。教師と生徒の関わり方がふつうの学校とはぜんぜん違うんです。子どもが自由に発言して、教師とのやり取りを中心に授業が進んでいくようなケースも多いし。数学なんかでも、たんに先生が黒板で例題を解説した後に子どもに問題をやらせるような授業ではなくて、文化としての数学というか、数学という学問の文化的な価値みたいなことを捉えることに重点を置いた授業なんです。先生自身も学校側から管理されてませんから、自由に授業内容を決めて、物理なら物理、生物なら生物に対する自分なりの考え方や思想を前面に出して語られますし、そういう意味では、むしろ大学の授業に近いんでしょうね。

それは授業に出てない生徒もいますけど、四十人いないとたいへんだとか、そういう感覚自体がないんですね。私たちも慣れちゃって、教室に行っても、「まあ、けっこういるじゃない」とか、「あっ、うちの子いた」とか(笑)、親もそんな感じになってくるんですよ。父母会の場でも、あの先生の授業内容が面白かったとか、この先生の考え方はどうかというようなことは話してましたけど、子どもの授業態度自体を現象的に取り上げてどうこう言うことはあまりなかっ

たですね。

授業に出てない子一人ひとりに、その子自身の状況があるわけでしょう。たとえば食堂で友達とお喋りしてる子にとっては、その時間は自分の居場所は教室ではなくて食堂なんでしょうし、芝生の上で寝てる子にとっては、そこが彼の心地よい居場所なんでしょうし。みなさん、そういう受けとめ方をされてるから、子ども自身の状況を無視して、授業だからとにかく出席させなくてはいけないとか、そんな発想をされてなかったんだと思いますけど。

「落ちこぼし」の問題は、一人ひとりの子どもをスポイルしてるかどうかが鍵ですよね。ふつうの学校では、授業に出てたってスポイルされてる子もいるわけだし、逆に、自由の森の場合には、授業に出てない子でも、学校にいることでひじょうに安心できる側面があると思うんです。やっぱり大きな意味で自分の存在が大人から認められている、愛されていると感じてるからじゃないかしら。

それは個々の授業を取り上げればいろいろ問題はあるでしょうし、自由の森が何も新しいものを生み出してないじゃないかという批判も当たっている部分があるとは思いますけどね。でも私は、むしろ学校とは何かという大きな視点から見て、自由の森の存在がすごく面白いと思ってるの。学校という概念そのものをかなり揺るがすというか、既存の学校制度に対するアンチテーゼとしての存在意義の大きさですよね。

自由の森に子どもを通わせてる親って、意外と教師が多いんですよ。私自身も公立の中学校で教えてた経験があるから、なんとなく気持ちがわかるんだけど、ふつうの学校で内心バカらしいなと思いつつ生徒指導とかやってる人たちが、自分の子どもにはこんな窮屈な思いをさせたくないって思いがあるんじゃないのかしら。ふつうの学校は、子どもに対して教師集団が統一して指導にあたるということにすごくこだわるのよね。だから価値観が単一になってきて、市民社会の常識から外れるようなバカバカしい指導を大まじめでやっちゃうわけでしょう。教師もそれで疲れ切っちゃうし。自由の森の存在は、そんな指導をいっさいしなくたって、子どもはちゃんと育つし、学校も成り立つんだということを示してると思うのね。

自由の森は壮大な実験？

真に自発的っていうか、すべての枠を取り払ったときに子どもがどうするかですよね。ふつう教育っていうのは、「これをやりなさい」とか「これをやっちゃいけません」っていう、教師の側からの働きかけのもとに行なわれているわけでしょう。民主的な教育とかという場合でも、はじめに枠組みがあって、そこに生徒を押し込もうとするという意味では同じですよね。そうじゃなくて、何をやってもいいし、何をやらなくてもいい、という環境に子どもを置いたときに、何が生まれるか……。

その意味では、壮大な実験という側面もありますね。音楽祭なんかでも、教師が前に出てきて子どもを静かにさせるようなことはぜんぜんないんですよ。すべて子どもたちが仕切ってやりますから。はじめはみんなワァワァ騒いでて、こんなんで大丈夫かしらなんて思って見てると、そのうち二



十分ぐらい遅れてちゃんと始まるんですね。いったん始まると、子どもたちはひじょうに集中しますし。まあ、出欠も自由なんで、参加意欲を持った子どもだけが集まるからできるということもあるんでしょうけど。

それと、私がすごく感激したのはね、自由の森が親にとってもとても自由な場だということなんですよ。父母が任意にグループをつくって、学内で冊子を配ったりして自分たちの意見を主張したりね。そんなことふつうの学校じゃ考えられないでしょう。一部の教師と一部の親が意気投合して何かを企画しても、そのこと自体を批判されることはないですし。自由の森自体の批判まで含めて、誰が何をやっても自由なんですね。

親の活動自体が保証されてますから、父母の集まりでもいろんなことができるんですよ。下の娘のクラスなんかだと、親が自主的に月にいっぺんぐらい集まって、太鼓の練習をしたり、近所の施設を借りて泊まり込みで話をしたり、キャンプをしたりね。そういう場に子どもも入ってきますけど、面白いのは、むしろ子どももなんかそっちのけで、親が喜んでるような場面がけっこうあるんですね。親どうしの出会いの場になっているというか、自分自身の生きざまを語り合えるというか、そういうところも、ほんとうに他の学校とは違いますよね。ちょうど親たちが学園紛争を体験した世代だということもあるんでしょうけど、自由の森っていうのは、親にとってもかなり面白い場だと思うんですよ。

PTAという単一の組織はないんです。つくりましょうという運動は自由の森の設立当初からいろいろあるんですけどね、それも言ってみれば自由の代償という側面があって、要はまとまらないんです。いろんな意見がありますでしょう。文部省からの規制に対して学校を守っていくためには、単一の組織が必要だという意見もあれば、組織としていったんできあがると、それが自立して逆に構成員を抑圧するっていうんで反対する人もいたりして。それがまた面白いって言えば面白いんだけど、議論というのは結論の出ないかぎり永遠に議論のままですからね（笑）。

自分たちは他の学校の連中とは違うんだという意識を自然と持っちゃうんです

卒業生　十九歳▼八九年高校入学、九二年卒業、現在私立大学二年生

自由の森は、中学の担任の先生から勧められました。僕に向いてるんじゃないかって。親は、ある程度偏差値の高い県立高校に行かせたかったみたいで、あんまりいい顔をしなかったんです。僕も、最初はそのつもりでしたけど、現実には、行きたい高校なんかぜんぜん受験できないんですよ。高校は、偏差値で完全に輪切りにされちゃうじゃないですか。僕はそんなに成績がよくなくて、平均ギリギリかちょい下ぐらいでしたから。

僕が行けるレベルの県立高校だと、地元ではバカ学校みたいな言われ方をされてて、評判もそんなによくなかったんです。もうひとつ、県内の私立高校でやっぱり制服とかなくて講座制で授業をやってる高校もあったんですけど、そこもあんまり印象がよくなくて。三つの高校を比べたときに、偏差値とか世間体みたいなことが、まずいちばん最初に頭に浮かんだんですね。受験案内とかの本を読むと、自由の森の場合は、偏差値四〇ちょっとから七五ぐらいの人まで受けてて、すごく幅が広いでしょう。まわりの友達も自由の森のことをよく知らないし、ここなら「あいつはバカだ」みたいな目で見られることもないかなって(笑)。自由がどうのこうのなんてまじめに考えもしなかったし、ただ楽しいところなんじゃないか、ぐらいに自分に思い込ませて、ホントいいかげんな動機で自由の森を選んだんです。

自由の森って洗脳教育？

そんな負い目があったからかもしれませんけど、いざ入学したら、まわりの人たちがやけに生き生きしてるように見えちゃって。みんな自分のやりたいことに熱中してるっていうか、ギターにのめり込んでる奴もいれば、難しそうな本とか読んで社会がどうのこうのとか喋ってるのもいるし、行事に一生懸命な人たちがいたり。僕なんかは、行事でも、自分が中心になってやるっていうよりは、ただクラスの一員として参加してるだけっていう感じでしたから。「こんなんじゃ、いけないんだろうなぁ」とは思いつつ、なんか中心メンバーの輪の中に入っていけなくて……。

何かしなくちゃ、っていうアセリだけはあるんですけどね。じゃあ、自分に何かしたいことがあるのかと考えると、何がしたいのかもわからないような感じで。偏差値思考みたいなものがよっぽど体に染みついてたんでしょうね。卒業後どうしようとか、こんな勉強でほんとに大学に行けるのかなとか、漠然とした不安も抱えてたし。やっぱり自由の森に来てる人たちって、よくも悪くも特別っていうイメージがあるじゃないですか。だから、逆に、俺はエラくふつうなんじゃないか、ホントただの平々凡々の面白味のない人間なんじゃないかと思っちゃって。なんか、自由の森にいながら自由の森の生徒じゃないみたいなところもあ

ったと思うんです。そんなんで、悶々としちゃって、卒業する間際まで、ほんと俺はどうしたらいいんだろうっていう気持ちで過ごしてました。

高校に入るまでは、悩むことすらしなかったですね。僕、中学生の頃とかって、狂ったように喋りまくってたんですよ。人に対して一線を画すっていうか、ある一定の距離以内に人を入れなかったんです。自分を出すのが怖いっていうか、僕自身が自分と向き合うのを避けてたんですね。そのことを自由の森に入ってすぐに中学時代の先生に指摘されて、自分が無意識のうちに避けてたものとはじめて向き合わされたんです。すごいショックでした。でも、いちど気づかされたものは、もうあと戻りできないですよね。それで、自分のことを少し考えるようになって……。



僕の場合は、親離れできてないということもあったんですよ。早い人だと十五、六で親離れしちゃうでしょう。僕も口だけではエラそうなこと言ってたから、まわりにいた友達はわりと大人っていうか、同じ学年でもけっこう大人っぽい奴ばっかりで。それですごくコンプレックスを感じちゃって、よけいアセってたんだと思うんです。必要以上に自分を過小評価してた部分もあったろうし、卒業間際になって、やっとまわりのみんなが等身大に見えてきたっていうか、自分は自分なんだってことで、少しずつ自分を認められるようになれたんですね。なんていうか、女の子と付き合い出すと、ちゃんと対話しないとダメでしょう(笑)。それで自分のことも相手のことも真剣に見つめられるようになったんじゃないかと思うんですけど。

それはたしかに、自由の森に行ったことで、主体性がなきゃいけないとか、自立してないとダメだとかっていう強迫観念を持たされちゃった部分はあるんでしょうね。まわりにも、「自由の森は洗脳教育だよな」って言ってた奴らがけっこういたし。でも、ふつうの学校に行ったら行ったで、きっと僕なんかテストの点とか偏差値のことで悩んでたんじゃないかと思うんです。中学のときだって、俺はバカなんだ、勉強ができないんだっていう劣等感だけは思いっきり植えつけられてましたからね。

同じクラスの連中だったら、だいたい成績ってわかるじゃないですか。同じようなこと言ってても、「ああ、コイツはやっぱりできるからなぁ」みたいな色眼鏡で見ちゃったり。受験する高校の名前を聞くと、すぐ偏差値がついて回るから、「あの人バカだったんだ」って。そういう感覚ってすごく強くあったと思います。そんな判断基準って、すごく一義的っていうか、人間を見る尺度としてはほんの些細なことですよね。自由の森に入ってからは、偏差値のこととかあんまり気にしなくなりましたからね。そういう意味では、自由の森って、やっぱりいいなって思うんです。

ただ、一方で、自由の森にいると、自分たちは他の学校の連中とは違うんだみたいな意識を自然と持っちゃうんですよ。借りものじゃない、自分の芯から出てくるような言葉でものを話せる奴、自分で自分のことを動かしていける人間は、やっぱり一段上っていうか、俺たちはそういう人間なんだって、他の学校の生徒をちょっと見下しちゃうようなところがあるんですね。それはそれで、また違った意味の差別なんでしょうけど。僕なんか、自由の森では、まわりの人たちにコンプレックスを抱いてたくせに、他の学校の生徒に対しては、アイツらより俺はマシだっていう優越感を持ってたりして、なんか複雑でしたね（笑）。

［卒業後の進路］

大学 短大 進学	30%
専修学校 各種学校 進学	47%
就職	4%
その他	19%

「高校受験案内 '94年度用」（晶文堂出版）による

ふつうに受験したら ぜったい受からない！

大学受験ですか？　そうですよね、自由の森でいくら偏差値教育はよくないなんて言ってても、大学を受けるときは、偏差値とまた向かい合わないといけないですからね。ふつうに受験してたら、僕なんかぜったい受からなかったでしょうね。ちょっと甘っちょろいんですけど、学校から推薦をもらえたんで、大学入試は小論文と面接の試験だけですんじゃったんです。一般推薦っていう制度があるんですよ。大学側が指定した評定平均以上で、授業にもちゃんと出席してれば、高校のほうから大学に推薦してくれて、一般の受験生より有利な条件で受けられるんです。合格するしないは大学が決めますから、一般推薦でも落ちる人のほうがずっと多かったですけど。

僕が行った大学は、評定平均がたしか三・五以上だったと思います。自由の森での五段階の評価の平均が三・五以上ってことです。評価表じゃなくて、学習指導要録ですか、五段階の評定をつけてる成績の原簿みたいのがあるじゃないですか。担任の先生と進路の面談をしたときに、三年になってはじめて見せてもらいました。当然、一年のときからつけられてますよね。正規の高校として文部省から認められるためには、評定をつけることが必要なんじゃないですか。自由の森のことだから、数字自体はけっこうアバウトにつけてるんでしょうけど、どういう基準でつけてるのかはわからないです。でも、大学に進学する人の数自体もそんなに多くはないし、べつに問題になるようなこともなかったと思いますけど。

バカ語録
一億総キョーイク評論家
竹内克好の巻
〈埼玉県教育長・当時〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

浦和市で塾通いの中二の少女が殺された事件が、この方式（業者テストの偏差値を高校に提示させない）を検討するきっかけだった。痛ましいことだと胸が痛んだ。偏差値競争の犠牲者ともいえる。これで偏差値問題を根本から見直さねばならないと考えるようになった。（『朝日新聞』九二年十一月十九日）

*

こういう思考法を精神病理学のほうでは関係妄想と呼ぶ。橋の上から川に飛び込んで自殺した青年がいた。痛ましいことだと胸が痛んだ。橋がなければこの事件はありえなかった。だから彼は橋の犠牲者とも言える。これで橋問題を根本から見直さねばならないと考えるようになった。こういう論理とまったく同じだ。

買い物をしていたって、楽しそうに遊んでいるときだって、通学途中だって、たまたま運が悪ければ殺されたり事故にあったりすることはある。ある行為をしていたときにたまたま不幸な事件に巻き込まれたからといって、その行為を促していたものにすぐ原因を帰するのは短絡も甚だしい。そんなことは幼稚園児でもわかる理屈だ。

もちろん、個人的な後悔の感情がそういう論理を呼び寄せることがあるのは否定できない。しかし社会的な物事を広い視野に立って考察してゆくときの論理は、それとはまったく別のはずである。それなのにこの種のことばが一見もっともらしく聞こえるのは、塾通いがひたすら悪であり、その元凶は偏差値であると頭から決め込んでいるからだ。

もしこういう論理が成り立つなら、逆に公教育を悪者と決めつける了解基盤がありさえすれば、通学途中の殺人をそのまま義務教育の悪として結びつけることもできる。また公教育が内容貧困なくせに一日中子どもを拘束してのさばっていなければ、夜の塾通いだってしなくてすむという論理を持ってくることも可能だろう。もう一歩話を進めれば、悪いのは、教育行政を直接指揮している教育長、あなたですよということにもなるわけだ。

さらに言うなら、夜間に子どもが出歩いていて殺人に巻き込まれるなど、日本では本当にまれなケースである。夜の塾通いがまず平穏無事にできるほど日本は治安がいいのだと考えることさえできるではないか。

何かあると、たまたま近接している手近なわかりやすい事象にすぐ因果を結びつけるのは、論理的訓練をしていないくせに一言いいたがる怠惰な人の悪弊だが、教育行政の責任者が冷静さを失ってそういう妄想をふりまわすようでは困るのだ。

きのくに子どもの村学園は明るく楽しいドライな子捨ての場だ！

権力性を自覚しない「予定調和的思考」に身をまかせ、能天気な親たちの要求のみにしたがう「きのくに子どもの村学園」は本当に子ども本位の学校か？ それを徹底検証する！

辻創（教育運動家）

最初におことわりすれば、私は「きのくに子どもの村学園」とその関係者になんの恨みも悪意もない。この「自由学校形式の正式な学校」については、せっかくの新しい試みだからなるべく肯定的に評価したい気はする。私の訪問時、親切に応対して下さった喜田周一理事長はじめスタッフの方がたの善意や熱意には心打たれたし、学校全体の印象は好ましいものだった。しかしここでは、個人感情は抜きにして表層でなく核心、つまり同校が原理的にはらんでいる問題を摘出しようと思う。学園開校の際ただ賛美しただけの軽薄なマスコミとは違い、私は以下で学園の本質的な有害性を手厳しく考察するが、これは教育のあるべき姿を真摯に追求するうえでの必然的な産物であって、同校への誹謗中傷の意図はもとよりみじんもないことを前置きさせていただいておく。

新聞はどう報道したか？

まず同校の概要を記した新聞記事を紹介する。九二年五月三日付京都新聞朝刊に掲載された「高野山中腹に『管理教育真っ平』の私立小」である。

「通信簿をなくし、集団体験学習で子供の個性や自主性を伸ばそうとするユニークな私立小学校『きのくに子どもの村学園』（松戸惇校長）が今春、和歌山県橋本市彦谷に設立された。管理教育を真っ向から否定した試みで、各地から授業参観の申込みが相次いでいる。

同校は高野山の中腹、戸数わずか十六戸の山村にあり、緑豊かな自然の中の敷地五千四百平方メートルに校舎など四棟が建つ。



児童六学年計九十一人に教諭は八人。地元出身者を除いて大部分が寮生活で、週休二日制。児童は大阪、和歌山を中心に、関東―九州の各地から転入学してきた。

　授業は体験を通じて生活の知恵を学ぶ週十二時間の〝プロジェクト〟が中心。土地を借りて農作業を進める『どろんこ軍団集まれ』や、新聞・テレビニュースをつくる『きのくに報道局』などで、児童たちは学年を超えて活動に熱中している。時間割は弾力的に組み、一般の教科書を使って文部省の学習指導要領が求める学力も付けていくという。また集団生活のルールや行事予定などは一方的に押し付けず、児童と教諭が全校集会で話し合って決める方針だ。現在の管理教育にはなじめず不登校で苦しんだ子供も少なくないが、児童たちは『勉強、勉強と追われず、のんびりと遊ぶ時間も多い』と目を輝かしていた。

　七年前から開校準備をしてきた堀真一郎大阪市立大教授（児童教育学）は『学年の枠、先生と児童の壁を取り払うことをこの学校では大切にしたい』と強調している。」

　この記事から一年。学園は今年三月、初の卒業生七人を送り出し、四月に新一年生十三人ほか学年編入者若干名を迎え二年目に入った。来年四月から中学校も県の認可を得てスタートすることが決まっており、同校六年生十一人はそのまま内部進学する見込み。他方、記事に出てくる学園創設者堀氏は当時理事兼学園長であったが、その後、兼職が教育公務員特例法に抵触することを大阪市大側から指摘されたため理事・学園長職とも辞任、現在は学園の〝黒幕〟となっている。

　私がここを訪ねたのは新年度が始まって三週間が経った四月末、ちょうど保護者会が開かれた日である。厳冬には摂氏零下十一度にまで外気温が下がるという霧深い谷の、瀟洒な木造校舎に足を一歩踏み入れたとたん情景はモノトーンから極彩色に変わり、まるで夢の世界が現出。明るい喧騒のなか子どもたちが屈託なく遊んでいる姿が眼に飛び込んできたのだが……。

非民主的体質とワンマン運営を露出させた内紛劇

　同校の現在の生徒数は七十八人。九十人定員のはずなのに欠員が出ているのは、開校半年も経たない昨年九月、十数人もの児童がここを辞め転校していったからだ。じつは同校では一学期を終了した時点で授業方法や学園運営をめぐって内紛が表面化し、理事長・学園長ら主流派が反主流派教師・寮母計四人を解雇。この過程で保護者間に

学園への失望と不信の声が沸き上がり、一部児童の引き上げという事態にまで発展したのである。解雇劇は四人が和歌山地裁に地位保全を訴えたものの年末になって和解が成立、職場復帰なしの金銭授受でいちおうの解決をみた。が内紛は、表看板とはまるで逆の学園の非民主的体質とワンマン運営を浮き彫りにしたのだった。

争議中、同校の謳い文句である「大人も子どもも等しく一票」「すべての決定は話し合いで」はまったく無視された。解雇の賛否を問う児童たち自身のアンケートでは、反解雇側の子どもが半ば強引に回答を集めた事情もあって、過半数の児童は「解雇に反対」。ところがその集計結果は反故（ほご）にされ、子どもたちの意思は無視された。つまり「学校に子どもを合わせるのではなく子どもに合わせた学校を」という英国の自由学校「サマーヒル」の創始者ニイルの言葉は履行されなかった。この学園の金科玉条を否定した責任者こそ、ニイルに心酔する堀真一郎氏であった。同校では堀氏の意思が最上位に置かれ、これには誰も文句を言えない〝天皇制〟ができ上がっていたのである。

権力性を自覚しない「予定調和的思考」

いうまでもなく、あらゆる組織集団にあっては指導（または支配）する者とされる者とが存在する。これは不当でも不自然でもない当たり前の現実だ。とくに新しい何かをつくろうとする小集団では、カリスマ的な指導者が皆を統轄し独走してこそ不可能も可能になる。きのくにの場合、堀氏はカリスマであり、それ以外のメンバーは堀氏に匹敵する力はとうてい持っていなかった。そもそも、自分の家屋敷を抵当に入れ不退転の決意で学校づくりを志し、関西財界その他から二億四千三百万円もの浄財を集めた堀氏と、学校づくりの理念に共鳴して会社員から転身した一教師とが、まったく同じ効力の一票を持つなどありえない話である。ましてや堀氏と単なる一児童では票の重みは月とスッポンほど差があろう。

ところが、善良なメンバーたちは「皆が平等」という美しい物語を文字通りに信じていた。物語には「堀先生は別格」という暗黙の了解が併存していたのだが、全員が理念に結ばれ仲良く夢を語っているうちはこれは暗黙のまま了解されていた。しかし学校ができて現場で教育が始まり、その具体的な学習方法をめぐって意見の相違があらわになったとき、「皆が等しく一票」「常に話し合い解決」というタテマエは座礁した。タテマエを尊重すれば学園運営に支障が出る。このため権力を持つ「堀派」は理念をタテにとる「平等派」を切ったのである。学園側は四人の解雇理由に「理事長・学園長と対等の権限を主張し学園運営に非協力的」を挙げたが、もともと「全員は対等」が学園の理念なのだから「対等の権限を主張したからクビ」というのは誰が見てもおかしい。子どもを転校させた父親の「学園側こそ自らの理念を踏みにじった」との怒りは当然至極だったのだ。

こんなことなら最初から「権力の所在は理事長・学園長にある」と言っておけばよさそうなものだが、それでは一般の学校と同じだから……ではなく、そもそも世間知らずの善人たちで構成した同校の運営主体には権力性の自覚自体がなかったのである。



堀氏からすれば、子どもたちへの最良の教育を考えれば誰しも自分と一致した方法をとるはずだ、そうでないのは子どもたちへの配慮が足らないからだ、という思いでいっぱいで、権力を振りかざしたつもりなど毛頭なかったろう。これは挫折を経験しない秀才が陥りやすい独善なのだが、こういう秀才によって統治される場では凡人の異なる意見を調整し合う泥くさい民主主義など根づくはずもない。民主主義を超越した堀氏の「予定調和的思考」が、支配原理として学園全体をただ貫くだけなのだ。

権力性の無自覚は管理意識の欠如につながっている。私は喜田理事長と話した際、善良でリベラルな老理事長にとって「学校管理」の概念とはイコール「管理教育」、つまり髪型や服装の規制、厳格な校則や懲罰といった狭義の管理しか意味していないことがよくわかった。彼は自分もまた学校管理者の一員だとの認識を持っていなかった。この学校では世に言う「管理教育」はたしかに行なわれていないが、自然の「オリ」に閉じ込めた子どもへの保護と監視、つまりソフトな管理は常時行なわれている。その管理を、する側の教職員もされる側の児童たちも管理だとは気がついていない。これは管理の理想、最高形態にほかならない。マスコミが「管理教育全面追放の場」と絶賛した同校は、実態はその逆の「管理教育全面貫徹の場」なのである。

このように同校では、物事の真実を直視する習慣などもともと誰にもない。だからこそ学園の目玉授業、教科の枠を取り払ったプロジェクトと称する体験学習を無邪気に自慢できるのだろう。私が見学したのはお絵描きや料理、工作など室内作業だが、「遊びを通して学ぶ」という通り、見た目は単なる遊びそのものだった。机の端で寝そべっている子、勝手におしゃべりに興じている子、ふざけ合って落ちつかない子など、子どもの自主性やヤル気を尊重しているといえばそうだろうが、これでは少なくともケジメは児童たちの身につくまい。我慢、辛抱は言うに及ばず、最低限のマナーやエチケットさえもここの児童たちは獲得するのかどうか。それでもプロジェクトが真に遊びを学びへと転化させていればいいが、果たしてそうなっているのか。

教育をなめた安直な姿勢

同校のプロジェクトのような体験学習あるいは総合学習は、過去の日本の教育界で「大正自由教育」「大正新教育」としてすでに経験ずみである。

一八九九年（明治三十二）、東京高等師範付属小学校の教師であった樋口勘次郎は著書『統合主義新教授法』を世に問い、子どもに一定の文化的内容を伝える営みである教育においては、教師の一方的な授業よりも子ども自身の自発的活動によって学ばせる方法が効果的だとする「新教育」を提唱した。これはもともと一八世紀以降のルソーやペスタロッチらの思想に源流を持つものだが、日本の都市部に富裕なインテリ階級が層として形成された明治末期から大正時代にかけて「新教育」は師範付属や私立の小学校で次々と試みられるようになった。

当時、その実践校であった明石、奈良の女子師範付属小には年に万を越す教師らが全国から見学につめかけ、また教育雑誌でも頻繁に新教育・自由教育の特集が組まれるなど、「新教育」は一種のブームを巻き起こしたのである。しかし、魅力ある新方法としてこんなにも注目を集めた「新教育」は、実際には一般に敷衍しなかった。この方法を評価し支持する親が都市の富裕な新中間層でしかなかった背景がある一方、「新教育」を実践するには教師に抜群の力量を必要としたからだ。つまり、教師が教えようとする内容をあたかも子ども自らが望んで学ぶがごとく采配することや、遊びの中に含まれたさまざまな学習要素を当意即妙に教科に結びつけて子どもの知的好奇心を体系的な知識にまで発展させることは、凡庸な平均的教師にとって荷の重すぎる難題であった。中途半端な実践では単に子どもを混乱させるだけに終わってしまうことは明らかだから、自らのぶんざいを知る教師は手を出せなかったのである。

このような日本教育史上の経験が、きのくに子どもの村学園に踏まえられているとはとうてい思えない。大正自由教育の推進者たちが子どもの自発性を効果的に活かす教育方法を醒めた目で構想したのに対し、きのくにの場合、子どもたちに材料を与えて自由にやらせれば大人が教えたい知識を自主的に学習するはずだという予定調和的で楽天的な子ども観に則っている。この学園の教師がほとんど全員教職経験のないシロウト集団である事実は、教師―児童の関係を横並び一線にしたいためだけでなく、教える側―教えられる側という基本構造さえ否定していいとの考えからだろう。しかし、いくら少人数クラスとはいえ、体験学習、総合学習のような指導する者の博学と即興性が容赦なく試される場で、シロウト教師でよしとする神経は楽観的どころかあまりにずさんである。これではまるで、運転免許をとったばかりのドライバーがチームを組んでいきなりF1レースに出場するようなものであり、教育という営みをなめた安直な姿勢ではないだろうか。

二重の意味での教育機関としての失格

堀氏は各方面からの疑問に答え、プロジェクト授業でも子どもたちの学力面での心配はないと言いきっている。私はこの堀氏の言葉を否定する気はなく、児童が同校で体験学習をみっちり重ねて疑問点や研究項目を整理しておき、週末や夏休みに帰宅した際それらを系統的に調査し研究して自分の頭に定着させていけば、十分受験にも対応できる学力はつくと思う。しかし、このことは言うは易いが現実にはなかなかたい



へんな行為であって、地道な学習を好まない性向の同校児童が実際にそのような努力をするとは考えにくい。換言すれば、もしそのようにして自分でどしどし学習していく意欲と能力のある子どもならば、あえてきのくにのような閉鎖的で不便な学校に学ぶ必要はない。都市のふつうの学校に通学し、週末に山や海に出向くなり家庭の内外で料理や大工仕事などの体験を積めばいいのである。

しかし実際のところ、この学園で学力がつくかどうかは本質的な問題ではない。同校の抱える最大の問題は、創設者堀氏が公言している「ここでは壁をつくらない」という学園の基本方針そのものにある。きのくにの「壁をつくらない」方針とは、二重の意味で同校が教育機関として失格であることを示しているのだ。

世の中とは壁だらけのところである。これを仮に不当だと捉えるとしても、人は壁の中で生きていかねばならない以上、その壁と交渉を持ち駆け引きし、場合によっては「壁」を打ち倒していくために、成育過程で否応なく壁にぶち当たる経験を積まねば仕方がない。しかも「壁」とは人間にとって少しも悪い存在ではない。「壁」に該当する深刻な対立や葛藤、ディスコミュニケーションこそ人間にとってその成長を促す契機だからである。

心理学者の河合隼雄は著書『日本人とアイデンティティ』のなかで、まさしく「壁」という表現を使い、教育における「抑制者」の必要性を次のように力説している。

「青少年に対して、親や教師が不退転の壁として存在するとき、彼らの巨大なエネルギーがそれにぶつかり、分化し統合されて、青少年の成長が生じるのである。この抑制者を失うとき、エネルギーは単に暴発するだけで、自分のものとはならない。それは境界をこえて拡散してしまうだけなのである。個性を自由に伸ばしてゆくためには、強力な抑制者が必要であるという、人間のもつパラドックスをわれわれ大人は忘れていなかっただろうか。大いに反省する必要がある。子どもを理解するとか、自由を尊重するという美名に隠れ、その本質を理解することなく、自ら抑制者として子どもの前に立ちはだかる義務を放棄してきた大人が、随分と多かったのではなかろうか。」

壁のないところで育った子どもが、この厳しい社会で生きていけるとはとうてい思われない。「壁をつくらない学校」は学校の一歩外にある人間社会の非情さや残酷さに対しての免疫を子どもに植えつけることはできない。だから、きのくには教育機関と

して失格なのだ。
しかも、である。実際には、常時開放的な職員室で教師と児童とが愛称で呼び合っていようとも、大人と子どもでは役割や立場が異なる以上、そこの空間にも見えない壁はやはり存在する。その壁とは硬質ではなくソフトで子どもにからみつくような壁であり、これをつくっている大人たちにはその「壁をつくっている」という自覚すらない。すなわち、こうした欺瞞を一方で無意識に演じながら「壁をつくらない」と喧伝するきのくにには、この意味でも教育機関として失格なのだ。

もっとも新しい子捨ての場

教育機関でなければ、では、きのくに子どもの村学園の本質とはいったい何か。
一言で言えば、この学校は「もっとも新しいタイプの子捨ての場」である。
かつて親は学校・教師に期待した。やがてそれは塾への依存へと変わっていった。しかし、子どもは塾が終われば家に帰ってくるから、やはり親は子どもの面倒を見なければならない。そこで親は思ったのだ。子どもの学びも遊びも生活もまるごと全部を誰かに委託すればどんなにいいだろう、と。その高度消費社会の親たちの要求にかなう「新型の保育センター」がきのくになのである。
「子捨て」といえばふつうどこかにウエットな感情や罪悪感がつきまとう。誰か悲しむ人間が必ず出てくる。しかし、きのくにの「最新版子捨て」は親も子も受け入れ先の学校もこれを「子捨て」だとは気がつかない、明るく楽しいドライな子捨てである。きのくにというもっともトレンディなブランドを身につけて、あたかも自分たちが立派で意義ある行動をとっているかのごとく錯覚し合う親と子は、両者が物理的に直面して日々の悩みや喜びを共有するといったダサイ生活にはなんの未練もない。
一昔前、山村留学という制度が注目を集めた。都会の子が過疎の村の老夫婦宅などに寄宿して地元の学校に通い自然の中で心身を鍛える、というものであった。これも「子捨て」の一種にちがいないが、この制度は子どもに他人の家庭での生活を通して自らの育ってきた文化を検証させ、結局は自分ひとりの力で人生を切り拓かねばならないと思い知らせるだけの厳しさを内包していた。この山村留学のかつての主要県であった和歌山で同制度が衰退し、それに取って代わってきのくにが登場したのは、大衆社会状況の進展に伴い豊かな日本の家族がいっそう形骸化しまた安楽志向になったことを示している。
私がきのくにを訪問した際、保護者会のため親たちが来ていた。ひとりの父親に娘を入学させた動機をたずねると、答は「規格品にしたくなかったから」だった。脳天気な新聞記者なら膝を打って納得するのだろうが、私はこの父親の主体性のなさにただあきれかえった。一般の学校の画一的な教育では娘は規格品にされる、だから自由を謳う学校の教育で娘を自由人に育てる……。ならば父親としての教育、父自身の娘への影響力はいったいどこにあるのか。どちらにせよ人にお任せすることに変わりはなく、かつ、お任せ先次第で娘のありようを決められてしまうとは。この父親は自分で気がついていないが、娘の力も自分自



身の力もまったく信じていないのである。

きのくにのプロジェクト授業はいずれも動きがあってにぎにぎしいため、子どもたちがさもたいそうな体験をしているかのように一見思える。しかし冷静にこれを眺めたとき、中身の中途半端さは覆うべくもない。模擬体験を端緒に子どもたちが既成の文化内容を系統的に学習していくには、教える側の人材は不十分にすぎ、教えられる子どもの側によほどの向上心と忍耐力がなければ遊びは遊びのまま完結してしまう。四つのプロジェクトのうち、たとえば料理を主にした「うまいもんをつくる会」にも、工作を中心に活動する「きのくに工務店」にも、児童に「壁」となって立ちはだかるコワモテの料理人やプロの大工さんは存在しない。ゆえに子どもたちは、高度な専門性にふれておのれの技量の未熟さを知り自分も本物への道を志すことや、専門職業を持つ大人を虚心坦懐に尊敬するような機会ともまず縁がないのである。

「異質の他者」の排除では真の個性は育たない！

すべてがシミュレーションであるきのくにでは、創設者堀氏の「予定調和的思考」にかなう同質の人間ばかりが集められ「異質の他者」は排除されている。教育を食生活になぞらえるなら、ここにいる児童は口当たりのいいハンバーグやエビフライを毎日食べてさえいれば、小魚や海草や人参のような歯ごたえのあるマズイ食品は口にしなくとも大きく育つというわけだ。容赦のない他者との葛藤の中で鍛えられ練り上げられてこそ真の個性や自主性が光り輝く実相を想起すれば、未熟なきのくにの無邪気さは、子どもの芽を伸ばすどころかむしろ芽のまま立ち枯れにさせるものだといえよう。子どもたちにとって、学園を出たあとまわってくるツケはあまりに大きい。

きのくにの教育が子どもに功を奏するのは、子ども自身が学園の欺瞞性と限界性に気づき「ここではダメだ」と足蹴にして立ち去る瞬間だけだろう。そのとき果たして、子どもは学園の外で自ら何事にも対応できる力を獲得できているのだろうか。

学園では来年四月から中学校が発足するが、この展開は新たな波瀾を予感させる。中学生ともなれば体は大きくなりセックスの問題もからんでくるため、現在のようなソフトな管理のままですむのかどうか。善良な大人たちにとって予想外の事態が起こる可能性もあり、中学開設はあるいはきのくに大変革の起爆剤となるかもしれない。

バカ語録
一億総キョーイク評論家
寺脇研の巻
〈文部省初等中等教育局職業教育課長〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

私は、鹿児島のラサールから東京大学と進みました。父親がそれを強く望んだんです。私は偏差値教育の犠牲者であったと思っています。父は仕事を離れたら、生きる活力さえ失ってしまった仕事人間でした。その父の姿をみて、人生八十年時代、余生を楽しめる人間を育てなくてはならないと思い、私は文部省に入り、偏差値教育という見えない怪物と、挫折を繰り返しながら戦っているんです。（『プレジデント』一九九三年五月号）

＊

ヌケヌケと嘘を言うのは政治家の得意技だが、どうしてどうして官僚もたいしたものだ。偏差値があろうがなかろうが、父親が望もうが望むまいが、成績優秀だったから東大へ進めたのだし、それは自分の意志ではないか。特権的位置にいながら「犠牲者」とはよくも言ってくれた。ちゃっかりまわりのせいにしながら、犠牲者の子どもはやっぱり立派に犠牲者の道を歩ませているんじゃないのかね。

だいたいこの人、思考回路が変だ。いくつだか知らないけれど、本庁の課長クラスなら四十代ぐらいかね。二十何年前の大学卒業時点で、人生八十年時代なんて言われてなかったぞ。つまり今言われていることをまるで当時自分が見越していたみたいに理屈づけしているわけだ。第一、余生を楽しめる社会をつくりたいなら厚生省に入ればいいじゃないか。なんで文部省に入ると余生を楽しめる人間が育てられるんだ。まるで偏差値教育を受けたが最後、余生を楽しむことはできなくなってしまうみたいだ。

どうも国民に媚びを売るためにいいかげんなことを言う癖がついているんじゃあないのか。確かにこういういいかげんな論理をふりまわしながら平気で官僚のイスに座っていられるのを見ていると、偏差値の弊害という声に同意したくなってくる。だけどその場合の「犠牲者」は、彼自身ではなく、そのいいかげんな論理に基づいた施策を享受しなくてはならない私たちである。

偏差値教育を「目に見えない怪物」などと妄想してドン・キホーテよろしくあれこれ挫折を繰り返す光景を見せていただいて、それはそれで私たちも「余生を楽しませて」もらっているのかもしれないが、そのたびに教育現場の人たちを翻弄するような結果を招くことだけは慎んでもらいたい。断わっておくが、偏差値は少しも「目に見えない怪物」なんかじゃない。むしろこんなによく見えるわかりやすい指標は他にはないのであって、そういうものを考えもなしに追放するときこそ、「怪物」が現れるのである。

【体験記】アメリカのハイスクールはどうなっているのか？

アメリカの高校は
日本のそれにくらべればずーっと自由だった。
もちろん不幸になる自由を含めてのそれであるが。
一高校教師が見た
アメリカのハイスクールの実態とは？

由紀草一
（公立高校教諭）

サミット市はニュージャージー州の北西の端にあり、道がすいていればマンハッタンまで車で一時間たらずで行ける。私たち——私と生徒たち——は昭和六十二年の三月、貸し切りバスでニューヨークからこの市に入ったのだが、別荘かお伽の家のようにさえ見える瀟洒な家並みにまず目を奪われた。

街全体に緑も多く、住宅地というより軽井沢のような高級リゾート地といった印象だった。若い頃は大都会で一所懸命に働き、ある程度の歳になったら郊外に家を持って、犬を飼ったり園芸をしたり、のんびり暮らすのが平均的アメリカ人の夢だと聞いたことがあるが、ここの住民はそういうアメリカン・ドリームを実現した人たちにちがいなかった。実際、人生の成功者が住む場所にふさわしく、地価は近隣の街に比べても非常に高く、早い話が薄給の高校教師など、管理職でなければここには住めないそうだ。

私たちはこの市の真ん中にあるこれまた非常に綺麗な学校——大きな博物館のような印象で、前庭の芝生の上にはリスが走り回っている——サミット・ハイスクールにまず着いた。ここに私たちをホームステイさせてくれるホスト・ファミリーの人たちが出迎えに来ていて、生徒たちは三々五々それぞれのファミリーへ引き取られて行った。一カ月間の「日米交換留学プログラム」はこうしてはじまった。

◆◆◆◆◆◆ 日米交換短期留学生を引率して

このような「短期留学」は現在では茨城県だけでも相当数の高校で実施されている。私の勤務校はもっとも早い時期にCIEEというアメリカの機関を通じてサミット高と姉妹校の提携を結び、毎年十五人前後の生徒をアメリカへ送ることを看板のひとつにしていた。転任したての英語教師である私が、一人で生徒の引率をするように言われたこのときで第四回目。

つけ加えて言うと、「交換」というタテマエだが、アメリカ側から生徒が来たことはいちどもなかった。それと、他にも理由はあったのだろうが、サミット高との関係はこれを最後にして打ち切られた。その後は別の機関による短期留学プログラムに代わり、私もこの三年後、こんどはカリフォルニアへ行った。

　私がアメリカの土を踏んだのは現在までこの二回で全部である。ただ、「アメリカの高校」というと、初めて見たこともあって、サミット高の印象がどうしても強い。私は彼我の違いと案外な類似点の両方にとまどいながら一カ月を過ごした。この戸惑いを軸として、私にとってのアメリカン・ハイスクール――のほんの一例にすぎない――の印象を述べていこう。

◆◆◆◆◆◆アメリカで聞いた日本への誤解

　ただ、そうすることは、アメリカに対するいらざる誤解を伝えることになってしまうかもしれないと多少は懸念される。日本人が外国というとまず第一にアメリカを思い浮かべるというぐらい、かの地は身近な国だが、それでも――それだからこそ――誤解や偏見の種には事欠かない。第一、あんなバカでかい国のことである。ハイスクールひとつとっても、私が二番目に見たカリフォルニアとサミットでは非常に違っている。このことは幾重にも断わっておかなくてはならない。

　逆に、アメリカで聞いた日本に対する小さな誤解をまず紹介しておこう。当地のホスト・ファミリーを探すなど、私たちの受け入れ態勢を整えてくれたTC（ティーチャー・コーディネーター）はウィラー先生という東洋史の教師だった。歳は五十ほど、でっぷりした大男で、立派な髭をたくわえ、頭ははげている。ちょっとオーソン・ウェルズに似ている。懐が深い、優しい人物であることはすぐわかった。

　いちど彼から、日本の教育について授業をするから来いと言われて行ってみると、ひどく古い雑誌が教材として使われていた。私はコピーをもらっただけだが、日本特集号らしかった。その記事の一節には、昔有名だった「教育ママ」(educational mother と訳されていた)が取り上げられていて、彼女たちは子どもが病気で学校を休んだようなとき、代わりに学校へ行ってノートをとってきてやるのだ、と書かれていた。これは本当かね、とウィラー先生に聞かれたときには少しまいった。

「そんな話は聞いたことがない。教育ママの評判が悪いのは、自分は勉強なんて大嫌いなくせに、子どもにはやらせようとするからだ」と答えると、ウィラー先生はほほうという顔をした。「聞いてみなくてはわからんものだな」、と。それから、これは雑誌の記事とは別に、「日本の教師は給与は高いのだろうね？」とも聞かれた。

「日本でもときどきそういう誤解があるのは事実ですが、そんなことはありません。少なくとも茨城県の場合、一般サラリーマンに比べれば安いほうです」

「へえ、またひとつ新しい事実を学ばせてもらったね。それでは、授業時間数は？　きみは一日何時間ぐらい授業するね？」

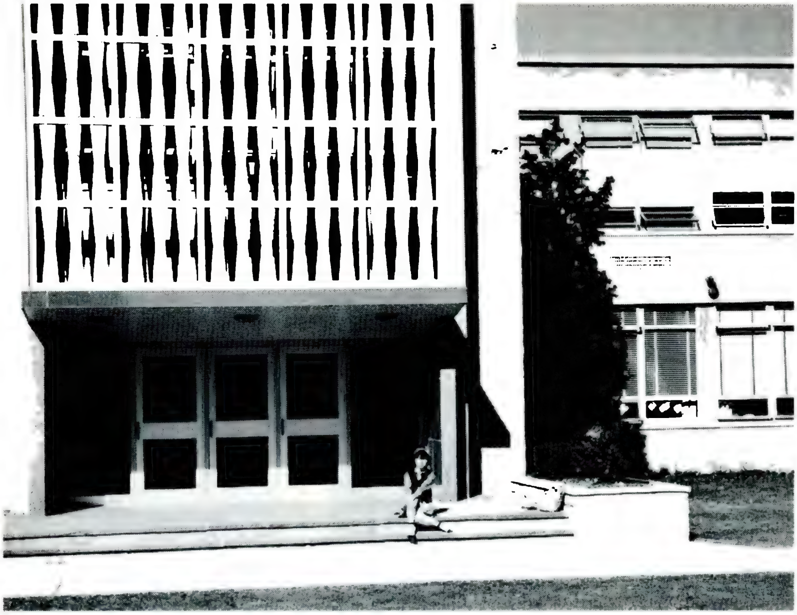
「平均して三時間というところです」

「それは少ない。空き時間には教科の研究ができるわけだ。とてもいいことだと思う」

　この学校では教師は一日五時間ぐらいの持ち時間になっている。ただし、いわゆる生徒指導などはしなくていいアメリカの高校教師の労働条件と、日本とを単純比較するわけにもいかないが。ただ、ごく一般的には、アメリカで小中高の教師は給料も安く身分も不安定で、決してよい職業とは思われていないのは事実だ。ウィラー先生の質問にはそういう思いもこめられているのは充分に見てとれた。

◆◆◆◆◆◆本人を前にして「バッド・スチューデンツ」と言う率直さ

　サミットに着いた次の日、ホスト・ファミリーと初めての晩を過ごして再び学校に集まった私たちを、ウィラー先生が案内してくれた。ある狭い一室で、生徒が二十名ばかり、仕切り板つきの机に向


サミット高正面。建物は白亜で，その前に芝生が広がっている

かっているのを、彼はここは謹慎室だと説明し、さらに「バッド・スチューデンツ」と彼らを紹介して、愉快そうに笑った。紹介された生徒たちのほうは無表情だったが、私は初めて、さすがはアメリカだな、と感心していた。日本人の教師なら、本人の目の前で「悪い生徒」とはまず言えない。たとえユーモアでも、というか、こういうのはユーモアにならない。

謹慎室の隣りに、この学校の教頭の一人、ジョージ（これがファミリーネーム）先生のオフィスがあった。サミット高は大所帯であるため、教頭が二人いる。教務関係と生徒指導関係の教頭で、ジョージ先生は後者のほうだ。背が高くてがっちりしており、精悍な顔つきで、いつもはニコニコしているが、怒るとこわそうだ。ジョークが好きで、豪放磊落なようだが、じつは案外神経が細かい。最近少なくなったとはいえ、日本にもよくいるタイプである。

この人が日本人びいきで、ウィラー先生と協力して、いろいろ私たちの便宜をはかってくれた。自分でも一人の日本人生徒のホストを引き受け、隣りに住んでいる義理の両親——奥さんの両親——一家に、日本人教師、つまり私のホストになるよう頼んでくれた。

そういうわけで、私はかなりの時間ジョージ先生と行動をともにした。これは非常に面白かった。この学校の生徒指導がどういうものか実地に見学できたからである。毎朝、ジョージ先生は自分の家にいる生徒と私を車に乗せて学校まで行く。それから、秘書が一人いるオフィスに入る。

ちょっと話があるからいっしょに来いと言われたようなとき、私もくっついて入っていったことがある。するといろいろな生徒がやってきた。皆、前の日に何かしでかしたバッド・スチューデンツだ。遅刻、授業からのエスケープ、ロッカーを蹴とばしてへこませた、指定外の場所での喫煙、教師に対する暴言……などなど。ジョージ先生は教師からきた報告書を読み上げ、「ノー・エクスキューズ（言いわけはないな）？」と念を押してから——たまに言いわけをする生徒もいたが、彼は決して聞き入れなかった——警告、親への連絡、謹慎などの処分を申し渡す。これが、十分あまりのジョージ先生の朝の仕事である。

「毎日こんなことをしなければな

らないのは残念だが」とジョージ先生は言った。「最低限の秩序でも保とうとすればやむをえない。昔はハイスクールはもっとずっと自由だったんだが、六〇年代のひどい荒れ方を経験してから、学校も私も変わったよ」

それでも、ニューヨークのある学校のように、生徒が銃を持っていないかどうかをチェックするために必ず金属探知機を通過させ、二十四時間態勢で武装したガードマンが見張っているところに比べれば、この学校は数段ましだ、とも彼は言った。

ただ、ずいぶんきちんとやっているようだが、彼の生徒指導も完全には徹底していない。たとえば指定場所以外での喫煙の禁止。ちょっと解説すると、アメリカでは未成年者は酒・煙草は買うことも禁じられているが、一方高校生からなるべく大人扱いしようという風潮もあって、日本では大学生のそれが見過ごされるように、高校生の飲酒・喫煙は見過ごされる。しかし嫌煙権が強く主張されるようになってからのアメリカでは、どこでもそうだと思うが、公共の建物では喫煙室以外では煙草は吸えない。もちろん教師もそうだから、私はたびたび喫煙室になっている教員用ラウンジへ行かねばならなかった。

生徒のためにも、喫煙してもいいエリアが一カ所決まっているそうだが、これはほとんど守られないようだ。ヘビースモーカーの生徒は、授業の合間に一服するのに、わざわざそこまで行かない。なにしろ、休み時間は四分しかなくて、しかも教室移動があるのだ。そこで、日本の場合と同じく、トイレで吸う。女子トイレでも煙草の煙がもうもうと立ちこめていて、髪の毛に匂いがついてしまうと、日本人の女子生徒がこぼしていた。

生徒指導にも、運動のコーチにも別の給与が支払われる

ジョージ先生は、学校中の全部で五十もあろうかという部屋の鍵を一束にしたものをじゃらじゃらいわせながら、巡回して歩くのも仕事にしていたが、煙草までなんとかして取り締まろうという気は、少なくとも当面はないようだった。もしそうしようとすれば、教職員のチームを組んでやるしかないから労働条件がますます悪くなる。そういうことを考慮しなくてはいけないのだ。

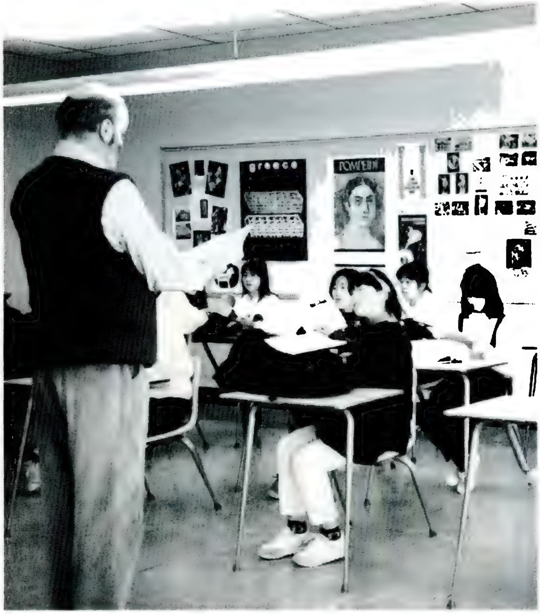
一般の教師は、日本のような生徒指導の義務はないようだったが、まるっきりやらないというわけでもない。たとえば昼食のときのカフェテリアの立ち番。この国には今も、古いスラップスティックス・ギャグでおなじみのあのパイ投げの伝統が残っているらしい。昼食のとき食物を投げてはいけないということは、ちゃんと注意書き（校則？）にも明記されている。そんなくらいだから、詳しくは聞かなかったが、昔ずいぶん盛大な投げ合いがあったらしい。

そして、ものすごく混雑する昼食時、教師が一人、必ずカフェテリアの隅に立っている。いちどウイラー先生が立っているのを見たとき、私がこういう生徒の見張りというようなことを教師がするのは日本だけかと思った、と話しかけると、彼は、これも授業と同じように教師の時間割りに組み込まれているんだよ、と答えた。つまり、一日平均五時間の持ち時間のうちにこれもちゃんと入っているのだった。考えてみれば、それがあたり前なのだ。さらにここでは、部活動のコーチに専門の人を雇うことも珍しくないが、教師がコーチを引き受けた場合には、それはまた別に給与が出る。これまたあたり前で、日本も早くそうなるべきだと思う。

少し話がそれたのでジョージ先生のことにもどると、彼は放課後週にいちど、このカフェテリアへ問題を起こした生徒を集めて注意する。私はいちどだけそれを覗いたが、なるほど豪傑だろうな、と思えるアメリカの悪ガキ諸君が、ふふん、とでも言いたげな表情で話を聞いている。昔は、このときに残飯が飛んできたこともあるそうだ。生徒指導を一手に引き受ければ、いろんな目に遭うのはわかりきっているとはいえ、つらい話である。

このあと私はジョージ先生と肩を並べて――いや、彼の肩と私の

頭を並べて家に帰った。学校を出る間際、一人の女の子が所在なさそうにうろちょろしているのを見つけて、ジョージ先生が、
「早く家に帰れ」
と声をかけると、
「指図しないでよ」
と向こうは答えてすばやくどこかに身を隠してしまった。日本でもあまりに見慣れた光景だったので、私は思わず苦笑せずにはいられなかった。ジョージ先生も笑った。この生徒との愛情あふれるやりとりが、この日の彼の仕事のやりおさめだった。



日本の生徒に、サミット高の説明をするウィラー先生

◆◆◆◆◆◆「ユリシーズ」から「英語のスペル」を勉強するクラスまで

私たちはサミット市に来る前にワシントンD.C.とニューヨークを四日ほど観光した。引率者としての私の役割はそれでほぼ終わりだった。ホーム・ステイに入ってしまえば、原則として生徒を監督する役割は各ホスト・ファミリーに移る。とくに、家庭訪問というようなことはアメリカにその習慣がなく、へんに思われるからやめてほしいと、CIEEから事前に渡されたパンフレットに書かれていた。そこで私は、学校で一日に一時間つくってくれた「ホームルーム」の時間以外は日本人の生徒と会うこともなく、たいがい一人で過ごした。ときどきラウンジで煙草をふかしたり居眠りをしたり、図書室で本を読んだりする以外は、授業を見学するしかなかった。

私は英語教師なので、主に英語の授業を見るようにすすめられたのは、今から考えると冗談みたいな話だ。あたり前だが、Englishとはこの国では国語なのである。

半分以上が選択教科になっているサミット高のカリキュラムのうち、英語は必修科目のひとつで、同一学年のなかでAからJまでの十のクラスに分けられていた。これは何で分けたのかと聞くと、前年度のテストの結果だという。つまり、能力別のクラス編成なのだ。

Aクラスの授業を担当しているのは、たいそう有能な教師だそうで、ぜひ見学するようにとジョージ先生に言われた。そこで出てみると、驚いたことに、この教室ではとくに何も行なわれていなかった。コンピューターはたくさんあって、口髭をはやした有能な教師と、十数名いる生徒の何人かはそれに向かって何かやっている。二人で頭を寄せ合って相談しながら手紙らしきものを書いている生徒もいる。じっと本を読んでいる者もいる。教師は生徒から話しかけられたときには答えるが、他に指示らしいものは何ひとつ出さなかった。やがて終業のベルが鳴ると、生徒たちはさっさと教室から出ていってしまった。

あとでジョージ先生に聞かれたので、私は正直に自分の見たままを話し、「しかしすばらしい授業だと思う」と、これまた正直に感想を述べた。もしそれが可能なら、教師からはできるだけものを伝えないようにするのがいい、それで成立するのがつまり「よい授業」

なのだと、私は以前から信じていたからである。ジョージ先生は、
「たぶん以前に課題が与えられて、それを終了してしまった生徒は、別の課題に取り組んだりしてるんだろうね。彼らは優秀だから、今自分にとって必要なことは何かぐらいは、言われなくたってわかる。下のクラスへ行くと、残念ながらそうはいかない」
と言っていた。
　次の機会に私は、初老の女性教師が担当しているBのクラスに行ってみた。このクラスには、ホスト・ファミリーのお嬢さんが出ていて、彼女からいちど来るようにすすめられてもいた。フランス系で、家ではフランス語でやりとりしているのだそうだが、落ち着いた聡明ないいお嬢さんだった。彼女が出ているくらいだから優秀なクラスにちがいなかった。
　このクラスはちゃんと統一された授業だった。ペンギン・ブックスか何かのジェームズ・ジョイス著『ユリシーズ』をテキストに使い、その解釈をやらせているのだ。先生の本がぼろぼろに年季が入っていたことがまず印象的で、ずいぶん長い間同じものを使っているにちがいなかった。もっとも、それだから同じ授業をやっているのだとは言えない。生徒は当然毎年変わるのだし、授業中主にしゃべるのは生徒だからだ。


グッバイ・パーティーで司会をするジョージ先生

　よく言われることだが、アメリカの生徒はたしかにじつに積極的に発言する。難解をもって鳴るジョイスのテキストに関し、臆せずにどしどし自分の考えを述べ、それに対して賛成だとか反対だとか、またたちまち意見が出る。だから先生はいちいち指名する必要もなく、ときどきうなずいては、自分も意見を言い、生徒たちの意見をまとめる、というふうだった。べつに結論は出さなかった。文学作品の解釈にそんなものがあるはずはない、と思っているのかどうかわからないが、ともかく非常におっとりしていて鷹揚で、テキストは一時間で二、三行しか進まない。そういうのがここでの英語の授業だった。

「すばらしい授業」の二つの前提

　それはそうと、生徒の積極的な授業参加ということについてここで一言しておこう。これがすばらしいんだと言う人が日本ではまだ多いからだ。私もどちらかというとこんな形態が好きだが、それには最低二つの前提をふまえなくてはならない。
　まず、どの授業でも、よく見ると発言するのはだいたい三分の二ぐらいの生徒にかぎられるということ。日本のように、黙っている生徒はずっと黙っているし、所在なげにいたずら書きをしたりペーパークラフト（折り紙）を作っている者もけっこういる。教師にはこういう生徒に対する配慮は見られない。いや、あるのかもしれないが、一方では非常に積極的に発言する生徒も多いので、実際問題としてそれへの応対だけで終わってしまうしかないというのが実状のようだった。いずれにしても、授業に参加する気がなければいくらでも置いておかれるし、それを誰も疑問には思わない。その雰囲気はたしかにあった。
　次に、いったい高校生ぐらいでどれくらい自分の意見を持てるのだろうということ。私は、あのフランス系の少女が、アメリカ史の

授業で、現代世界におけるアメリカの役割について発言しているのを見た。失礼だが、このときには、これは彼女の父の意見か、CNNのニュース・キャスターの意見か、まずそんなところだろうと思えた。いくら優秀でも、十七歳の女の子が、ジョイスについても国際政治についても意見を言うように求められたら、そんなふうになるのも当然だろう。それでも、将来きちんと彼女が自分の意見が持てるようになったとき、堂々と発表できるように、今その訓練をしておくのはいいことかもしれないが。


ゆかた姿が，なんだかヘン？

まとめて言うと、これは自分の意見を持つことを強制される社会の中で成立する話だということだ。これと、日本のように、高校生でも興味がないことには徹底して無関心でいられる社会と、どっちがいいか、それはにわかには決められないし、仮に決めても、一朝一夕に変えられるものでもないだろう。

能力別授業という一つの見識

さて、最後に、途中をすっとばしてJのクラスに出たときのことを書こう。授業を見せてもらえますか、と担当の中年の女性教師に頼んで、「いいけど、ここは動物園みたいなものよ」と言われたときには驚いた。そんなにひどいのかと、内心びくつきながら参観していたが、べつに生徒たちの態度が悪いということはなかった。

私にしてみると、上級クラスでは完全に無視されていたが、ここでは二、三人挨拶してくれる生徒もいたので、可愛いと思えたくらいだ。やっていることは単語の書き取りで、wallet のlをひとつ落とすような子がたくさんいたようだが、それは日本の高校でも簡単な漢字の書き取りをやらせているようなところはいくらもあるのだから、べつに驚くにはあたらない。

ただ、教師の態度は、あくまで厳格だった。必ず宿題が出されるらしく、最初にその検査があったが、やってこなかった生徒が一人いて、ただちに退室を命じられていた。この学校ではそういうことは許されるらしい。

A、BのクラスとJのクラスの、この鮮やかな差別待遇は、日本的な目で見ると本当にびっくりするが、全入で、将来は奨学金をもらってハーバードあたりに進む生徒もいれば、英語の読み書きがろくにできない生徒もいる、という状態で、授業できちんと何事かをなそうとするなら、こういうのもひとつのやり方であることは認めざるをえないと思う。

不幸になる自由を含めての自由

先ほど書いたことの続きになるが、ここはどうやら、人間には能力に差があるのはあたり前、そうであるならその能力に応じた扱いをするのもまたあたり前という社会らしかった。そして、自分にどれくらいの能力があるものか、他人に示すところまでが全部個人の責任と考えられている。そのうえで、アメリカの高校生は、日本の高校生に比べればずっと自由なのだった。もちろん、不幸になる自由を含めて、の話である。

日本の高校生が、このような「自由」と日本の不自由な「管理教育」のどちらが望ましいと思うか、できれば考えさせたいところだったが、残念ながら彼らはアメリカ滞在が楽しくてならず――一カ月ぐらいならしょせんはお客さまである――あっという間に帰国の日が来てしまったというのが実状だった。たぶん将来、機会があればまた自分で考えるだろう。教師としてはそれだけを期待している。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

平岡英信の巻

〈私立清風中学・高校長〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

たとえば、ヨーロッパでは、生まれたときに、あそこの学校に行きたい、と登録するんです。それと同時に教育資金を貯金するそうです。それに学校側も授業料を安くするなどの措置でこたえる。入学するのは、そこで学びたいというやる気のある生徒ばかりですから学校も思い切ったことができる。受験勉強もなくなりますね。日本もそうしたことができるようになれば、と思っているんですがね。（『産経新聞』九三年二月八日）

＊

恥ずかしながら、小生、こんな制度がヨーロッパにあったなんて知らなかった。まったくのウソでもないようだから、そういう学校が一部にあるのは事実なんだろう。だけどなんで、ヨーロッパではみんながやっているみたいなオーヴァーなことを言うのか。しかも、だからヨーロッパの教育はすばらしいみたいに一般化するのか。あいかわらず西欧コンプレックス丸出しのこういう人があとを絶たないんですね。

ちょっと考えてみてほしい。この言葉、額面どおりに受け取るなら、ヨーロッパの赤ちゃんは生まれたときにもう自分の行きたい学校を知っているということになる。さすがヨーロッパってすごいんだね。

まあ意地悪な冗談はやめるとして、要するにごく一部の教育熱心な親（中産階級以上であろう）が、あそこの学校は伝統もあるし、しつけも厳しいからということで勝手に決めちゃうということでしょう。そうでないとしたら、たぶん特定の地域では、円滑な教育行政をはかるために前もって決めなくてはいけない規則になっているというだけのことでしょう。どっちにしたって、それがどうして「そこで学びたいというやる気のある生徒ばかり」ということになるのかね。

もし事前の登録制度を敷くだけで全国そういうことになるなら、話は簡単。この世にはやる気のない生徒なんてはじめから存在しないことになるじゃないか。

またおよそこの世の中のことで、人間の側の勝手な欲望の多種多様な質に、供給側が過不足なくぴったりと適合するなんてことはあったためしがないのに、この教育者は、ヨーロッパではみんなが行きたい学校を見出しているみたいなことを夢想している。

そういうのんきな夢想に浸っていられるのも、自分の学校がエリート校だからこそだということぐらいは自覚してほしいよね。またこの聞きかじった話の出所が、たぶんあちらのエリート校のものにちがいないということも。

中高一貫校という幻想

目先の進学実績の素晴らしさにばかり目を奪われていると意外な落とし穴にはまってしまう。
中高一貫校の知られざる姿を直視する！

中山治（心理学者）

近年、中高一貫校が脚光を浴びている。もちろん、大学進学実績の高さや、高校受験がないことよる「ゆとり」を生かした人間教育によってである。もっとも、そのほとんどは私立で、公立にはなく、あとは国立にわずかにあるだけである。

ここでは私立の中高一貫校について取り上げるが、これには大学付属校と進学校とがある。今日、議論の的になっているのは、主に進学校のほうである。理由は、東大、京大、あるいは早慶大といった国立、私立の日本を代表する有名大学に大量に合格者を出すようになったからである。

これがなぜ問題かというと、私立校に行けるだけの経済的に豊かな層の子弟だけが難関大学への進学に有利になる、とする危惧からである。なんのかと言っても、一流大学の卒業生が社会の中枢へ進む可能性は大きい。となれば、こうした名門大学が特定の社会階層の子弟に占拠されるのは機会均等の観点からしてどうか。このような主旨であった。こうして、私立の中高一貫校が第十四期中央教育審議会で初めて取り上げられることとなった。

第十四期中教審のおそまつ

第十四期中教審は、一九九一年四月五日に駒場東邦高校と灘高校の校長を呼び、続いて同月二十七日に日能研代表と河合塾本部長を呼んで後期中等教育に関するヒアリングを行なった。テーマのひとつは中高一貫校の問題についてであった。

それであるから、この場で中高一貫校の功罪というか長所と問題点が明らかにされ、それがこれからの日本の教育のあり方にど

う取り入れられてゆくべきかの議論がなされるのかと期待していた。しかし、それはないものねだりに終わった。その場は、単に中高一貫校や塾関係者を叩く場に成り下がってしまったからである。

日能研の機関紙「合格レーダー」夏期臨時増刊号（一九九一）によれば、灘と駒東の校長は西尾幹二氏（電気通信大学教授）に詰問され、自由な討論どころかまるで被告席に座らされているようだったそうだし、日能研代表は村崎芙蓉子氏（医師、『カイワレ族の偏差値日記』の著者）に「武器商人」だとか「あなた方は何人の子どもたちを殺せば気がすむの」と罵倒されたそうである。

この間の議論は公開されてはいないが、二十七日のヒアリングのあと、座長の河野重男氏（お茶の水女子大学学長）が、一部委員の非礼を認めて公式に謝罪しているので、このことはおおむね事実と考えてよいであろう。

しかし、私はこれを知ってあきれ果ててしまった。座長が正式に謝罪したくらいだから相当にひどかったのだろうが、同時にこれは後世に記録されるべきブラック・ジョークだからである。少し「常識」を働かせて考えてみるとよい。中教審というのは「教育を良くする」ための審議会であろう。教育においてもっとも大切なのはコミュニケーションである。コミュニケーションの基本は「相手の意見にじっくり耳を傾ける」ということにある。相手との意見の隔たりが大きいほどこのことは大切である。

私も日能研批判派の一人だが、だからこそ「合格レーダー」をはじめとする日能研の出版物にほとんど目を通して、相手の言い分を少しでも理解しようとしている。こんなことはあたり前のことで、少し社会常識がある人なら誰でもやっていることである。

それを「教育」に関する政府の審議会であり、それゆえにコミュニケーションをもっとも尊重しなければならないはずの中教審が、参考人として呼びつけた人間の意見に「聞く耳持たぬ」態度で相手を感情的に罵るのでは、これはもう議論以前にそういう人の人間性、幼児性が疑われても仕方のないことであろう。学校の「いじめ」や「校内暴力」ばかりか、中教審まで「コミュニケーション不全症候群」に冒されていたわけで、これがたちの悪いジョークでなくていったいなんなのだろう。

ただ、中教審の名誉のために言っておくと、「こんな無礼な審議会は見たことがない。人から話を聞きたくないのであれば、最初から呼ばなければよいではないか」と批判した委員もいたそうである（「合格レーダー」一八ページ）。まさに正論であり、これがまっとうな人間の社会常識というものである。

中高一貫校は意外に生徒を伸ばせていない

さて、こうして中高一貫校について議論するせっかくの機会がメチャクチャになってしまったようだが、私の考えでは、西尾幹二氏も、日能研をはじめとする塾も、そして中高一貫校の先生方も、いずれも中高一貫校を過大評価しすぎている、と思う。

確かに、データで見るかぎり、中高一貫校は東大、京大、あるいは早慶といった一流大学の入試で圧倒的な力を持っているように見える。だからこそ、特定高校からの

Illustration＝下谷二助



入学者数の制限という案も出てくるのだろうが、その実態をもう少し突っ込んで見てみると、決して日能研が囃し立てているほどバラ色ではなく、むしろ逆である。結論から先に入ろう。中高一貫校が進学実績を上げたのは、べつにそのシステムが優れているからではなく、公立学校の荒廃を嫌って優秀な生徒が私立に流れたという、いわば敵のエラーに助けられたからにすぎない。それどころか、中高一貫校はその生徒の素質を考慮するとき、意外に生徒を伸ばせていないのだ。つまり、中高一貫校に入ったがために学力面で伸び悩む生徒がじつに多いのである。以下にそのことを検証していこう。

中高一貫校が伸びた二つの理由

はじめにはっきりさせておきたいのだが、単に一流大学への進学ということだけを考えるのなら、何も中高一貫校などに行かなくても、公立中学、公立高校からも充分可能である。いや、学校などむしろ邪魔なだけで、大検から目指したほうがよほど効率がよいのだ。というのは、一流大学に合格する条件というのは「どの高校に通っているのか」で決まるのではなく、「どれだけ高度な参考書、問題集を自力でこなせたか」ということで決まるからである。

　本屋の参考書売場をちょっとのぞいてみるがよい。東大だろうがどこだろうが、合格してお釣りがくる参考書、問題集はいくらでもある。地方の生徒ならZ会をはじめとする通信添削がある。それをこなせるだ

けの能力の高さと意志の強さを持った生徒が合格する。そうでない生徒が落ちる。ただそれだけのことなのだ。勉強というのは親や教師がいくら騒いだところで、結局は生徒自身が自分の頭で汗をかかなければ絶対ものにならないのだから、あたり前の話である。

では、なぜ中高一貫校が伸びたのか。それには二つ理由があると私は考えている。ひとつは公立中学を嫌って、能力の高い生徒が中高一貫校に集まるようになったからである。では、なぜ公立中学は能力の高い生徒に嫌われるようになったのか。塾関係者はいわゆる「ゆとり教育」による公立学校の学力低下を嫌ったのだという見方をしている。しかし、私はそれよりも公立中学の荒廃の影響のほうがはるかに大きいと考えている。というのは、学校の授業レベルへの不満ならいくらでも補えるからである。参考書、問題集はもちろんのこと、通信添削から塾、予備校までいくらでも手だてはある。

しかし、「いじめ」や「校内暴力」となるとそうはいかない。何よりも学校が落ち着いて勉強できる雰囲気ではなくなってくる。勉強していると足を引っ張られる、というのでは、能力の高い子の親は経済的な負担を覚悟しても私立の中高一貫校へという気持ちになるのは当然である。かくして、とくに大都市圏では、能力の高い子が多数、私立の中高一貫校に流れることとなったのである。

次なる理由は、現代社会に特有の「誘惑」という要因である。今の時代は、やれTVゲームだ、マンガだ、テレビだ、と子どものか弱い学習意欲など簡単に吹き飛ばしてしまう「おもしろいもの」に満ち満ちている。それであるから、一部の教育評論家の言うように、「勉強なんて二の次で、自由にのびのび」育てたりしたら、子どもたちはそうした「誘惑」にあっという間にからめ捕られてしまって、勉強などまったくしなくなってしまうのである。かなり知能の高い子でもそうである。

それどころか、こうした「おもしろいもの」の「誘惑」に背を向けて、文学全集を読みあさったり、参考書で勉強したり、自由研究をしたりする子がいたとしたら、そのほうがよほど不思議である。むしろ、誘惑に引きずられるほうが、子どもの本性を考えるとよほど自然である。

だから、そうした誘惑を断ち切って、いかに子どもを学習へと向かわせるかに親も教師もたいへんな苦労をしている。実際、学校関係者の間に、受験地獄などというが今の学生より昔の学生のほうが学力が高かった、とする見方があるのもこうした背景があるからである。

しかも、中学生、高校生といえば反抗期の真っ最中で、親や教師の説教など聞かないのが普通である。そんなとき、学習への大きな誘因となるのが仲間への競争意識である。

私立の中高一貫校には、公立の落ち着いて勉強できない雰囲気を嫌ってきた子が大勢いる。能力も高い。そういう子たちがお互いに刺激し合うのである。だから、いくらゲーセンに遊びに行っても、どこかで歯止めがかかるのである。しょせん、勉強は本人がやる気にならなければ無意味である。本人の学習意欲を高めるのに、友人同士の刺激ほど効果的なものはないのだ。だから、

じつは名門進学校というのは、教師の教え方がうまいとかいう以上に、生徒相互を競わせるのがうまいのである。

実際、善し悪しはべつにして、桐蔭学園や巣鴨学園といった新興の進学校が伸びてきたのは、その徹底した生徒間競争の刺激策のためである。

だから、私立の中高一貫校がわが世の春を謳歌できるようになったのは、たまたま時代状況の変化に助けられて、優秀な生徒が集まるようになったからであって、べつに中高一貫それ自体が優れていたからではない。

中高一貫校の落とし穴

だから、中高一貫校は公立校より英語や数学の授業時間が多く、中学、高校の六年間でやることを五年でやってしまうから大学受験で実績が上がるのではない。そうした先取り学習を可能にするだけの能力のある生徒がそろっているから実績が上がるのである。国立の学芸大付属や筑波大付属を見ればわかるように、公立校と同じカリキュラムであっても、生徒の質が優秀であれば、生徒同士がお互い刺激し合って、放っておいても大学進学実績はいくらでも上がるのである。

むしろ、小学校時代あれだけ優秀だった子どもたちを集めているにもかかわらず、なぜ開成や麻布の子どもたちが全員現役で東大なり早慶大なりに入れないのか、という逆転の発想で見ていくと中高一貫校の問題点のほうがかえって際立ってくる。

ひとつは「中だるみ」という問題である。高校受験がないという利点が柔軟な思考力や豊かな感性を伸ばすことに活用されればよいのだが、その逆に、「甘え」となって遊びを覚え、それにハマってしまう生徒は決して少なくないのだ。ことに、伝統ある名門進学校ほど生徒の自主性に任せる傾向が強いので、これはいっそう顕著になる。そして、ひとたび遊びを覚えて学業で落後しはじめると、周囲が秀才ぞろいだけに簡単には追いつけなくなる。その結果、どうにか卒業できたところで、大学進学は不本意な結果とならざるをえないことになる。ハマった生徒はハマった同士で群れる傾向が強いので、勉強する生徒たちとヤンキーたちとに二極分化するわけである。

この「中だるみ」を防ぐには三つのやり方がある。ひとつは、灘や開成のように高校からの入学者を入れることである。灘を例に取ると、高校編入組はたいへんな勉強をして入ってくる。だから彼らは高校一年間ぐらいはのんびりするかと思うとまったく逆で、必死で勉強するのである。というのは、中学からの繰り上がり組は自分たちより優に一年先のことを勉強しているのであるから、それに追いつくためである。こうして、高校一年の終わりの実力テストでは高校編入組が上位を占めるようになる。すると、中だるみ状態だった中学入学組が慌てはじめるのである。

もうひとつは、生徒を徹底的に管理するのである。ラサールや桐蔭、巣鴨がそうであるが、こうした一貫校は高校編入組を取るだけでなく、生徒を宿題漬けやテスト漬けにして徹底的に管理するのである。

最後に、駒場東邦のように、高校編入組を取らない純粋な中高一貫校であるマイナスを、管理というよりも面倒見の良さでカ

バーしようというところがある。

ともかく、各校とも高校編入組と競わせたり、徹底的に管理したり、あるいはきめの細かい補習をしたりと、いかに「中だるみ」対策に苦慮しているかがわかるであろう。したがって、麻布や女子学院のように、高校での生徒募集をしない純粋な中高一貫校であって、しかもとりたてて「中だるみ」対策も取らない自由放任のところでは、大学進学実績に非常な幅が生ずるのである。

このように、単純に中高一貫校でありさえすれば大学進学実績が上がるというわけではないのである。単に大学進学実績を上げたいだけならば、中高一貫かそうでないかということより、優秀な生徒だけを集めてお互いが刺激し合う仕組みを作ってやることのほうがよほど効果があるのだ。ちょうど、昔の都立日比谷高校のように。

ダブル・スクールをする子どもたち

ところで、中高一貫校の問題点は何も「中だるみ」ばかりではない。いくら各小学校の秀才を集めたといったところで、そのなかでもまた能力に幅があることは避けられないことである。しかも、名門進学校ほど、中位よりはむしろ上位の子に合わせて授業を進める傾向が強い。というのは、そうしないと上位の子が授業をバカにし出すからである。

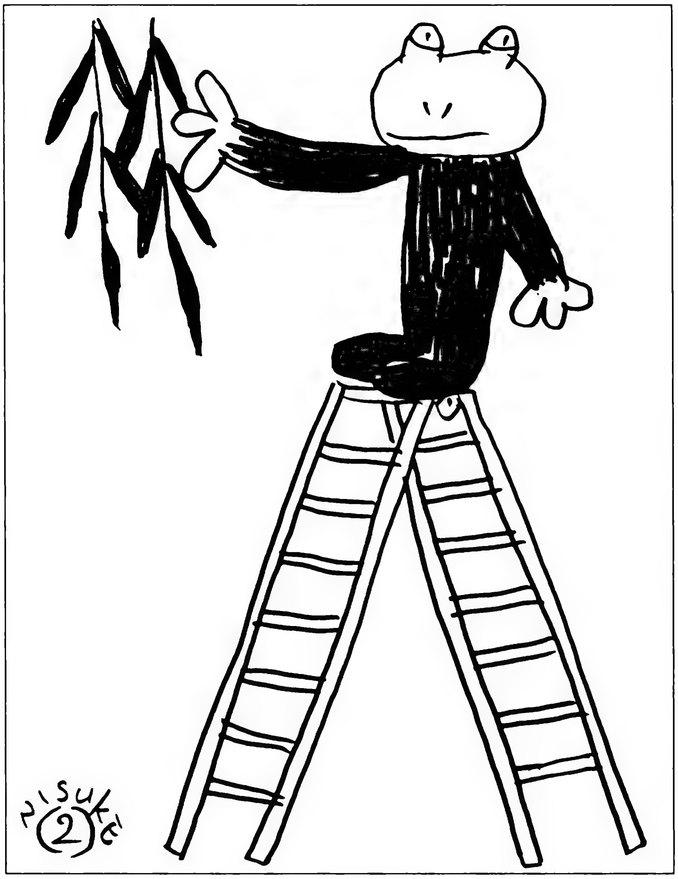
実際、名門進学校の生徒のなかには、学校で学ぶことよりもっと先を、あるいはもっと難しいことを、という理由で早くから塾通いをする子が増えている。反対に、能力ギリギリで入学したために、学校の授業についてゆけず、そのために塾通いを始める子どももいる。つまり、ダブル・スクールをする子が非常に多くなっているのである。しかも、中学一年から通う子も決して少なくない。

だから、中学受験塾が、「私立の中高一貫校に入学すれば、勉強は学校がしっかりやってくれるからもう塾通いをしなくてすむ。しかし、公立中学に通うとなれば塾通いは常識だから、掛かる学費は公立も私立もさして違わない」などと言うのは大ウソなのだ。

しかも、塾通いとなれば、クラブ活動や生徒会活動などに打ち込むことは難しくなるし、何より学校の勉強と塾の勉強とで「ゆとり」がなくなってしまう。勉強漬けの中学、高校時代ではなんのための中高一貫かということになる。そうかといって塾にも行かず学校生活に打ち込んでいると落ちこぼれになる危険がある。では、塾に行っていれば落ちこぼれにならないかというとそんなことはなくて、塾も中途半端、学校の勉強も中途半端となって落ちこぼれてしまう子も少なくないのである。

つまり、中高一貫校では、勉強とそれ以外の学校生活とのバランスを取るのが意外に難しいのである。これはほとんど気づかれていない中高一貫校の盲点である。だから、勉強もクラブもどんなにハードでも楽々こなせるというスーパー少年は別として、小学校の秀才が名門私立に入ったことによって「ただの人」となったケースの場合、私は個別指導を勧めるようにしている。

私立の中高一貫校では、学校の予習復習をやっていれば大丈夫です、などと言うがそれは「ただの人」にとってはたてまえにすぎない。国語はともかく、英語と数学は



そうである。中学で初めて学ぶ教科なのだから、勉強法がわからない。数学を算数の発想のまま勉強したり、英語でつまずいたりする子は決して少なくないのである。ところが、名門校ほど手取り足取りの指導はしないのだ。さりとて、普通の塾通いでは二重の負担である。だがら、学校の教材を軸に、個別指導によって自学自習への勉強法を身につけるようにするのがいちばん合理的である。私立校生用の個人ないし少数制の塾か、あるいは家庭教師を頼むのもよい。銀行の掲示板を見たり、大学に直接申し込むのである。ただ、家庭教師センターの類はやめたほうがよい。二重に搾取されるだけである。いっそのこと親が見てやってもよい。私などその口である。ともかく、手段はなんでもよいが、家庭でのフォローをしっかりやるのとやらないのとではいつの間にかものすごい差がついてしまうのが私立の中高一貫校の怖さなのである。

男女別学という問題

私立の中高一貫校はその多くが男女別学である。この点、かつての都立の名門進学校は男女共学であった。男女共学だからといって、べつに勉強にマイナスということはないのだから、なぜ多くの私立の一貫校が男女別学にしているのか、考えてみるとじつに不思議である。まるで戦前の学校のようである。思春期の人間形成ということを考えると、身近に異性がいたほうがよいと思うのだが、どうだろうか。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

福田雅章の巻

〈一橋大教授・刑事法〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

凶悪な少年事件も、子どもの責任だなんて言ってられない。親は、子どもがそういう状況になったときには、一緒に地獄に行かなくてはならないんです。子どもに権利を与えるとそれほどまでに重い責任が出てくるということです。教師も同じです。（「朝日新聞」九二年四月二十七日）

＊

これはスゴイ！と、その倒錯ぶり、非常識ぶりに思わず目を疑ってしまう。権利を与えられた者は、当然それ相応の責任も課されるというのが近代社会の常識じゃなかったっけ？　ところが、このウルトラ・モダンに生きる先生の頭の中では、鏡の国みたいに論理が逆転する。子どもに権利を与えると、大人の責任のほうが重くなっちゃうんだってさ。しかも、子どもが責任を負うというタテマエにすると、実際上たいへんになるのは親だという事実を指摘しているだけならわからないではない。なんで「教師も同じです」などと安直に言い切って教師まで巻き添えにしなけりゃ気がすまないんだ。ただでさえ問題行動を起こす生徒には手を焼いてるってのに。

要するにこれは、今以上に子どもを甘やかすことにして、そのつけは子どもに権利を与えた私たち大人がみんなでかぶって地獄へ行きましょうということね。それなら、平凡な大人のひとりとしてのワタクシはそんな割に合わない地獄行きは御免被りたいから、ぜひ「子どもの権利条約」も子どもの権利一般も認めないことにしたい。そして人に迷惑をかけるだけで自分では責任が取れないような者に街中をうろうろ歩かれてはまことに剣呑だから、親にはわが子を座敷牢にでも閉じ込めておくよう要求したい。これは普通のか弱き市民として、無理な権利要求でしょうか、福田センセイ？

そこでセンセイ答えて曰く「お互いがどの程度まで迷惑に耐えられるかは、実際に迷惑をかけたり、かけられたりしなければ学べない」んだってさ。人間ての は殺し合わないと殺しの恐ろしさを理解できない動物だったのか。じゃあいったいなんのために教育はあるんだろうね。「教育の目的は、個々の能力を最大限に発展させること…自分も損をし、友達も失い、他人を傷つける経験をしながら成長していく。それが教育」なんだってさ。なんだか恐ろしい世界だね、教育って。このセンセイ、能力と暴力とをまちがえてるんじゃないかな。ワタクシは教育ってのは、経験しなくてもなんとかことばや想像力でカバーしていけるような人間的特性を身につけていくことだと思ってたんだけど。

元祖お助けスクール戸塚ヨットスクール〝事件〟十年目の真実

異常な過熱報道下の裁判で戸塚校長に言い渡された判決は、懲役三年、執行猶予三年という「かぎりなく無罪に近い有罪」。お助けスクールとしての功罪とは何か？　事件の本質はどこにあるのか？　直接、氏自身に聞いてみた

辻創（教育運動家）

自閉症や登校拒否、緘黙、非行、家庭内暴力、校内暴力など、いわゆる問題行動を起こした子どもたちのための居場所、民間「お助けスクール」施設・私塾は、文部省統計によれば全国で二百七十数カ所に及ぶという。

その「お助けスクール」の元祖、草分け的存在がかの有名な戸塚ヨットスクールである。今からちょうど十年前の昭和五十八年夏、異常な過熱報道のさなか、戸塚校長以下コーチ数名が生徒への傷害致死容疑、監禁致死容疑で逮捕、拘禁された。九年にわたる公判を経て平成四年夏、名古屋地裁は結審。マスコミの期待に反し、戸塚校長に言い渡された判決は懲役三年、執行猶予三年という「かぎりなく無罪に近い有罪」であった。

同スクールはひと頃の華々しさは当然影を潜めたものの健在で、ヨットでなくウインドサーフィンの講習を主に現在も活動中である。戸塚ヨット〝事件〟の本質はどこにあるのか。お助けスクールとしての戸塚ヨットの功罪とはいかなるものか。これらをじっくり考察するため、私は三河湾に赴き太平洋の潮風のもと戸塚宏校長から直に話を聞いてみることにした。

戸塚ヨットスクールの所在地は愛知県知多半島のなかば、東海岸の美浜町。周りには人家が建ち並び意外にひらけたところである。海に面した好適のロケーションに映える白い三階建てが同スクールの合宿所ビル。昔は料理屋だったこのビルは、経営者が夜逃げして空き家となり、スクールが地元に請われて買い取ったものという。

職人こそ男の本懐

戸塚校長は日焼けして精悍(せいかん)だが、マスコミが烙印した「鬼のトツカ」とはまるで正反対の、小柄で人なつっこい笑みをたたえた穏やかな人物。風情はまさしく職人である。本人は香港を旅したとき魚屋と間違えられた経験もあり漁師と見てもらいたいようだが、敏捷な造園師か鳶職(とびしょく)というのが私の印象。地下足袋を履き腰に手拭いをぶら下げればピッタリするくらい、職人気質を全身ににじませている。

職人に見られるのは光栄ですね。会社員は会社辞めたらただの人やけども、職人は自分そのものについた技術を持っとるからね。どんな高齢でも仕事をやれるし、成り上がろうともせん。職人というのはタチが悪いと徹底的に悪く、人間ができとると徹底してできてますね。職人の自信の強さは表面に出る態度の一つひとつに表われとるもんね。職人こそが男の本懐やね。いい仕事する職人はみんな、いい顔しとるでしょう。あんな顔に自分もなれるのかなあ、と思いますね。

この職人、戸塚校長の仕事場は海の上である。

山は母性的自然　海は父性的自然

戸塚ヨットスクールを論ずる際、絶対に忘れてはならない最大のポイントは、同スクール（の生徒たち）が取り組む相手は水であり海だということだ。水は人間が生きるのに必須不可欠の要素だが、同時に人間の命を簡単に奪うじつに恐ろしい物質でもある。たとえば風呂に入り頭をすっぽり水中に沈めてみるとする。その瞬間、一切の物音は消え去りまったく別の世界に閉じ込められた自分を感じてしまう。息ができないから、その状態はいつまでも続けられない。思わず頭を水面から上げると元の世界に戻れて「ああ助かった」。つまり、こんな風呂の水程度でも人を溺死させることは充分にできる。その水が、無尽蔵に集積したところが海である。背丈の何倍、何十倍もある深さを持ち、しかも強い風や高い波、低い気温といった悪条件を備えた海。人間にとってこれほど危険で恐ろしい場所が他にあろうか。この海が、ヨットスクールの訓練の舞台なのである。

同じ自然でも山には海の怖さはない。近年、登校拒否児が山村の自然に囲まれ農作物や家畜の世話をする集団生活を通じ自主自立の気概を持てるよう仕向ける、という試みが日本中で数多く行なわれるようになった。こうした「山型お助けスクール」は、もちろんこれはこれで好ましい存在だが、ここでの自然とはあくまで人間にソフトに接する調和的な自然にほかならない。ヨットスクールが相手にする凶暴で荒々しく人間に敵対的な自然とは対照的である。同じように「自然の中の教育」と表現しても、中身はまったく違う。山が母性的自然なら、海は父性的自然と言えようか。

朝日（新聞）なんか山奥が好きやからね。ここにこんな素晴らしい先生がいて理想的な「ふれあい教育」を展開して大きな成果を上げてます、なんて書く。こ

ういうのは精神の安定は図れるかなという気はしますのでね、精神が安定することによって助かる子はある程度助かるだろうとは思います。風邪ひいたから休ませるという方式だから。暖かくして栄養つけて。体の弱い子を保護してとりあえず風邪をなおそうというのは間違いじゃない。だけど、また風邪ひくよね。弱さそのものはなおしてないんやから。われわれは、そこを強くして二度と風邪ひかんようにしようとしてるわけ。こっちのほうがホントのやり方なんです。で、ホラ行け、言うて海へ出しとるの。マスコミの論調がけしからんのはね、ダブル・スタンダードなんや。田舎で母性的にというやつ、あれは成功例ばっかり言うのね。ウチのは失敗例ばっかり言うんやから(笑)。おしなべたらウチはダンチに成功しとるのに。



人なつっこい笑みの戸塚校長

海という極限状態の中で 子どもの生きる力を喚起する!

戸塚ヨットスクールの一日の訓練は、昔も今もヨットでもウインドサーフィンでも骨格は同じである。午前中八時から正午までと午後一時から五時まで、海上で帆走訓練を行なう。「一口に言えば、子どもをヨットに乗せて沖へ連れ出し、孤立無援で海や風という自然と闘わせることによって精神力を鍛え、やり遂げた満足感により自信をつけさせようとするのが私どもの採用している方法なのであります」(第一回公判での戸塚被告人の冒頭陳述より)。この方法で同スクールは過去多くの「情緒障害」の子どもたちを治療し回復させてきた実績を持つ。

現在のサーフィン訓練がかつてのヨット訓練と違っているところは、訓練生たちのサーフィンに常時モーターボートが一艘以上張りつき、口頭での指導と事故を防ぐための管理を入念に行なっていることだ。もちろん昔も監視はしていたのだが、遠くから双眼鏡で様子を見るというやり方が多かった。これだと、ヨットが転覆してもすぐには救助に来てもらえないから、訓練生は必死で自身の自助努力に励まねばならなかった。だから今の訓練体制は、かつてよりずいぶん〝過保護〟になっているわけである。

ウチがヨットスクールとして成功したとするならばね、ひとつはヨットそのものによるんですよ。当時、子ども向きスクールもやりたくて始めたんですが、誰しも考えるのは子ども向きのヨットを作ることね。子どもなんだからこれくらいしか乗れないだろうという。つまり帆が小さくてひっくり返りにくく力もいらないヨットね。で、どうもそれは逆のような気がしてね。というのは子どもと一緒にやっていると彼らのほうが丈夫やから。

回復力は早いし敏感だし。アイススケートなんて子どもの頃からやらないと大人になってからでは遅いんやから。だから、逆のヨット作ったれい、いうて。大人じゃ絶対乗れんというヨットを作ったわけです。

もうひとつ大事なのはね、ひとりで乗せんといかんということなんや。自分だけの力で操作させる。それで条件を全部一緒にして、帆走して比べてみたら力量の違いがわかるやないか、と。こういうふうにしたのが成功したんだと思います。ひっくり返りやすい操作の難しいヨットで、それを自分ひとりで乗り切って、人に勝たなあかんということね。ここが、現代社会において子どもが失っていたものをドンピシャに補充しちまったんですよ。

海で施す訓練は、いつでも死と隣り合わせになっている。この極限の局面に立たせて子どもの生きる力を喚起することが戸塚式教育法の要諦だが、同時にこれはきわめて危険な冒険でもある。しかも、同スクールが扱ってきたのはふつうよりもずっと事故を起こしやすい、脆弱(ぜいじゃく)で心身の不安定な子どもたちだ。そこで、危険回避のための判断力や体力を養うのに体罰を含めた厳しい指導をかつてはしていたのだが……。

死に対する あまりにもエモーショナルな反応

われわれは死んだ子どもたちに対して、新聞に報道されていたような無茶苦茶なことをした覚えは毛頭ないわけ。あの子たちは、これはヤバイぞ、という子どもたちなの。そこでコーチたちに、やらんほうがええ、とさかんにいっとったの。コーチは生真面目やからね、どんな子にもなんとかしてやろうと、そんなふうに考えちゃうわけ。で、いわゆる戸塚式シゴキというのをやるわけ。やめとけやめとけ、いっとったの。あれはあまりにも弱いで、と。最初はね、逃げて帰るだろう、というところから始まったの。ちょっとトレーニングきつくしたれ、体操さしてやりゃ絶対帰るから、と。ところが、現実を知らんのやね、子どもが。「頑張ります」なんて言いだすんや。頑張れるやつがガンバリマスというのはいいんだけども、頑張ることさえできんやつがそういうて。目をキラキラッとさせてね。われわれは考え込んじゃうわけやね。それで、あの子は大事に扱わんといかん、無理させたらあかん、いうて真綿にくるむようにするわけです。それでも死んじゃったんや。

そこでね、よう考えんといかんのや。どうしてそんなことくらいで死んでしまうのかと。環境がえらく変わってしまった。寒さがあった。水に濡れる。運動させられる。周りの雰囲気がぜんぜん違う。そんなことくらいで死ぬほどヤワになっとったのか、と。だから、死んだ本当の原因をきちんと究明しておいてやらないと、その子は死んでも死にきれんと思うよ。いちばんいかんのは「殺したんだ殺したんだ」と結論づけてしまうことやね。おまえが悪いから、おまえが叩き殺したから、というような短絡的な結論です。これでは子どもは死んでも浮かばれんやろうね。

私はいつも思うのだが子どもの死、とりわけ教育的行為がらみの子どもの死に対する、日本人のエモーショナルな反応ぶりは度を越している。こう書くとすぐさま「死んでもいいと言うのか」との声が聞こえてきそうだが、こうした声自体まるでエモーショナルではないか。子どもは死なないほうがいいし、子どもの死が痛ましいのは言うまでもない。しかしそれが「あってはならないこと」だとしても、たびたびあるのが人間社会の現実であり、その死はあくまで冷静に受け止めたほうがいい。死について騒ぎ立てることは、往々にして死を巡る事実関係を見えなくするだけである。


青い海に映える白亜の合宿所

　もともと身内や当事者でない市民にとって他人の子どもの死は、気の毒だと同情すべき事柄には違いないにせよ、大騒ぎする必要などないはずだ。その死の周辺を追及するのであれば、むしろクールであるべきだろう。にもかかわらず、教育に関連した営みのなかで子どもが死んだとき、とくにマスコミや教育評論家、進歩的な人びとがことさらエモーショナルに反応してみせるのは、彼らが自らのいい人ぶりを他人にも自分にも誇示したいゆえばかりではない。権力側対反権力側というずさんな二者択一論で世の中を解釈する戦後民主主義イデオロギーを、子どもの死をまさに奇貨として、正当化し振りかざそうとする意図が（意識しようとしまいと）こうした人びとの胸中にあるからなのである。

過失致死事故が「殺人」になるとき

戦後民主主義とは厄介な代物で、民主主義を標榜しながら戦後民主主義以外の考え方はすべて誤りとして排斥する、反民主主義的な、ファシズムと呼んでも差し支えない偏狭な思想なのだ。このイデオロギーが教育の磁場で子どもの死を感情を交えて解釈するとき、過失致死や事故死は「殺人」へと仕立て上げられてしまう。いつも特定の個人（必ず大人）が殺人者呼ばわりされて魔女裁判にかけられ、検事と判事を兼ねたマスコミが勝手に有罪を宣告するにまで至るのである。

　傷害致死という名目も問題になったんです。傷害致死とは故意罪やないか、と。故意というのは犯意があったということだから、あの子らを殺してわれわれにどういう利益があるのかそれを説明してくれ、聞いたのね。彼ら検察官は基本的に民主主義というのを知らんもんで、故意罪と過失をごっちゃにしちゃうんですね。

故意に犯罪を犯すというのは、それによってなんらかの利益を得ようとしとるんだから、その利益の説明ができんといかんのね。それができんじゃないか。だからこっちは無罪を主張しとるんやから。最初から業務上過失致死で訴えられてるのだったら、われわれはOKいうとったの。そう思っとるんだから。誰がやっても死んだかもしれんけども、われわれだって完全にわかっていたわけではないし、確かに過失はあったんだからね。経験則でいっとったんやから。こうすれば、こうなる、という。ところがその経験則があの子たちには当てはまらなかったのは確かでね。その部分は責任とらんといかん、それは最初からいっとったんですよ。ところが新聞のバカが「犯罪者だ」なんて書き立てるもんだから、なにを！ということになるのね。こんなふうに、すぐ腹立てるのがいかんのやけど（笑）。

あたり前だが、戸塚ヨットスクールに入校してくる生徒はひとりとして戸塚校長らがそこらあたりで勝手にかっさらってきた子ではない。すべての親のほうからスクールに依頼し、同時に親権も委託しているのである。そして、ほとんどのケースがあらゆる相談所や施設を巡り歩いたあと、スクールの門を叩いている。親にとって手のつけられない重症の家庭内暴力児や自閉症児をなおしてもらう最後の頼みの綱が、戸塚ヨットスクールであったわけだ。

フェリーから海に飛び込んだ二人の子ども。あの件はね、何がひどいかといって、断わったんや。危ないからいうて。九月に入ったらやるから、八月は勘弁してくれ、いったの。そんな弱い子どもが来ていきなりあんな鹿児島の合宿へ連れていって、向こうでどういうことが起こるかもしれんし。ただ、船から逃げだすところまでは想像しなかったけどもね。充分なトレーニングもできん。だから、今はダメです、いうて断わったんや、二人とも。それを無理矢理入ってきたんや。ともかくなんとかしてくれ、それこそ「死んでもいいから」というような言い方でもってね。

ふつう私たちは、親子関係というと情愛で結ばれた暖かくうるわしいイメージで語りがちである。しかし、実態はそういったものを探しだすほうが難しいところにまできている。ヨットスクールでの子どもの死亡記事が出た日、わが子を入校させたいと希望する親からの問合せ電話が相次いだという当時の現実は、今、変わらないどころかますます深刻化しているのだろう。

ひとつわかったらんといかんのは、親が情けないとか社会が悪いとかいうことはあるにしても、とにかく親が自分の子どもに対してそれほどの気持ちにまでなるということやね。この前、高校の先生が自分の息子を殺しちまった事件があったでしょう。オレはね、親のほうに同情するね。あの子どもたち見とると、自分だってどうなるかわからんという気になるな。動物的なんていうよりね、動物は親を殺そうなんてしないんやから。親を殺したら自分が生きていけんから。動物はそんなことはしないよね。それが本能

なんです。ところが、殺そうとまでするのは人間だけなのね。本能が狂った人間だけなの。

理論的裏づけとしての「脳幹論」

逮捕から保釈されるまで三年あまりの長きにわたる拘留生活のなかで、戸塚校長はノーベル賞学者コンラート・ローレンツ博士の著作に出会う。そして同博士の動物行動学を中心に脳生理学や仏教に関する多くの書物も参考にして、ヨットスクールが実践してきた情緒障害児回復のメカニズムの理論的裏づけを試みた。その結論が「文明病のすべては脳幹の虚弱に原因がある」という仮説、すなわち「脳幹論」である。理性的思考をコントロールするのは大脳新皮質だが脳幹は精神の素（もと）を作る、だから脳幹が肝心だ、とする推論だ。



危険を伴うヨットには，入念な下準備が必要だ

ウチに来た子どもたちのいろいろ事情を探ってみると、たとえば登校拒否にしてもいきなりそうなるのではなくて、その前段階でなんらかのかたちで心身症が出ているのね。心身症が出て、問題行動つまり登校拒否とか非行とかが出て、それが神経症になっていくわけやね。つまり、心身症、問題行動、神経症というのは、その順番でまったく同じ理由で起こってくるということになる。逆にいえば、問題行動をなおす方法は、心身症と神経症をなおす方法でもあるわけです。だから四の五のいわんでいいから、対人恐怖症とか強迫神経症とかをとにかくなおしてみせろや、と。それがいちばんなおしやすいはずだから。逆からなおっていくんだから。あるいは、アトピー性皮膚炎をなおしてみせい、小児喘息をなおしてみろ。そういうものがなおる方法だったら非行もなおる、というわけです。著書『敵は脳幹にあり』には「花粉症と非行は同じ原因で生じる」と。ホントは花粉症ではなくて癌と書きたかったのですが、まあ医者と喧嘩したらいかんと思って（笑）。

戸塚校長は、そもそもエモーションという英語が「情緒」と和訳されたのは間違いで、正しい訳は「情動」だと述べる。情緒といえば理性的で高級な働きのようにイメージしてしまうが、正しくは情動、すなわちエモーションは理性でなく本能のランクにおける感情を意味するわけだ。したがって、情緒障害（情動障害）は即「本能がおかしい」のであって、これには理性的な言葉は役に立たない。情緒障害をなおすには本

能そのもののトレーニングが必要だ、と戸塚校長は強調する。

昔、男の子たちは山へ行ったり川で遊んだり、かなり危険なこともしとったでしょう。あれが本能のトレーニングなんですね。理性では説明のつかない行為なの。じっとしているほうが安全だし腹も減らんしね。怪我をすることも死ぬこともない。親や他人に怒られることもない。それなのに子どもは遊ぶんですね、本能的に。だからあの行為は何か意味のあることをしているのにちがいない、ということです。川に橋がかかっていて、という状況でね、向こうに行くだけだったらそのまま渡れば安全に早く行けるでしょう。ところが、子どもは欄干を歩くということをやる。これは理性のなせるわざじゃありませんね。生きるか死ぬかの状態を経験して、最後に生きるということ。危険をくぐり抜けて勝利するという訓練を毎日のように経験しているわけやね。まさしく本能のトレーニングなんです。

文明が発達したおかげで現代人は安逸なぬるま湯に浸りきってしまい、子どもは外で遊ばずもっぱら保護された環境に置かれることとなった。人間の使わない筋肉や脳の細胞は負荷がかからないためどんどん萎縮してしまう。こうした不用性萎縮が脳幹や辺縁系に起こったケースがいわゆる情緒障害を引き起こす。とすれば情緒障害を治療するには脳幹や辺縁系に刺激を与えてこれを活性化すればいい。その活性化のための具体的方法が脳幹トレーニング、すなわちヨットやウインドサーフィンの操作、つまりボードセイリング訓練というわけである。

この戸塚校長の脳幹論はあくまで推論であり医学的に実証されたものではない。しかし脳幹論が正しいかどうかをうんぬんするより、ヨットスクールの数多くの〝臨床例〟から帰納法で導き出されたこの論の、「人間とはあくまで生物体であり動物の一種である」というあたり前だが忘れられがちなリアルな人間観に目を向けるべきであろう。それこそローレンツはカントの認識論を手厳しく批判しているのだが、カント以降の近代化した考え方はいつも、人間性を特徴づける理性的な行動を高級なものとし動物的な性向は低級であると決めつけてきた。とくに日本の戦後民主主義はその基本にマルクス主義弁証法を据え、「話せばわかる」という性善説を推し進めてきたことから、人間性が動物的な本能の基盤の上にある実相を無視して、あたかも人間の理性が万能であるかのように錯覚してきた。「近代行動学の父」ローレンツのいわば辛口の学説が、サイエンスの世界では常識になっているにもかかわらず、いまだに日本の一般社会に浸透していないのはなんとも残念な話といえよう。

戦後民主主義はエゴむきだしの子どもを生み出しただけだ!

脳幹論でもうひとつ注目すべき点は、この論がこれも忘れられがちな「俎上にのぼらせるべきは自分であり自分自身が変わらなければ何も変えられない」という古くて新しい真理を押さえていることである。戦後民主主義はこの真理とはまったく逆に、人が問題に直面した場合その原因を常に社

会や為政者のせいにすることを一貫して奨励してきた。今や糜爛（びらん）した戦後民主主義は、結果として、フラストレーションに満ちた人びととエゴイズムむきだしの子どもたちを生み出しただけではなかったか。

ヨットでアメリカへ向かって太平洋を横断するときにね、伊勢湾出たとたんに後悔するわけ。やめときゃよかったな、と(笑)。しょっちゅう、ヨットは揺れまくるしね。メシは食えんし。クソしようと思ったら誰か見てやがるし(笑)。一緒にいる先輩というのはわがままやしね。もう帰ろかなあと思うわ、必ず。ところがね、いったんアメリカまで渡っちゃうとね、何かこう開き直るわけ。この開き直りがえぇのね。日本を出る時点ではあの人は立派な人やと思っとったのが、向こうへ着いてみると、なんやあの人はたいしたことないなというふうに思うわけ。つまり人を見る目ができてくるんやね。そのとき気がついたんです。価値判断というのは自分との比較なのね。通常はね、ホントの自分を知らんわけ。実際よりもいい理想像をつくっているわけ。インチキの像をね。ところが、ああいう生活を経験すると、もうまるまるの自分というものがわかるわけ。あのとき自分は怒ったけれどもなんであんなことくらいで怒ったんだろう、なんて今まで見えなかったものが洗いざらい出てくるわけ。ということは、裸の自分がわかってくるんですね。その裸の自分と比較して、相手が偉いか偉くないか本当のところがちゃんと見える。価値判断のモノサシ、それは自分自身ということ。モノサシである自分を伸ばしていけば、より大きなものが測れることになるのね。このことにみんな、気がついてほしいと思いますね。

現在、戸塚ヨットスクールでは訓練生はマキシマム十人を定員にしている。体罰は行なっていない。今なお入校問合せはあとを絶たないが、実際に入校に至らないケースもけっこうある。戸塚校長は月一回以上は講演にでかけ、東京や九州へ飛ぶこともある。裁判はおそらく最高裁までいくだろうという。

ヨットというのは単に手段にしかすぎないんであってね、われわれにとっても彼ら生徒にとっても。だけれども、ヨットがうまくなることによって何か得るものがあるんだから。それを得るためにヨットを完走させなきゃいかん。そのときに技術つまりソフトウェアの面と、脳のトレーニングというハードウェアの面との、両方ができないといかんのですね。ありがたいことに合宿生活というのは、今みんなが弾劾するイジメから何から不愉快なものが全部あるんだから。メシはとられるわ、うしろから蹴飛ばされるわでね。こんななかから、人間とはこういうもんだということを子どもは知るわけで。子どもにとってのすごくいいチャンスになるわけです。

戦後民主主義という海原に小さなヨット船団を乗り入れ、波に呑まれてこっぴどい目に遭った戸塚宏校長。だが、この無類の楽天家は、性懲りもなく今日もヨットを動かしている。

バカ語録
一億総キョーイク評論家
保坂展人の巻
〈教育評論家，活動家〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

体罰が、精神的かつ心理的な屈辱感や忍耐をもふくめて表現されるのなら、聞くに耐えない授業を聞かされるのも、成績上位者のみに焦点を合わせた特急授業によって存在を無視されたままに教室に座っていなければならないことも、立派な体罰ではないだろうか?…「管理教育」「体罰」を廃止しても、「学校」に構造として巣くってしまった病巣を退治することはできない。強制という意味では授業も、評価も、単位も強制であるからだ。…そんなことまで言われちゃ教師なんかやっていられないじゃないか――という声がいかにも聞こえてきそうである。私は、こう返そう――極みまで走らなければ、解放の道はないのだ。(『体罰と子どもの人権』有斐閣)

＊

ああ、かったるい、こういうのにまたぞろコメントしなくちゃならないなんて、因果な商売だ。でもこれ、保坂クンの七年前の姿なんだよね。今は少しは往年の元気を失って成熟の道を歩みつつあるのかなあ。でも「私の姿勢は年季が入って多少の厚みを増しこそすれ、基本的には麹町全共闘以来一貫して変わっていない」なんて言いそうだな。

それにしても「授業も体罰だ」というのはスサマジイ思想というか…。要するに学校で行なわれていることは、みんな子どもに対する犯罪的暴力行為ってことになるな。

そうすると、「授業、ツマンナイ」とかブーたれながらもなんとか毎日学校に通ってる子どもたち――統計なんかとってみると、いちおう七、八割が「学校は楽しい」とか答えてしまう連中ね――ありゃいったいなんなんだ。よほどのマゾヒスト軍団ということになるな。

授業も、評価も、単位も強制だから病巣が退治できないとすると、教師をやっていられるかどうかより、なにより生徒が生徒をやっていられないはずだと思うんだが。

そこでもうひとつわからないのは、「極みまで走」った果てに現れる「解放の道」というヤツ。言葉はスッゴクかっこいいんだけど、要するに学校をどうするってことなんだろう。みんなでレジャーランドにしてしまおうということなのかな。それならもう半ばなってるところもあるけんね。

どうせ、自分たちは絶対正しくて、天賦の人権とやらを与えられてて、その正しさをちょっとでも脅かしにやってくる教師はみんな人権侵害者なんだから、いっそ教師の授業も管理もぜーんぶ排除して空いたところでロックフェスティバルでもディスコでもなんでもやって、勝手に楽しめばいいじゃん。オレ、やだぜ、そんな勉強する気もない奴らのためにおもしろい授業なんか工夫してやるの。

PART 4

ところで、これまでの教育改革構想でうまくいくのか？

財界・文部省は何を考え、何をしようとしているのか？

財界も文部省も現在の偏差値体制に危機感を抱いている。ゼロサム時代に必要とされる人材確保の困難と、学歴社会がこの国を滅ぼすのではという深刻な危機意識が背景にあるからだ。率直なところを、諸井虔日経連副会長と文部省の寺脇研職業教育課課長に問い質してみた

米本和広（ルポライター）

偏差値体制は今後どうなっていくのか。高偏差値大学の受入れ先である大手企業を代表して日経連副会長の諸井虔氏（秩父セメント会長）、最近矢継ぎ早に学校改革を仕掛ける文部省を代表して初等教育局・職業教育課長の寺脇研氏に聞いてみた。

高偏差値大学の合格切符を手に入れるには、私（国）立の中高一貫校に入学しなければならず、その一貫校に合格するには小学校四年生から塾に通わなければならない。こんな単純な図式が今ではすっかり定着してしまった。最近では小四からでは遅すぎるとの声が出はじめ、小一からの塾あるいは幼児教育がブームになっている。わが子を高偏差値大学に入れたいと思うのは、社会に出たときのスタート地点を少しでもいい位置につけさせてやりたいという親心からにほかならない。実際、大手企業の採用は高偏差値大学に偏っており、偏差値と企業ランキング値は密接な相関関係をもつまでになっている。

教育界を垣間見れば、比較の数値にすぎない偏差値はまるで生き物のように一人歩きし、花盛りの学校論・教育論を踏みつけ、親や子どもの心をいいように翻弄しているとさえ感じられる。

中学塾・日能研から、この春開成中に入った子の母親は「偏差値体制がなくなる可能性があるんだったら、塾や開成なんかに子ども行かせませんよ」ともらしていた。

日経連副会長・諸井虔氏に聞く

大量生産・大量販売時代には、金太郎飴型の人材が求められたが
これからはスペシャリストが必要だ

──企業からご覧になって、今の教育がどういう状況にあると考えていますか。

諸井●日本の戦後経済の発展は、大量生産・大量販売型のシステムに支えられてきました。大量生産・大量販売に見合う人材は、真面目で、根性があって、忠誠心があって、チームワークを大切にするような人たちでした。ずば抜けた能力をもった人、平均より落ちる人は必要としなかった。というのは大量生産のシンボルはベルトコンベアです。ずば抜けた人が入っても、コンベアがスピードアップするわけではない。平均より落ちる人はスピードをダウンさせるからダメですよね。大量生産型の経済の中で、競争に打ち勝つような人材は協調、和の精神、チームワークによって励ましながらやっていけるような人でした。金太郎飴型の人と言ってもよい。そうした人たちによって、企業は発展し、日本経済は進展したわけです。

大量生産にはスペシャリストは必要ではありません。熟練工は必要ではなく、なんでもこなせる多機能工が重要だった。いろんな仕事を経験させ、QC運動によって、仕事の動機づけを行なう。そのなかからマネージャーをピックアップする。それは事務部門も同じで、経理、営業、工場の管理などの仕事を経験させ、ゼネラリストにしていく。その過程で昇格する人を選んできたわけです。

特別できる人ではなく、そこそこの人を採用し、多機能工、ゼネラリストにし、チームワークによって大量生産を行ない、競争に打ち勝ってきた。

──大量生産に適合する人材と高偏差値校との関係は、どういうことになるのでしょうか。

高偏差値大学卒は ハズレが少ない!?

諸井●これは経験則だと思うのですが、高偏差値大学の大学生のなかにはいい人材がいる、ハズレが少ないということなのでしょう。そのような採用をしてきて、問題はなかったから、そのようになってきたと思う。ただし、いい人材がすべて高偏差値大学卒者とは限りませんよ。逆は真ならず、ですよ(笑)。でも、体験上、偏差値の高い大学からの採用で問題はなかったし、そうすることで企業は発展してきたわけです。

それに、高偏差値の学校の生徒は競争に打ち勝ってきた人たちなわけで、それが激烈な競争をしている企業にとってもいい人材であったということも言えるでしょうね。

人事部の考課も影響したと思いますね。

本来、採用した人が良かったか悪かったかは十年後、二十年後になってわかることでしょ。ところが、企業は人事部をそういう単位で考課するわけじゃない。東大を何人とったかで評価する(笑)。まあ、それでこれまでハズレが少なかったということな

んでしょうね。
その結果、偏差値教育、受験戦争は悪いことでしょうが、企業がそういう人材を必要とした結果なわけです。それで、日本の経済は発展したわけです。

——すると、この傾向は続いていく?

諸井●いや、私はいま転換期にきていると考えている。大量生産・大量販売は機械に置き換えられるシステムだし、円高を背景に人手を必要とするような仕事はアジアにもっていくようになっている。中国は前からそうですが、韓国、タイ、台湾、インドネシアなどは教育の基礎的レベルが上がっているから、人手を充分にカバーできる。これからはベトナムがそのようになるでしょう。

つまり、平均的な人材は機械化、アジア化によって、必要としなくなりつつあるということなんです。

もうひとつの大きな変化は、需要が増えていく段階では大量生産、過当競争でよかったわけですが、最近はゼロサム(総量ゼロ)になっている。紳士服の青山商事の背広が売れているが、といって背広の需要が増えたわけではなく、デパートの売上げは減っている。需要は増えない、これまでの大量生産・大量販売型の仕組みは限界にきたということなのです。

ゼロサム時代に求められるスペシャリスト

——そうすると、どういうことになっていきますか。

諸井●限界にきたということははっきり言えますが、しかし、だからどうなっていくのかは正直よくわからない。はっきりしているのは、これまで食料、エネルギーなどを輸入し、大量生産による商品を輸出して日本はやってきた。だから、今後なんで稼いでいくのかということになると、私は他国の先を走るような高度な技術開発しかないと思っている。これまでの日本的経営では乗り切ることができない、それだけははっきりしている。

——そうなると、企業が必要とする人材も変化していくということですね。

諸井●ゼネラリストではなく、高度なスペシャリストが必要になってくると思います。これまでの、ある程度の偏差値のレベルの人、金太郎飴型、チームワーク型の人材では、東南アジアの力、ロボットの力にはかなわないでしょう。

従来の複製品型の商品では需要は増えないわけですし、そうした商品が過当競争になっても、それを社会が吸収することはできなくなっている。絶対に強いもの、絶対に消費者が支持するようなもの、そうした独創性のある製品を開発しなければならなくなる。買換え需要といっても、よほどいいものでないと、消費者は買わない。となると、金太郎飴ではダメなんですよ。

マーケティングに特殊な才能のある人、センスがすばらしくいいデザイナー、高度な技術力のある人、そういうスペシャリストによって、コンセプト段階から製品が開発されるようになっていくと思います。企業のローテーション人事によって、マーケティングの担当になったような人では無理になっていく。

——その話を聞くと、文部省が力を入れはじめている東大などの大学院大学構想を連

想しますが。

諸井●どうなんでしょうかね。偏差値の高い大学院生がスペシャリストとしてやっていけるかどうか。無理ではないでしょうか。べつに東大の大学院生でなくってもいいと思いますよ。アメリカから採用してもいいわけだし、東大生もべつに日本の企業にこだわらなくなるような時代になるでしょうし。


諸井虔氏

今の入試制度からはスペシャリストは育ちにくいと思います。三教科、五教科の偏差値の高い人が評価されるような入試ではね。結局、記憶力でしょ。これまでは記憶力がいい人が経験上、できる人ということになっていましたが、高度なスペシャリストが必要とされる時代には通用しないのではないでしょうか。

流動化する労働市場

——では、現在の偏差値重視の体制は崩れると考えていいのですか。

諸井●いや、いっきょにはいかないでしょう。十年あるいは三十年先になるかもしれない。というのは、そうなるには企業がこれまでやってきた経営マネジメントを変えなければいけませんよね。戦後、ずっと日本的経営でやってきた企業がすぐにマネジメントを改革できるわけはないでしょう。社会のニーズの変化によって、経済の流れが変化し、少しずつ企業が変化していく。企業が変われば、学校が変わり、それによってまた企業が変わっていく。長期的なプロセスをたどると思います。

ただ、変化はもう生じています。

これまでは、企業は偏差値の高い学生を採用し、終身雇用型の労務管理によって、忠誠心をうえつけ、発展してきました。それは企業の発展、拡大が前提条件になっていた。ところが、成長は止まってしまった。

そうすると、社員を一生面倒見ることができなくなる。採用を大幅に減らさざるを得ない。これまでの企業はよけいに採用していた。(発展によって)人材が足りなくなることが怖かったのです。しかし、これからは余る怖さが出てくる。

労働市場は流動化すると思います。忠誠心のあるゼネラリストがいなくなれば会社は存在しなくなるから、その意味でこれまでの体制のすべてがなくなることはあり得ない。しかし、スペシャリストは忠誠心よりも自分の才能が大切ですから、終身雇用型は崩れ、多様な雇用形態が出現すると予測できます。

教育にもたらされた企業の犯罪性

——ある経済団体の事務局に聞くと、経済四団体の幹部のなかでも教育問題を考えていらっしゃるのは諸井さんと、富士ゼロックス会長の小林陽太郎さんぐらいと聞きましたが。

諸井●(苦笑)いやあ、企業人が教育に無関心というより、父親には今の教育界のことがわからないのですよ。

企業が変わらなければ学校も変わりませんが、もうひとつ子どもや母親の価値観の変化の問題もあると思います。ひたすら会社のために働いてきた父親の今の現実を見て、そのような生き方がいいのかってね。子どもの特性に応じて、スペシャリストにしたほうがいいというようになっていくのではないでしょうか。人生をもっと楽しむ、べつに出世なんかしなくていい、その代わり一生勉強しようとか。職業観、人生観も変化する。

——諸井さんは、前から教育における企業のギルティ(犯罪性)について語っていらっしゃると聞きましたが。

諸井●二十年前に、ある会合でパネラーとして話したことです。教育については文部省も反省しなければならないし、教師も反省しなければならない。しかし、企業も反省する必要があると、三つのギルティを挙げました。

ひとつは、猛烈社員に見られるように家庭から父親を奪ったこと。もうひとつは経済至上主義を社会に蔓延させたこと。三つめは受験競争を招いたことです。これによって、ガリガリの競争、拝金主義・出世主義を生み、そして思いやりがない人をつくった。

二十年前に話したことですが、今でもこの指摘が通用するのは、弊害はたくさんあっても、企業の運営に支障をきたさなかったからなのでしょう。しかし、社会に対する影響という点からいくと、このままではいかないと思います。

——文部省が最近、偏差値追放のキャッチフレーズのもと、いろんな改革に取り組んでいますが、どうご覧になりますか?

諸井●成功するか失敗するかわかりません。失敗するかもしれない。ただ、十年前に提案していたら、まちがいなく失敗していたとだけは言える。今、社会のニーズ、時代の流れが変化しつつある。だから、改革のチャンスであると見ています。

文部省初等教育局職業教育課(中学・高校の進路指導セクション)課長・寺脇研氏に聞く

東大の合格実績を吹聴するような公立学校の校長には辞めてもらいたい

——業者テスト追放あるいは総合学科制度の導入など、文部省はこのところ改革の提案をさかんに行なっています。今の教育のどういう点に危機感を抱いているのですか?

寺脇●文部省というより、社会が危機感をもったわけです。それは臨時教育審議会の答申で示された。はっきり申し上げれば、当時の総理中曽根康弘が文部省がやっている教育政策はまちがっていると指摘したわ

けです。単純に言えば、教育改革を早急に行なわなければならないと主張し、その改革に向けた審議会を総理直属のもとに置いたわけです。われわれは文部省の中に置いてくれとたいへんな努力をしましたが、中曽根総理は文部官僚にやらせることはできないと言ったのです。私はその頃三十歳前の血気さかんな頃で、怒っていましたよ。臨教審発足直後、文部省には敗北感が漂いました。

　それはともあれ、これまでの教育政策の何が問題なのか。臨教審によれば、時代は変わったという。誤解を恐れずに言えば、これまでの教育は発展途上国型の教育であり、これからは先進国型にしなければならないということです。


寺脇研氏

　それまでの、高度成長を支えた教育はいかに効率よく、いかに多くの人を教育するか、つまりマスプロ教育、量を追い求める教育だったわけです。これからは質を求める時代に入ったというわけです。

　その当時は腹が立ったけど、冷静になって考えてみると、そのとおりだと思った。

　昭和五十年は私が文部省に入った年ですが、その年に大学進学率は三七％、高校進学率は九五％になった。文部省は大学進学率は五〇％まではいくだろうと、そのために高等教育計画を立てたわけです。ところが、五十一年以降大学進学率はぴたりと止まってしまった。この間、みんなの生活が貧しくなったわけではない。行けないのではなく、行かなくなってしまった。

　昭和五十一年に専修学校制度が発足したのですが、その新しい学校の進学率は昨年短大を追い越し一五・三％までになった。専修学校というのは、学歴社会的な価値から言えば意味はありません。ところが、千代田テレビ専門学校に子どもたちは進学する。そこを卒業したからといって、誰も尊敬してくれるわけではない。でも、その専門学校で学んで、何かを得ようとする。

　つまり、世の中が変わりつつあるのです。

――高度成長に合わせた、量を追求する教育政策は社会の変化と合わなくなってきたということですね。

学歴社会の打破は生涯学習なり

寺脇●大学進学率の伸びが止まったのが昭和五十一年、臨教審がスタートしたのが五十九年です。この八年間、がまんにがまんを重ねてきたということなんでしょう。五十年代はイジメ、校内暴力などが発生しました。国民の求めるものと、教育政策がズレていたわけです。もっとも、文部省には文部省なりの言い分があって、これだけ巨大な教育制度をいっきょに変えるわけにはいかない、そう簡単にはいかないと考えていた。しかし、もう待ちきれんということになって、臨教審が発足し、六十二年に答申を出した。生涯学習社会をつくる、学歴社会の打破ですよ。

　その答申を受けて、われわれはそのとおりにやりつつあるわけです。

——一連の改革はすべて答申の流れに沿っていると。

寺脇●改革はすぐにやることはできません。学習指導要領の改定の時期を待たなければならなかった。平成四年に小学校、五年に中学、六年に高校です。しかし、社会教育は指導要領なんかあるわけじゃあないから、すぐにできる。昭和六十三年に社会教育局を生涯学習局に変えたわけです。平成四年まで改革を進めてきましたが、一段階は終わったと考えています。というのは、学校五日制になって、親や子ども会、婦人会が子どもたちを受け入れたからです。完全とは言いませんが、従来の（画一的発想の）学校であれば、休みなら全員をボーイスカウトに組織してなどと考えるが、子どもたちがバラバラに休日を過ごすようになったわけです。

——生涯学習という考えがいまひとつよくわからないのですが。

寺脇●生涯学習は社会教育と学校教育の二つからなっているわけですが、生涯学習としての学校教育という点で言えば、これまで中学、高校、大学、企業とそれぞれがぶつ切りになっていたわけです。中学教育は高校入学のための教育ではなく、三十年、四十年を考えた教育をしよう、高校も人生八十年を考えた教育にしようという考えです。子ども会も子どものためだけではなく、生涯を考えた子ども会。最近、子ども会と老人会の交流がなされるようになっていますが、そういう観点での子ども会が大切だと。

　子どもを、教育を受ける者ではなく、学習者として見る考えなのです。高校教育で英語は必須科目ではないのに、これまですべての高校で教える側の論理で必須にしていた。必要ないという子どもを無視してきたわけです。ですから、こんどの総合学科制度の学校では選択できるようにした。小学校に生活科をもうけ、中学では選択制を導入し、高校では男女とも家庭科を入れた。

——性教育もクレジットカードの使い方も、クラブ活動もすべて学校、というあり方を変えようというわけですか。塾と並んで学校のクラブ活動にも異常なものがありますし。

寺脇●そうです。すぐにはいかないでしょうが、クラブ活動は地域のクラブ活動にしたい。理想的な話ですが、学校からクラブ活動をなくすことができればいいと思っている。甲子園だって、地域のクラブから出場できるようになればいいと思うのです。そして、学校は本来の学校教育をする場に戻したい。

十五の春も十八の春も三十の春も五十の春も泣かしたくない！

——といっても、今の社会では「〝いい大学〟を卒業して〝いい会社〟に入れる」というように輪切りになっている。それを簡単に直すことができるとは思われない。

寺脇●中学を卒業する子どもには、中学三年生までの学力をしっかり身につけさせようというわけです。いい高校に合格できるための受験教育はしないということ。高校も同じです。自ら考え、自ら学び、自ら行動する子どもをつくっていく。偏差値だけに縛られて、社会に無目的に出るような子どもをなくしたいと思っているのです。十五の春も十八の春も三十の春も五十の春も泣かしたくない。官僚でもいるのですよ。

東大を卒業して課長になれない人が。ゴロゴロいる。

――えっ、課長にまでは横並びで出世できるでしょ。

寺脇●そんなことないですよ。なんなら、リストをお見せしましょうか。成績がいいというだけで社会に出ても、三十、五十になって泣くようなことは出てくるのです。

しかしですよ。文部省が学歴社会をなくすことはできません。学歴社会をなくすために、文部省、学校ができることとできないことがある。できることは、学校の中から学歴社会につながるようなことはなくすということ。それはできる。しかし、学歴社会をなくすことはできない。昭和十八年の政府なら、政府が思うがままにできたでしょうが、今は平成の政府であり、民主主義の官僚です。できないことはある。

――しかし、学校の現場から偏差値を追放しても、塾などが肩代わりするだけでしょう。実際、大学、私（国）立中の受験指導は外で行なわれている。

寺脇●突き放した言い方をすれば、それはわれわれが関知するところではない。塾に対してはなんの権限ももっていないし、そうでなくても規制することは、昭和十八年の政府がやったことと同じだ。でも私たちがやろうとしていることは社会に浸透すると思っている。

私立の進学実績が上がろうが下がろうが文部省は関知しない

――規制はできないにせよ、高偏差値大学の進学実績という点では、ますます私立が高くなることが考えられます。

寺脇●それがどうしたというのですか。それはそれでいいじゃあないですか。

これまでは学校に力があるから、大学に進学できたわけじゃあないんです。偏差値輪切りによって、大学に進学できるような子どもばかりを集めたから、進学実績が高くなっただけの話じゃないですか。言葉は悪いが、それはゲットーにすぎない。私たちが今やろうとしているのは、どの学校に入っても、大学に進学できるような学力をもった子は大学にやるということなんですよ。農業高校に入っても、そういう力があり大学に行きたいと思う子は大学に行かせる。そのために、中高の先生に頑張ってもらう。

――輪切りになった高校をバラし、どの学校からも自由な進路の選択ができるようにするということですか。

寺脇●これまでの学校の特色は輪切りになっていた偏差値でしょ。その輪切りをバラし、特色あるものにしていく。大学に行きたい子どもは大学に行かせる、何かの技能を身につけたいと思う子にはそうしてやる。そのために学校本来のあり方に戻してやる。そのためには、学力だけの入試はしない。そのことは、もう文章で示されている。ひとつの学校の入試でもいろいろあっていいと言っている。静岡に高校中退者を救うために単位制の学校をつくりましたが、そこではいちど高校に入った子どもたちなのですから、面接を重視していますよ。

能力には差があります。私が三浦知良になれるわけがないし、その逆もない。それぞれの希望、特性に合わせてその子どもを生かしていく。そう考えているのです。

埼玉の新座にある高校の校長とお話ししたら、その校長が失言したのです、「うちで

もお茶の水大学に合格したんですよ」と。で、私は言った。「それがどうかしたんですか。それはその子にとっていいことでしょうが、学校の誇りにするなら、苦労して吉兆の板前になった子どものほうが誇りになる」って。詳細は省きますが、じつに苦労してその子は板さんになったのです。東大の合格実績を吹聴するような公立校長には、辞めてもらいたい。

——寺脇さんのおっしゃる話は理解できますが、大学に入ることが当たり前のようになった今日、親の多くは「せめてわが子は大学ぐらいは」と願っているんではないでしょうか。現実と遊離しているように感じられますが。

寺脇●ですから、われわれは社会そのものを変える立場にはありません。学歴社会をなくす、そのためにわれわれができることは何か、という立場にある。学歴社会がこのまま続いていくようだと、これは私の個人的な言葉になりますが、わが国は滅びるしかないでしょう。しかし、国民のレベルはそんな程度じゃないと思う。今の子どもの親は全共闘世代でしょ。ピラミッドを否定した人たちですからね。いろんなアンケートでも、若い親ほどわれわれの改革を支持する結果が出ている。

学校問題はつまるところ会社の問題

寺脇さんが指摘するとおり、国や文部省が強圧的に社会を変えることはできない。といって、文部省が社会とまったく関係ない位置にいるわけではない。文部省は、学歴社会ではない「社会」を目指し、政策を実施しようとしているからである。現実社会にはいろんな社会がある。「学歴社会」でいいと思っている人もいるし、その反対の人もいる。表面的には偏差値体制を打破したいと言いつつも、わが子のこととなると偏差値体制の一員になることを肯定する社会もある。

しかし、その社会の動向に重要な部分を占める会社にも変化の兆しが出てきたのは諸井さんの話から読み取ることができるだろう。学校を卒業すれば社会に入る。社会と言っても地域社会ではなく会社に入るのである。その会社が現在の偏差値を指標とするような教育を必要としなくなれば、「学校は変わる」(諸井さん)。

日本を世界第二位のGNP国にした日本型会社システムが、そう簡単に変わるとは思われない。しかしそうであっても、学校がどう変わるかは、学校に通わせている親たちの職場である会社がどう変わるか、にかかっている。国際論争にまでなっている日本の会社だが、過労死、単身赴任、サービス残業、出向、希望退職など「暗」の部分がこのところ社会的な問題になりはじめている。日本の会社がどう変わるか。「学校問題」は文部省をはじめとする教育界の問題であると同時に、「会社の問題」なのである。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

村崎芙蓉子の巻

〈医師，第十四期中央教育審議会委員〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

私は子どもの受験を通じて、偏差値が今の中学教育の中心に大きく居座っている有様をこの目で見、肌で感じました。……いびつなこの〝教育〟に携わっている教育界の先生達には、児童心理学をもう一度やり直してもらわなくてはなりません。目に見えないところで、中学生たちは大きく傷つき、血を流し、絶望しています。この〝教育〟は、残酷な差別です。（『カイワレ族の偏差値日記』鎌倉書房）

＊

そりゃあ、ご子息の受験戦争に死に物狂いでつきあって、ベッドの脇で手を握りしめたり肩を撫でたりして愛の告白までした身とあってみれば、さぞかし「肌で感じ」たことでしょうな。だけど「傷つき、血を流し、絶望」するのを実際に見たのは、ご自分のお子さんだけのはずなのに、どうして「中学生たち」と複数で言うのでしょう。

それに聞くところによると、お子さんは偏差値五〇以上、けっして「傷つき、血を流し、絶望」するような数字ではない。察するに村崎女史、じつはご自分がショックで「傷つき、血を流し、絶望」されたのを、わが子へのあまりの愛の深さゆえにわが子とわが身との区別がつかなくなり、お子さんの身の上のことと錯覚なさったのではありますまいか。しかし医師たるもの、誰が「傷つき、血を流し」ているのかを誤認するようでは困ります。村崎医師には、「臨床医学をもう一度やり直してもらわなくてはなりません」。

それにしても、インテリ・ママとしての誇りを傷つけられた怒りから、その起死回生の苦しみの中にお子さんを道連れにした以上、その苦しみはもっぱら自分の上昇志向的欲望が招いたことと自覚するべきです。苦しみから逃れるやいなや、こんどは子どもを苦しめた犯人は偏差値や社会や先生だ、と他人に怒りをぶつけるのはあまりに虫がいいというか、八つ当りもいいとこというか…。だって、元はといえば、その怒りは、お子さんのふがいなさに向けられたものだったのではないですか。

繰り返すが、お子さんは、ほおっておけば、そんなに苦しまずにどこかには入れたのだ。しかしそのどこかでは我慢がならないという序列意識を行動で示したのは、母親であるあなた自身なのです。もし本当に偏差値的な序列が気に入らないなら、はじめから敢然と無関心を決め込む自由もあったはずです。大切なことは、自分の不遇感をなんでも自分の外側の社会や制度のせいにするのではなく、まず不遇感をつくり出している自分自身の内部の条件を見つめることではないでしょうか。

教職適正審議会、初任者研修は本当に必要か？

いま人びとがなすべきことは教師を支配する方法をさがすことなのか？それとも教師と協力しあえる道をさがすことなのか？ほとんど何も生み出さない研修や適性審議会の隠された真の意図をさぐる

夏木智（公立高校教諭）

読者のなかにも、きっと聞いた覚えがある人がいるにちがいないのだが、生徒に対する教師のお説教のなかには、こんなせりふがしばしば登場する。

「君たちには本校生であるという自覚を持って、行動を慎んでもらいたい」

「君たちは高校生なのだから、高校生らしい服装をしなさい」

「二一世紀をつくるのは君たちなのだから、しっかり勉学に励んでください」

彼らは主観的には、教育者として、生徒がどう行動すべきかを教え諭しているつもりだし、それもこれも、すべて生徒のためにしていることだと思っている。しかし、あなたが生徒だったら、なんて自分勝手なことを、よくもまあ平気な顔で言えるもんだと思うにちがいない。

結局、彼らは、自分がそうしてほしいことを、ただ相手に押しつけているにすぎない。「自分の学校の名を汚されたくないから」「高校生はこうあるべきだと自分は思っているから」「君らがしっかりしてくれないと、社会がうまくいかないから」、それでは自分が困るから、自分の言うとおりふるまいなさいと言っているだけなのである。

しかし、こうした「教育」が、効果を上げることはまず少ない。生徒だって、中高校生ともなれば、こうしたせりふが自覚されないエゴイズムにすぎないことくらい、うすうす感づいている。なにせ、生まれてこのかた、この手の話は何度聞かされたかわからないくらいだ。またかと思うだけで、ほとんど聞いてさえいない。お説教が終わって、解放された次の瞬間には、お説教のことなど忘れて自分のやりたいようにふるまうことになる。

資質向上論議のエゴイズムとは何か!?

当然と言えば当然である。生徒には自分の人生があり、そうそう人の願望のとおりになど、動いてはいられない。しかし、この当然の結果は、教師にとっては許すべからざることである。彼の意識の中では、彼の願望のとおりに動くことこそが「正しい」ことになっているので、そうでない生徒は「悪い」生徒であることになってしまう。

「なんというあきれた連中だ」。彼は憤慨し、なんとしてでも、言うことを聞かない「悪い」生徒を、言うことを聞く「よい」生徒にしなくてはと考える。どうしたらいいか。

説教でだめなら、無理やり言うことを聞かせるしかない。考えられるのは、指導の強化と厳しい罰である。指導する機会をなるだけ多く設定し、それでも指導に応じない者に対しては、厳しい罰を課すというわけだ。

こうした、生徒に「正しい」行動をさせようとする教師たちの努力を、世間では管理教育と呼んでいる。

さて、この話を読者はどう思うであろうか。読者が教師でないとしたら、まったくそのとおりだと言う人も多いだろう。「教師は自分勝手すぎる。もう少し生徒の立場に立って、教育をしてほしい」と、多くの人が思うにちがいない。

ところが、もし、本当にそう思う読者がいたとしたら、その人は教師と同じくらい自分勝手である。教師を責める資格などない。

よく考えてみてほしい。教師の側には、生徒の立場に立たなくてはならない理由は何もない。「生徒の立場に立ってほしい」という要求は、その人自身の願望以外の何ものでもないのである。つまり、彼は、自分自身がそうしてほしいからという、その願望だけを理由に、相手がそうすべきだと考えているわけであって、彼の非難する教師とまったく同じことをしているのである。

自分のする「管理」はよい管理

教員の資質の向上を求める声は、世間にあふれているが、その言い分は、教師の生徒に対する言い分と、うんざりするくらい何から何までそっくりである。

「教師は自分が教師であるという自覚を持って行動してもらいたい」

「教師である以上、子どものことをまずいちばんに考えてほしい」

「教育を支えるのは教師なのだから、ぜひがんばって自分を向上させてください」

こうした言い方を、最初にあげた教師の説教と比べてみてほしい。

資質向上を叫ぶ人たちが、教師にある行動を要求するのは、それが自分や、自分の愛する子どもたちにとって都合がいいからというだけでしかない。

「そんなこと、あたりまえじゃないか」と言う人がいるかもしれない。「子どもたちのためになることを要求して何が悪い」と。

しかし、彼らがどう考えようと、教師の人生は教師のためにあるのである。そうそう彼らの言うとおりには動いていられない

(念のために、少し補足説明しておく。生徒はしばしば「悪いこと」をするのだが、それはたいてい教師の目を盗んでなされる。

やはり教師はこわい。教師もしばしば「悪いこと」をするのだが、それはたいてい世間の目を盗んでなされる。やはり世間はこわいのである。この図式もそっくりである)。

ところが、彼らの意識の中では、教師が彼らの思惑どおりに動くことこそ、「正しい」ことなので、そうでない教師は、「悪い」教師であることになる。彼らは「悪い」教師を、「よい」教師に変えなくてはならないと主張する。これが、いわゆる教員の資質向上論議である。

彼らがまず考えるのは、教員に対する説教である。新聞でもテレビでも、毎日のように出版される教育書でも、教員を集めて開かれる研修会でも、先ほど述べたような文句がいくどとなく繰り返されている。

だが、生徒同様、教師だって、その言葉の本当の意味に気づかないほどばかではない。こうしたことは、お互い他人事でありさえすればよくわかるものなのだ。

説教にいっこうに効きめがないらしいとなると、どうしたものかと彼らは考えはじめる。で、指導をより強化して、指導にどうしても従わないような者には、厳しい罰を与えるしかない、ということになる。誰にとっても、自分のする管理は「よい」管理であるらしい。

教員の資質向上のために提唱されている方策のうち、「指導の強化」にあたるのが「研修の充実」であり、「厳しい罰」にあたるのが「教職適性審議会」である。さてさて、教師の発想の貧困を笑うほど、彼らの発想はたいしたものなのだろうか、次に検討してみよう。

研修の充実は何かの役に立つか

研修の充実とは、ひとことで言えば、現職教員の再教育ということである。なりたての教員を対象にした「初任者研修」が代表的なものであるが、最近は教職について五年目の教師を対象とする「五年研修」も実施されている。今年度からは、文部省は十年あるいは二十年研修も導入するよう都道府県教育委員会を指導している。

研修の充実によって、人びとが手に入れるものは何か、少し具体的に考えてみよう。そもそも、研修とはどういう内容のものなのだろう。本などによると昔の軍事教練まがいのことをするところもあるらしいが、私の経験では、次の二つが大きな柱になっている。

まず、教育界の要職にある人や大学教授などが教員を相手にする「講話あるいは講義」、もうひとつは、集まった教員同士がいくつかのグループに分かれて、あるテーマに沿って意見を交換する「研究協議」である。それぞれについて、その効果を考えてみよう。

最初に、講話ないし講義であるが、これはその話の内容による。教師の事情をよく理解した、教師にとっても有益なレベルの高い話を聞かせることができれば、教員だって喜んで聞くだろうし、それなりに有意義なことはまちがいない。しかし、問題はそういう話ができる人が何人いるかということだ。

研修の充実は教員を忙しくさせるが、それ以上に研修の企画の仕事をする人たちを忙しくさせる。教員は行って話を聞いていればいいだけだが、この人たちは、日程を

決め、内容を決め、場所を確保し、講師の依頼をしなくてはならない。研修がひとつ増えればそれだけで仕事はどっと増える。彼らだって、どうしても研修をさせたいと思っているわけではない。仕事だから研修の企画をしているのである。忙しければ、どうしたって講師の人選だって間に合わせになる。誰でもそれらしい人であればいいということになる。

講師を引き受けるほうだって、事情は似たり寄ったりである。なにがしかの謝礼はもらえるだろうが、それにしたって、どうしても教師相手に話をしたいという気持ちを持っているわけではない。おそらくは、頼まれてむげにも断わりにくいから、といった程度の動機で引き受けてくる人が多いのである。

乗り気でない教育委員会の公務員が、乗り気でない教員を集めて、乗り気でない講師に話をさせる。それもこれも「誰もが本気で研修に取り組んでいる」というポーズを世間に向けてつくるためだけに。こうした講義に、いったい何を期待できるだろうか。

もちろん、なかには、ぜひ教員相手に話をしたいという情熱を持った人もいるだろう。こういう人は、しかし、かえって始末に悪い。そういう情熱はたいてい、教員を自分の思惑どおりに動かしたいという気持ちから生まれているからである。そういう話は教員をうんざりさせるだけであろう。

読者が、ちょっと想像力を働かせてみさえすれば、教員研修でのこうした講義や講話が、ほとんど時間の無駄にすぎないことはすぐにわかるはずである。もっとも、つまらない話を聞かせることで、教員に生徒の気持ちをわからせる効果をねらっているのだ、という噂もないではないが、まあ、せいぜいその程度の効果でしかない。

では、「研究協議」はどうであろうか。これも、たいした効果は期待できない。もともと、集められた教員は、そこに来たくて集まっているわけではない。いやいや来ているのである。積極的に発言する理由がない。メンバーにもよるが、前もって提出を義務づけられたレポートをそれぞれが発表して、それで終わりという場合さえある。

まあ、レポートを聞いていると、本当にいろいろな学校があるなあ、というくらいのことはわかるから、まったく無意味とばかりは言えないが、せいぜいその程度である。

もちろん、なかには積極的に発言する人もいる。とくに「底辺校」の教師からは、「こういう問題があって、どうしたらいいか悩んでいる」といった発言がよくある。聞いていると本当にたいへんな問題で、なんとかいい方策がないかという気持ちはよくわかるが、だからといって、もちろんいい解決法などあるはずもなく、答が出ないまま、愚痴を言いあっているだけになる。

そして、やがて時間が来て、最後に、臨席していた指導主事が、「いろいろみなさん困難を抱えているのはわかりますけど、大事なのは教員間の協力ではないでしょうか」とか、わかったようなわからないような総括をして終わりである。みんな、そそくさと立ち上がる。出席者は、どうせこれが仕事、と割り切っているからなんとも思わないが、まじめに教育の問題を考えようという人がその場にいたら、いったいこの人たちはなんのために集まったのだろうと

思うにちがいない。

講義にしろ、研究協議にしろ、こんな調子である。人びとは、こうした研修を増やせば増やすほど、教員の資質が向上すると本気で思っているのだろうか。

まあ、あまり効果はないかもしれないが、でも、やらないよりはやったほうがいいんじゃないか、という人もいるかもしれない。しかし、そういう人は、研修を増やすことによるデメリットをよく考えてみることである。

デメリットの第一は、教師を忙しくすることである。それは、教師の学校における生徒へのサービスの量が、間違いなく減ることを意味する。第二に、希望もしない研修を無理やりさせることで、教師に感情的反発を抱かせるということがある。自分が大事にされない教師は、生徒を大事にしようとは思いにくくなるものである。第三に、研修が充実して教師の仕事が忙しくなればなるほど、教職を希望する者が減って、その結果、教員の資質の低下を招くということがある。研修の充実で、教員の質が低下したというのでは、笑い話にもならないが、とくに最近では、現実の問題であると言ってよいと思う。

これらのデメリットは、さっき述べたような、ほとんど何も生み出さない研修とひきかえにするほど、ささいなことなのだろうか。もういちど、よく考えてみてほしいものだと思う。

教職適性審議会はエゴイズムの牙だ

教職適性審議会というのは臨教審のなかで出てきた案で、大まかに言って、問題教師を排除するための機関を作ろうというアイデアである。臨教審内部でも反対があって、答申には盛りこまれなかったが、今でもこうしたものが必要だと思っている人は、少なくないようである。

このアイデアの最大の難点は、ある教師が問題であるかどうかを、決定する方法がないということだ。勉強が遅れがちの生徒を特別扱いして、放課後に呼んでていねいに教えてあげるような教師は、えこひいきをする問題教師なのだろうか。あるいは、勉強が遅れがちの子がいても見て見ぬふりをするような公平な教師が問題教師なのだろうか。

何が問題で、何が問題でないか、各人は自分の正しさを疑えないので、「そんなことは誰が見たって明らかだ」と思っている。ところが、意見の違う者同士がみなそう思っているのだ。こうした状況で、いったい全体どうやって問題教師を見わけるというのか。

このアイデアの残酷さは、「教職」のところを何か別の単語で置き換えてみるとよくわかる。「ドライバー適性審議会」「弁護士適性審議会」「新聞記者適性審議会」「国民適性審議会」…こういうものを考えていけば、いったい誰が何を基準に審議するんだと、疑問に思わない人はいないはずである。教職だけ特別である理由があるだろうか？

年度の終わりに生徒に投票させて決定したらどうか、などという意見も聞いたことがある。しかし、もしそんなことをしたら、「底辺校」の教師は、どんな立派な教師でもかたはしから首になってしまうだろう。「底辺校」の教師が、「進学校」へ行けなかった子どもたちに、少しでも社会で生きる力を

Illustration＝サイコ・オカダ



つけてやろうとして、どれほどの苦労をしているのか、人びとはわかっているのだろうか。そういう教師が首になっても平気でいられるほど、人びとは残酷なのだろうか？

人びとが自分の思いこみだけを真実と思い、自分がおもしろくないと思う教師を問題教師と呼ぶかぎり、教職適性審議会は、人びとのきまぐれなエゴイズムが、教師を食い荒らすための牙にしかなりえない。それは、教師にとってはもちろん、人びとにとっても結局は不幸しかもたらさないであろう。

資質向上論議のゆくえ

こうした問題を考えていると、時々、淋しい気持ちになる。

「他人の立場に立て」と言う教師が、自分の都合を生徒に押しつけ、その押しつけを批判する人びとが、自分の都合を教師に押しつける。そうして、自分たちの気持ちをわかってくれないという子どもたちが、教師や親の気持ちなどわかろうとさえしないのだ。みんな他人のエゴイズムばかりが見えて、自分のそれには決して気づかない。悪者はいつも他人である。他人が自分の言うとおりにしさえすれば、すべてまるくおさまるのだと、誰もが思っている。

もちろん、誰も自分のため、そのためだけに生きている。「他人のために生きる」などという言葉は、どんなに美しく見えても幻想である。自分のため、それでいいし、そうでなくてはならない。しかし、それはまた他人にとってもそうだということを忘れてはならない。他人もまた誰かのためではなく、その人自身のために生きているのだ。

そのことが理解できさえすれば、他人が自分の思いどおり動いてくれないとき、ならば、力ずくでも動かしてやろうとすることだけが、自分にとって必ずしも最善の選択でないことは理解できるはずである。「いいか、世の中すべて自分のためにあると思うなよ」と他人に向かって言う人は、同じことを自分に向かっても言ってみたほうがいいのだ。

今、人びとのなすべきことは、教師を支配する方法を探すことなのか？　それとも、教師と協力しあえる道を探すことなのか？

もし、人びとが本当に、今の教育をよりよいものにしたいと願うなら、ぜひ、もういちど、そのことをよく考えてみてほしいものだと、心から願わずにはいられない。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

森毅の巻

〈元京都大教授，数学者，評論家〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

高校入試も一発勝負で七割、内申書で三割とか、入り口の尺度をいっぱい作ればいい。制度を変えると必ず「現場が混乱する」「子どもがかわいそう」などの意見が出るけど、業者テストをなくした影響で落ちる子もいる代わりに、合格する子だっているはず。混乱に強い子が有利になってもいいじゃないの。（『朝日新聞』九三年一月二十七日）

＊

たしかT・S・エリオットのことばに「検閲制度がよくないのは検閲に通った作品がみんないい作品だと思われるからだ」というのがあった。これをもじって、現代では「検閲にひっかかるとどんなつまらない作品でもいいと思われる」と言った人がいる。これをもうひとつもじって「偏差値体制がよくないのは、点数以外の選び方が全部いい選び方だと思われるからだ」とも言えるのではないか。

なにしろ、この間の偏差値追放大合唱のうねりの中では、どんな尺度だろうと偏差値よりはまし、と言いたげな趨勢である。土井たか子の「ダメなものはダメ！」という名言のオソロシサが今さらのように思い出される。そう思われてしまう根拠は、もちろん現在の偏差値（本当はテストの点数）体制に対するルサンチマン以外にはありえない。

この森のコメントはもちろん文部省の業者テスト追放令に関するものだが、やっぱりこのルサンチマンの精神構造がなかったら、愚にもつかぬ悪い冗談としか受け取られないだろう。混乱に強い子が有利になって何がどう今よりいいのか。それをぜんぜん明らかにしないまま、ただ偏差値支配と呼ばれる状況が少し壊れるのが爽快だというだけだ。無責任そのものである。

それでは「混乱」が訪れるとして、それからどうなるか、無責任な一刀斎氏のかわりに考えてあげよう。まず、本当の成績優秀者と本当の成績不振者はまったく影響を受けない。境界線上で、今まではならたぶん受かっていた何人かが落ちて、今までならたぶん落ちていた「混乱に強い」何人かに交替するだけだ。社会全体のルサンチマンの総量はまったく同じで、「今までなら」という思いが加わるだけ、より深刻なものになる。

もともと偏差値支配と呼ばれる状況の構造は、そんなに複雑なものではない。私たちにはただ、自分自身の身勝手さと卑小さを見つめる勇気が必要なだけだ。ともかく「いいじゃないの」という軽いノリでなんとかなるという甘い幻想だけは捨てようじゃありませんか。

臨教審・自由化論かく敗れたり！

［安保全学連委員長・香山健一の闘い］

教育の自由化＝教育に対する画一的国家統制・許認可・規制等の緩和を提唱した香山健一は臨教審のなかで何と闘い、なぜ一敗地にまみれたのか。彼の孤独な悪戦から学ぶべきものを指し示す！

松田博公（共同通信記者）

「それで、あなたはいったい臨教審・自由化論に反対なのか賛成なのか、どっちなんだ」

年季の入った初老の活動家らしい男がイラついた表情でそう言った。

八六年十一月刊の『果てしない教育？』（北斗出版）に一章を設け、私は佐々木賢と香山自由化論について語り合った。その頃進行中の臨教審の教育改革論議を香山自由化論・PHP派自由化論・国家主義教育論の三つ巴（ともえ）の構図から読み取る私たちの視角は、当時きわめて例外的で異色だった。そこで名古屋市の反管理主義の教育運動家たちが私を呼んで話させた、その席上でのことだ。

「次元が違うんだよ」とは私は言わなかった。今なら「学校を向こうにまわし、何がなんでも子どもの側に立ち続けようとするあなたたちの立場と、農耕・工業文明型装置である旧来の学校システムと情報消費文明がもたらした家庭・子ども変容の断層か

ら教育現象を見つめる立場とは次元が違うんだ」と語るだろう。佐々木賢の『怠学の研究』(三一書房)、彼と私の第二作『教育という謎――消費社会の文化変容』(北斗出版)、そして、この数年の佐藤通雅、由紀草一、小浜逸郎らの仕事の蓄積が、楽々とそう言えるだけの地盤を形成しているから。けれど、そのときはこう答えただけだ。

「香山はともかく教育に対する画一的な国家統制を緩和せよと主張し、自由を旗印に文部省解体というわかりやすい方針を出した。市民派が夢想もしなかったことを香山がなぜやれたのか。考えてみたほうがいい」

「自由化論が提案する学校の民営化、塾の学校化はいわば教育における消費者運動だ。それに反撥するなら生協も否定しなければ一貫性がない。それとも、(文部省のように)教育と消費経済は違うとでも言うのだろうか」

狭い部屋に気まずい雰囲気が流れ、会はそのままおひらきになった。

偏狭な二項対立型精神の無効

何しろ、体制・反体制を問わず、味方でなければ敵、反対でなければ賛成、革新でなければ保守、善でなければ悪という偏狭な二項対立型精神がこの国には満ちている。戦後教育史もまた、かつての米ソの相互依存と相互反撥の世界分割体制のように、文部省は日教組を、日教組や市民派は文部省をひたすら諸悪の根源と名指し、その結果、教育荒廃の真の認識を遠ざけておくニセの安定構造を維持してきた。

だから「教育の自由化」＝「教育に対する画一的国家統制・許認可・規制等の緩和(デレギュレーション)」を提唱し、文部省の文化・スポーツ省への改組を大胆に提案するかつての六〇年安保全学連委員長が登場したとき、驚がくしたのは文部官僚だけではなかった。日教組は大あわてで文部省とともに「公教育を守れ」と叫び、市民運動家は混乱と疑惑に包まれたのである。彼は敵なのか味方なのか、と。

人は自身にとって真に新しいものを知ることはできない。文化人類学者によれば、南の島の住民は初めて巨大な船を見たとき、目の前に浮かぶその船の存在に気づかなかった。私たちは宇宙人に会っても、宇宙人だとわかりはしない。なぜなら宇宙人の姿形について定型的なイメージはないから。私たちはあらかじめ認識図式を抱いているものについて、その図式を頼りに認識するだけだ。

香山自由化論をめぐる私の取材に、当時の市民運動・女性民教審の世話人、俵萠子が、「何かキツネにつままれたカンジ。ウラがあるんじゃないの」と感想を語ったのも、まさにこの認識図式の不在によるのだろう。「(中野区の準公選制教育委員として)画一化、硬直化した教育行政のただ中で活動して自由化は絶対必要と思う。けれど、自民党内閣の下での教育改革でしょ。高校教科書の検定廃止など自民党文教族が絶対許すはずのないことを彼がなぜ主張するのか」

臨教審が中教審のように文部大臣の諮問機関としてでなく、中曽根内閣の下で総理大臣の諮問機関として設置されたことも、疑心暗鬼の種だった。けれど、総理大臣の



香山健一氏

立場に立てば、戦後の文部省による教育改革がなんら実効を上げないために、学校は、「陰惨ないじめ、自殺、校内暴力、登校拒否、非行、しつけの喪失、問題教師、偏差値偏重の受験競争の行きすぎ、管理教育の弊害等」が横行する現場になったのである。「なにも新しい審議会を設置する必要はない。従来の中教審でやればよい」という自民党文教族らの意見を抑え、既得権益の打破や文部省改革が可能な直属の審議形態を模索したのはむしろ中曽根の意気ごみを示していた。軍拡路線を歩む国家主義者という彼の世評と政策ブレーンとしての香山健一の位置とが、「ウラ」にあるものをかんぐらせ、「学校の民営化」の主張が国鉄解体＝民活路線のもたらした過渡的混乱を連想させたのである。

〈自由〉という思想のパラドックス

しかし、人びとが香山の自由化論をまともにとらえる能力を喪失していたもっとも決定的な理由は、やはり認識図式の欠落にある。それはこの国の変革運動における〈自由〉についての常識的なセンスの一般的不在にかかわる事柄なのだ。

私は思い出す――。

八五年十一月、東大本郷キャンパスで開かれた社会主義理論フォーラムの教育分科会でのことだ。内申書裁判の元原告・保坂展人が、生徒は学校でもっと自由自治に生きてしまおうと主張した。保坂が行なってきた学校の管理主義に抵抗する行動については誰も異議はないはずのその分科会で、ただし「自由自治」に関しては、会場から「自由自治は日本においては一貫して力ある者の論理だった」という批判が投げかけられた。しかも、その発言は「障害者など

ハンディを負った者にとっては自由という概念は抑圧的に働く」という平等主義的な善意を含んでいたのである。

だが、それは違う。七〇年代にスウェーデン、カナダ、アメリカなどで同時多発的に発生した、障害者が命をかけて病院や収容施設から脱出し、地域で生活するＩＬ（インディペンデント・リビング）運動の思想は〈自由自治〉以外のなにものでもなかった。彼らが対決し、乗り越えようとしたのは施設の壁ではなく、善意の人びとの心の中の弱者保護という管理・抑圧思想であり、平等という名の差別主義だ。彼らは人間の尊厳と自治自律を行動で示した。「社会から隔離された施設の中で安全に管理され、生き延びるより、普通の人びととともに地域社会で暮らす自由のほうを選びたい。死の危険というリスクを負うとしても」と。

日本においても、たとえば私が短い期間知り合った宇都宮辰範などは、単身、四国から車いすで上京し、快活な笑顔と痛烈な毒舌でアパートに近寄る人びとを魅了しながら、あるとき肺炎にかかり、救急病院をタライ回しされるうちにあっけなく死んでしまった。すがすがしい記憶を残したまま。

個体としての自分の生き方は自分で決める、どんな強制にも従属するまいとする〈自由〉の思想。たしかに〈自由〉の思想にはパラドックスがつきまとう。私たちの感覚や意識自体がすでに、生活の場において社会的に、身体を通して生物学的に拘束されている。〈全き自由〉という観念はまるで自己欺瞞だ。私たちは独りで生まれてこず、独りで生きていない。〈自由〉とは他者との関係における〈自由〉であり、したがって他者を侵害せず自由かっ達に生きるためには、自己規律の道具としての倫理を内包していなければならない。さもなければその〈自由〉は反転し、欲望に従属してしまう。

欲望への服従としての〈自由〉の讃歌は農耕型管理社会の産物でもあるだろう。個人がリスクを冒し、自己の責任で運命を切り拓く自律的な機会の乏しい農耕社会型文明において、〈自由〉は過剰な管理と保護のシステムに対する過激で絶望的な反逆に追い込まれ、ロマンや芸術、犯罪の中に生き延びた。〈自由〉は、体制側からも反体制側からも、共同体の規律を犯すうさんくさいタブーの対象だったのである。

いわば思考の訓練のできていない〈自由〉音痴で感度の鈍い人びとが、晴天の霹靂（ヘキレキ）のような香山自由化論に直面し、あわてふためき、困惑し、押しこめ、議論にふたをし、無視しようとしたのだ。

香山健一の孤独な闘い

臨教審最終答申後六年の現在、香山健一は一冊の思想的遺書として評論集『自由のための教育改革――画一主義から多様性への選択』（ＰＨＰ研究所）を残している。ここには明治以来の近代百年を支えた教育の画一的システムが、元安保全学連闘士の未来学者であり、体制を支える政策ブレーンである一人の男を挑発し、憤激させ、論理のひとりでに飛び立つままに過激な自由思想家として振るまわせた記録が収められている。少なくとも紙の上で、香山は今なお現役の革命的思想家だ。そのままならただの野心的で穏健な政策エリートで終わったろう天皇家が好きな男に、青春の血をよみがえらせ、解体を叫ばせた公教育の統制管

理と画一主義の現実は、基本的には何ひとつ変わっていないのだから。

　まことに人と思想は、個人の意志が、ではなく、時代がつくるものだ。西尾幹二のように個人的にどんなに香山が嫌いな者でも、次のことは公平に認めねばなるまい。戦後日本で〈自由〉を現状変革の実践的思想としてかくも批判的、かつ全面的に主張したのは香山が初めてだということを。

「秦山鳴動ネズミ一匹」と評されたように、最終答申を含め、四次の答申には、この本の中の香山健一の提唱はほとんど影をとどめていない。と言えば、香山は不服だろう。なるほど第一次答申の第一部「教育改革の基本方向」の第四節「改革の基本的考え方」では筆頭に〈個性重視の原則〉を掲げ、「今次教育改革においてもっとも重要なことは、これまでの我が国の教育の根深い病弊である画一性、閉鎖性、非国際性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則、すなわち個性重視の原則を確立することである」と述べている。この第一次答申を貫く基本トーンをとらえ、〈自由化〉という言葉は削らざるをえなかったが、〈自由〉という言葉なき実質的な自由化論は実ったと言いたいかもしれない。

　だが、耳目を集めた文部省の改組はもとより、通学区の弾力化、塾やホームスクーリングの「義務教育」としての認可、共通一次の廃止、国公立大の分割民営化の促進、高校教科書の検定廃止など、香山が唱えた具体的でドラスティックな改革案のどのひとつも答申に採用されてはいない。彼が口を極めて糾弾した「公教育旧体制護持派（アンシャン・レジームのエスタブリッシュメント）」は、抽象的理念において自由化論に花をもたせながら、具体的方策ではほとんど無策という既定路線を守り、臨教審を現行の教育行政の枠組みの中に抑えこんだのである。

　だからといって、香山健一の闘いが無意味だったわけではない。逆である。あとから考えてみるとなおのこと、香山は最初からほとんど敗れるにきまっている闘いによく挑んだ。それは中曽根が風見鶏ぶりを発揮して多数意見に屈服し、「義務教育は国の責任なので、自由化は慎重に」と内輪で語った八五年六月以降もしばらくは続いたのである。第一部会にはＰＨＰ派の天谷直弘のほか俵孝太郎らの他の自由化論別派もいたが、彼の闘いは明確な連合戦線なしに終始した。おそらく情報文明の体系的なとらえ方において、自由主義の哲学の戦闘的な理解において、さらに青春時代に行動主義的マルクス主義をくぐる過程で身につけた戦略戦術思考やアジテーションのスタイルにおいて、そして首相の政策ブレーンという地位のもたらすものによって彼は孤立し、突出していた。

　そして私たちが多くを学びうるのは、そのように孤立して闘う者からである。文部官僚の公教育支配のシステムにどのような根拠で、どのような構造認識に基づいてオルタナティブをつきつけ、どのように対峙し、そして当然のように敗北したのか。自らの孤立と引き換えに、香山はその軌跡をクリアに提示してくれている。

教育自由化論の戦略目標

　香山が自認するように、臨教審・自由化論は「近代教育史上初めて『教育における

自由』の問題を真正面から論争し」た場だった。しかし、文部省、日教組はおろか、市民運動家にもマスメディアにも自由化論の思想的意味をまともに論評した者はいなかった。せいぜい香山の出自を中曽根ブレーンに求め、臨調行革路線批判の視点から皮肉たっぷり、斜めにながめていたにすぎない。

私はといえば、八五年五月、第一次答申を控えた日に香山にインタビューした（「果てしない教育？」に収録）。市民派・俵萌子の困惑にはじまり、反自由化論、文部省＝日教組の公教育擁護連合戦線、理念的自由主義の内容、二つの自由化論の差異などに触れながら、私は記事を「体制・反体制の枠組みでとらえ切れなくなった政治や思想の現状。香山『自由化』論の登場はそれを映し出している」と結んだ。単にジャーナリズムの香山無視の傾向に異を唱えたかっただけではない。時代が押し出したひとつの思想の表現を是非は別に、そのものとして遇しないこの国のシニカルな雰囲気が腹立たしかった。

その頃、霞が関の政府刊行物センターで入手したパンフレットが大蔵省ソフトノミックス・フォローアップ研究会報告書I—9『高度情報社会のパラダイム』（香山健一チーム）である。香山を中曽根ブレーンに還元するぐらいなら、大平首相ブレーン時代の作業を引き継いだこの報告書にこそ還元すべきなのだ。

香山自由化論は寄せ木細工のようにできている。フリードマン流の経済自由主義を骨子としながら、もうひとつのルーツと言えそうなのがこの報告書に見られる高度情報社会の文明変容の視点だ。ベースはトフラーの『第三の波』である。第五世代コンピュータを志向する情報技術が切り拓く未来社会では、家庭や地域、生活中心に多様化、分権化、選択の自由が拡大し、人びとの理性と感情、科学技術と宗教、ハイ・テク（技術）とハイ・タッチ（精神）が正しい均衡に到達する。そして自然の収奪や大衆独裁社会をもたらした工業化時代のアトミズム、デカルト以来の近代合理主義を脱する新たな自由と自律の世界観、自然観、人間観、社会観の形成が展望されている。

デカルト的二元論批判やホロン概念、『タオ自然学』、バグワン、老子が登場するかと思えば、エコロジーあり、オーウェル流の「一九八四年」社会批判あり、「リゾーム」あり。七〇年代反体制ラディカリズムのパロディ版とでも呼べそうなこのパンフレットには、教育改革に関する主題的な言及はない。

だが、臨教審に先行する時期に香山が主宰した研究報告の末尾に「個性化」「分権化」「自由化」「脱イデオロギー」「国際化」「人間化」の諸原理が新しい社会の性格として挙げられているのは無視できない。それは、教育自由化論の戦略目標そのものだ。また、臨教審において香山が好んで使った「耐用年数」「陳腐化」「画一」などの諸概念も散見される。つまり、『高度情報社会のパラダイム』を学校、教育にあてはめるなら、農耕・工業型文明から情報文明への移行に伴って労働や社会生活の態様とともに学校も変わらざるをえない、変わるべきだという見解がおのずから成立するのだ。香山が雑誌『NEXT』八五年三月号に書いた論文「画一性に死を」の次のような表現は、学校改革論と文明変革論とを結びつける理論構築な

しには考えられないものだ。
「まず、画一性の弊害に焦点を絞ってみても、これには次のような諸要因が複合的に作用していたものと考えられる。
第一に、そもそも明治以降の我国の急速な追いつき型近代化、工業化、西欧化の過程において、我国が欧米から輸入した近代の学校制度というものは、本質的に国家統制と画一主義の性格を強く帯びているものであり、その理念としては近代合理主義とインダストリアリズムを中心とするものであった。
このような近代学校制度は、我国を含め今日の工業先進国において大きな成功を収めたものであるが、成功することによってすでにその制度としての耐用年数を終えて陳腐化し、近代の終焉、工業社会から脱工業社会への転換期のなかで様々な先進国病の病理症状を顕在化するに至っている。
近代の成果を継承し、その限界を超えていくためには、学校と教育は脱工業社会、高度情報社会に向けて根本的なイノベーションを必要としているのである」

香山自由化論の先駆性

自由化論によって香山が残したいくつかの理論的遺産のなかでも、段階論的な時代区分に基づき、学校価値を相対化するこの認識の先駆性は疑えない。理念型が先行しているとはいえ、それは定時制高校の生徒たちの教育嫌悪の感情との日常的な接触を通して、学校と教育の価値転倒と教育無化の発想にたどりついた佐々木賢や、学校現象の中に情報化、消費化のただ中を漂流する子どもたちの意識の現在を探ろうとする近年の佐藤通雅から小浜逸郎に至る一連の作業とも重なるものだ。
学校はもはや古い。子どもたちはその枠組みの中で窒息している――。香山はもちろん事態を政治的に単純化している。だが、彼が学校問題の根源を佐々木らと同様、情報文明と農耕・工業文明のせめぎ合いから把握していることは、八五年二月十六日、「学校は人が作ったものだから、人は必要なものと思うだろう。だけどだ。学校へ行ってしあわせになるかだ」と書いた作文をしからられ、自殺した横浜市の小学校五年生、杉本治君への次のような視線にもよく現れている。
「厳しい言い方をあえてすれば、治君を死に追いやったのは、画一的、硬直的で陳腐な『児童像』の枠のなかに子供を押し込もうとしか考えない画一主義の教育であり、治君の個性を殺し続けた教師と学校と制度である。子供たちは教師や親の世代よりも肉体的、精神的に早熟化傾向を強めているし、遙かに個性化し、多様化していることを自覚する必要があろう。
しかも、治君はたった一人なのではない。全国各地の学校において、どれほど大勢のかけがえのない貴重な『個性』を押し潰されてきたことか。教育関係者は、この治君の死の重い意味、『学校を破産させちゃう』という治君の思いつめた発言の意味を胆に銘ずるべきであろう。
今次教育改革の目的のひとつは、全国各地の無数の『治君』の尊い生命と豊かな個性を救うことであり、『治君』を死に至らしめた画一主義の教師と学校と制度を『破産

させる』ことでなければならないと私は思う。幼い治君の文章には、二十一世紀への文明の転換の鋭い予感がある」（「文部省解体論――国営・配給制教育の終焉」『文藝春秋』八五年四月号）

香山は彼のパラダイム的な文明変革論と自由思想が、従来の審議会の官僚主導型の形式的運営とまったくあいいれないことを熟知していた。八四年九月十三日の朝刊に臨教審委員が知らない「議事規則案」が報道されたことをきっかけに、総会にワープロ印刷の意見書を配布、審議会のイノベーションに乗り出す。それが香山の第一の闘いとなった。以後、たびたび提出するワープロ文書と編集委員を務める公式雑誌『臨教審だより』、外部の雑誌論文をメディアに戦闘が続くのである。

既成の固定概念を破壊しようとする者が明確な論争を回避する「ウチの和優先主義」、満場一致主義を嫌うのは当然だ。香山の見上げた点は、会議運営の方法を具体的に改革するためにモーレツな行動を起こしたことだ。しかもそれ自体が方法論的な信念にうらづけられていた。

「いちど徹底的な論争を組織するという習慣をつけることが大切である。意見の多様性、異質性を積極的に肯定し、その基礎の上に多様な意見の調整、統合を図るという多元論的なアプローチの確立が不可欠である」

「これからの教育改革は一つの考え方で、上から進められるものではなく、多様な考え方の合成を基礎に、下から分権的、主体的に進められるべきものである。意見の相違や対立を恐れず、むしろそうしたものを歓迎し、数学的に言うならば多様な『ベクトルの合成』という考え方で臨教審を運営する態度が必要ではないか。（中略）意見のベクトルの方向や大きさが違っていることを恐れる必要は何もない。二つの異なるベクトルの和が、これを二辺とする平行四辺形の対角線となるように、多様な意見ベクトルの合成はむしろ望ましいものと言える」（『自由のための教育改革』PHP研究所）

ここで香山はひとつの隠された思考について語っている。彼は『果てしない教育？』で私が引用しているように、知る人ぞ知る、エンゲルスの対角線の理論について述べているのだ。エンゲルスは書いている。「そこには、相互に交錯する無数の力、力の平行四辺形の無限の群があって、そのなかから一つの合成力――歴史的成果――が生じてくるのである」（「J・ブロッホへの手紙」）

二十代の日々、香山もマルクス、エンゲルスの文庫本を手に反安保のデモに加わっただろう。そして官憲に追われながら、「誰も自分の思うように歴史をつくることはできない。歴史とは諸力の合成である」というテーゼを身にしみて受け入れたにちがいない。

本来、マルクスの思想もエンゲルスの言説も、思いのほか近代の自由思想と通底している。戦後左翼の心情をおおったクラい敵味方論とは一線を画している。真に闘う者は誰も、戦闘の中で敵が味方に、味方が敵に逆転するゾクゾクするような瞬間を知っている。エンゲルスをひそかに引用し自由思想をふくらませながら、香山の胸には全学連時代が去来していただろう。

だが、臨教審の戦場において、香山はついに敵の反自由化論の闘将を味方につけることはできなかった。

第三部会長・有田一寿の反撃

第一部会が自由化論者優勢なら第三部会は圧倒的に学校関係者の公教育擁護派が占めていた。部会長の有田一寿は、クラウンレコード会長で経団連理事だ。音楽産業という情報消費社会の先端企業の経営者だからといって「高度情報社会のパラダイム変容」がすんなりと理解できるわけではない。むしろ元教育長の経験を背景に学校荒廃の最大の理由を徳育の不在に求め、教員の資質管理のための教職適格審査会、初任者研修の実現を図って、文部省を代弁したのが有田だ。彼は記者会見で「満身創痍になっても斬り死に覚悟で自由化と対決する」と大見得を切った。反自由化論の部会長見解まで出した彼には、けっこう名言が多い。



有田一寿氏

「わが国の初等中等教育は世界最高水準にあり、『教育の自由化』による規制緩和等を進めることは、かえって成果のすべてを損なう恐れがある」という文部省初等中等局長の官僚的見解に比べても、彼の老練な思索ははるかに香山の論拠に迫ったのである。『臨教審だより』3号(八五年三月)の教育改革論争シリーズ「いわゆる〝教育の自由化〟をめぐって」の座談会で有田は香山と対決した。

「日本は開かれた本当の意味での自由主義国家になっていない。半自由主義国家であり、集団主義社会であり、まだまだ農耕社会時代の一つの社会意識というものを引きずっている。(中略)

　だからそのときにもっとすっきりした個人主義、自由主義社会で一番ふさわしいと思われるような教育制度、教育方法、教育内容を持ち込んでも、そのせっかくの自由を半自由主義社会の国民は活用しえないだろうと思う」

　国家とは強制・管理と防衛・保護の二重構造のシステムだ。義務教育という強制教育は、最低限、基礎学力を注入し、労働者として食っていける要件を満たしてやる保護教育でもある。それが大衆の公教育への平等主義的欲求を吸引するのだ。この巧妙な支配・被支配、管理・服従の共犯関係のからくりを有田の言葉は語っている。「半自由主義社会」の国家と国民はもちつもたれつ。意識の遅れた国民は自由など決して望んでいない。むしろ国家の手厚い保護・援助こそ求めている。そこから国家主義的官僚の家父長的精神が顔をのぞかせるのである。

　総会において削除された第三部会の「審議の概要(案)」には、「自由化」反対の理由が列記され、そこには「学校の選択等の際における親の判断が、真に子どもの立場を考えて適切に行なわれるか疑問である」というどう考えてもおせっかいな表現がある。部会長見解でも有田は言った。「日本人がもっと自分の頭で判断し、『人は人、われはわ

れ」という思考で行動するようになれば、教育制度を大幅に自由化し、父兄に選択権を与えてもいいと思うが、そういう意識が定着していないところへ『自由化』や『競争原理』を導入した場合、混乱が生じ弊害が生まれることが充分考えられる」

　誰も有田の発言を守旧派の妄想と笑えない。体罰や管理主義教育への批判をよそに、多くの父母が学校への依存体質を持ち、子どものしつけに対して「殺さないかぎりでの」管理主義を容認しているのも、よく知られた事実だ。

文明史的認識からの画一化批判

　泥にまみれて現実を知り、大衆の欲求を思想に繰りこもうとする優れた思想家なら、ここでしりぞくことだろう。どんな過剰さが香山にそうさせたのかわからない。だが、一級の思想家なら必ずや回避しただろう、大なたをふるう理念的思想が着地しないこの国の湿地帯へと香山は前進した。

　それが「近代教育史上初めて」の思考実験となったのは香山の歴史的功績だ。まさに反独裁・民主の闘士をほうふつとさせる次のような発言を持続することによって――――。

「親の教育権、選択能力、判断能力を否認する考え方は、旧憲法的感覚であり、行き過ぎた国家統制主義、全体主義の残滓に過ぎない」

「教師を徹底的に管理、統制するという制度と政策……。このような考え方に基づくあまりにも瑣末な『指導・助言』という名目の国家統制こそが画一主義の弊害をもたらし、教師と学校から個性、創造性、多様性、生き生きとした健康な活力を奪い去った」

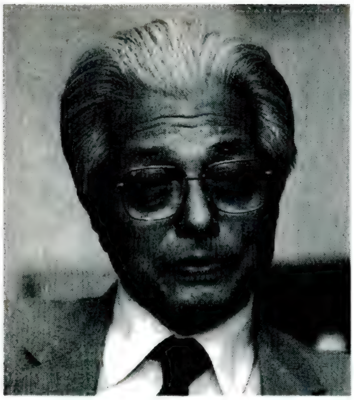
「子供を管理の対象としか考えないような教育は教育の名に値しない」

「『反自由化論』は教育の世界にだけ残存し続けている、古い配給経済、統制経済、国営経済イデオロギーの硬直化した化石に過ぎないのである。なぜこのような化石化現象が教育の世界にのみ強く見られるのか――――これはそれ自体興味深い考古学的研究のテーマとなろう。

　このような前時代的な経済認識のゆえに、『反自由化論』は学校の外側において急速に成長、発展しているさまざまな知識産業、情報産業、教育産業に目が向かないし、まして高度情報社会への文明史的転換がこれからの教育に与えるであろう衝撃については想像もつかないのである」

「文部省の意識の中では、戦前教育と戦後教育の理念上の転換が欠落しているのである。『反自由化論』の不思議な体質はすべてこのことと深くかかわっているように思われる。つまり、文部省は戦後の意識改革をきちんと通過していないのである。このことは、戦後の教育行政における戦前的な法解釈の体質から、古い戦前型の行政体質に至るまで一貫しているようである。この古い体質を改善することが、今次教育改革には不可欠であろう」（配布文書「『教育の自由化』論争の歴史的意義」）

　反自由化論の「画一教育」肯定論が依拠したのは、何よりも教育の機会均等という平等主義のたてまえである。したがって現実には東大を頂点とする大学制度が厳しい受験競争を媒介にエリート形成をし、階級差をつくりだしているにもかかわらず、そ


天谷直弘氏

の面については黙して語らない。だが財界を中心に、単線型教育を複線型に切り換え、実戦力のあるエリートを計画的に養成せよという願望は戦前の旧制高校への郷愁を伴いつつ、根強くあった。

ボーダレスな国際社会の激動は、臨教審を前に、この願望を新たなかたちで再燃させた。東大教授佐藤誠三郎は、第二部会長のPHP派・石井威望との対談「社会変化とリーダーの条件」でこう話している。「いかにして使命感と責任感をもったエリートを再生産するかということは、現在の平等で豊かな社会における大問題ではないでしようか。それにつけてもぜひ直さなければいけないのは、日本の学校制度の恐るべき画一主義です。……日本が先進国となった現在では、多様な能力、リーダーを養成するために重大な桎梏となっています」（「ヒューマンサイエンス」第五巻・中山書店）

香山の自由化論は個人の「能力に応じた教育」を核とするかぎり、エリート養成の任務にこたえるシステムを準備する。それはたしかだろう。だからといって、香山の論理を英才教育に矮小化することはできない。私に対して彼は語っている。「このままだと日本の国際競争力がなくなるから基礎科学振興のために創造性や個性が大切という経済至上主義的な考え方とは僕は違う。個性とは、何かの手段じゃない。この世に生まれて何十年か、独自の生物として生きること自体が価値でしょ」

香山自由化論が今日の教育論の先端と切り結ぶ意義をもういちど繰り返せば、それは高度情報化社会において学校は中心的地位を失うという醒めた文明史的認識から出発していることだった。

エリート養成をめざす もうひとつの自由化論

けれどエリート養成の視点から学校を重視する政策論的自由化論別派の流れも臨教審にはあった。松下幸之助を座長とする「世界を考える京都座会」であり、第一部会長の元資源エネルギー庁長官・天谷直弘はその一員である。同座会は八四年三月、臨教審に先立ち、①学校設立の自由化②通学区域制限の緩和③教育内容の弾力化、飛び級の導入――など「学校教育活性化のための七つの提言」を公表した。八五年二月、天谷が総会に提出した意見書「21世紀の要請する教育」は短い文章の中で非エリート的な「ドングリ」への批判を連呼することによって、国際化社会へ向かう日本の人材欠如を訴えた。

「日本は、モーレツドングリのせいくらべ社会である。この日本社会の特質を比類ない純粋さで培養した場所こそ、小学校から大学に至る日本の学校社会である」

同座会の教育改革原案の作成に加わったある人物の証言によれば、香山の主張と同

様の文部省のサービス機関化や地域の教育委員会への権限委譲を盛りこんだところ、「文部省を怒らせてはまずい。日教組の跳りょうを招く」と削られたそうだ。

香山の悪戦から学ぶべきもの

　このようなPHP系の自由化論別派と時に手を結び、あるいは独りで香山は反自由化論と対峙した。第一次答申で、〈自由化〉の〈個性重視〉への後退を強いられ、実質的な骨抜きに甘んじた香山は直後、戸部良一らとの共著『失敗の本質――日本軍の組織論的研究』（現在・中公文庫）を、委員と専門委員の全員に寄贈している。この共同研究は、ミッドウェー、ガダルカナル、インパール、沖縄など旧帝国軍隊が大敗した六つの作戦をケーススタディし、そこから教訓を引き出したものだった。あいまいな戦略目標、主観的な空気の支配、人的ネットワーク偏重の組織構造、学習を軽視した組織などの日本的組織の弱点に関する鋭い指摘が、「同じ日本人の組織としての連続性を有する臨教審、文部省、学校等、教育界の諸組織の審議、運営、人間関係等のあり方を考える上で示唆に富むものと信じます」と香山は送り状に書いている。

　この行為によって香山は彼が何と闘い、一敗地にまみれたかの自覚を明瞭に伝えている。それは生温かい平等主義の空気がただよう、大衆のルサンチマンの蓄積した集団主義社会日本の懐かしい沼地のような風土だった。過去半年間の反省のために、という目的で行なわれたこの寄贈は、今考えると、実質的にはいささか早すぎる臨教審全期間に対する香山の最後っぺであり、総括の儀式となった。

　第一次答申を乗り切った文部官僚と第三部会の優勢はその後も動かず、教科書検定、秋季入学、学校五日制などの各論の議論の枠組みは香山にはいかんせん狭すぎた。〈自由化〉のキーワードを放棄した闘将香山が再びスポットライトをあびて激論の舞台に立つことはなかったのである。

　ウォーラーステインは『史的システムとしての資本主義』（岩波書店）で、社会革命は、実際には革命というドラスティックなかたちでは起こらない、起きているのは旧支配層の〝自己変身〟という「管理された変革」だと考えている。今は亡き香山自由化論は、きっと支配エリートの中に生じた、将来の社会システムの移行に向けた個有の〝自己変身〟だったのである。現代社会という重層的なパラレルワールドの先端の表層の部分の〝自己変身〟。それは、香山健一という個性に刻印されながらも、世界的な自由主義思想の伝統と水準に照らして、決して奇異でもスキャンダラスなものでもなかった。むしろ脱近代を提唱する人物にしてなしえた、言語構築と対話によるきわめて正当で、近代的な変革行動だった。だからこそ、赤裸々に闘い、敗北する過程で、私たちの学校の、教育の、風土の、権力の、村落的集団主義の遺制の、つまり私たちの変革の場の、まさにアジア的な特異さを鏡のように映し出したのである。それは今もそこにある。

「よくぞ掘った、老いたるモグラよ！」。この次に闘う者は、八〇年代半ば、〈自由〉を恐れる人びとを向こうに回して強いられた香山の悪戦から学ぶことなしに、よく闘うことはないのだ、きっと。

第十四期中教審委員・西尾幹二氏に聞く

中央教育審議会は何を獲得し、何を失ったのか？



第十四期中教審の「暴れ馬」として終始、審議会をリードし続けた氏が改革案の真の意図とその首尾一貫性のなさがなぜ生じたかを赤裸々に語ってくれた！

西尾幹二（電気通信大学教授）
聞き手＝由紀草一

——まず最初に、第十四期中教審の全体的なムードといったようなものについてお聞きしたいのですが。

西尾●ぼくは第一期から第十三期までの中教審の答申をまじめに読んだことがないし、誰が委員だったかも知りません。中教審というもののこれまでの性格を考えてみると、いわゆる文化界の名士を並べ、文部省があらかじめ考えておいた考え、アイデア、あるいは改革案を説明してご意見を伺う。そして、文化界の名士がいろんなことを言い、結果的には彼らのお墨付をちょうだいして権威づけをして出す、というようなものであったと思うんです。

ですから、私らの胸にひびかなかったし、関心もなかった。中教審が偉そうなことを言うと、反発だけがあった。個性ある教育をめざすと言ってればそれで通ると思ったり、個性の開発とか、受験一辺倒はいけないと言ってればそれで通った。受験一辺倒をどうやって直すかという具体的なことは考えないで、ただいけないと言ってればそれですむし、個性ある教育というスローガンをかかげていれば、通ってしまうということだったと思うんですね。

第十四期中教審は、なぜ世間の耳目を集めたのか？

西尾●ところが、第十四期中教審は——けっして私の功績なのではなくて——スターラインから個性的な委員が少なくなく、「個性ある教育」なんていう言葉を使わないでくれとみんなが言いました。「個性ある」という言葉ほど、個性的でない言葉はないとかね。あるいは、いろんな意味で文部省の既成のあり方に疑問をなげかけて、「現地

視察」だなんて偉そうな言葉を使うな、「現地訪問」にせよ、なんて言ってね。とくに受験の問題では偏差値支配はいけません、と言ってるだけではだめで、本当になんとかしなくちゃいけないんだったら、具体的な解決策を提示するなり本気でメスを入れなかったらやっている意味がないじゃないか、というような声がありました。これはけっして私が言い出したのではなくて、期せずして多くの委員の口から吹き出した言葉なんです。それは、途中で私の改革案に逃げ腰になった人たちもみな異口同音に言っていたことで、最後までみんなの志はそうだった。

　なんとかしなくてはいけないと言うけれども、おためごかしみたいに、ただ文化界の代表が出てきてお墨付を与え、教訓を述べるような話ではだめだということについて、かなりみんなが強い共通感情をもっていた。それはやはり時代が大きくからんでくる。臨教審が文部省のムードを一回壊したでしょう。ぼくらと方向は違っていたけど、香山健一さんたちの臨教審が、文部省的体質がもっている事大主義がかった修身道徳、徳目的なものを並べればそれで用がすむたぐいの、政策を考えないできれいごとですませようとするあり方をいちど壊しましたから、それ以来のドライなムードというのは続いていると思いますね。それから、委員の世代が代わって若返っているということですね。第一に、みんないい意味での戦後民主主義を経験してきた人たちが委員になりつつあるんで、中教審の委員に選ばれてもさしてありがたがらないということですね。

——それは文部省にとって予想外のことで、失敗だったのでしょうか。

西尾●いや、文部省も——文部省にかぎらずあらゆる審議会がそうなんですが——全部イエスマンを集めるつもりはないんですね。イエスマンの反対の暴れ馬もつねに入れてるはずですが、その人がこれまではあまり役割を果たさなかったのかもしれない。第十二期でも第十三期でも入れてるはずですよ。各地方のいろんな審議会であろうと、つねに役人は自分たちの役に立つイエスマンのほかに、価値観が自分たちと極端に逸脱しては困るけれども、相当に自分たちも刺激を受けられるような、異を唱える人物を必ず入れるんですよ。それが審議会を活性化する源であることを知っていて、どういうふうに彼らを使うかというのが、おそらく文部省サイドの智恵の出しどころなんだろうとぼくは思うんです。

審議会の中の「暴れ馬」の役割

西尾●ぼく自身、利用されているということをわかっていたし、されていいと思ったんですよ。だけども、よもや全部終わったあとインサイドレポートを書かれるとは思わなかったでしょうけどね(笑)。ただ、利用価値のある暴れ馬を使うという発想は、臨教審のときにもありまして、それが限度を超えない程度にうまく活用するのが官僚の才幹だと思いますね。そういうことはちゃんと計算していると思います。

——具体的には、今回「暴れ馬」はどう使われたんですか。

西尾●第十四期で言いますと、高校改革がテーマであったわけですが、そのために単位制高校の問題、総合制学科の創出、ある

いは個性ある学校等の開発、高校入試評価の多元化の推進といったようなさまざまなテーマは、第十三期あるいはその前から出ているし、しかもすでに実験校がいくつもあって実験が行なわれ、現に一定の評価が与えられている。特色ある高等学校、単位制高校、それぞれモデル校があって、われわれが見学しに行くことができたほどです。こうしてすでに成立しているものを、「どうかみなさんこれを見てください。けっこうでしょう、よろしいでしょう。これを広めたいと思いますからどうかよろしく」というのが中教審の利用法だった。きわめて安全な既成の観念に従っているし、すべて既知のものですよね。中教審をわざわざつくってやるという、なんのためにあんなエネルギーを使うのか、ぜんぜんわからないくらいもう出来あがっていたものです。

つまり高校改革に関して、こんどの中教審で扱っているテーマは、われわれのアイデアではなくて、文部省が最初に出しておいたテーマで、それを中教審が承認しましたというかたちにすればよい。しかも、中教審が終わってから、文部省は推進会議というようなものを新たにつくった。いったん中教審が承認したテーマをまた推進会議でやっているというかたちになっている。これも屋上屋を架するナンセンスな話ですが、こういうわけですから、本当は私の役割などは社会的には意味があったけど、文部省の内部にはどの程度影響を与えているかは、まったくわかりませんね。そうでしょう、素通りしちゃってるわけですから。

その前に、第十四期に諮問された八つのテーマそのものがほとんど意味のない問いであったと思いますね。あの八つのなかに新しいことがもしあったとすれば、特定の能力において著しい発達を早くから遂げている子どもたちをどう扱うか。たとえば、十二歳ぐらいで天才的な数学の才能の出てきた子どもをどういうふうに育てるか、のテーマくらいで、これは飛び級の問題で話題になった。結論は飛び級はしない、そのかわり特別な大学レベルを与える方向で検討する、となった。ただし、ひじょうに微妙な問題なのでさらに専門委員会をつくってそこであらためて検討するということで、そこでまた逃げちゃうんです。

――そうでしょうね。もしそれを本当にやるとなるとたいへんな問題ですね。

西尾●いずれにしても、新しいテーマがあるとすればそれくらいで、そのために数学者の人に来てもらったり、音楽界や美術界のいろんな偉い人の話を聞いたわけですよ。それにもう一つ四年制高等学校が新しいテーマで、これと飛び級のこの二つは文部大臣（当時）の西岡武夫さんが出した諮問内容なんだと聞いていますよ。これは既存のアイデアだと思います。あとの六つの諮問内容のうち、高専と短大の案件を除いたものはかつての文部省の高校改革案の焼き直しにすぎないんですね。

委員のなかには文部省が答申までの筋書きを書いていると言う人もいましたが、今ふり返ってみると、われわれが一時間ぐらい議論すると次のときに必ず座長メモというのがきちんと整理されて、わたされる。それがだんだんたまってくるんですよ。はは あ、これをまとめて答申に使うつもりなんだなあとみんな言っていたんですよ。座長メモというのを上手に残していって、み

んなで審議したというかたちにして、それを使って最後に官僚が作文をするんだとみんなが見ていました。そうしたら、夏の合宿討議のときに、やんぬるかなそれを整理した一覧表がどんと出てきたんですよ。これがたぶん、役人の考えている答申の予行演習的なものであろうと委員たちは密かに言っていたわけです。

　ところが、委員みんなのなかに既成の価値観でしかものを考えない文部省のやり方に対し欲求不満がずっとたまっていて、このままではまずい、なんとかしなくてはいけないという気持ちがあったものですから、私が夏の合宿で出した理念の部分、例の「平等と効率」を論じたあの部分ですが、あれにみながひじょうに魅かれて、今まで文部省に牛耳られていた反発心のぶんだけ、私への依存心が高まったというのが、それ以降のドラマの基本ではないかと私は見ているんです。

審議会の中の依存心理と嫉妬の感情

西尾●ところが、文部省に対する依存心理に抵抗していた委員諸氏は、最終的に蓋をあけてみたら、こんどは西尾というライターに依存していたということを天下に衆知せしめてしまうことになったわけで、十二月に中間報告が出てしまうと、何か自分たちの沽券にかかわるような新しい感情がそこで発生したと思うんですね。文部省のある審議官は「それ以降の審議会の西尾離れは、要するに嫉妬心ですよ」ということを言いました。ですから、中間報告に対し私立の中高連盟が反発したり、早稲田の元総長が床に投げたとかドギツイ言葉でこき下ろしたりしたことによって動揺したとは思いませんね。そうではなくて、委員たち自身が「どうして一人にそんなに振りまわされているのか」と言われているかのように自分で思いこんでしまった。それでこんどは、そういう外からの刺激、圧力をテコにして私から権限を奪うという方向にいっせいに動いた、と私は読んでます。

――でも、いちおう先生の案に共鳴して、先生の案でいこうかということで一回はまとまったわけでしょう。

西尾●そうです。しかも私のアイデアでいくと言っても、徹底的に削られて、言ってみれば、私が一本の樹木を仮に造形したとすると、木の皮ははがれ、枝は切り落とされ、幹はえぐられ、何か無残な木が枯木寸前でそこに立っているというのが最後にそこに残ったかたちです。

――最終答申のことですか。

西尾●いいえ、中間報告すら、ほとんどそうだと言ってもいいですね。最終答申は、さらにそれに油をかけて火をつけられたぐらいの感じですけどね（笑）。

――じゃ、けっして先生の独断専行ということではない。

西尾●いや、それはできない。そんなことはあり得ない。なぜ独断専行ができないかというと、みなさんの意見を聞きながら書きすすめたからです。私が自由に書いたのは、理念の部分だけです。理念の部分はほとんど一人で書いてしまって、みなさんの意見を入れて表現などを直していったということで、あまり問題はなかったんですよ。ただ一カ所、「平等と効率」のどちらか一方ではなく、両方の程度を同時に引き下げる以外に日本の教育を今や変えていく道はほ

Illustration＝東芳純



かにないという箇所だけは、猛反対に遭い、削りとられてしまいました。それ以外はほぼ私の考えを出すことができました。

ところが、受験競争を緩和するというポイントをなす具体策の、膨大な分量のところがありますが、あそこはブアーッと膨れちゃったんですよ。実物を見ればわかるとおり、たいへんな分量になっているわけです。あそこは私自身が考えながら書くんですけれども先へなかなか進まなくて、みんなの意見を調整して書きすすめては議論し、書き改めてはみんながまた議論し、というかたちでした。推薦制度の批判などという箇所は、やはり数名の委員がひじょうに強く主張しましてね、そして私がそれならばきちんとしたデータで言ったほうがいいと申し上げて、文部省に要求して具体的にきわめて悪い四つの大学の例を出してもらい、実例を匿名で出すというかたちで文部省から出してもらったデータをもとにして書いたわけです。ですから、推薦入学の弊害を改めるというテーマ自体は、じつは私の意識の中にはなかったんです。みなさんに教えてもらったものです。

それから、私学の自由と中高等学校の教育課程という、私立六年制一貫校がいびつなカリキュラムでやっているという例のカリキュラムの内容批判の問題ですが、これについても、みんながそういう意見を言って、私もなるほどと思った。文部省に資料を出してもらい、それに基づいて書きましたが、大論争になり、私は私の文意を生かすのを条件に文部省にゲタを預けました。

受験優等生の抱える問題という、いわゆるエリート大学生の幼児化傾向をからかった文章が入っていますが、あそこは、これはかなり私のアイデアです。しかし、ハーバード大学を例にあげ比較をしようと言ったのは、委員のなかにそれに詳しい人が三人ぐらいいましてね、それでわれわれはハ

ーバード大学のことをみんなに知らしめる必要があるということになりました。

特定高等学校からの東大・京大への入学の集中度が高いということについては、私はある程度予想してたんですが、数字上のデータが出ないとなんにも書けないと思ったので、私は文部省に数字を出すように頼みました。そのデータが出たときには、本当にみんなアッと驚きましたね。

そんなわけで、私が自由に書いたり、みんなにヒントをもらったり、いろいろだったんです。私もね、どういうことをやったらいいか、本当にききめのある解決策は、今でもわからないんですよ。企業の人事観と大学の選抜のあり方が変わらないかぎり、受験競争は緩和されません。評価尺度の多元化などということでは解決はしませんし、中教審の中間報告ないし答申の範囲では、企業や大学といった前提条件にまでさかのぼってメスを入れることはできません。お願いするだけです。具体的に何かやらなければいけないとわかっているのに、やることないんですよ、本当に。大学の改革というところまで一歩進めなければなんにも起こらない。大学改革は、大学の側に問題があって、大学のために改革しなければならないのですから、けっして受験生のために改革するという話ではないんです。それは誤解しないでいただきたいんですけれども。

まとめますと、中教審がどんなもので、十四期はどういうムードであったかということですが、文部省ははじめからプログラムをもって既成の価値観で臨んでくる。しかしなんらかの外圧を期待して何人かの暴れ馬を用意し、既成のものとのバランスをうまくとりたい、それが文部省の審議会だと思うのですが、今回は外圧を代表する人間が彼らを思わぬ方向へ動かしてしまい、文部省側から言えば不本意だったと思いますね。はしなくも、終わったパーティで、まだ若い、年齢的に言えば審議官にもならない前の中堅幹部が、「私どもは西尾にやられちゃった、ここまでやられるとは思わなかった、なんとかして阻止したかった」と言っていた。「最終答申であれだけぼくを阻止したでしょう」と言うと、「あそこまで走られるとは思わなかった、大失敗でした」と言うんですよ。

——自分たちの掌の上だけで動いていてほしかったんだが、そこを超えてしまった。

西尾●だけども、超えたのは私の功績である前に、私に超えさせようとする無言の要求、要望が審議会の中にありましたね。私にというよりも、みんなが役人の言うとおりにするなという感じでね、少なくとも中間答申が出るまでは。

——出たあとに空気が変わるというのは、まさに大衆社会ですね。嫉妬の感情が出るというのはその縮図ですよね。審議会ですらそういう縮図をもっているというのは、もっと根が深いんだということですね。

西尾●すべての人がそうじゃなくて、黙ってぼくに感謝してくれた先生もいましたし、あとから「いや、おかげで」と言ってくれた人もいました。でも、「おかげで」と言ってくれた人も、きわどいときにぼくを支えてはくれませんでしたよ。黙ってましたね。

第十四期中教審はアンチ臨教審として始まった

——次の質問は、中教審と臨教審のつながりの問題です。先生が臨教審に批判的なの

は『日本の教育　智恵と矛盾』の本におさめられた文章で読んでおります。私はあのころちょうど教員になりたてで、ひじょうにおもしろく読んだことを覚えています。こんどの中教審というのは、ちょっと文部省の巻き返しみたいな気もしましたけれど。

西尾●これに関しては二つあります。全体の問題と私の内部の問題です。全体の局面から言うと、私が言うんではなくて多く新聞記者が言っていることですけれど、臨教審というのは十三回まで続いた中央教育審議会の歴史にさからって、首相官邸主導を狙った中曽根内閣の政策であって、文部省から審議会の主導権を首相官邸が奪うというスタイルで始まったわけです。国鉄と電電を民営化した中曽根内閣の民活化路線を教育に適用できないかという発想が最初にあって、国立大学はもちろんのこと、義務教育も解体して民営化する、そういう過激な発想が右派系の論客のなかに多かった。例の「自由化」論がそれです。若手の論客が中曽根内閣と一体化するんですが、これは世界的に同じ現象がありました。真っ先にそういうことを言ったのはフリードマンというレーガンの懐刀ですが、自由競争経済を絶対とした経済学者で、一種の「学校無用論」なんですね。これが新左翼系のイワン・イリッチなんかの「脱学校論」と通じちゃうんですよ。極右と極左が通じるというのが、世界の教育史の中でちょうど八〇年代に出てきた奇妙な現象なんですね。

ところが、ぼくは伝統的なオーソドックス保守主義ですから、左右のどっちもおかしいということで、規制を撤廃したからといって、けっして自由競争は生まれないと主張した。ぼくは、三つ自由競争の単純原則に合致しないものがあると思います。一つは教育で、一つは農業で、一つは労働市場です。この三つは、規制を撤廃してなんでも自由競争でやりなさいといって、それだけでは競争は起こらないジャンルです。規制をし制限をし、バランスをとりながら競争を喚起するようにやっていかなければだめな世界です。神の手ではなくて人間の手で上手に自由競争をつくりだしていく。言ってみればケインズ的な発想でやらないとだめだ、とぼくは思ってきたんです。

官邸主導型で出た臨教審のありように対して、文部省が主導権を握りたいということと、西岡（武夫・当時の文部大臣）さんの発想とがたぶん一致して始められたのが第十四期中教審だと思います。ところが、テーマがないのに無理してやりだした観がある。臨教審の答申が出て二年しかたっていないので、義務教育について問うことができない。また、大学審議会がスタートした直後で大学入試の問題も諮問できない。そこで残っていたのが高校問題です。高校の問題はたしかに臨教審の積み残し、未処理部分だった。それと、中教審を早くやって、いちおう文部省の声をあげておきたいという政治的思惑とが重なって、テーマがないけどともかくやるということだったと思いますよ、今にして見れば。ここが大事なんですけど、諮問を出した文部省側も文部大臣側も、諮問内容を重視していなかったということですよ。私はそう思いますね。

――なるほど、諮問内容じゃなくて、文部省が主導権をとることが大事だった。

西尾●だからぼくの独走を許したとも言える。つまり、「なんだ、あんな大騒ぎをしてこんな程度か」と言われたくないので、高

校改革の八つのテーマをチマチマとやってヘンな答申が出るよりは、何か時代に合致した大きな理念を打ち出したい、そういう希望は文部省サイドにもあったんですけど、何をしていいかわからなかったんですね。それと、ぼくのイデーとがうまく合致したということだと思います。じつは臨教審を否定したいという文部省の考えと、うまくか悪くか相重なって、たまたまそうなった。しかも、あえて言えば、私を選んだのは私がアンチ臨教審だったということがはっきりとあると思いますよ。

――西岡さんからの直接の要請でお入りになったのでしょう?

西尾●そうなんですけれども、文部省が合意しなければできないことです。そして私がはしなくも乗っちゃったわけです。臨教審は産業の効率と教育の効率を混同し、それをほぼ同一視した。義務教育にまで民活路線を導入しようという発想が一部にあったということは、結果としてはそういうものは出ませんでしたけど、大きな流れとしては、臨教審の落とし子である大学審議会につながっている。大学審議会のこんどの大綱化という考え方が民活路線みたいなものですから、そういう自由化、好き勝手にやんなさいという発想、教育がめちゃくちゃになってもいいから、どうぞお好きにやりなさいという考え方は今もずっと流れている。

戦後ずっと自由化、自由化と言ってきたことの最後の決着点みたいなところに、臨教審が位置づけられるわけです。大学審もそうです。私は、それがひじょうに疑問だったんです。

――たまたま先生と文部省の両者に共通の敵があったということですね。

西尾●出された中教審の答申も、臨教審・大学審議会の自由化路線に対して、「自由だけで自由か」という問いを出したという、つまり、自由競争の思想に対してケインズ的な制限政策が必要であるという違う考え方、アンチテーゼをぶつけたと思ってますけど。

――そう言われればそうです。文部省のほうでもそういうことに関して賛成したんですか。

西尾●賛成どころかありがたいはずなんですよ。彼らは黙ってますけどね。

中教審の首尾一貫のなさはなぜ生じたか

――先生はご自分の思想を表明し、一人の思想家としてやるときには、肯定語ではなく否定語で分析して新しいものをめざしていくんだ、そういう生き方でしょう。でも、審議会というのは絶対否定語はいやだというのがあります。先生の一人の表現者、思想家としての立場と、行政的な言語とのぶつかり合いという問題は、どうだったのでしょうか。

西尾●残念ながら尾羽うち枯らしたと言うか、次々と無残に削られていくということだったわけですね。書いては切られ、書いては切られだったわけです。いちばん肝心な「効率と平等の程度を同時に少し引き下げる」方針についてはぼくは早々と旗をまいてしまいました。しかし、もう二点については私の本(『教育と自由』)の中で強く取り上げています。その一つは、入学者選抜は大学の自治にあらずというテーマです。しかもこの本の中に、そのとき私が提出し、

削られた全文が載せられています。全文削除ということになった全文をここに掲載している。このテーマを生かすと、下手すると「大学の自治は神聖にして不可侵」と左翼の学者に攻撃されるからという親切心で、削除するように言った人もいる。でも、これはたいへん重要なテーマなんですね。

日本では入学者選抜は大学の自治で教授会の自由だと思いこんでおります。つまり、選ぶ側に自由がある。入学試験で人を選んで人を落とすことは、本当に当然のことだと思ってますが、この当然のことがドイツでは憲法違反なんです。志望者の多い医学部に関しては、定員の三分の二は高等学校の卒業成績で採用しますが、三分の一は成績が悪くても何年か待っていれば入れるという、待ち時間制度を採用している。それで選ぶ側の自由を制限しているわけです。たとえば、医者になりたいという人がいれば誰でも何年か待って医学部で学べるという、そういうかたちで学習者の自由を守る。それが自由なんですよ。そういう発想が日本以外の世界にはある。したがって入学者選抜は大学の自治じゃないんですよ。アメリカの場合もおそらく同じことが言えるでしょう。たとえば、税金を払っている市民は公立大学に入学する権利があるという意識が強いわけです。そのために、入試で門前払いすることは許されないという意識がありますので、ニューヨーク市立大学などは、志願者の七、八割を入学させてしまうのです。そして、毎年、三割から四割を落第させるわけです。それでいて、じっさいに教育効果はたいへん高くてノーベル賞受賞者が何人も出ている大学です。アイビーリーグと言われるアメリカのエリート私立大学と少しもひけをとらないんですね。

このやり方が日本の体質にぴったり合うかどうかわかりません。だけど、日本では選ぶ側の自由が無制限で、それが大学の自治だと考えられている。選ばれる側は極端に権利が制限されている。そのことを誰も疑わない。しかも日本の場合は選ぶ側の自由といっても、すべての大学に完全な自由があるわけでなくて、序列があって、序列の上位にいくにつれて選ぶ側の自由の度合いが高まっている。序列トップの大学は選ぶことの自由において、ほとんど他の業界にないくらいの無制限の自由をもっている。

これはひじょうに奇現象で、自由というのを西洋から導入し、学習の自由、大学の自治と言っていながらまったくひっくり返った話なんですよ。少なくとも選ぶ側の自由は制限されて当然だという思想が日本の国内に少しでもあれば、教育の思想は変わってくるということを言いたかったために、「入試は大学の自治にあらず」という項目を一生懸命書いたにもかかわらず、審議会の思惑で全文削除になった。

その結果、重大なことが起こったわけです。選ぶ側の自由に制限を加えるという理論的根拠が消されてしまったために、たったひとつ中間報告の中で残った「ひとつの高校からひとつの大学に一定人数以上の合格者がでることを防止し、数字上の上限を定めることも考慮すべし」というあの一点だけが、これはまさに選ぶ側の自由に制限を加え、それによって自由を復活させるというアイデアだったんですけれども、そこだけがぽつんと、裸のままに残ってしまったわけですよ。その背景をなす理論的根拠がすべて切られてしまっているから、ひじ

ようにおかしなかたちになって、いかにも現代の特定の私立高等学校を攻撃するようなスタイルに読まれてしまった。

——理念とか観念というのは明日にはすぐ役に立たないけれども、変わっていく方向をサジェスチョンしていますね。それがなくて、すぐ制度的なものを考えるとかなりいびつなものになってくる。だから、社会一般が、それはおかしい、そういうふうにならなくちゃいけないんだという理念がないかぎり、権力で何かやってもうまくいかないんじゃないか。だからこそ、そういう理念を追求していく発想は必要ですね。

西尾●人が読む答申の中にそれが入っていれば議論を呼ぶ。反対し、叩く人もいるでしょう、それはそれでいいんですよ。ところが、審議会というのは妙に臆病で、結果的にはかえってヘンなことになるんですよ。役人が書いた文章だったり、みんなが手わけして書いて集めた文章だったらいいんですが、一人のライターのパーソナリティのある文章に依存して、それでいて大事な頭脳の部分をとってしまったら、最後に残ったものが何か奇妙な、不自然なものになってしまう。だから、その点はひじょうに悲しい。

——首尾一貫性がなくなったということですね。

四回書き直されて、とうとう全部削られた！

西尾●大学の自治の部分がひじょうに残念だ。もうひとつは、これも私の本の中にいきさつを全部書いておりますが、最初のタイトルは「学校歴コンプレックスについて」という題だった、第一章の第四節です。「学校歴コンプレックス」という言葉が困ると言われたので、最終的に「学校歴意識について」と改定しました。卒業校名にこだわる日本人の独特な心理というものは、欧米先進国にはない。あっても弱い。日本の場合には、それが微妙な差別意識構造と結びついて、イギリス社会の古くからの身分差別ととても似ている。そういう心理構造をずっと遡って考えていったときに、日本の近代化はいろんなものを壊していった。封建的な美風も壊し、言語、方言、人間の違いといったようなもの、文化意識、地方意識というものを壊していった。近代化、工業化のプログラムの中で目印が他になくなってしまったので、社会的身分意識として歴史的に残存してきたものが、いわば近代的な学校歴に転移したんではないか、という推理を理論的に書いたんです。

それは四回書き直されて、とうとう全部削られるはめになった。残ったのは、最終答申の短い文章の中の学校歴意識という言葉だけで、こういうものにとらわれてはいけませんという教訓だけで終わってしまった(笑)。ぼくは必死だったんですけど、四回書き直させられて、最後の場面では、教訓めいた文章を適当に作文して書かないと、あとの大切な理念の部分が全部危ないんです。修正させられた場面というのはひどかったですよ。官僚が六人ぐらい並んでて、とにかく「あなたが書かなきゃ、私どもが書く」と言うわけだ。

——詰め腹を切らされた。

西尾●そういう感じですね。文部省がなぜこうもピリピリするのか考えてみました。日本では、大学の序列とか学校の序列にちょっとでも変動が生じる可能性につながる



ことが持ちあがると、今まで教育問題に無関心であった人までが目の色を変えるということと、これは深くつながっているわけですよ。結局「学校歴」の問題が心理的にすべての教育問題の基本にあるのではないかと思います。封建的な身分意識がなくなった社会で、唯一の価値の目印みたいなものですね。そういう不合理なものだから、ぼくは学校歴というのは目に見えない「結社の心理学」だと言ってるんです。

――平等というのはそもそも誰も好きではないし、考えもしないんじゃないですか。

西尾●そうでしょう。だけどね、ぼくは身分の違いや門閥や財産、あるいはそういったものが多様にあった社会のほうが幸せで……。

――そういうものは不合理だからいいんですよね。一見、大学というのは合理的ですから、それがかえって救いがなくなっちゃう。

西尾●いろんな不合理なものがあってね、たとえば、東京に家をもつことはひじょうに困難である。しかし、お父さんからの遺産でもらったら誰も嫉妬しないんだ。自分で稼いで家をもったと言ったら人は嫉妬するわけですよ。それと同じで、人と人の間にいろんな複合的違いを際立たせる尺度があって、それが宿命として意識されているほうが個人は幸せだし、社会は安定する。能力主義の行き着く果ては不毛なんです。だけどついに能力主義は皇室にまで入ってしまったんですよ、こんど。これはまさに幸か不幸か、ひとつの大きな象徴的な出来事です。「効率と平等」の社会の最終帰結が

ついにきたんじゃないかと思うな(笑)。効率主義が皇室にまで入ったという文明論的な意義づけというのを、われわれは今考える必要があると思いますね。皇室の幸せとは別個にして、そのことは国民的にはぼくはやっぱり不幸なことだと思いますよ。貴族階級のいない王制というのは世界史の過去に果たしてあったでしょうか。

入試改革は学校改革につながるか

――最後の質問です。具体的な大学の入試についてですが、ほんの少し違和感を感じるんです。日本ではいい学校と言えば、高校でも大学でもいい生徒の集まる学校ですね。そこでいい教育が行なわれているとは、ふつうあんまり信じられていないんですよ。早い話が、東大と京大の教授を全部入れかえたとしても、おそらく東大 京大という序列はほとんど変わらないですね。

西尾●そのとおりです。おもしろいところですね。

――それが問題のいちばんのおおもとをつくっているので、先ほど、選ぶ側が自由をもっていて、東大が完全な自由をもっているとおっしゃったわけですが、これは見方を変えれば、彼らにも自由はないですよ。たとえば、入学試験で、下から順番に定員まで入れましょうという自由は彼らにはないんですよ。そんなことしたら、東大の信用がなくなってしまうから、自分の好き勝手にできないという意味ではやっぱり彼らだって点数主義に縛られているんですよね。要するにいい点数の人間が入るというのが、東大のたったひとつの信用の根拠で、世間はそれしか信用してません。

だから、先生がいちばん最後に言われた身分秩序みたいなもの、不合理なものを全部崩してしまったから、たったひとつ残った、何やら合理的な感じのする学校の選抜制度としての地位がぐっとせり上がってきたわけでしょう。これが私の考える最大の問題の根本ですよ。ここのところをなんとかしないかぎり制度をどのようにいじくったって、ますます悪くする一方で、それならいっそ現状のままの点数主義で、高校も一点、二点の差だけで入学合格者を決めるのがいちばんよいと思うのですが。

西尾●今のご質問は入学試験というか、受験するサイドの苦痛や公平の問題を前提としているんです。でも私の今言ったことは、これからは逆に大学のもつ学問能力ということ、あるいは学問の国際競争力と言っていいかもしれませんが、そういうものが今のような選抜のしくみから入ってくる人材を基本において十全に展開できるか、それどころか行き詰まっているんではないかという問題を、むしろ考えるべきなんですね。今の学生諸君があれだけたくさん勉強して、どうしたことか勉強したことがほとんど有機的に生きていないし、現実を見ることにつながっていない。

受験の能力はひたすら役人、官僚の能力とはパラレルだと『教育と自由』を書くときまで信じてたんですが、最近大蔵省の高級官僚から聞きましたが、じつはそうじゃない。東大出の大蔵官僚が危ない。こんなやり方をしてると大蔵省も危ない。なぜなら、政策を決定するときに、経済の教科書に書いてある判断しかできない。今、四十歳前後から以下の官僚はそういう傾向がひじょうに強くなっている。世界の経済の動

きを見ていくときに、教科書どおりに見ていたんじゃどうにもならんわけで、おそらく今後まもなく企業のエコノミストのほうがはるかに上になる。官僚はばかだという時代を迎えるんではないかと言う。ぜんぜん現実が見えないんだ、と、そういう話を聞きました。

受験競争の能力というのは、ぼくは基本的にはヨーロッパの文明を模倣する段階の学問ではよかったと思うんですよ。模倣学問というかコピー学問の時代にはひじょうによく機能した。ところが、ゼロから何かをつくりだすという基礎開発力、企画力、基礎科学の探究力、あるいは情報の受信者ではなくて自ら発信者になるというパーソナリティや独創性、そういうものは今の受験制度からは出てこない。そして日本の大学は今、そのために危機を迎えていて、このままいくと日本の大学はソウル大学やチュラロンコン大学(タイ)以下になりかねない、と私は真剣にそう思っているんです。

世界の高等教育のトップ校の三分の二くらいはアメリカに集まっていると言われています。それはアメリカの大学が人を採用するときにも、それぞれのジャンルのなかで人種・国籍を問わない学者を世界各地から採用するというダイナミックな人事を行なっているからです。だけど、日本の大学はぜんぜんそうじゃないわけですよ。受験優等生を教授にしていくわけです。欧米の発信したものをモデルにして、忠実にそれを再生産する知性にはそれでよかったんですよ。

すべてにおいて今日本は曲がり角にきていて、貿易で拡大してきたこの国は、既存の西欧のインフォーメーションというものを拡大再生産する文明のいき方の限界に近づきつつあるわけです。私は大学の危機、文明の危機という意味から言っても、たんに受験生の公平の問題ではなく、選抜制度を抜本的に改正しなくてはいけないと思っているんです。

そのための結論をかんたんに言いますと、東大絶対主義をぶち壊さなくてはいけない。しかし東大をつぶしただけではまた別のものが出てきますから、そういう大学をひとつつぶすということではなくて、頂点と底辺をつくるような序列形成の運動そのものを変えていかなくてはいけない。複数の相当数の大学、三十でも四十でもいいんですが、公立・私立を併せた学科間競争、学部間競争——教室競争ですね——が盛んになる状況をつくり出す必要がある。ある学問に関してはそこが日本のトップだということを世間が知っていて、受験生はそこの学科、その大学へ行く。必ずしも東大には行かない。そういうことがあちこちでいっぱい出てこなくてはいけないと思うんですよ。そういう状態にならないかぎり、日本の学問は国際化しない。学問の創造性は育たない。

——庶民が大学に求めているのは、いわば貴族の称号みたいなもので、東大出という称号は一生涯消えないわけですね。それがなんの役に立つのかというと、役に立たないことのほうが多いと思いますよ。しかし、それでもないよりはあったほうがいいという心理ですね。そういうもののうえにのっかって学校制度がありますので、研究レベルを上げるというのはもちろん悪いわけはないんですけど、それを入試改革によって実現するというのはどうでしょうか、とい

う気がするんです。

西尾●入試改革はそのうちのひとつですね。入試改革だけでそういうことはもちろんできませんね。

「結社の心理学」の呪縛とそれを超えることの意味

――大学改革に関して先生のおっしゃることはまったく正論なんで、一流大学だったら教授はなんにもしなくたって一流の学生は集まってきますからね。教授はボケッとしていても、おれは一流の教授だという顔をしていられるのはまことに醜悪のきわみですけれども、だからといって、一流の学生が集中しないようにして、大学の質を上げようとするのもどうかと思うのですが。

西尾●だけど、学生の国際競争力の低下、学生を商品として考えたときの、学生を教育するべき機関における国際競争力の低下を考えると、アメリカやフランスやドイツの学生に比べて日本の学生は商品価値が低く、不幸であり、ひじょうに大きな国家的欠損だろうと思いますよ。せっかくの人材を殺しているのですから。国内競争のない分野では国際競争力も育たない。これまた商品経済からも言えることです。

――それは、大学人事の純血主義もばかげていますから、先生がおっしゃったように、いくつかの大学で勤めたあとでないと教授にさせないということもやるべきだと思うんです。しかし受験はそれとはまたぜんぜん別のことが入りこみすぎます。

西尾●それは、あなたが今の現状が動かないという前提で考えている。すなわち人間の区別意識ですか、「目に見えない結社の心理学」に触れることの恐ろしさ、いわば社会の無意識の底部にやどっている何ものかの逆鱗に触れるということをこわがっているからでしょうね。自ら気づかずしてあなたもそういうものに呪縛されているんですよ。ですから、それを言っても空論であり理想論だというふうに見えてあきらめてしまうんでしょうが、私は百年かけてもやらなければだめだと言ってるんですよ。

――やっぱり百年というスパンがないといけませんね。どうしても学校改革は、すごくスパンの短いところでやっているからおかしくなるということなんですね。

西尾●でも、ぼく自身はそう短いことでは考えていませんけれどもね。

――理念の先行というのがいちばん大きいんで、それが多数派を形成したときには、無意識と言いましたけれども、無意識がそうなっていく。

西尾●だんだんばからしさに気がついている面もあるしね。

――気がついてますよ。だけど降りられない、ばかげてるからこそ降りられないというか、そういうところがありますね。ちょっとした不足に人は傷つきやすい。

西尾●そのとおりです。ちょっとした不足に人は傷つきやすいんですよ。大きな不足はあきらめる（笑）。

――今日のインタビューというのは結局そこに結論をもっていかざるをえないんじゃないかな、という気がします。

西尾●一人のばかな人間がばかなことを言ったことで百年後か、あるいは何十年かあとに向けて、少し影響を与えればいいと思ってるぐらいなんです。

――今日は長時間どうもありがとうございました。

そこ（文部省）で知らされたのは、高校生の中退の増加だった。多くは偏差値による輪切りの振り分けで自分の意思とは無関係に高校に入った子供たちだ。不本意入学者が集中した〝教育困難校〟を訪問すると、私語やトランプで授業は成り立たない状況が日常の光景になっていた。偏差値万能の延長線上に生まれた姿といっていいだろう。（『毎日新聞』九三年一月二十七日）

＊

眉目うるわしい善意の若き秀才ジャーナリストよ（顔写真を紹介できないのが残念だ）。あなたが底辺校の実態に触れて感じたナイーブな衝撃は尊重する。前途のあるあなたをバカ呼ばわりするのは気がひけるし、この種の判断の誤りについては別稿で論じたので、ここではくどくどと繰り返したくない。でも、最低限、自分の論じていることがいかに根拠のない先験的観念を前提にしているかだけは知っておいてほしい。

バカ語録

一億総キョーイク評論家

梁瀬誠一の巻

〈毎日新聞社会部記者・文部省担当〉

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

たしかに中退者は、自分の意思とは無関係に高校に入った子どもたちである。しかしあなたは、彼らの意思なるものが本当に確固としてあったかどうかを確かめたうえで発言しているだろうか。また人間には意思さえあれば、それがいかに分不相応の途方もないものであっても能力と関係なく満足な結果が得られると思い込んでいるのではないか。

あなたの論理によれば、彼らはすべてどういう学校に行きたいかという明確な意思をあらかじめ持ち、その意思が偏差値振り分けによってただただねじ曲げられた結果として、教育困難校でのやる気のない日常を送らされるはめになったということになる。はっきり言うが、それはまったく人間認識が甘い。

そこで前提となっているのは、（あなたは自分で考えたと思っているだろうが）もう何十年も前から教育界で固着的に唱えられてきて、現在ではようやく信じる人も少なくなってきた最悪の民主教育的神話である。それは「子どもはみんな学びたがっている。どの子もみんなすばらしい力を秘めている」というヤツだ。あなたにはこの神話が、教育の理想を表現したものとして、自分の憂い顔のように美しく思われるかもしれないが、この神話が、とくに学校現場の外部からマスコミなどを通じて扇情的に唱えられるとき、普通の教師たちにどれほど抑圧的な作用を及ぼしてきたかあなたは知っているか。だからこんなカビのはえた教育信仰を再生産する前に、もう少し自分の頭でよく考えなさい。そのためにこの本は、とてもいい素材を提供してくれるはずである。

入試改革案を採点する！

亜細亜大学の一芸一能入試、慶応大学のAO入試、西尾幹二氏の入試改革案、それらはいずれも偏差値体制打破を叫び、個性的な人材の発掘・育成を通して学校歴社会を変えることを目的とした。果たして、それは所期の目的を達成することができるか？

小浜逸郎（評論家）

ここでは、三つの入試改革（案）のオイシサかげんを賞味する。亜細亜大と慶応大のものはすでに実行に移されているものであり、西尾案は、まだ改革者の頭の中だけにあるものである。

これらの改革または改革案は、具体策こそ違え、理念としてうたうところはいずれも同じである。要するに、大学間のタテ並びの序列と格差を生んでいる偏差値偏重の現在の入試制度の弊害をなくし、より個性的な人材を発掘・育成することを通じて、学校歴社会を少しでも変えてゆこうというのである。この稿ではその理念の是非そのものについては問わない。問題としてみたいのは、これらの方策が、はたして改革者の理念どおりの「よき結果」をもたらすものとして機能するかどうかという一点である。ではお手並み拝見。

亜細亜大学の一芸一能入試

これは、偏差値三八から四〇あたりをテイメイしていた元・滑り止め大学の亜細亜大に、昭和六十二年、外部から乗りこんできた新学長・衛藤瀋吉氏（東大名誉教授）が取り組んだ学内改革の目玉のひとつとして実施されたもので、ケン玉日本一で合格したなどで話題を投げた。出願資格は、現役生で出身高校の推薦があり、一芸一能に優れていること。選考方法は、①書類審査（高校長の推薦書、調査書、自己申告の推薦文、賞状など）②面接（面接官二、三人で最低三十分行なう。実際その場で実演できるも

のがあればやらせる場合もあるが、全員に課すことはない）③作文。

衛藤学長はこのほかにも、学生全員を留学させる単位認定留学制度やすぐ実践に役立つ語学教育、パソコン、ワープロ操作技術の修得など、社会人、国際人として通用する力をつけるための教育法を大胆に取り入れて、カビのはえた専門知だけを講義するような従来の一般的な大学のイメージを一掃することに力を注いだ。そしてこれらの改革によって大学が生まれ変わりつつあることを強力にアッピールするために、電通に依頼してテレビCMまで作成した。そのひとつのコピーが、なんと「偏差値ぎらいの学長がいます。亜細亜大学」。

よく言うぜという感じだが、これらの作戦が効を奏したせいか、人も知るごとく、亜細亜大の人気はここ数年でうなぎ登り、受験者数は倍増し、今年の大学案内の偏差値ランキングでは、各学部とも五六以上、国際関係学部に至っては六〇の高ランクを占めている（代々木ゼミナール調べ）。つまり、衛藤学長の改革は成功したわけである。

とはいうものの、はてさて、どっかヘンだ。偏差値ぎらいが本当なら、理屈からすれば学長にとってこの事態は予想外の失敗であって、深く悩まなくてはならないはずである。ところが、もちろんホンネはそんなところには全然なくて、室伏哲郎氏との対談で次のようななんともカワユイ告白をしているのだ。許せん！……いや、許せる。

室伏　最後に、先生は偏差値が嫌いだと標榜なさっていますが。

衛藤　（小声で）大好き。

室伏　やはりそうですか（笑い）。

（『シリーズ　大学は挑戦する　亜細亜大学』）

ほくほくした学長の顔が見えるようだ。もちろん誰も衛藤氏の偏差値ぎらいなぞ信じてはいない。例のコピーや入試改革は、就学者数激減を迎える私学サバイバルゲームでの奇策ともいうべきもので、はじめから彼は、自学興隆という純粋に私的な利害のために、その眠っていた企業家的才能を大いに発揮してみせたにすぎない。当然の結果として、それまでだったら受かるはずの生徒が、この改革の成功によってこんどは亜細亜大からはじき出されることになり、彼らはさらに低偏差値の大学や専門学校に甘んじるというだけの話である。

個別大学が何か目立つ改革パフォーマンスをやって人気が高まることは、その大学に合格できた者や教員の気分を昂揚させることはできるが、その気分の昂揚は、結局は高偏差値という価値尺度に代表されるようなより優秀な学生の参集を獲得できた優越感情から来るのであるから、別に偏差値序列の構造そのものが改まったことなどにはならない。個性や特色が目に見えて信用度を獲得すればするほど、その大学は人気が高まって、優秀な学生が殺到するようになる。その優秀さは、偏差値的優秀さとそんなにひどくずれるものではないのである。せいぜい見られるのは、これまでの人気地図が少しばかり変動するという現象であって、それは、チャゲ&飛鳥からドリカムに人気が移っても、ファン心理の構造そのものに変化があるわけではないのと同じである。

ところで亜細亜大学の偏差値アップは、

Illustration＝盛本康成



半分は入試改革の成果といえるかもしれないが、あとの半分は、じつは大学進学志望者が増えたことの自然の結果である。説明するまでもないが、偏差値というのは、母集団全体のなかの個々の資料の相対的な序列を知るための数値である。したがって、母集団自体がこれまでより下位の生徒までも含むようになれば、それだけで同一学力の生徒は偏差値がアップする。こうした大学志望者のここ十年ほどの大衆化現象と、私立への受験者の集中状況が各私立大学の偏差値ランクにも反映したのである。だから、五ポイントや六ポイントの偏差値アップがあったからといって、そのことは別に入学者の質の向上を意味しない。事実、日東駒専や大東亜帝国などと呼ばれて、知名度を高めてきた「二流」大学は、軒並み一〇ポイント以上偏差値がアップしている。

しかしまあそうした全体の動きのなかでの小競り合いにおいて、亜細亜大がその改革の先駆けによっていくらか他に抜きん出たというほどのことはいえるであろう。ただしこの場合の人気の秘密は、全員留学制度や実用的教育の魅力のほうが中心であろうと考えられる。だから一芸一能入試自体の貢献度となると、どうもはなはだこころもとない。

しかもこの入試の合格者は、全体の二、三％にすぎない。そんな数では改革者が期待している「学内活性化」などの効果を生むにはほど遠いというべきで、むしろ外部的には人寄せパンダであり（大学の知名度を高める効果はかなりあった）、内部的には差別的まなざしに耐えるというあたりが相場ではなかろうか。本当に偏差値体制打破の理念を貫こうとするなら、いっそのこと全員一芸一能で選定するのでなければ意味はないと思う。しかしさすがにそこまで踏み切れずに、わずか数％にとどめているところがなんともセコイ。

もうひとつついえるのは、かつてのあの亜細亜大であったから、このアイデアがそれなりに生きる余地があったということである。露骨なことをいって悪いけれど、現況偏差値四〇だったら、一芸一能で選んでも、一般入試で選んでも、入ってくる学生にそんなに大した学力差はないだろう。しかしたとえば東大でこんなことをやったらひっくり返るような騒ぎになるであろうし、そんなことはするわけがない。東大でも後期

募集では論文審査だけであるが、その問題は高度の語学力や文章構想力が要求されるし、しかも受験資格者をセンター試験の成績による足切りでちゃっかり絞っている。

というわけで、亜細亜大でも、今後偏差値六〇以上が定着するようなことになれば、一芸一能入試の合格者はますますその学内での位置が微妙なものとなることは避けられない。私の予感では、今後この選抜方法は再考を促されるであろう。

慶応義塾大学のAO入試

AOとはアドミッション・オフィス（入試事務局）の略で、平成二年から新しく開かれた慶応義塾大学の湘南藤沢キャンパスで始められた選抜方法である。年間を通じて事務局を開き、年四回の選考を行なう。ペーパーテストは行なわず、自己推薦書に基づく書類選考と、時間をかけた面接を基本とする。出願資格は次のようになっている。

以下の1、2の両方の条件を満たす者

1、本塾大学総合政策学部、環境情報学部いずれかの学部での勉学を強く志望し、第一志望として入学を志す者

2、次の一つ以上に該当する者

A、高校（大学・社会人）生活において文化・芸術・スポーツなどさまざまな分野で、個人や団体の活動を通し、広く高い評価を得ている者

B、能力、技術について高度な資格や水準を有し、広く高い評価を得ている者

C、高校（大学・社会人）生活において社会的な奉仕活動やその他の社会活動を通じ、広く高い評価を得ている者

D、学業がきわめて優秀であり、創造的、積極的な学習姿勢を堅持している者

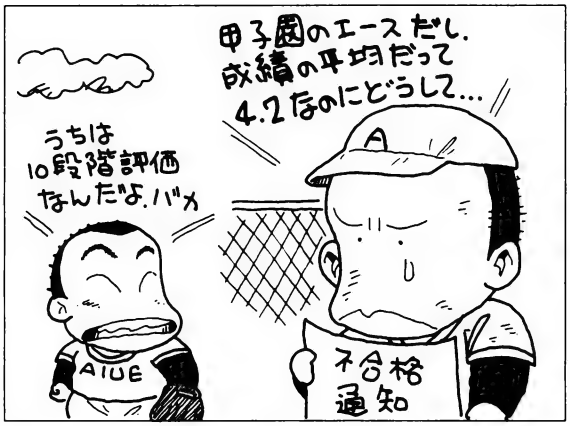
E、成績人物ともに優れ、課外活動、趣味、スポーツなどにおいて指導的役割を果たし、地域社会や高等学校などから高い評価を得ている者

審査・選考には入試専門の集団（つまりAO）があたり、二か月を費やすという。

なかなかに物々しい条件である。おまけに名門中の名門、慶応とあってみれば、よほどの自信がないかぎり、自己推薦書を作成してみる気にならないのではないか。そればかりではない。じつはこれに加えて、高校三年間の成績が五段階評価で平均点四・〇以上でなくてはならない。「指定校制は取らない」といって、いかにも広く門戸を開放し、偏差値主義の助長を避けるようなことをいっているが、審査・選考の過程で学校間格差を考慮しないとどうして言い切れるだろうか。実際に平均四・〇以上の成績を取っていても、学区内公立高校群のなかで下から数えたほうが早いランクの学校の生徒だったら、あえて挑戦するだろうか。

おそらく、この入試を突破できる生徒は、一般入試を受けてもまず楽々合格しそうな生徒であると考えられる。そしてそのぶん一般入試の枠が狭くなるわけであるから（平成三年度で、全定員の一五%）、この制度は、かえって慶応大学の高偏差値に支えられ、しかもさらに偏差値アップに貢献しているのである。

おわかりのように、これは一般的な偏差値打破などにつながるものではなく、成績のよい者のなかからもっと優れた、具体的な能力を発揮しうるエリートをうまく探し出そうという魂胆であり、大いに欲張った能力主義そのものというべきである（私はそのことを別に批判しない。ただそれをごまかさずにはっきり言ってほしいと思うだけである）。



新キャンパスの運営を精力的に推進している総合政策学部長の加藤寛氏は、先の衛藤氏同様、内心得意満面のご様子だが、どうやら衛藤氏よりもいささかタヌキと見えて、表向きは次のように、白々しくうそぶいていらっしゃる。「ただ一つ気になるのは、偏差値打破を願っているのだが、その効果は小さいようだ。新学部の偏差値は全国一となったばかりか、上昇する一方であるのは、仕方ないのだろうか」（『慶応湘南藤沢キャンパスの挑戦』）。

西尾幹二氏の「有力大学の受験機会の複数化と特定進学高校からの入学者数制限」

西尾氏は、よく知られているように、第十四期中教審の中心メンバーとして、積極的に大学の制度改革を提議し、中間報告の文章の主だった部分を起草した人である。私はこの中間報告が発表されたとき、西尾氏のものとは知らず、その文章がお役所の作品にしてはあまりに生き生きしているのに驚き、そのことをある新聞に書いた憶えがある。しかし西尾氏は、最終答申では文部官僚の手が大幅に入り、意図したところをほとんど伝えることができなかったと悔しがることしきりであった。だがその間の経緯と彼自身の本来の改革理念および改革案は、『教育と自由』（新潮選書）という本に思いのたけ述べられているので、こちらを参考にすれば、彼の考えを正確に把握したことになるはずである。

ところでそのなかで彼は、以下に掲げたような二つの案を提起し、これによって、同一大学に少数の高度能力者が集中することがなくなり、大学のタテの序列をヨコ並びに多元化することができると強調している。

（I）たとえば東大文学部が前期なら京大文学部は後期に、それぞれ政策的に振り分け、受験生は両方合格したら、どちらかを自由に選べる、というのでなくてはならない。この原則を全国のあらゆる大学の相互関係で徹底させる。

（II）一つの高等学校から一つの大学に

ある一定数以上の入学者が出ることを防止するよう提言する。その場合、数字上の上限を定めることを考慮するのも案の一つである。

以上をワンセットで同時実行することによって、すべての大学は入試日程を安心して自由に設定できる。他大学に才能を根こそぎ攫われる恐れがなくなるからである。

と、このように天下の西尾氏が自信たっぷりに決めつけるので、なんだかおかしいなとは思ったのだが、そんなものかなといちおうは考えることにした。とくにII案はマスコミで騒がれたために、それだけが突出してしまって西尾氏自身意を尽くせず困惑したということをしきりに述べていたから、この「ワンセット」ということばを私はことさら尊重して彼の意とするところをなんとか汲もうと思ったのである。しかし、なんど考えてみても、どうして二案をワンセットで同時実行すれば所期の結果が得られるのかわからなかった。ここで私のトロい頭の過程を、ひとつのシミュレーションで説明してみたいが、その前に、I案とII案とをそれぞれ個別に実行したときの効果についてふれておこう。

受験機会の複数化は、本来受験生の自由選択性の増大を意味する。今人間がほとんど必ず既成のブランド価値の高いほうを選ぶ傾向を持つとすれば（事実そうなのだが）、その結果は、昭和六十一年の実験例を待つまでもなく明らかである。東大と京大ではたいていの人は東大を選ぶ。西尾氏もそのことを知らないわけではないので、あのとき京大はなぜ屈辱に耐えて何年かそのまま頑張ってみなかったのかなどと言っている。やがて東大が他大学にさらわれるという事態がどうしてやってこないといえるだろうか、と。

だがこれはじつにわからない論理だ。どこからそのような可能性の確実さがやってくるのか。ありうるとすれば、たとえば京大がその屈辱をかみしめるなかから奮起して、研究内容や教育内容で絶対に東大に勝ってみせると決意し、その必死の成果を本当に受験生たちの心にまで響かせたときだけだ。まるでスポ根ものみたいだが、たとえ内容が東大をしのいだとしても（実際にはすでにかなりの面でそういえる）、それがそのまま大学人気につながるほど甘くはないし、仮になったとしても、人気の移行があるだけである。また姑息な一時の人気取り政策に走る危険も大いに考えられる。だがもともと受験生には私立受験の選択もあるのだから、そんなことをしてまで国公立のランクを流動化させること自体、西尾氏が期待しているような大きな社会変革的意味があろうとも思えないのである。

もし少しでも才能の拡散を期するなら、かえって一大学しか受験できないほうがいいのである。なぜなら単数受験の場合、やや東大に自信のない子や、自分は京大向きかなと考える子ははじめから京大をめざすが、複数受験なら、これらの子は必ず東大も受け、両方受かればどうしても東大のほうへ行ってしまうということになるからである。もともと受験機会の複数化は、もっぱら受験生の側の便宜を考えて出てきた政策なのである。

次にIIの特定高校からの入学者数制限は、たしかに六年一貫制の有名私立中学・高校の人気をややダウンさせ、中学受験の熱を

冷ます効果をもつだろう。その結果、トップレベルの公立高校へ人気が少し逆流し、優秀な生徒がいろいろな高校に拡散する。しかしそれはそれだけのことで、別に大学の序列や格差が減少するわけでは少しもない。なぜならこの方法は、選別に際して単に高校別のシェアに規制を加えようというものであって、選別される個々の人間に手をつけているわけではないからである。たとえば一高校あたり五十人と制限された場合、以前なら開成で七十番の子が、今度は巣鴨にまわって二十番ぐらいで東大を受けて合格、ということになるだけの話である。代わりにあらわれるのは、各高校内部での学力格差の拡大と競争の激化である（たとえば東大に二十人程度入っていた高校は、可能性がさらに開けるので、もっと必死になる）。

さて、両者のドッキングである。私がいくら頭をひねってもわからないのは、果たすべき目的も向けられた対象も違う二つの方策（かたや受験生の自由度の増加、かたや高校単位のシェアの自由の拘束）が結合して、どうしてそこから西尾氏の指摘するようなえもいわれぬ効果が出てくるのかということである。彼は言う、両者を同時実行すれば、大学は他大学に才能を根こそぎさらわれる恐れがないから安心して自由に日程を設定できる、と。本当にそんな論理的連関がこの二つの方策の間にあるだろうか。

わかりやすくするために話を思い切り単純化する。しかしこの単純化は、人情のおもむくところという前提を踏みはずしていないはずであるから、原則にのっとった単純化である。

今誰でも二つの国立大学を受けることができ、トップの甲大学と二番手の乙大学があるとする。X高校から甲大学へは五人が合格する実力を持っており、これは全国一の実績である。その五人を成績順にA〜Eとする。もちろん彼らは乙大学にも合格できる。Y高校から甲大学へは一人しか合格しないが、乙大学は少しやさしいので二人合格できる。二人を成績順にF、Gとする。さて、入学者制限を行なわない場合、X高校の五人は甲、乙両大学を受験し、両方とも合格し、全員甲大学へ進む(これはべつに全員でなくともよいのだが)。Y高校の二人も両大学を受験し、Fは甲大学、Gは乙大学へ進む。

ところが新制度ができて、一高校から甲乙両大学へはそれぞれ三人までしか合格を認めないということになった。X高校の魅力もさほどではなくなったので、やや自信に欠けるDE両君は、かえって有利なY高校から両大学を受けたが、実力があったのでどちらも合格した。そしてやはり甲大学へ進んだ。ところがGはDEに押されて三人の枠からはずれることになるために、乙大学不合格。本当なら上位者の脱落のある乙大学としては、かなり成績のよいGを補欠合格としたいところだが、それは制度上できないから、他校のもっと成績の低い生徒のなかから補欠入学者を選定しておかなくてはならない。というわけで、事態は少なくとも乙大学にとってはよい方向へは向かっていないことがわかる。

だがもうひとつの可能性がある。西尾氏もおそらくこのケースを漠然と前提にして言っているように思うのだが、入学者制限が決められていても、X高校、Y高校の生



徒の学力水準には変化がなかったとする（もっともこれは、私立中高への集中の緩和策の期待とは矛盾することになる）。つまり、X高校には相変わらずA〜Eがいることになる。するとどうなるか。甲大学へはDEは入れないことになる。そこがこの案のミソ、彼らこそ乙大学へ入学するから才能が分散するではないかとあなたは思ったかもしれない。ところがそうならないのである。なぜなら複数受験が可能だから、当然ABCも乙大学を受けており、それで定員いっぱい、DEは乙大からもはじき出され、私大か浪人ということになるわけだ。つまり、複数受験が許されていて、一流進学校の人数制限が厳しいほど乙大学は優秀な生徒を獲得しにくいということになる。それだったら、人数制限のない状態のほうが、優秀な五人のなかの誰かが乙大に入学する可能性がより多く残って、はるかにましではないか。A〜Eの全員に甲大学へ逃げられる最悪の場合でも、Y高校のG以下の生徒を確実に補欠入学者として確保することができるのだから、もともとである。

もし本当に才能の分散をはかることを第一義とするなら、むしろ西尾氏のアイデアとは逆に、単数受験と人数制限とをワンセットとするべきなのである。なぜなら、そうすればA〜Eの誰かはほぼ確実に乙大学だけを選んで受けるだろうからだ。しかしそれは受験者の自由をさらに厳しく制限する社会主義的な平等化政策に近づくことになるわけで、そんなことをすると国立大学ばなれがいっそう進んで私立人気が高まってしまう。結局それこそは妙案かもしれない。もちろんそれで偏差値体制が改まるわけでは少しもないが。

使用した資料

『シリーズ　大学は挑戦する　亜細亜大学』二期出版
『学長の鈴』読売新聞社
『慶応湘南藤沢キャンパスの挑戦』東洋経済新報社
『教育と自由』新潮社

バカ語録

一億総キョーイク評論家

主婦の投書からの巻

Arranged by
ITSUO KOHAMA
Collaborators:
SOUICHI YUKI & SATORU NATSUKI

郵便受けにポトンと音がする。走って電子郵便を取りに行く。封書を祈るような気持ちでそっと開いてみる。…同時に、東京で最後の受験に挑戦している息子の顔が浮かんでくる。「ない」。もう一度数行前から見直してみる。「やっぱり駄目だったか」と自分自身に言い聞かせる。…私のように合格を祈り願う人たちがどのくらいいるのだろう。…入学受験制度の詳細な改善に熱心に取り組んでくれる方が、一人でも多く国会に参加してくれることをひたすら望むばかりです。

＊

「うちの子は業者テストの偏差値はあまり高くないが、基礎学力はある。『この高校のこういうコースに行きたい』という目的意識がはっきりしている。こういう面を評価する入試方法を検討してほしい」

＊

はじめの奥様、ご子息様のご無念を悔しく思われるお気持ち、よーくわかります。でもちょっとお待ちください。当方の受験制度をどのように改善いたしますと、ご希望に添えるのでしょうか。

おことばから察しますと、ご子息様やそのほか合格を祈り願う方たちが、皆さんそろって合格できるような改善をご希望なさっているようでございますね。申し訳ございませんが、当方では、そのお申し出だけはちょっと承りかねますんでございますが。と申しますのも、当方の受験制度は、さまざまな工夫改善を積み重ねてきてはございますものの、いちおう入学できる方と、入学をご遠慮いただく方とをはっきり分けさせていただくという仕組みだけは動かし難いものでございますから。

それからあとの奥様、少々ご希望のご趣旨の正確なところをはかりかねる点がございますので、たいへん失礼なご質問をさせていただくのですが、基礎学力というのはどの程度で、何に基づく評価でございましょうか。

それともうひとつ、「こういう面を評価する入試方法」とおっしゃっていますが、その「こういう面」というのは、お子様が目的意識をはっきり持っていらっしゃるという点でございましょうか。ただ、おことばを返すようでございますが、目的意識がはっきりしているということは、それはお子様の単なるご希望ということでございますね。わたくしどもといたしましては、単なるご希望を「評価する」ということは、ちょっと難しいんでございますが。やはり、たとえばいくらお医者さんになりたいと強く望まれたとしても、そのご希望の強さ、ご意思の明確さだけでお医者さんになる資格が手近なものになるというわけではございませんのでね。

PART 5

さあ、いよいよ我れわれの改革案の出番だ！

大座談会

我れわれなら こうする!



【参加者】

佐藤通雅・河原巧・小浜逸郎・佐々木賢・由木草一
松田博公(司会)

「子どもは無垢」「子どもは被害者」というパターン化した学校批判に異を唱え、
過剰に倫理主義的な熱心教師への傾きにも陥らぬ、
フツーの教師がフツーの教師として生きられる学校は可能か!?
「教師たるものかくあるべし」の無言の圧力とタブー意識を排し、
どんな幻想にも支配されずに、
日常の実践を通じて見えるものを言葉にしようとするフツーの教師が
泥沼の孤独な闘いの果てに見たものは?

松田●みなさんの本はひととおり読ませていただきました。感じたことは、かなり煮つまってきているなということです。
　もちろん、改造案をどうしていくかという具体的なことになると、必要であるのか、必要でないのか、いろいろなニュアンスの違いとか、立場の違いも出てきますけれども、現状認識ということでは、かなりみなさん、共通した見解に到達している。それだけ、十年の教育論議の煮つまりが感じられます。
　ぼくはマスメディアに従事していて、やはり十年ぐらい前から、このような教育記事を書いていていいのだろうかという疑問にかられて、ぼくの記事も叩き台にして佐々木賢さんと二冊の本を出しました。良心的新聞記事と言われている記事自身が持っている限界みたいなものを見つめたかったんです。それはおそらく自分の意図を超えて、構造的な限界を伴っているわけだから。


松田博公氏

引き裂かれる教師たち

松田●みなさんは、それぞれの著作の中の最初のパートに必ずと言っていいぐらい、マスコミ言説、あるいは学校を取り巻く言説の問題を取り上げている。佐藤さんの場合はとくに印象的なもので、矛盾したメッセージを同時に与えられて、教師というのはどうしていいかわからない立場に立たされている、つまりどう行動しても叩かれるのではないかという実感を語っておられる。
　農耕社会的な集団主義などという古いものは全廃せよという教師批判と、教師はそういった集団主義を担う責任者ではないか、責任を果たしていないという、まったく相反するメッセージがあるということですね。
　そこで、もういちど、マスコミ言説、あるいは学校言説の持っている問題性を、実感としてどうとらえているかというところから入っていきませんか。
佐藤●学校につきつけられる言説は、大きく分けると二方向あって、かなり相反しています。そのひとつは、教師というものは社会的に責任があって、その責任を果たさなければいけないというのです。こちらがまともに受けてそれを実行しますと、どうしても過度に管理主義的になったりする。ヘタをすると生徒を殺害するという事態まで引き起こすところがあります。
　ところがこの逆に、集団主義はもういらないという考え方があります。自分の子どもは個人なんだから、それはこちらでやるから学校はよけいなことをするなという、いわば欧米型の個人主義と言いますか、そのような考え方があります。
　結局、学校というのはどちらをとっても何か問題が起きれば叩かれる、何もなければ無視される、そのような情況にあると思います。
松田●河原さんは、学校批判派と学校依存

派というように、その矛盾する要求を分けていますね。

河原●ええ、今言われた旧来の集団主義的なものを要求する親と、西欧型の個人主義的なことを要求する親と、このふたつがあります。その場合、教師は結局、多数派につかなければしかたないわけです、個々の学校で。自分の学校で、自分の地域の親がどちらのほうを要求しているかによって教師の態度が決まるのですが、現在のところ圧倒的に集団主義型です。

親が全部、個人主義のほうに行ってくれれば、教師が生徒のスカートの丈を測ったりするようなバカげたことはなくなります。しかし、現実には、大多数の親は、きちんとした学生服、セーラー服で象徴される教育をしてほしいという欲求を持っています。だから、教師は、それに応えなければしかたがない。

小浜●河原さんの今のお話の中の集団主義が多数派だというのはよくわかるんです。けれども、そういう集団主義的な統制を、ほんとうに親がいいと思って、積極的に言っているというよりは、親の安心感のために学校に押しつけているという感じがしてしようがないんです。

現場の先生がそれを引き受けて、誠実に集団主義をとろうというのは、これはいたしかたのないことですけれども、もう少し長い目で見た場合に、そういう親の押しつけ意識のようなものを逆に批判していかなくてもいいのかなという気はするんです。

佐藤さんは、『教員養成セミナー』(九三年五月号)で「職業としての教師」という特集がありまして、そこでいじめの例を挙げておられます。ぼくは、あれはすごく象徴的な例だと思います。

いじめをやった生徒に対して、教師がそれをやめさせようと思って体罰をしたら、ものすごい非難を受けたという新聞記事があって、もう一方の新聞記事では、いじめを教師が監督しなかったということで、いじめられた子の親が裁判沙汰にしている。これではいったい先生はどうしたらいいんだ、ということがあるわけですね。この「どうしたらいいんだ」ということを、声を高くして、どんどん言っていく必要があると思います。

河原●たとえば、校則で制服が定められているのに、あえて私服で登校させるという、現体制に反対する意識の親というのがいますね。ところが、これは、どこの学校でもだいたい一人きりなんです。それが広がったという話は聞きません。

小浜●孤立してしまうんですね、必ず。

河原●ただし、個人主義的な方向にやりたいという親が一人しかいないということではないんです。個人主義的な教育を求めている親は何人もいるはずなのに、はっきりしたかたちで現れないのは、集団的な圧力、地域の全体的な空気が集団主義的なものを求めているからなのです。そういうものが変わらないかぎり、学校は変わらないと、ぼくは考えています。

小浜●制服の問題は偏差値の問題とすごく絡んでくるような気がします。端的に言ってしまえば、高偏差値の学校は、ある程度自由を許しても、なんとか規律は保てるだろうけれども、底辺校でこれをやるととんでもないことになるという認識——学校の階層構造の問題——も、必ずそこに入れておかないと一般的には語れないという問題

があります ね。

松田●管理教育も、文部省が管理教育を推進しているなどと騒がれた時期がありましたけれども、そんなことはないんですね。

河原●それが、結果として、どの学校も似たり寄ったりのことをするのは、誰かがやらせているのではなしに、社会的な、時代的な必然性があるのではないかということを言いたかったんです。

佐々木●先ほどの服装のことですけれども、定時制では制服はないんです。だいたい、どこの学校もありません。偏差値はかなり低いんですけれども。ですから、必ずしも偏差値というのは……(笑)。思っているよりは、もっとほんとうは自由にできるところがあると思います。

小浜●でも少なくとも教師が危機感を持っているという現実はありますよね。それを外してしまうと、秩序が保てないのではないかという……。

佐々木●まあ、秩序というのは、あまりないんです。そうするとまわりから怒られるわけですけれども、怒られても知らんぷりしてやっている、それでもある程度、できるんじゃないですか。

マスコミは なぜ教師叩きが好きなのか?

松田●佐藤さんは、共同体がまさに崩壊していくからこそ、共同体を学校が固守してくれなければ困るという無意識の欲求があるというわけですね。

佐藤●今の親の世代はどちらかと言えば、欧米型の個人主義でずっと育ってきているから、ほんとうは個人主義でやりたいと思っているんですよ。ところが、自分の子どもとなると違うんですね。自分はこうしたいという欲求と、子どもにこうあってほしいという欲求に段差がどうしても出てくるんです。このまま個人の欲求だけで推し進めていくと社会がバラバラになるという危機感を日常的に持っているんです。

　で、個人主義でやりたい気持ちと、それは困るという気持ちが、今の一般大衆の間ではせめぎ合っているという、そういう情況だと思います。

松田●一人の個人の中にも、そういう矛盾した欲求の層があるということですね。

佐藤●そうです。せめぎ合っていて、出口が見つからない。それでは日常やっていけないので、なんとかせめて自分を支えるというか、あるいはごまかすというか、そういうシステムがほしいんですね。

小浜●なんでも学校に期待して押しつける反面、そのくせ学校をあまり信用していないというような親の意識があって、しかしあいかわらず国家からの配給品である学校制度の旨味をできるだけ味わおうみたいな感覚がどこかに残っているんですね。反面、個人主義が育ってきていて、教育に対する不信感を一方で募らせているという感じだと思うんです。

　変な言い方だけれども、そうした不信感をただぶつけるのではなく、うまく育てていくことによって何か抜け道があるのではないかという気がするんですけれどもね。

松田●教育というのは強制教育、強制されたサービス業なんだということを、ここにおられるみなさんがおっしゃっておられる。

　そうすると、教師というのはエージェント、いわば強制教育の収容所というか、強制収容所のエージェントたらざるを得ない

面があるわけですね。マスコミというのも、中立、公正、客観性という三種の神器の神話性のうえに成り立った社会の公器なわけです。新聞記者も当然のことながら、エージェントである。自分の思想を表現しているわけではなくて、誰かの思想を代弁して表現している。視点も文体も、表現の文章もすべてパターン化されているわけです。

問題は、過渡期の社会の構造と構造がぶつかり合っているにもかかわらず、その構造がマスコミの言説にはぜんぜん見えていない。そして、システムの代理人としての教師に別の代理人としての立場から、もっとしっかりしろと注文する。だから場当たり的で矛盾だらけの注文になるわけです。

佐藤●今の教育論議のもうひとつの問題は、日本人の子ども観の問題があると思うんです。これがマスコミの体質にも作用している気がします。弱者のうちでも、もっとも弱者である子どもを損なうのは、これはたいへんな害悪であるというとらえ方ですね。

そこで、松田さんにお尋ねしたいんですけれども、新聞で、とくに教育記事を書くときにこういう子ども観に本能的に立っていないでしょうか。

松田●それはそうだと思います。二項対立と佐藤さんもおっしゃっておられますが、その二項対立という神話的パラダイムに立脚している。新聞記事というのは、どこかに悪者がいて、その悪者がいけないんだと言って叩く、結果は問わずにですね。それが文体として成立してしまうわけです。

だから、子どもは無垢である、被害者であると考えるパターン思考がエコノミーというか、ベースにあると思います。

小浜●子どもが無垢であるという立場をとりあえず取る。でも、その「とりあえず取る」ということが昂じていくと、学校で起こっている現象の因果関係が転倒にまでいってしまうことが現にあったと思うんです。それは、管理主義や受験教育をやったから学校が荒れたという論理を容易に導き出しているひとつのポイントになってるわけです。

ですから、ほんとうは、まず子どもイコール無垢という神話をどのように崩すかということも、ひとつやるべきことだという気がするんです。

佐藤●二項対立は確かに理解の仕方としてはきわめて簡単、単純で、理解しやすいんです。ぼくは、教師という立場を離れて学校問題とか教育問題のマスコミの記事を見ていると、時代劇をどうしても連想するんです。まず敵と味方がいて斬り合いをする。そのときは弱いほうの味方をしたくなるし、最後に強いのがやっつけられたほうが大衆受けをする。そのような、われわれの日本人的な意識構造がやはりあると思うんです。もしかしたら、マスコミの言説というのは無意識のうちに時代劇をもう一回作ろうとしているのではないかな。

小浜●もう少し質のいい物語を作る必要がありますね、いずれの物語であるにしてもね。

いじめはなぜなくならないのか

由紀●ここでいじめの問題を言わなければいけないでしょうけれども、あれは、何が原因なのかというのは、ちょっと難しくて、よくわからないけれども、こういう学校の閉鎖性が温床になっていることだけは、ど


佐藤通雅氏

うやら確かみたいですね。

河原●いや、違いますよ。今のマスコミの論調は、いじめはあってはならないものだという前提でしょ。そうじゃないんです。いじめがあってふつうなんです。あれは自然の姿です、動物界の。人間の世界もそうでしょ。われわれ教師間にもいじめがあるんですからね。生徒のなかにいじめがあって当然のことです。

だから、そういうものを予測して、そのいじめをどうするかということを話し合わなければいかんですね。それを「いじめはあってはならない」ものだというような前提に立って、「いじめはありませんでした、ありませんでした」と言うんです。

由紀●だけど、今みたいに、現実にいじめで死んだりする子がどんどん増えると、やっぱり、これは……。

昨日まで親友だと思っていた人間に、じつはいじめられていた、それも冗談のようなかたちで。本人もいじめだとは気づかなかったけれど、じつはいじめられていた。そういう土屋守さんの娘さんの『私のいじめられ日記』（青弓社）に出ていた、人間関係のすごさというのは、私の理解を絶するところがあります。

河原●いや、ぼくはわかります。親友がいじめるんですよ。いちばん密接な人間ほど、愛憎関係が強くなるんです。親子の関係、夫婦の関係がそれでしょ。だから、そういう目で見ないから、話がおかしくなると思うんです。

あの土屋さんというのは、精神科医ですね。あの人が朝日新聞に書いていたのを読んで嗤ったですよ、嗤ったというと悪いけれどもね。「多くの人の善意のもとに自分は生かされているのだ」ということで子どもを育てたと言うんですね。バカかと思うんです。家の外には七人の敵があるというのが常識でしょ、親としては。そういうように親というのは子どもを育てなければいけないんですよ。

由紀●反駁するわけではないですけれども、そういう見方もわかりますが、やはり、一方で、土屋さんなんかの場合だと、中学生、高校生ぐらいの女の子にとって、クラスの中で孤立してしまうというのは、すごくきついんですよ。

河原●きついですよ。

由紀●それに耐えられるようになれと言うのはいいと思うんです、そういう教育があっていいと思います。あっていいけれども、実際問題としてできないんだし、また、そういう孤立化を恐れる気持ちが、またいじめを作り出すわけですね。

その因果関係はいちおうはっきりしているものですね。言いたいのは、学校の閉鎖性を少しずつ取り払う方向にいかないといけないということ、それだけは、今はいちおう言えるのではないかなと思いますね。

小浜●学校が作っている閉鎖的なひとつの枠組みが、人間の中にある闘争本能のよう

なものを外に向かわせずに関係が濃くなればなるほど、親友関係になればなるほど、イジイジいじめる傾向を助長している部分もあることは確かではないでしょうか。
それは、こういう管理教育をしたからいじめが蔓延するとか、そういう言い回しとはまた別のレベルの問題であって、それに対しては当然反駁すべきだと思います。管理教育をやったからだとか、受験教育で子どもを抑圧しているからだとか、そういうのはナンセンスなんですね。
でも、学校の、ひとつのシステムがつくり上げている子どもたちの気分みたいなものがいじめを誘発させる要因になっているという部分があるということは、明確に言っていく必要があると思うんです。

由紀●私も、管理教育から閉鎖性が生まれてきたとはぜんぜん思わないですけれどもね。閉鎖性というのは、なにしろ、学校制度が強まった結果として、自然に生まれてきてしまったんですね。

小浜●みんな学校に追い込まれていて、そのところで、整然とした有効な管理がないときにいじめ的な土壌がだんだんできるわけでしょ。つまり無秩序な集団性が、囲い込まれた中で渦を巻いて、しだい、しだいにいじめ的な「あいつ、ムカつく」みたいな感覚を育てている部分が、ぼくはあると思うんです。

河原●だから、教師の指導力の低下なんです。

小浜●うーん、はたして、そうなのかということなんですけれどもね。

教師の指導力云々だけでは「いじめ」は語れない

河原●中学校では担任によってクラスのカラーが決まります。で、いじめが発生するクラスというのは予測できるんです。それは弱い教師のクラスなんです。生徒をきちっと指導できない教師のクラスです。そういうクラスでは生徒は自分で自分を守らなければならないんです。教師が守ってくれないですからね。

由紀●ただ、どうですか？　シカトのかたちのいじめにもちゃんと対応できますか。

河原●それは、なんでも一緒ですよ。

小浜●ただ、あまり教師の力量の問題にしてしまうと、シカト的ないじめの場合でも、そこまで監督できないのは教師の責任だというかたちになってきます。じゃ、そこまで介入して、それこそ熱心教師になって、必死でいじめを防止するようなかたちで精力を注ぐのがいいのかという問題が出てきますよね。

由紀●結局、四、五人でグループを作りますでしょ、今はね、女の子も男の子もね。だから、簡単なんですよ。四人のうちの三人が一致して、あいつを仲間外れにしようと言えば、それがいじめですからね。

松田●外から見れば、仲よしグループみたいに見えるんですよね。

小浜●それで、先生がいないときを見はからって、そういうことをやってるんですね。

河原●だから、いじめがあるのがふつうなんだと言ったのは、それなんです。だけども、やる程度に強弱があるわけです。

由紀●そうでしょうが、それは個人の受けとめ方の違いもありますから、独りぼっちにされてもわりと耐えられる子とまったく耐えられない子とありますので、それを教師の指導力だけでなんとかというのは、や

はり、ちょっとねえ……。

河原●そういう意味ではないんです。ぼくの言ってるのは、たとえば警察の捜査能力なり、治安維持能力なんかが高い社会では、それほど犯罪がないでしょ。それと同じ意味なんです。

由紀●ですから、殴るとか、かたちに現れているようないじめはまだしも対処がしやすいですよね。だけどシカト・無視、嫌いな奴と口をきかないというのは、何も悪いことはないですからね。それがいじめなのか、いじめではないのか、やられている側だけがいじめと受けとっている場合もありますよね。そういうところには、おそらくとても学校とか教師は介入できないんですよね。

じゃ、何が原因なのかと言われると、私もたいへん難しくて、よくわからないけれども、なんとかすることを考える必要があるだろうと思うんです。

昔は地域社会の受け皿のようなものがあったわけですが、今さらそれはできないと思いますし、何かしらそれに代わるようなものをつくらないと、とてもじゃないけれども、できないんじゃないかと思いますね、こういうことは。

河原●いえ、シカト・無視されても耐えられるのがふつうなんです。耐えられる子どもがふつうなんです。

由紀●それは、先生の時代にはそうであったのであって……、私の時代でもそうですよ。シカトされたぐらいで自殺はしませんよ、悲しくてもね。だけど、今の子どもは現実にそうじゃなくなってしまったんですから。

それは、さっきも言ったように孤立に耐えられるような教育も、またひじょうに大事だと思います。思うけれども、現実にそうじゃない子どもがいるんだから、これは考えざるを得ないでしょう。

河原●でも、パーセンテージから言ったら、ものすごく少数でしょ、自殺する子なんていうのは。つらい思いはしているけれども、耐えて生きていくわけです。昔からいじめっ子というのはおったわけですからね。

由紀●いましたね。ただ、やはり私は考えざるを得ないだろうなという気がしますけれども、自殺する子が何人か出てきた場合は。

小浜●河原さんのおっしゃることはわかるんです。先生が実際にクラス作りとかをやっていますと、いじめが発生しにくいような予防的なクラスの雰囲気作りは、先生の力量にかかっているという部分は確かにあると思います。

しかし、それを言うだけではなくて、やはり由紀さんのおっしゃっているような、こういういじめは、先生がいくら目を光らせていても、予防することはできないんだという限界性の認識も、また、ぼくは必要だと思うんです。両方言わないといけないと思うんですね。

松田●今、マスコミの批判は、いじめが起きるとあいかわらず先生に集中しますよね。対症療法としては、それしか言えない。

小浜●現場で苦しんでいらっしゃる河原先生のような方が、いじめは先生の力量しだい、みたいなことを言ってはいけないんですよ（笑）。

由紀●私が言いたかったのは、ごく単純な話で、どんなに学校の中で孤立していても、放課後、スポーツ少年団みたいなところに

行って、そこに友達がいて活躍できるなら、まあ、自殺はしませんね。
　だから、学校に代わるものを制度的に作っていくというか……、なにしろ、今、学校の力があまりにも強すぎるから、何か学校以外のところに目を向けられるような方向に持っていくことはできないのかなということなんですけれどもね。

民主的なクラスには「いじめ」が多発するメカニズム

河原●ぼくが言いたかったのは、教師の力量ではなくて思想性と言うんですかねえ。たとえば、民主的とか、進歩的を自認する教師のクラスにいじめが多く発生するんです。
佐藤●それは単純なことで、強い担任がいると、そのクラスはわりあいと治まるんです。ところが、生徒は、その担任を陰ですごく憎んでいるんです。それこそ民主的な、みんなを大事にしようというクラスにはいじめがあるんです。こういうメカニズムは確かにあります。
河原●強い担任が憎まれるとはかぎらないんです。もちろん、そういうところはありますよ。しかし生徒は自分を守ってくれる教師をまず頼りますよ。教師の力で正義が行なわれるということですね。
　掃除のとき、班があって共同でするのに、ボス的な奴がサボっているというのは不満を持ちますよね。それを教師が、そういうことを許さない強い指導をすると、生徒は信頼する。そういうメカニズムです。
由紀●でも、強い指導をした結果、佐藤さんが書かれた場合のように訴えられたりするわけでしょ。そうするとひじょうにイヤになるでしょ。つまり、いじめを防ごうとして強い指導して、そのことを訴えられる。
河原●だから、そのような強い指導を社会は認めなければいけない。
由紀●確信犯としてやれればいいかもしれないけど、やはり、それはちょっとつらいなあ。
佐藤●スポーツの世界では、このメカニズムが完全なんです。強い部は監督が強権でやりますからすごく憎まれています。その代わり、生徒はまとまるんです。そういう部が強くなるんです。そうでない心のやさしい監督はダメです。それははっきりしています。
小浜●そのへんは河原さんと同じ現象を言いながら、異論が出てくるところですね。
　河原さんの考えでは、腕力が強いというだけではなくて、精神的なヘゲモニーを生徒たちが望むし、また、それがいじめ防止のひとつの手だてになるということですね。
河原●やはり教師が信頼されないとダメですね。憎まれてしまったら、どんな方法をとってもね。また、殴ったから憎まれる、やさしくしたから信頼されるというものでもないですね。そんな単純なものではない。
佐藤●やさしくすることと信頼が繋がらないような気がしますね。
松田●かつては繋がったような感じがあるんですけどね。
佐藤●そうですね。でも、繋がらない場合がたびたびあります。
　自分なんかもやさしいほうだから、よく体験しているんですけれどもね（笑）。生徒のほうで、自分をガッチリと押さえてもらわないとやっていけないという体質的なものが、最近ずいぶんあります。いわゆる民

主的と言われている人に対して、投げ出しているというふうに見る生徒がけっこう出てきているんです。

小浜●校門圧死事件の細井敏彦教諭の場合も、いちばん人気があったらしいですからね。信頼感もあったし。それで、あの本（『校門の時計だけが知っている』草思社）の最後に、いろいろ寄せ書きや投書が載っていましたけれども、「先生がいなくなってから、学校は滅茶苦茶です」とか言ってる子がいるんですよね、けっこう。

編集部●あの先生はいい先生だと思うんです。だけど、いい先生で熱心な先生は、ダーティーワークを全部引き受けさせられ、


河原巧氏

最終的には学校からも裏切られますものね。だから、ほどほどにということも、やっぱり必要だということですね。

河原●ダーティ・ハリーですよ。頼りにされて最後は裏切られる。

由紀●でも、細井先生は確信犯ではないです。わかってやっているわけではない。

編集部●ないですね。あの事件があって、はじめてものを考えはじめたという感じがありますからね。それまでは、単純に、こうやらなくちゃという、一人だけで正義漢ぶってという、いるでしょ、ああいう人が世の中に。いやだね、と思いますけれどもね。でも、あの先生は、教壇から追放され、今いちど自分を見つめ直すかたちでしか――それはひとつの悲劇ではあるのですが――学校を考えるという場所に来られなかったというのは、大きいと思うんです。

　ですから、そうならないために、こんどのこの特集はもっともっと読まれるべきだということは言えるんじゃないですかね。

官製の改革は何をもたらしたのか

松田●つぎに官製の改革は何をもたらしたのかというところに入っていきましょう。

　由紀さんが印象的な言葉として、「システムを替えようとして、ますます、その強化をもたらすという、戦後日本の教育政策が一貫してとってきたやり方」とおっしゃっておられますね。

由紀●これは具体的な例を考えれば、みなさん、おわかりになると思いますけれどもね。

　システムというか、学校制度の圧迫みたいなものを軽くしようとして、文部省側はかなり一貫してやってきた印象が強くあるわけです。ところが、共通一次テストがいい例ですけれども、あれで生徒の負担はますます増したし、偏差値体制と言われるものが、あれで完全に決まってしまったわけです。

　こんどは週五日制が完全に施行されるとすると、文部省側は塾のほうには控えてくださいと言っているらしいですけれども、

そんなものは聞くわけがないですから、塾に行く生徒は絶対に出ますね。それで、塾できちんと勉強する生徒とそうでない生徒の差が開くでしょうね。まるで、塾か予備校と結託しているような気がしてきますでしょう。

小浜●学校群制度もそうですね。あれをやったおかげで、私立のほうにバーッと流れましたからね。

由紀●これも、なぜかというのが、いまいちよくわからないんですけれども、要するに学力差は現にあるということですね。それから学校間格差があるということも、この間、中教審がはじめて認めたんですね。それまではないということになっていたんです。今だって、地方の教育委員会では学校間格差はないということになってるんです。全部、同格だと。

そんなことは嘘だというのは誰でも知っているのに、どうして、そういうたてまえを作らなければいけないのか、いまいち理解できないところがありますけどね。

それから、いちばん根本にあるのは大衆自身の中の差異化の欲求ですからね。差をつけたいわけです。平等なんて、みんな嫌いなんですよ、人間はおそらく。あいつと俺と同じだなんて思いたくないんですよ。

だから偏差値体制をもたらしたのは、なんだかんだ言っても大衆自身ですから、これを変えなければ、どんなふうにいじってもますます制度が妙な具合に複雑になっていって、結局、差異化というものがさらに緻密に細かく分けられるようになるのは、ある程度ほんとうだと思うんです。

文部省とか、ああいうものの最高の機能、最高の至上命題は、学校に対する幻想をなんとか守る、破れているけれども幻想としてはまだありますよ、ということをアピールする機能じゃないかと思います。

小浜●ところが、文部省などの目の届く範囲、手の及ぶ範囲がもうかぎられていて、それを受ける市民のほうは、もっと別に私的な領域をたくさん抱え込んでいるんだよ、というようなことに対しては文部省は絶対に見て見ぬふりをすると言いますか、それはないことにしようという暗黙の了解があるわけで、あれは公的権力の苦悩ではないかという気がしますけれどもね。

公的な部門の内部での制度いじりをやればやるほど、抑えれば抑えるほど、内圧みたいなものが民間のほうにゴーッと出て行って、膨らんでいっちゃうという、そういう構造になっていますからね、今は。

松田●国家意識は、文部省はかなり強いでしょう。これは絶対に譲れないところではないですか。国家の幻想性をいかに保持していくかは、文部官僚の世代が代わったとしても、絶対に譲れないところなんじゃないでしょうか。

その国家意識が、通産省などの国家意識とかなり違うものとしてあるわけですね。それこそ君が代・日の丸のレベルということかな。

由紀●あの君が代・日の丸というのは、どういうメリットがあるんでしょうかね。あのように押しつけてね。あれは、どこから出ているんですか。

松田●いわゆる保守反動意識がモロにあるとは、ぼくは思わないですけれども、要するにシンボルですね。シンボルはシンボルとして定着させていくという、それはあるでしょうね。

小浜●このまま放っておくと、日本市民（日本国民）の精神のアイデンティティが解体する一方だという危機意識がものすごくあって、それをシンボルでもって抑えておけば、というギリギリの歯止めの意識だと思いますけれども。

由紀●有能な官僚であれば、共和制になろうが、天皇制だろうが、大丈夫ですよね。まったく関係ないでしょ？　そのへんが、私も理解しかねるところですけれどもね。

松田●文部官僚は、通産省と比べても、かなり目先の利かない人たちですね。河原さんが分析しておられたけれども。そこは、あまり考えてもしかたがないかもしれないですね。

教育に市場経済を持ち込むことの問題点

小浜●竹内靖雄さんなんかは、『正義と嫉妬の経済学』（講談社）の中で、公教育は国家が強制的に与えた配給制度で、その配給制度にだけ従おうとは今の人たちは思っていないということを言っていますね。しかも、その配給制度は、社会主義だという言い方もしていますね。

由紀●竹内さんの教育に関するところは、臨教審・自由化論と同じではないかと思いますけれど、どうなんでしょう。

小浜●ただ、臨教審の場合には、政府の審議会だということで、塾やなんかの自由な民間教育を認定せよという言い方になるわけですね。そこが若干違うと思うんです。もっと竹内さんのほうがラジカルだと思うんです。文部省を廃止しろですから、この人は。

　だから、官が、そういうものを認定する方向で自由化を考えるか、そうではなくて、公はもう引っ込んでいろというのか、そこには微妙な違いがあると思いますけれども。

由紀●なるほどね、公教育の「公」を取るんですね。

河原●全部の学校を民営化するということですね。

小浜●ええ。ただ竹内さんの場合は、それでは資格認定の機関をどうするのかという問題がありますね。文部省を廃止して、第三者的な認定機関という言い方をしていますけれども、この概念は少し曖昧で、やはり、これは何かパブリックなものでなければならない気がするんです。そういうところに、市場経済オンリーだけでは負いきれないものがどうしても出てくる。

　たとえば「あなたは医師です」ということを、誰がどういう手続きで認定するのか、資格の公的な顔だち、権威の顔だちをどこから手に入れるのかと議論をしていくと、たんに教育論に留まらず、より根本的な国家論や市民社会論に当然発展しますね。

河原●この竹内さんのもので気になったのは、全部民営化するという点ですね。民営化すると親と子どもが学校を選ぶから、そこに市場経済の原理が働いて、いいものが生き残っていくということですね、根拠は。

小浜●神の見えざる手ですね、これは、まさしく。

河原●この論理は、もう一方の選別を見落としています。というのは学校側も子どもを選別します。ふつうの商品であれば、あの方には売るけれども、あなたには売らないということはしませんね。だけど、学校の場合には、入りたい者を全部入れるわけではない。必ず知的能力の高い者を合格さ

せる。学校側の選別によって学校自身の市場価値を高める方向にいきますから、したがって原理は働かないと思うんです。

小浜●竹内さんは市場原理でもって、学校側をサプライにして、受験生や子どもたちをディマンドというふうにして、需要と供給のモデルを当てはめているわけです。でも、確かに今、河原さんがおっしゃったように、学校側がディマンドである部分もあるわけです。

　ふつうの商品、サービスでしたら、売れれば売れるほどいいわけです。たくさん売れれば、需要があれば、その分だけ生産していくというかたち、それがふつうの自由市場経済のかたちですけれども、そういうかたちを教育は絶対に取らないですね、確かに。

河原●能力の問題で言えば、はっきり生まれつき知的能力の高い者とそうでない者とあるわけです。タブーになっていてみんなはそれを言わないですけれども。学校のほうは、必ず能力のある者をほしがります。それは手間をかけずに成果が上がるということがあるからです。

小浜●その部分は学校側のディマンドなんですね。純粋にサプライではないんです。ただ、こういう切り口はとても爽やかで、倫理倫理でやってきた教育論の世界には、外から新風を吹き込んでいると思うんですがね。

河原●逆にどこの学校も引き受けてくれない子どもが出てくるわけでしょ。最終的には、公立学校で引き受けなければしようがないでしょ。だから、完全に民営化してしまえば、どこも引き受けないような子どもが出てきますね。

松田●竹内さんのは、ひとつのシミュレーションなんですね。ある種、アナロジーの論理だと思うんです。社会主義と配給制公教育を、ちょっとアナロジカルにとらえて、それを資本主義化しようと。社会主義と資本主義というキーワードで、ひとつのストーリーを書いたという意味で香山健一の自由化論同様、記憶に値すると思いますね。

単位制高校・総合学科は新しい試みではない

由紀●単位制高校とか、その他、学科の乗り入れだとか、いろんなことをやっているみたいですけれども、それはどうなんでしょうね。

佐藤●同じことでしょ? 要するに単位制高校のようなものを持ってくるなら、地盤を変えていかないとどうにもできないということなんです。

　ところが今の状態では学校側に、とにかく生徒であることだけで、内部にいても外部にいても指導監督することを強制しているわけですから、それが改まらないとダメですね。つまり大学のようなシステムにならないとひじょうに迷惑だということなんです。

小浜●単発的に、ここをちょっといじってみようという感じで出てくるから矛盾してしまうんでしょうね。

佐々木●単位制高校を、ぼくはいくつか見てきたんですけれども、一年生の中退が多いですよね。生活指導なんかしなくて、放っておくと単位が取れなくなるんです。その中退率と定時制の中退率はほぼ同じだという感じですね。

　それから総合学科は、文部省が職業科と

普通科の間の、両方を跨ぐものと言ってますが、何も新しいものではなく、ずーっと前からあるものです。専門学校とか、資格とかを調べていると、ものすごく多様に民間にあるわけです。総合学科は、それを公立でやってみたというだけの話ですね。

小浜●ただレベルの低い普通高校のように、たちに教えなければならないという要素は教える側が必死に、わかりもしない子ども若干は少なくてすむということはある。

佐々木●単位制高校では逆行が始まっていて、放っておくと、あまりにたくさんやめるので、クラスを作ろうとか、教師が生徒に声をかけようとか言っていますね。そうすると、だんだん昔の定時制に戻っていくんですね(笑)。



小浜逸郎氏

総合学科で、いちばん教師がたいへんなのは、どこの学校に行っても、教科をたくさん持たされることなんです。選択が増えますからね。普通高校だと二教科持たされる程度ですが、総合学科だと五教科も六教科も持たされるんです。時間数も多かったりする。

一週間に五教科の進度を、もし真面目に予習しようと思うとたいへんなんです。えらいハードワークになる。倍以上に教師の人数を増やすならばいいんですが。

教育の多様化と現実の単純化

小浜●文部省が、そこまでちゃんとフォローして、そういうことを言うならいいけれども、そういうところはケチっておいて、先生に汗をかいてもらうという発想でしょ。それがひじょうに気に入らないですね。

佐々木●金をかけて、そのあとフォローをすればいいのかというと、ちょっと違うと思うんです。事態はもっと難しいんじゃないかという感じがしきりにする。

教育で多様化と言って、ひじょうに複雑にしているのが、現実の社会では中級労働者の単純化がどんどん進んでいるんですね。そんな矛盾があるんです。だから、学校の多様化路線だとか、新しい施策とか、教育の制度改革が、全部宙に浮くんじゃないかなという感じがしてしようがないんです。

河原●それはたんなるカルチャー・センター化でしょ? 学校に魅力がないから、生徒は中退するんだというバカげた批判に応えるためのジェスチャーなんです。

由紀●現実に、会社でそういう資格をもし要求するとすると、カルチャー・センターとも言っていられませんね。

佐々木●ええ、会社は会社で資格を要求するんです。なぜかというと、資格を持っていても仕事ができん奴はできないというのは、ちゃんと知ってるからですね。だけど、努力を見る指標にはなっているんです。

小浜●しかし、そういうごまかしみたいなかたちで、上から下まで適当にやって、そこそこ高い教育水準を保ってきたこれまでの日本の教育というのは、定時制高校も含

めて、全部いちおうフォローしてきたわけですよね。それはそれですごいことだなという気もするんですけれどもね。

佐藤●奇跡ですね。

小浜●しかし、「なんなんだ、これは」という感じもしますよね。そんなに過保護みたいな、面倒見がよすぎるみたいなことは。

佐々木●これからは、生産が衰えるんじゃないですか。これからですよ、どんどん衰えていきますよ。

いわゆる能力というものを発揮する場面がなくなってくるため、意欲をなくした若者たちが出てくるんじゃないかな。

由紀●でも、ひじょうに高い能力を持ってる人も出てきますから、べつだん社会としては困らないような気もしますけれどもね。

小浜●そういう知的情報の階層みたいなものがはっきりしてどんどん進むというか。

松田●ただ、エリート形成に関しては、うまくいっていないという意識が臨教審にも、竹内さんにも、西尾幹二さんにもあるんですね。

由紀●ほんとうに能力のある人間なんて、ほんのひと握りでいいようにだんだんなってきますでしょうね。それは止めようがないし、いいも悪いもないんじゃないかという気がしますけれどもね、そのこと自体は。けれども、そうすると学校というのは、いよいよ無意味な場所になってくるのは避けようがないですね。

松田●にもかかわらずハードな締めつけをさらにやる。解体していけばいくだけ、それをハードに締めつけようとする力も、また働くんですね。

由紀●そうですね。資格を取れ、取れと言うわけですね。その資格自体が無意味なのに。

松田●みんなで無意味だと言ってしまえば、それでいいんですけれどもね。

佐藤●ぼくは、結局、一部のエリートをめざす以外は、一日一日を楽に楽しく過ごせたらいいということになると思うんです。だから、極論すれば学校はレジャーランドになっていく。レジャーランドになると、そこで仲よくするだけではなくてあらゆることが、たとえば賭博とか暴力とか、そういうことも出てきます。すでに、だいたい底辺校で出ているわけですからね。

そうなった場合に、はたして日本人の感覚として、これらも学校と言っていいかどうかというジレンマが出てくるでしょうね。

エロス的関係か自動車教習所型か

松田●マスコミ記者も構造的に見れば、そういう未来図が見えてくるにもかかわらず、見ようとしないんですね。不安ということもありますし、それに対して、どういう処方箋を出せばいいかもぜんぜんわからないから、ただただ目先の教師を叩くということに、どうしてもなりますよね。

佐藤●それで教師は疲れてしまう。日本の未来を背負おうなんていう使命感を持っている教師は、最近はそんなにいないですからね。たまにいると、熱血型になりすぎて悪いほうにいってしまうわけでしょ。

もし最後の砦の役割を学校に求めるならば、それに見合ったものを用意しなければいけないんです。それがなくなってるというのが実感ですね。

小浜●それは、おそらく近代化後発国の宿命として、教育というテーマが、上からの

強制として、ボーンと与えられたということの後遺症が出ているという感じがするんです。

ぼくらの中に、自分の子どもというのは自分で面倒を見て、自分で教育していくんだという意識が、そんなに育っていない部分があるんですよ。だけど、ここにきて、そういうものを育てないとどうしようもないというところにきているんじゃないかな。

あとは社会のルールをどこで学ばせるかという話になりますね。それを私教育に解体していった場合に、それを保障してくれる機関がないじゃないかという危機意識がけっこうあると思うんです。その問題を考えた場合には、最低限の公教育の土台みたいなものは確保しておいたほうがいいだろうなという感じがしますね。

松田●佐々木さんの理念の中には、子どもたちはできるだけ早く働いたほうがいいというのがあるんですか。

佐々木●働いたほうがいいと言っても、働く必要がないような社会に今はなってるから、そこらへんが難しいんですけれどもね。実際には、子どもたちは実社会に出たがっていますね。

松田●六・三・三制なんて、そんなに長く教育プロセスの中に閉じ込められる必然性自体が何もないわけですからね、今は。

佐藤●結局だから、収容所の役割だと、ぼくは割り切ろうとしているわけ。もっとも収容所でも、いい収容所と悪い収容所がある。学校がどんなにダメになっても教師と生徒がいるかぎりエロス的関係は最後まで残ると思うんです。簡単に言えば肌の触れ合いですね。それの残るような収容所はいいと、ぼくは思ってるわけ。

小浜●保育所と収容所の違いみたいなものですね。

佐藤●まあ、そうですね。こういうふうな時代が進めば進むほど、学校、とくに高校の役割は今の若者をひと所に置くことに求められるでしょう。しかもただブラブラしているのではなくて、何か意味のあるものをやらせているんだという幻想を持たせながら置く、そういう役割だと思うんです。

肌のふれあいと言いましたけれども、小学校の段階と中学校の段階、高校の段階では質が違うんです。ですからそこの違いをこちらがいかに見きわめて、適切なエロス的関係に持っていくかということが大切になるでしょうね。

由紀●ただ、それもなかなか難しい。というのは、大部分の生徒とは、そういうエロス的な関係を結べないだろうということなんです。

それから今の若い人は、あるいは私ぐらいの年代まで含めてかもしれないけれども、友達同士の付き合い以外の付き合い方、肉親とか、ひじょうに親しい人以外の人とある程度の距離を持って付き合うということがとてもヘタになっています。だから、学校なんかで教員と付き合っていく方法みたいなものを学んでほしいんだがなと思いますけれどもね。そうじゃなくて、同じような感覚とか、同じような体験を共有した人間としか話が通じなくなるというのは、やはりまずいですよね。

じゃ、どうしたらいいかと言われると、方法は考えつかないんですけれども、だから、エロス的なやつだけではまずいと思いますよ、たぶん。

河原●ぼくは、もう学校には教師と生徒と

の魂のふれあいというようなものはなくしていくほうがいいと思います。偶発的と言うか、付録的にそういうものが発生しても、それは、まあ、いいですけれども、そういうものに頼るのではなしに、教師は授業をする、知識の伝達ということで割り切ってしまうと。

由紀●私も、それには賛成です。

河原●運動会とか、文化祭とか、ああいうものをなくしていく、遠足も修学旅行もなくしていく。もちろん部活動なんかは社会教育にゆだねてしまう。

小浜●ぼくは、それは段階的に、両方とも納得できるところがあるんです。

　エロス的か、乾いた自動車教習所かということで言うならば、おそらく佐藤さんが描かれているイメージというのはより小学校的であり、河原さんの描いているのはより高校的というか、成長した人間に当てはまるような在り方だという気がするんです。

松田●そうすると、中学生の年代の……。

小浜●そのへんがいちばん難しいですね。

河原●中学生だと思春期・反抗期に入ってきますね。そういうところで付き合っていくと、変にドロドロしたものになっていきがちなんです。愛憎と言うんですか、裏返しのね。

　だから、生徒と教師とぶつかって取っ組み合いになるというのは、どうもそういう場面が多い感じなんです。お前のことを思ってするんだとかですね。

由紀●それを四十何人の人間にいちいちやったら身がもちませんね、絶対に（笑）。

小浜●その意味では、プロ教師の会が言っていることは一部当たっているところがあるんです。ああいうふうに意識的に距離をとった対応をするというのはね。

由紀●私も、制度論としては、そうだと思います。エロス的なことは、偶発的なものだと河原さんも言われましたけれども、偶発的にしか出ないでしょうから、人間同士のそういうものを制度化しようとするのはじつにバカげた発想ですからね。

改革のイメージは公教育機能の縮小

松田●そこで、小浜さんの改革案の叩き台の話に入りましょうか。

小浜●先ほど来からの話で、公共部門が意識的にやろうとすることというのは、みんな裏目に出るし、また彼らの意識性というものはひじょうに混乱していて統一性がない。にもかかわらず、施設や人事などのハードな部分はあいかわらず公共部門が握っているという現実があるわけです。

　ぼくは基本的には、そういう公共部門の理念的無力性とハードな部分での頑迷さとの矛盾みたいなものを内外にいっそう印象づけるような動きに加担していったらいいんじゃないかという感じがするんです。

　それだけ言ってしまうと、いかにも自由無軌道に、どんどん突っ走れと言っているかのように誤解されてしまうんですが、それは学校をなくせということではなくて、公教育がいくら意識的にやっても裏目に出てしまう、そういう無駄な努力はやらないかたちで考えるとすると、どうしても一定程度、公教育機能そのものを縮小していくことしかないんじゃないかと思うんです。

　今の体制では、先生が手当てももらえないのに、朝から夜中まで生活指導のために突っ走って、疲労して、精神が荒（すさ）んでいく

という悲劇的なことになりがちです。子どもが減っても先生を減らさずに、機能のほうを減らせば、そういう不毛な事態を避けられるんではないか。それは理念をどうこう言っているレベルではなくて、ハードの部分をいじるということで、ある程度、ぼくは可能なんだという感じがするんです。

　いちばん単純な話、ぼくは塾をやっていて、一人で七人、見ていたんです。多くても十人ぐらいですね。これは楽ですね、やはり。時間はせいぜい二時間ぐらいで、しかもお金を払って、学力の増進だけを目的にして来る。指導を受ける側の目的意識がはっきりしている、なんとなく押し込められたというのとはだいぶ違うんですね。



佐々木賢氏

　自動車教習所に近いですね、塾は。しかも徳育などと、偉そうなことをあまり言わない。そういう方向に今の公教育を近づけていくというのが、ぼくが漠然と描いているイメージなんです。

松田●ぼくはみなさんの本を読ませていただいて、共通項として、学校こそ大事だという神話を、たかが学校だという方向へ変えていくことはプラスだろう、ただの学校にするというのがいいんだと、同じことを意味されていると思うんです。

由紀●おそらく制度は、自動車教習所のように役割を限定したほうが、かえってエロス的な交流ができる、人間的な交わりというか、そういうものが起きやすいでしょうね。そう思いますから、限定をつけていくのはいいんですが、最大の問題は学校の教えているものが普遍的な教養なるものですから、ちょっとこれが面倒なんですよね。

　吉本隆明さんが1＋1＝2という意味合いのことは、学校以外ではちょっと学べなかったかなと言っていますけれども、そうでしょうねえ。

　だから、限定するということで言えば、自動車教習所で言えば、ほんとうに勉強したいと思っている人間が来ればいい、その人に教えましょうということであれば、買手と売手の欲求がピタッと合いますけれど。

小浜●自動車教習所は通うも通わないも自由ですね。でも、今言っているのは公教育の話ですから、そのとおりにはなかなかいかないでしょうね。ある程度強制の部分は残さざるを得ない。

由紀●残さざるを得ないでしょうね。放っておいて1＋1＝2の意味合いのことを学ぶかどうか、わかりませんからね。

余剰時間の受け皿をどうするのか

小浜●これは、たんに縮小すればいいという話ではなくて、縮小によって生ずる一人ひとりの生存時間のあまった部分を社会の他の機関がどのように受け皿として、あるいはゲームの場として用意できているかという、それとワンセットで考えなければ、あまり意味がないということは言えるんですよね。

松田●それは、消費社会と言われている、この現代の段階が、潜在的というか、可能的にと言うか、すでに準備しているものだということですね。
由紀●お金を出せば、あらゆるものが手に入りますよね。でも、当然お金がなければダメだから、そこで差が出てしまうでしょう、また。
松田●実質的に、余剰時間を増やしていくことは、制度的にではないにしても、客観的には複線化型の方向へ行くということですね。
小浜●そうでしょうね、客観的にはね。民間教育と公教育と両方合わせて言ってみた場合はそうだと思います。ただ、政府自体は、小さな政府にだんだんなっていくわけですからね。
由紀●それから階層化もたぶん進むだろうと思いますね。
小浜●そうですね。だから、そこは全肯定はしないまでも、しようがないんじゃないの、という感じですね(笑)。
今、定時制高校なんかが部分的に果たしている機能が民間の中にあって、あそこに行ってみると、こういう人間交流が得られるよ、みたいなものとして用意されていればいいわけでしょ?
佐々木●ぼくが言わんとするところは、そういう機関を制度として設けていくよりも、早く世の中に出てしまったほうがいいんじゃないかと思うんです。
ただ、すぐに「働け」とは、よう言わんですけどね、ぼくはね。
小浜●そうですよね。お前は学校に行く能力がないんだから働くんだというかたちでの決めつけられ方は、今の子どもは嫌がると思うんです。
河原●その意識の変化は、いつごろから出てきたんでしょうね。ぼくが教師になった昭和三十年ころは、高校に進学するのは、それだけの資格、能力的に資格がある者だけという意識が、教師にも親にも、本人にもありましたね。だから、高校は、勉強させてもらえるところなんだと。それがいつの間にか行かなければいけないところになったんですね。
小浜●九割を越えたころから、みんな、行かないと人並みではないという感じですからね。
河原●その意識が正しいというのか、昔と比べて進んだものなのか、良くなったものなのか、それとも、ひとつの歪みなのかですね。
小浜●歪みではあると思いますけれども、元へ戻そうとしても、ぼくは不可能だと思うんです、それは。
河原●制度的には戻せないと思うんです。だけど、個々の子どもたち、生徒たちが、しだいに学校なんてつまらんと……。
小浜●思うようになればいいんですね。
河原●なんで、勉強が嫌いな子らを、高校の生徒として抱きかかえなければならないのかなあという疑問は出てきますね。
小浜●幸か不幸か、それが戦後教育なんですよね。
河原●卒業して専門学校に行った生徒が一クラスの中には必ずいるんですが、「先生、あんなん、学校ちゃうで」と言うんです。やはりイメージが違うんですね。
由紀●まわりが認めないし、本人も認めないんですよ。やっぱり、学校へは来たいんですよ、おそらく定時制の人たちも。来た

いのか、来たくないのか、どちらかを選べと言われれば来たいんですよ。
小浜●明日から来なくていいよ、と言われると、やっぱりイヤなんですね。
河原●勉強はしたくないんです。だけど学校には来たいんです。だから、勉強をしない学校がいちばんいいわけですね（笑）。
由紀●そうですね。学校に来るなと言うと困るし、「うちの学校は勉強をしないから、お前ら、好きなときだけ、ここで時間を潰せよ」と、そういう学校だからいいだろう？というと、またダメなんじゃないかという気がしますね。
佐々木●イヤでしょうね。だから、勉強をやってるようなフリをして、その場を過ごさせる……、やっぱり収容所だな（笑）。
小浜●教育収容所であることはしようがないでしょう。

大衆の意識は「モバレイ」を許せるか？

佐々木●もし学校の制度改革に力を入れるんだったら、これは言ってもしようがないことなんだけれども、理念としてブラブラできる期間を公的に認めるような雰囲気をつくれば、それでいいと、制度改革なんていっさい手をつけないでおいてですね。
　だから、それを、ぼくは松田さんとの共著『教育という謎』という本の中で「モバレイ」と言ったんですけれどもね。モラトリアムとバカンスとレイバーなんです。働くのをやらせる。遊ぶのもやらせる。で、モラトリアムの期間を全体的に認めるような雰囲気をつくったほうがよろしい。大人が、そういう具合に意識を変えるほうがいい。だから、海外旅行に行こうが、何しようがいいんです。
　雰囲気づくりというのは、われわれの意識の問題なんです。親の意識の問題なんですね。そういう意識ができてきて、学校があろうが、生徒が変わろうが変わるまいが、そういう意識を持った親や教師が出てきたらいい。たとえばバイトをしたいというとき、「今はやめなさい、大事なときなんだから。学校の単位を取りなさい」なんてことを言わなくなってくるんです。
小浜●佐々木さんの話をお聞きしていて、いいイメージだけれども、たしかに言ってもしようがないみたいなところもありますね。大衆の意識が、そういうことを許すことにならないと思うんです。
河原●それは社会のほうが不安がると思うんです。大学生が遊んでいても、たいしたことはない。犯罪に走ることはない。だけど、高校に行けないような子が街に溢れたら、これは不安ですね。たむろしてるだけで不安だということがありますね。
佐藤●校外指導のとき、昼間ずっと街を回ると、予想以上の若者が、若者というのは高校以下ですが、かなりブラブラしてますよ。しかし彼らが学校から完全にふっ切れたいのかというとどうもそう思えない。
　最近、生徒のなかに下校拒否が出てきていて、困ったことがあるんです。登校拒否の逆なんですね。勉強はぜんぜんしたくない、登校しても授業なんかろくに聞かない。それでいて、放課後になると帰りたくないというのがいるんです。いろいろ考えてみると、彼らは自分の存在する根がほしいんです。所属する場がなくなると自分はどうしようもなくなるんだという恐怖感覚があるんです。しかもこの感覚はかなり共通し

ている。

だからそういう意味では、とにかく勉強したくても、したくなくても、ひとつの場をつくっておくのは有効なんだとぼくは思っているんです。ただ、教室に置く時間を減らしてやらないと、彼らもつらいしこっちもつらいんですね。

システムとしては縮小する、そして社会に出ても多様な生き方を認めるというように、自然とやっていけば、かなり生息できるなということを考えているんです。

松田●世間では各学校単位での縮小はできないと思ってるけど。

河原●こんどの指導要領の改訂で、弾力的運用と言っていますが、小手先だけの縮小ですからね。中学校の場合は、親の抵抗が強いですね。親の期待は託児所ですからね、学校は。子どもが早く帰って来たら文句が出ますよ。

佐々木●それはそうですね。定時制でもそうです。試験期間中というのは登校しなくてもよろしいと言っていると、「なんでですか？」なんて電話がかかってくるんです、親から。

松田●当面は、誰がうるさいのかをはっきりさせることも大事ですよね。今までは、文部省がうるさいからと、全部それだったわけだから。

河原●文部省が言う週五日制というのは教師の労働時間の短縮という関係で、早くやりたかったんでしょ。そのためには授業時間を週四時間は減らさなければならない。そこで各教科の時間を少しずつ削って「ゆとり」の時間をつくりだした。

ところが、親のほうの反対が強いもので、十年間「ゆとり」などというムダなことをやって、ようやく月に一回になった。あのときの議論で不思議だったのは、土曜日が休みになると非行が増えるということがあったんですが、それなら夏休みは非行だらけになりますよね。

佐々木●佐藤さんが言ったみたいに、いわゆる余剰時間ができると、「小人閑居して……」ではないんだけれども、治安上よくないという考えがあるんです。これはあまり根拠がないと思いますが。全体の雰囲気が変わったら、そうじゃないんですからね。

で、全体の雰囲気というのは、日本の労働者の労働時間の問題だろうと思うんです。今、年間二千時間を若干切ったと言って、ワアワア騒いでいるけれども、ドイツあたりだと千五百時間に移行するとか、千四百時間だってあり得るということで、猛烈に違うわけでしょ。

小浜●だから、生産過程にかかわっている人間と、消費しかしていない人間との極端なギャップが問題なんですね。少し生産過程にかかわっている人が、生産時間を減らすことができて、消費にかかわるようになれば、佐々木さんのおっしゃるとおりですよね。みんながそうなれば、それが当たり前なんですからね。

佐々木●ドイツが午前中の授業でやっていけるのは、社会全体が労働時間も含めてそのことを許容しているわけでしょ。だからそちらの方向に進まなければいけないということですね。

小浜●感情の問題でも、親父が朝から晩まで汗水流して働いてきているのに、息子はブラブラしやがってと、そういう問題があるわけじゃないですか（笑）。

それが、親父のほうがそんなに汗水垂ら

さないですむようになれば、多少は見方も和らいできますよね。ああ、ブラブラするというのはいいものだなあと（笑）。

佐々木●そうですね（笑）。若者たちの居心地の悪さというのは、みんなが働いていて、自分たちだけ暇があってという状況だと、圧迫感を持つわけですね。でも、みんなが時間のゆとりがあり、遊んでいるんだったら、そんなにやたらに非行化しないんじゃないかと思うんですけどね。

教師の泥沼の闘いはまだまだ続く！

由紀●日本の犯罪発生率がこんなに低いのは、底辺校の先生たちが頑張って問題児を学校に止めておいてもらっているおかげですと、警察の人が語っていたという話があります。

　私も、ここのすべての先生方がおっしゃるように、暇な時間を与えても、そんなに犯罪とかに走る子が増えるとは思いませんけれど、そのへんに関する恐怖感みたいなものは、親や社会の側にありますよね。ただ、アメリカみたいにピストルを持ってくるとか、そこまではなかなか日本社会ではいかないとは思うんだけれども、でも、少しは増えますよね。



由紀草一氏

佐藤●それは増えます。その増えることは覚悟しなければいけないですね。ただ、問題は、その増えたことをもって、学校は何をしてるかと、逆流する恐れがあるんです。そこの意識を変えなければいけない。けど実際はまだまだ、学校に期待するというかたちでの押しつけをするでしょうね。

松田●ということは、教師の永続的な泥沼の闘いが、まだまだ続くということですね。

佐藤●当分はね。

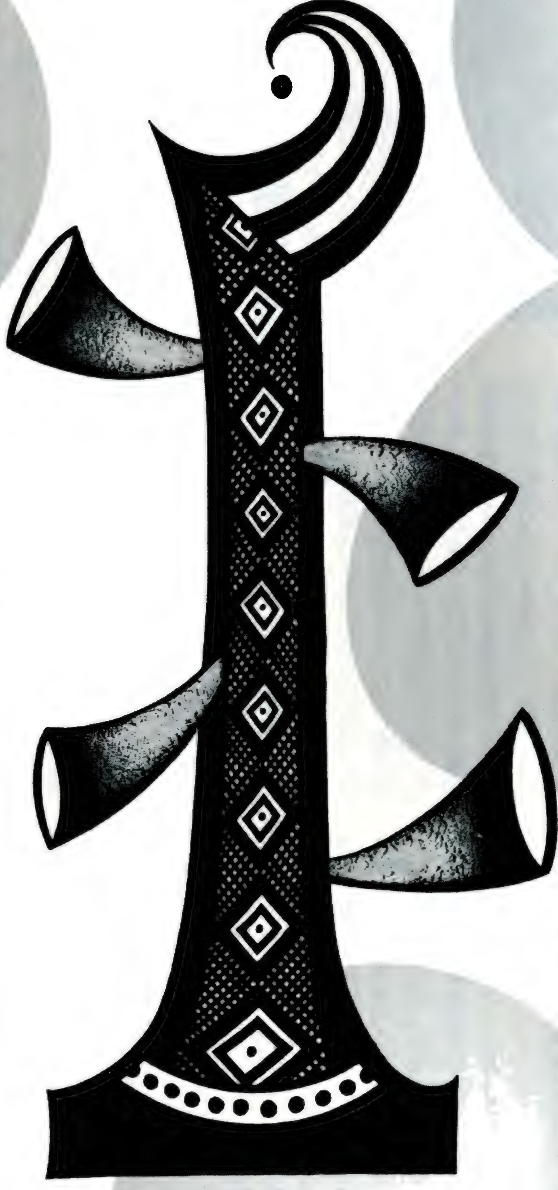
編集部●これからどうやっても、まだ教師は泥沼の闘いをしなければいけないみたいなところがあるんだけれども、やはり制度改革ですべて片づくという問題ではないことは、ここで確認されたと思うんです。

　親の意識、親の問題でもあるし、社会の問題だというようなかたち。でないと常に、管理教育が今の子どもたちの荒れを生んだとか、受験戦争の激化がこうなったというかたちで、因果関係はぜんぜん説明されていないにもかかわらず、それで学校を叩いてしまっているという情況がある。それは怠慢な認識の仕方だと、まさに私たち自身が意識を変えていくことにしか、学校改革の芽はないだろうということですね。

　ぼくたち自身が変わっていかなければいけないし、そういう幻想をつくり出していくものに対しては、自分らが、あえてつくり出すことに加担しないんだというところまでもっていくことによってしか方向性は見えない、と。

　でも、「可能か」と言ったら、「不可能」ということで結論を出すわけにいかないんであって、「可能だ、でも、道は遠い」という感じではないでしょうか。

教育構造改革の基本提言



誰を最初に救うべきか？　それは「子ども」でも「日本」でもない。フツーの教師こそが他ならぬその主体だ。
そのはじまりの一歩として新しい「学校と教育」ヴィジョンを提示してみよう——

小浜逸郎（評論家）

現在、日本の教育を改革しようという声はあちこちで起こっているが、その根本の動機を分析してゆくと、互いに矛盾する二つの要求が曖昧なかたちで結合している状態が見えてくる。一つは、知育偏重や競争を排して豊かな人間性を伸ばせるような教育を実現させようというものであり、もう一つは、点数主義やタテ並びの序列主義の中に子どもを囲い込むのではなく、より広い能力を育てるような教育を実現させようというものである。

この二つはほとんど同じことを言っているように見えるが、じつはそれぞれの要求の出所とその要求によって満たそうと思っている目的とがまったく異なっている。前者は、いわば日本国憲法を絶対平和論的に解釈する場合と同じように、社会的現実とは切り離された教育の純粋理念を前提とするところから来ている。いわば「このままでは子どもがダメになる!」という立場である。また、後者は、国際化、多様化などの日本の新しい社会情勢に教育を適応させなければならないという切迫感が前提になっており、産業社会を代表するオピニオンリーダーたちを中心として出てくる声である。いわば「このままでは日本がダメになる!」という立場である。

互いに矛盾する改革の根本動機

イデオロギーとして言うなら、一方は能力差別否定の平等主義・理想主義であり、他方は、社会や国家にとって、時代に見合った、より効果的な能力の開発・再編方法を考えるという、一種の能力主義・実利主義である。また心理として言うなら、一方は、敗者のルサンチマンに根ざしており、他方は、競争を肯定する闘争本能に根ざしている。

その昔、知識層にとって、産業主義が学問の自由を侵す悪の権化のように考えられていた頃、この両者は鮮明な対立的立場を示すのが当然であった。なぜならば、そこには戦後民主主義が打ち立てた大学の自治とか学問の自由とかいった理念がまだ積極的かつ牧歌的に信じられていたからである。大学人などの反体制的知識層は、その理念に寄りかかってただ現実を批判していればよかった。かつては、国家の打ち出す「期待される人間像」とか「産学協同路線」とかは、これらの人びとにとって、恰好の攻撃材料だったのである。

現在では、反体制的な論理として学問の自由などということを臆面もなく振りまわす大学人や知識人はまず見当たらないし(家永三郎ぐらいか)、そんな発言は一般社会のほうでまともに相手にしてくれない。豊かな社会が実現して現状に対する肯定感情が大衆の中に根を下ろすとともに、「自由の砦」に引きこもる大学人によって授けられた教育なるものが、日進月歩の実業社会にとってはほとんどなんの役にも立たないものであることが、いたるところで意識されるようになってしまったからである。

今日、最先端の企業では新卒者を採用するにあたって、彼らがどこの大学を出たかには関心をもつだろうが、その大学が彼らにどんな教育をほどこしてくれたかなどにはどんな期待も持っていないと言える。さすがに大学人のほうでも、「俺たちは社会から与えられた権威に甘えて自由に遊んでいるうちに、社会から取り残されてしまったのではないか」と焦りはじめ、現在ようやくさまざまな苦しまぎれの改革をもくろんでいる始末である。

スケープゴートを産み出す教育的情念

このように、反体制的な学問擁護論の枠内でのヒューマンな教育論議は元気をなくしてしまったにもかかわらず、「学力だけに偏らず、より普遍的な人間性をめざして」というようなかたちでの〈教育的情念〉だけは相変わらず脈々と生き残り、政治的イデオロギーを超えて、人びとの教育に対する基底感情を形成していると言ってよい。じつを言えばこうした掛け声は、とくに戦後に始まったというわけでもなく、すでに明治近代公教育の元祖ともいうべき森有礼の時代からいくどとなく出没した伝統的な言説のパターンなのである。そして産業サイドに立つ人たちもまた、ひとたび教育的発言をするとなると、大部分がなぜかこの伝統的な情念のパターンに染まってしまうのである。

情念は、自己を合理化するためにスケープゴートの産出を必要とする。現在、右は産業界から左は頑迷な平等主義者までが、同一の教育的情念のもとに結託して産出しているのが、「偏差値」とか「管理教育」とか「サラリーマン化した教師」とかいうつくられたスケープゴートである。しかし、これらは本当は、彼らがイメージとして抱いているほど悪者視するに値しない。「偏差値」は普通教育において普通の生徒の学力を診断するのに今のところもっとも客観性をもつ尺度であり、ある部分領域の中では否定しえない存在理由をもつ。また、「管理教育」ということばで一定の指導理念に基づく教育体制のようなものを考えているのだとしたら、そういうものはどこにも存在しない。それはむしろ子どもの変化にうまく対応できなかった学校組織が示した場当たり的な反応の集積にほかならなかったからである。また、「サラリーマン化した教師」というイメージは、教師が聖職者でなければならぬという、明治以来のなんとも抑圧的な思い込みからきている。

これらのスケープゴートは、どのような「制度改革」や「通達」や「指導」や「思想的対応」の経路をたどるにせよ、最後にはその放逐のための処方箋を、「現場の先生にうんと頑張ってもらわなくちゃね」というところに求めるしかないのであった。しかし、放逐されるべき悪者がでっちあげられたスケープゴートであることがはっきりしている以上、でっちあげに基づく処方箋をそのまま受け取るわけにはいかない。

Illustration＝かわぐちせいこ



改革の基本のモチーフをどこに置くのか？

いったい日本の教育の何が変わらなければならないのだろうか。いや、そのように問うよりも、次のように問いを立てたほうがよい。日本の教育を変えなくてはならないと考えるときのいちばん基本のモチーフをどこに置くのがもっとも合理的か。

私たちは、平等論的理想主義者の「このままでは子どもがダメになる！」の立場に立って改革を考えることも、産業界や国家などの「このままでは日本がダメになる！」の立場にのっとって改革を考えることもしたくない。私たちは、普通の教師が普通の生徒に普通の知識や市民的ルールを普通にコミュニケートするにはどうするのがよいか、というクールな観点をあくまでも発想の原点に据えておきたいと思う。そうすることがスムースに運ばないかぎりで、「現在の教育」が問題となるのだし、そのかぎりで、改革の方向をいろいろと模索することにも意味があるのだと思う。それ以上の大袈裟なヴィジョンをふりまわして、こうすればこんなによくなるだの、こうしないとたいへんなことになるだのと騒ぎ立てても、事実上なんの効果も生まないか、生んだとしても一つの局面での効果が他の局面での逆効果となって現れたりすることは目に見えている。ミもフタもない言い方で申し訳ないが、ことに私たちの社会のように複雑なシステムを備えた成熟した市民社会では、もはや教育という世界は、思想的にも実践的にも個人の過剰な夢を託すに値しない世界なのである。

さてそのように見てきたとき、現在の日本の教育でもっとも矛盾が集中しているのは中等公教育である。それはしかし偏差値体制でも教師の資質問題でもない。近代公教育の目的の一つであった個々人の豊かな生活という状態が半ば達成されてしまったにもかかわらず、学力や意志力において適応も

できない子どもたちが義務教育的強制の中にいつまでも置かれており、しかもその膨大な若年失業者たちを統制するために、教師に過大な責任と負担が押しつけられているという事実である。さらにことを厄介にしているのは、この義務教育的強制が、専制権力の抑圧や奴隷的拘束によってなされたのではなく、社会制度に自発的に参加・順応してゆく親子の意志によって支えられているということである。ここには、ゆきすぎた平等志向ががえって何割かの子どもに抑圧感や無気力感をもたらしているという戦後民主主義の矛盾が現れているが、しかし今さらこれを覆すことはできない。とすれば、この現実をふまえたうえで、できることを考えてゆくほかはない。

新しい「学校と教育」ヴィジョン

私は『症状としての学校言説』（宝島社）という本の結論部分で、この問題を中心とした「新しい『学校と教育』ヴィジョン」なるものを、試論のかたちで示しておいた。ここでそのすべてを紹介することはできないが、重要な点だけをくりかえしておきたい。

①（基本姿勢）教師が並みはずれた努力や犠牲的精神を傾注しなくても、普通の勤務の範囲内できちんと管理の責任を果たすことができるような学校システムを構想する。

②（基本施策）教師の数を減らさずに、公的な義務教育機能の縮小をはかる。

これは教育改革というよりは、官製のポジティヴな改革が少しもよい結果をもたらさなかったこれまでの事実をふまえ、国はやたら制度いじりに手を出すことをあきらめて、むしろ民間に任せよという牽制の意味も込めている。そこで具体的な方法として――

③（具体的方法）義務教育年限の縮小（たとえば現在の中学二年生までを八年制の初期スクールとする）か、毎日の通学時間の縮小（たとえば午前中のみ授業）。

しかし、この方法は、実際には、教育意識の高い（悪くいえば教育幻想に拘束されすぎている）日本の親たちの賛同を得ることが難しい。したがってその教育意識を満たすための民間機関の充実がともなっていなければならない。そこでたとえば――

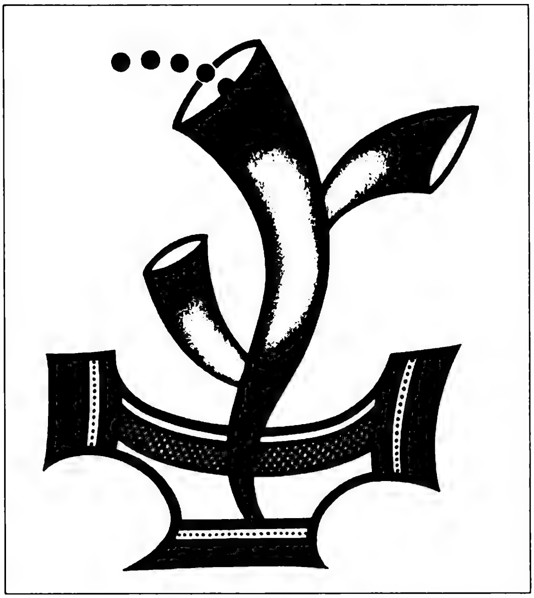
④（補助的施策）すべての高校経営を国から完全に自立化させ、民間教育機関の充実を積極的にはかる。もちろん教育内容も、各学校の自由。

ただし、予算は国から援助してもらう。国は金だけ出して経営や教育内容にいっさい介入しない。

また、教育意識を満たすためばかりではなく、ある面では身の程をわきまえない教育意識を冷ますための多様な民間機関も必要である。それは、学力が伸びないのに無理な努力を

強いられるかたちで一様に高等教育をめざすかわりに、将来の展望や現在の生き方において、ある程度満足できる代替選択のさまざまな道を、社会がきちんと用意しておくという意味を持っている。エリートはエリート的進路を。そうでない方は、早めに諦めて、そうでない方にふさわしい選択を。そこでたとえば——

⑤（受け皿的機関の振興）企業が魅力的なサービスに満ちた自前の実践的教育機関をどんどん作る。



民間の自然発生的な改革志向の芽を

日本の教育が曲がり角に来ていることはたしかだ。だが多くの人びとは、教育の改革というと、まず国家的規模で一律に困った事態があるはずであり、それを共通に認識して、これまた国家的規模でその困った事態を上から変えていくというふうにしか思いつかない。しかし、今までやってきたことから手を引くということも充分に改革の名に値するのだ。

また、ある見地から困った事態と見えるものが、別の見地からはそうではないということがありうる。たとえば、私立中学への人の流れなどは、公教育的な立場からはおもしろくない事態かもしれないし、また現在の私立中学への期待が、必ずしも私立教育の優越性を正しく反映しているわけではない。しかし少なくとも、配給制度的な戦後公教育（竹内靖雄『正義と嫉妬の経済学』講談社）の質の低さに飽き足りなくなった層が大量に発生し、またそこから抜け出す意欲を満たすだけの経済的な実力をもった人たちが多数存在しているということは、結果として現在の教育の問題を相対化し、事態を流動化させるための大きな可能性を表している。つまりそれは、民間の自然発生的な改革志向なのだ。そういう志向の芽を摘むことなしに正しく生かすことも、立派な改革（思想）と言えるのである。

筆者紹介

♡**夏木智**　なつき・さとる
'55年茨城県生まれ。東京大学理学部数学科卒業。茨城県公立高校教諭。著書に『誰が学校を殺したか』(小社刊)、共著に『学校の現在』(大和書房)がある。

♡**河原巧**　かわはら・たくみ
'34年東京都生まれ。京都市立美術大学彫刻科卒業。大阪市立中学校教諭。著書に『学校はなぜ変わらないか』『学校についての常識とウソ』(以上、小社刊)などがある。

♡**由紀草一**　ゆき・そういち
'54年茨城県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修了。茨城県公立高校教諭。著書に『学校はいかに語られたか』(小社刊)などがある。

♡**佐藤通雅**　さとう・みちまさ
'43年岩手県生まれ。東北大学教育学部卒業。歌人、評論家。著書に『教育の現在』(砂小屋書房)、『学校はどうなるのか』(學藝書林)の他、歌集、児童文学評論など多数。

♡**小浜逸郎**　こはま・いつお
'47年神奈川県生まれ。横浜国立大学工学部卒業。批評家。著書に『学校の現象学のために』『方法としての子ども』(以上、大和書房)、『男はどこにいるのか』(草思社)、『症状としての学校言説』『家族を考える30日』(以上、小社刊)などがある。

♡**滝川一廣**　たきがわ・かずひろ
'47年愛知県生まれ。名古屋市立大学医学部卒業。現在、名古屋市立くすのき学園長。共著に『思春期の精神病理と治療』(岩崎学術出版社)、『家族のフォークロア』(岩波書店)などがある。

♡**赤田圭亮**　あかだ・けいすけ
'53年福島県生まれ。都留文科大学文学部卒業。横浜市立中学校教諭、横浜学校労働者組合執行委員。共著に『現代子ども若者考』(明石書店)がある。

♡**佐々木賢**　ささき・まさる
'33年中国東北地方瀋陽市生まれ。高校教論を経て、現在日本心理センター研究員。著書に『学校を疑う』『怠学の研究』(以上、三一書房)がある。

♡**向井吉人**　むかい・よしひと
'48年三重県生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。公立小学校教諭。著書に『素敵にことば遊び』(學藝書林)がある。

♡**辻創**　つじ・そう
'49年京都府生まれ。現在京都で会員制の鶏料理店「ANDANTE」を自営するかたわら、教育と学校を考える市民運動「脱学校講座」を主宰。著書に『父親主義』(小社刊)などがある。

♡**副島隆彦**　そえじま・たかひこ
'53年福岡県生まれ。早稲田大学法学部卒業。現在、著述業、代々木ゼミナール講師。著書に『欠陥英和辞典の研究』(別冊宝島一〇二号)、共著に『法律学の正体』(小社刊)などがある。

♡**米本和広**　よねもと。かずひろ
'51年島根県生まれ。横浜市立大学卒業。新聞記者を経て、現在フリーのルポライター。著書に『大川隆法の霊言』(小社刊)、共著に『くたばれ税金』(プレジデント社)などがある。

♡**村山和雄**　むらやま・かずお
'62年埼玉県生まれ。日本大学商学部卒業。フリーライター。共著に『官僚のボヤキ』(別冊宝島一八〇号)などがある。

♡**中山治**　なかやま・おさむ
'47年神奈川県生まれ。慶応義塾大学大学院社会学研究科修了。心理学者。著書に『「ぼかし」の心理』(創元社)、『「ゆとり受験」の方法』(小社刊)などがある。

♡**山口宏**　やまぐち・ひろし
'54年生まれ。早稲田大学法学部卒業、同大学大学院法学研究科中退。弁護士(第二東京弁護士会登録)。共著に『法律学の正体』(小社刊)などがある。

♡**大月隆寛**　おおつき・たかひろ
'59年東京都生まれ。早稲田大学法学部卒業。成城大学大学院で民俗学を専攻するも、その惨状に啞然とする。以後、知の遊び人として開き直る。現在、東京外国語大学助手。著書に『厩舎物語』(日本エディタースクール出版部)、『民俗学という不幸』(青弓社)などがある。

♡**古橋健二**　ふるはし・けんじ
'59年東京都生まれ。明治大学政治経済学部卒業。学校警備員などを経て、現在フリーライター。著書に『アイドリアン超人伝説』(小社刊)、共著に『実録!　不動産のウラ』(別冊宝島一七七号)などがある。

♡**松田博公**　まつだ・ひろきみ
'45年兵庫県生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。共同通信社文化部記者。共著に『果てしない教育?』『教育という謎』(以上、北斗出版)がある。

♡**西尾幹二**　にしお・かんじ
'35年東京都生まれ。東京大学文学部独文科、同大学大学院修了。現在、電気通信大学教授、評論家。ニーチェの翻訳をはじめ、『戦略的「鎖国」論』(講談社)、『日本の教育　ドイツの教育』『教育と自由』(以上、新潮選書)など多数の著書がある。

別冊宝島一八三号『「日本の教育」改造案』一九九三年八月二十三日発行
編集長――小川哲生
製作・進行デスク――佐藤文昭
編集局長――石井慎二
発行人――蓮見清一
発行所――株式会社宝島社©
〒一〇二 東京都千代田区麹町5-5-5 電話〈営業部〉03-3234-4621 〈編集部〉03-3234-3688 郵便振替=東京7-170829㈱宝島社
印刷所――東京書籍印刷株式会社 Printed in Japan

同時代の知的フィールドワークマガジン

別冊宝島

月２回（10日、25日頃）発売／定価1010円（税込み）

1 全都市カタログ

都市生活者にとって必要なものをユニークな視点から徹底的に追求した知的シティ・カタログ。

2 新版・道具としての英語

学校英語とは全く異なった視点から、生きた英語世界に読者を案内する〝革命的英語教科書〟。

3 ボディの本

からだを知ることは、自分を知ることだ
からだとの対話をとおして生き方を考える大特集

からだとの対話で自分を知り、自然の環の一部として人間を考える東洋の英知に基づく身体論。

4 おんなの事典

The New Women's Survival Guide Book

自由に生きたいと思っている女たちに贈る、女たちの手によるサバイバル・ガイド！

5 復刻版 女と男

目覚めたつながりをつくるための手引き

性の本質とは？　結婚とは？　役割分担とは？　切実なテーマを新鮮で大胆な問題意識で探る！

6 性格の本

もうひとりの自分に出会うためのマニュアル

自分はどこから来てどこへ行くのか——。性格を手がかりに現代人のアイデンティティを探る。

7 仕事の本

仕事を通しての人間関係の回復を切望する現代人に贈る画期的な仕事論。

8 道具の本

ライフルからノコギリまで、冒険と遊びのための道具を体系的に網羅した道具の百科事典。

9 女のからだ

女のセクシュアリティグラフティ

女のからだに関する具体的な最新の知識を織り込み、女がのびやかに生きるための方法を考える一冊。

10 都市探検入門

未知の都市探検作戦を豊富な体験に基づいて伝授する画期的マニュアル。

11 みんなのライフ&ワークカタログ

99人の仕事の現実を無味乾燥な職業案内でなく、生身の人間が語る本音だけでつづられた仕事論。

12 ライス・ブック

こめと日本文化のかかわり方、こめから見た日本史など、こめ文化論を縦横無尽に展開。

13 マンガ論争

のらくろ３世代からクロス・オーバー世代まで、それぞれの甘くほろ苦い同世代のノスタルジー。

14 道具としての英語・会話編

みんな、英語はしゃべれるんだよ／

英語の核となる850語のベーシック・イングリッシュと、状況創造型学習法による英会話の本。

15 夢の本

インナー・スペース（内世界）への旅

ユングの方法を武器に夢の不思議に挑む。コンプレックスから自分を解放するためのマニュアル。

16 精神世界マップ

精神世界を旅するひとのためのガイド・ブック

人類の歴史とともに古いオカルト＝隠れた知の系譜に、未来を生きる立場から光をあて総展望する。

18 現代思想のキーワード

科学の知から神話・魔術の知の領分まで、文明転換期の知の流儀を理解するための思想用語辞典。

19 文章スタイル・ブック

ちょっとしゃれて書くための初級修辞学講座

流行作家の文体から新聞・雑誌・宣伝コピーまで、ちょっとしゃれて書くための初級修辞学講座。

宝島社　〒102　東京都千代田区麹町5-5-5

別冊宝島

21 街を耕す本

伝統的な生活技術と知恵、季節とともに生きる技術を実践的に、かつ実用的に集めた保存版。

20 センス・パワー！
センス・エリートになるための[感性トレーニングの技術]

感覚の党派性が火花を散らす！　センス・エリートになるための［感性トレーニングの技術］。

23 アウトドア学教程・技術編

安全で快適なアウトドア・ライフを送るためのベーシック・テクニックを豊富なビジュアルで解説。

22 アジア・太平洋［発想する旅のガイド・ブック］

環太平洋に広がる島々と半島に、日本人の源流を求めて、国境を越えた旅、第三の旅に出かけよう！

25 レトリックの本
文章と発想の技術

文章に生命を吹きこめ！　極悪文を恐れるな！　いま、もっとも過激で新しい発想の作文術！

24 道具としての英語・読み方編

英語を読むのが苦手だと思っている人に捧げる、ムダなく苦労なく英語が読める画期的手引書！

27 機械オンチに捧げるパソコン・ブック

機械・電気が苦手でもコンピュータは使えるのだ。文科系の頭脳がコンピュータを裸にする！

26 メディアのつくり方
すぐに役立つ編集・印刷ハンドブック

編集技術から製本まで、ミニメディア作りの全工程を徹底的に説き明かした完全マニュアル！

29 道具としての英語・テキスト編

200を越えるバラエティに富んだ英文で、英語と友達になるための新しい英文スタイルブック。

28 新しい道具の本

ちょっと変わった分類法を使った宝島流道具のスーパーマーケット。道具たちの地図を塗りかえる一冊。

31 珍国語

教える側にはショックを、教えられる側には笑いと共感の渦を巻きおこす国語狂科書。

30 映像メディアのつくり方

映画、ビデオを中心とした映像作品のつくり方が具体的に理解でき、実際に応用できるマニュアル。

33 発想トレーニングの技術
リラックスして発想するための実践的ガイダンス／

しんどい「主体的発想」からの解放をめざして！　リラックスして発想するための実践的ガイダンス。

32 答えられないあなたのための科学読本

身近な不思議の数々から科学技術の最先端まで、科学嫌いの人たちに贈る愉快で納得できる科学質問箱。

35 もっとしなやかに生きるための東洋体育の本
からだに聞いて自分でつくる健康法／

しなやかな心とからだを育てるために。からだに聞いて自分でつくる健康法の具体的レッスン集。

34 みんなの文章教室

書くべき原体験を何ももたない世代に贈る、ちょっと風変わりな文章を書くためのマニュアル集。

37 身近な資本主義を知るための会社の本
スーパーガイド ザ・カイシャ

会社という謎に満ちた不思議世界を旅するための旅行ガイドブック。会社ツアーの案内書！

36 アメリカを読む本

多民族の混沌とした文化、ビジネス、政治、アートなどから、アメリカを深く知るためのエッセイ＆ガイド。

39 朝鮮・韓国を知る本
隣の国が見えてくる／

隣邦でありながら、視野外におかれがちな朝鮮・韓国を、等身大のサイズで理解するための本。

38 タブーと常識に挑戦する日本史読本

歴史は進歩しない。変化するだけだ。タブーと常識に挑戦し、日本史を書きかえる大胆知的な本。

書店にない場合は、窓口販売及び通信販売も行っております。詳細のお問い合わせは☎03-3221-1994まで。

別冊宝島

61 **道具としての英語・言いまわし編** 鮮度100%の生きた英語で、アメリカ英語のキマリ文句をマスター！　英語の表現力を豊かにする！	**60** **収容所社会ソ連に生きる** ナマの声で綴る、いまロシア人であることの悲劇／ ソビエト体制下の普通の人々の生活を通して明らかにされる、いまロシア人であることの悲劇／
63 **ミステリーの友** ミステリーグルメになるためのメニュー105 ミステリー通が贈る、エッセイ形式のミステリー小説徹底ガイド。ミステリーグルメになる本。	**62** **自民党という知恵** 日本的政治力の研究 自民党とはどんな政党なのか？　人事・政策・組織の三つの軸から、日本的保守政治の核心を抉る。
65 **道具としての英語・英語で雑談編** 〈自分のおしゃべり〉を英語でするための本。身近な30の話題に、ふだん着の英語表現集つき。	**64** **女を愛する女たちの物語** 日本で初めて／234人の証言で綴るレズビアンレポート レズビアンたちが語る悩み、苦しみ、喜び。234人の証言による初のレズビアン・レポート！
67 **エイズの文化人類学** ［エイズ現象］をどう読むか？ さまざまなメタファーを身にまとう社会現象としてのエイズをテキストとして、現代を読み解く！	**66** **盛り場の資本主義** 悪場所という欲望の経済人類学 盛り場に咲きほこる〈いかがわしさの経済〉がもつ磁力の秘密を解き明かす、欲望の経済人類学！
69 **道具としての英語・表現辞典** 単語・イディオム622・例文791 英和辞典ではわからない言葉のニュアンス、英語表現のコツを、英米作家から直接学びとれる辞典。	**68** **新しい韓国を知る本** 躍進する隣邦、その政治と経済をどう読むか？ 韓国の経済成長の奇跡の原動力はなんなのか？　日本と韓国の第一線ジャーナリストが迫る新しい韓国／
71 わかりたいあなたのための **現代美術・入門** 印象派からハイテク・アートまで現代アートの完全見取図／ 印象派から、シュールリアリズム、ダダ、ハイテク・アートまで、現代アートの完全見取図！	**70** **ザ・中学教師** 〈不思議の国の中学校〉に棲息する センセイたちのありのまま 中学教師の奇妙な生態を、具体的なエピソードを通じて描きだす！　現地直送、素顔の教師。
73 **楽しい俳句生活** 読みかつ詠むための現代俳句スタイル・ブック 近くて遠い俳句の世界への入門書。まったく新しい「読みかつ詠む」現代俳句スタイル・ブック。	**72** **ザ・新聞** 「病める巨人」のカルテを公開する いま、新聞のどこがどう危ないのか？「メディアの帝王」「病める巨人」のカルテを全公開する。
75 **［モダン都市解読］読本** あるいは近代の「知覚」を横断する 「知識／権力」の系譜学 東京という近代都市の空間と近代日本人の知覚がどのように形成されたのかを視覚資料から解読する。	**74** **競馬コーフン読本** 直線いっきのおもしろさ／ 馬、騎手、厩舎、馬主、牧場、血統、予想、必勝法など。競馬の魅力を全てみせる、ファンに贈る本命本！
77 **新しいソウルを歩く本** ソウルっ子も知らなかったソウルの真実／ 写真とイラストを駆使して語るソウルの街と人々の生活文化案内&旅する人のためのガイドブック。	**76** **ホテル物語** ホテルは都市の劇場だ／ 世相を映し出す鏡、ホテル、その多彩なドラマからビジネスまでの華麗なインサイド・レポート。
79 世紀末キッズのための **SFワンダーランド** SFで遊ぶ／ 20世紀最後のカルチャートレンドSFで遊ぶ！　サイバーパンクを始めとした〝SFの現場報告〟。	**78** **ザ・中学教師** **［プロ教師へのステップ］編** 人はいかにしてプロ教師になるのか？　学校という戦場を生きぬくための、教師のサバイバル・ブック。

書店にない場合は、窓口販売及び通信販売も行っております。詳細のお問い合わせは☎03-3221-1994まで。

別冊宝島

120 プロレスに捧げるバラード
神に選ばれし無頼漢たちの物語／
漂泊する芸能者、異形の神々、人類最古にして最も神聖なる文化としてのプロレス。

121 競馬おいこみ読本
人もいななくゴール前／
ターフを駆ける馬、ターフに賭ける人。ターフを翔ける夢、ターフに欠ける物語。すべてがこの本に。

122 道具としての英語 英語の発想／日本語の発想
日本人なら誰でもわかるが、英語で表現できない言葉にこだわり、日本語と英語の発想の違いを探る。

123 科学論争を愉しむ本
科学はもう法廷の裁判官ではなくなった／
エイズ論争、脳死論争などの論争の構図を描き、論争の内情を探り科学の正体を暴く！

124 セックスというお仕事
女が見た女を売る女たち
女にとって風俗産業とは何か？　はじめての女だけによるセックス産業をめぐるフィールド・ワーク!!

125 当世ぎゃんぶる読本
やめられない人たちの懲りない日々
裏ワザ師からフツーの人までギャンブル・アドベンチャーたちの天国と地獄！

126 江戸の真実
誰も挑まなかった近世日本のわかり方
明治よりもエネルギッシュで昭和よりも豊かで平成よりもダイナミックな江戸の姿がいまここに甦る。

127 謎の島・台湾
いま台湾に興奮するワケ／
不思議の島・台湾をとおして、いま東アジアの変な資本主義がみえてくる！

128 道具としての英語 暗記しないで覚える英単語
丸暗記の苦労をいっさいしないで「単語の力」と「英語の力」が同時に身につく究極の学習法。

129 ザ・中学教師 子どもが変だ！
子どもはもはや、あなたの知っている子どもではない//
大衆消費社会はいったいどのような子どもを生み出したのか？　学校にはいま、こんな子どもがいる！

130 スポーツ科学・読本
最新理論から体力トレーニングの技術まで／
生理学や物理学などの最新成果を楽しみながら、自分で実際に活用し、未知のパワーをひきだす本！

131 ライターの事情
ボーダーレス化した「書く仕事」の現場を追う／
書いて稼ぐ人びとの生活と意見をたずねて、高度情報社会の足元に迫り来る液状化現象を探る！

132 競馬ボロボロ読本
激走、激走、また激走／
ボロ勝ちの人も、ボロ負けの人も、この本を読め！　競馬読本シリーズ怒涛の第5弾！

133 裸の自衛隊！
おかしくてやがて悲しき、世界第三位の軍隊の実態
自衛官そのものに迫ることで初めて明らかになった！　世界第三位の軍隊の驚くべき真実の数々！

134 編集の学校
知的生産能力を全開させる超・具体的な完全学習プログラム
知的生産能力を全開させる超・具体的な完全学習プログラム！　新シリーズ「使える本」第1弾！

135 ニッポンと戦争
われわれは湾岸戦争をどう語ったのか？
ラジカルな平和主義から新保守主義まで、湾岸戦争をめぐってタレ流されたあらゆる論議を検証する。

136 闘う男！
アナクロニズムの逆襲
ケンカの現場からその考察に至るまで、一冊まるごとケンカの本！　天下御免のラジカル・ファイト！

137 研究する人生
「理系」の彼らは何をしているのか？
科学技術国・日本の繁栄を黙々と支えてきた人びとの情熱、喜び、愛、不安、苦しみ、そして人生。

138 宇宙論が怪しくなる本
現代宇宙論はどこまで信用できるのか／
宇宙論ブームの昨今。でもこの本はあなたの疑問に答えません。もっと宇宙論がわからなくなる本。

139 恋をしない女たち
愛がわからない時代の、私たちの恋愛さがし
ダイヤルQ²で出会い、パソコン通信で不倫するフツーの女の子たちの愛の物語！

宝島社　〒102 東京都千代田区麹町5-5-5

別冊宝島

141 巨人列伝

われわれを攪乱するケタはずれな大物たちの、とんでもない生き方に見る人間性の研究。

140 トランスフォーメーション・ワークブック
20日間で自分を変える自己創造メソッド

この本はあなたが自分で書き込みながら、隠れていた自分に気づき、自己変容していくための道具です。

143 競馬名馬読本
思い入れ・思い込みの名馬事典

「名馬の時代」80年代を駆け抜けた111頭の物語。誰がなんと言おうと、この馬は私にとって名馬だ！

142 道具としての英語 暗記しないで使える英熟語

熟語を使いこなして、もっと豊かに表現するための「丸暗記主義反対！」の学習法。

145 都市生活のための 決定版・農業大論争！
百家争鳴の農業論争、その全体像がこれだけで一挙に分かる完全見取図

普通の人には理解しにくい農業をめぐる論争のすべてがこの一冊でわかる。

144 シナリオ入門
だれでも身につくシナリオ作法書／

シナリオは映像ドラマの設計図だ。映像ドラマを言葉で表現するためのレッスン。

147 我らがバブルの日々
「ギャンブル資本主義」最前線からの証言／

バブルとともに生き、バブルとともに眠る企業戦士とアウトローたちの金とノルマと女の物語!!

146 変態さんがいく
これを読めば、私もヘンタイになりたい／

倒錯した性愛に情熱を注ぐ、セックスおたくたちの生活ウラ&オモテ！　本当の変態たちが語り始めた。

149 シンクタンクの仕事術

データの収集・加工から商品開発まで情報化社会を生き抜くために、シンクタンクの秘密を大公開！

148 F1激走読本
サーキットを駆けめぐる人とマシンの物語

ニッポンのF1ブームはどこへ行く？　このブームをブームで終わらせないために！　決定版!!読むF1。

151 看護婦（ナース）の世界
天使の仮面を脱ぎ捨てて

ナースたちの仕事と人生をありのままに描き、医学と医療のタブーに挑戦する！

150 家は建つ！
ローン漬けのマイホーム観を笑い飛ばす転機の書

押しつけられた住み方なんてもういやだ！　安く、楽しく、よい家に住みたいあなたのための本！

153 世界の読み方が変わる本

CNNとNewsweekでは国際情勢はわからない！　世界を揺るがす「紛争」の正体が見える本！

152 病院で死ぬ！
終末期医療の現場から

日本人の80%は病院で死んでいく。ホスピス、尊厳死、ガン告知など終末期医療の生きた衝撃レポート！

155 みんなの不倫
世紀末ニッポンのア・ブ・ナ・イLOVE WARS//

ヤンエグ君、キャリアギャル、イケイケ主婦、オジサン。世紀末ニッポンの危ないLOVE　WARS!!

154 競馬にげきり読本
あれよあれよのにげきり勝ち

競馬「国際化・自由化」論争を読むと「馬券先進国・競走馬後進国」のニッポン競馬の正体が見えてくる！

157 ヤクザという生き方 これがシノギや！
実録／ヤクザ・企業舎弟のカネと人生

ヤクザとその周辺に棲息する男たちがはじめて語った平成ニッポンのブラックビジネスのすべて！

156 ASEAN（アセアン）にようこそ！

アセアン経済の最前線で働く日本人ビジネスマンの、おかしなおかしな「アジア体験レポート」

159 ゲイの贈り物
GAYがつくった、みんなのための、ゲイ・カルチャー案内／

GAYは楽しい、GAYは美しい、GAYは豊かだ。日本初のゲイによる、ゲイ・カルチャー案内！

158 あぶない少女たち
ティーンエイジャーの誘惑と冒険／

不良少女からごくフツーの女子高生まで、少女たちのドキドキする「現在」をまるごとつかんだ！

書店にない場合は、窓口販売及び通信販売も行っております。詳細のお問い合わせは☎03-3221-1994まで。

別冊宝島

181 オカルトごっこ

霊能力、UFO、気功、占い、幽霊、チャネリング……
私たち、すべて体験しました！

女の子27人で結成された「オカルト調査隊」による、ワクワク、ドキドキ、100％の超常現象・神秘体験！

180 官僚のボヤキ

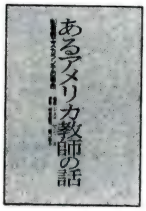
「冬の時代」を生きる官僚たちが語った自分自身

高度成長期の「官僚たちの夏」の季節が去り、もはや過去の栄光にすがれなくなった官僚の実態に迫る！

182 カッ飛び！クルマ読本

公道のバトルからラリーまで「実録／走り屋の世界」

ニッポンの改造車事情を考え、巷で盛り上がるドラテクを点検し"走り"の原点に迫る！



あるアメリカ教師の話

NO.1教師エスカランテの場合
ジェイ・マシューズ・著／越智道雄・他訳
定価2800円

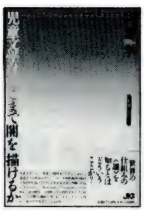
エスカランテを通して、真の教師のあり方、教育の真のあり方を問い、文化多元国家アメリカの荒む教育現場に一石を投じた問題の書。



プロ教師の道

豊かな「管理教育」をつくるために
河上亮一・著
定価1400円

職員室で権力を握り、生徒を管理・掌握し、学校を動かすためのザ・中学教師の実践の奥義！自由で民主的な教育理論を捨てプロフェッショナルを目指せ!!



児童文学はどこまで闇を描けるか

上野瞭の場所から
村瀬学・著
定価1750円

人間的現実の総体を意欲的に描きつづける児童文学者上野瞭の作品を手がかりに、人間性と非人間性が支え合い反転し合う《闇》の構造を明らかにする。



子どもの本のまなざし

清水真砂子・著
定価1650円

現代の児童文学に最も重要な位置を占める作家の中に、現在が解かねばならぬ問題。たとえば日々を生きのびる技術等、時代の感受性のありようを指し示す。



父親主義

辻創・著
定価1500円

かつて日本の父親が子育て、学校、教育についてこれほどマトモに語ったことがあっただろうか!? 女・子どもの教育談義を粉砕するウルトラ常識教育論！



TURTLE BOOKS

少年野球は誰のもの？

加賀山耕一・著
定価1150円

健康的イメージとは裏腹に、躾という教育的効果を押しつけられる少年野球。その実態に鋭く迫り、スポーツが本来もつべき「あそび」の復権をとなえる。

書店にない場合は、窓口販売及び通信販売も行っております。詳細のお問い合わせは☎03-3221-1994まで。



学校はなぜ変わらないか

河原巧・著
定価1600円

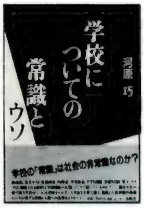
現在の矛盾が先鋭に集中する中学校。この学校をめぐる認識のギャップは限りなく深い。現役中学教師が共通の認識を求めて書き下ろす学校の現在。

学校は甦るのか

河原巧・著
定価1600円

いま、われわれは、現場の教師の建前ではない本音の言葉を求めている。学校をめぐるすべての「神話」を排し、学校再生のための常識的学校論を提唱する。





学校についての常識とウソ

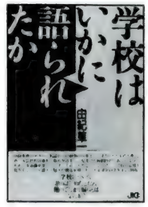
河原巧・著
定価1600円

業者テスト、内申書、学校5日制etc…。複合不信の海で漂う学校の「いま」を綴る！　混乱した教育論の現場に一石を投ずる教師から親へのメッセージ。

学校はいかに語られたか

由紀草一・著
定価1600円

学校事件のマスコミ報道から、子どもの人権をめぐる親の発言まで。現役の高校教師が、学校をめぐる論議を俎上にのせ、語り＝騙りの構造を明らかにする。





学校、この民主主義パラダイス
反動的！

諏訪哲二・著
定価1600円

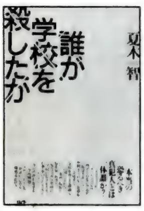
学校に必要なのは「自由」な教育でも「個性的」な授業でも「民主的」な教師でもない。学校の現実から錯乱と妄想のすべての「学校論」を撃つ!!

日の丸

諏訪哲二・著
定価1400円

どこにでもある普通科底辺高校の教師と生徒のほんとうの姿を描き「日の丸・君が代」論争に決着をつけるおきて破りの実録パロディ小説！





誰が学校を殺したか

夏木智・著
定価1650円

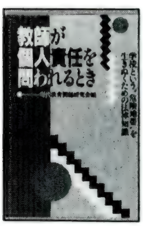
現役の高校教師が、学校に抱きがちな幻想を白日のもとにさらし、今日の深刻化する学校問題の本質＝「幻想」の犯罪性に迫る問題提起の書。

症状としての学校言説

小浜逸郎・著
定価1700円

山本哲士から「プロ教師の会」まで、「左」から「右」に至る学校言説の病巣を完膚なまでに剔抉・解体・埋葬し、現象そのものの解読に迫る論争的学校論。





教師が個人責任を問われるとき

現代教育問題研究会・編
定価1240円

あなたは学校という〝危険地帯〟を生きぬけるか！　校内暴力で鎖骨を折られた！　など、学校の身近な出来事70例を、ベテラン弁護士が分かりやすく解説。

「ゆとり受験」の方法

中山治・著
定価1300円

親の受験といわれる中学受験から、ムリ・ムダ・ムラの詰め込み勉強を排し、「愛情に支えられた合理主義」に基づいた画期的方法を提唱する話題騒然の書。



宝島社　〒102　東京都千代田区麹町5-5-5

別冊宝島バックナンバー常設店一覧

東　京

（千代田区）三省堂書店神田本店／書泉ブックマート／書泉グランデ／東京堂書店／丸善お茶の水店／岩波BSC／いずみ書店南口店／前田書林／BM市ケ谷／山脇ブックガーデン／パイオニアブックス／旭屋水道橋店／プレスセンター丸善／飯田橋書店／ブックス松田屋飯田橋店／改造社国際ビル店／明正堂秋葉原店／法政大学市ケ谷生協店／山王書房（中央区）八重洲ブックセンター／近藤書店本店／旭屋銀座店／福家書店／教文館（港区）モノレール山下書店／書原新橋店／文鳥堂新橋店／新橋駅書店／青山BC六本木店／誠志堂本店／誠志堂東日ビル店／イグレグ書房／金松堂／文鳥堂赤坂店／流水書房共同通信店／アシーネ芝公園／リーブルダール／流水書房青山店／福家書店高輪店（新宿区）紀伊國屋本店／西武新宿ブックセンター／新星堂新宿NSビル店／福家書店新宿センタービル店／福家書店野村ビル店／啓文堂／風書房／ぶっくらんど／芳林堂書店高田馬場店／ソーブン堂書店高田馬場店／いちかわ書店／ラムラ芳進堂／文鳥堂飯田橋店／ブックスサカイ深夜プラス１／早大生協コーププラザ店／早大生協文学部店／オーブックス／三省堂高田馬場店／未来堂書店／ブックス高田馬場／鈴木書房／ブックスミヤ／ヒマラヤ書店／工学院大学生協／あゆみブックス早稲田店／三省堂新宿西口店／三省堂サウスブックポート／雄峰堂北新宿店／青山ブックセンター新宿店（文京区）東大生協本郷書籍部（台東区）明正堂中通店／リブロ浅草／明正堂丸井上野店／明正堂浅草橋店（墨田区）リブロ錦糸町／ブックストアー談錦糸町店（品川区）明屋五反田店／リブロ大森／文星堂大崎ニューシティ店／アイブックス目黒店／浜田山書房目黒店／芳林堂大井町店／三省堂大井町店／博文堂大井町店（目黒区）恭文堂／三省堂自由ヶ丘店／東大駒場生協／ブックス中川／青山ブックセンター自由ヶ丘店（大田区）栄松堂蒲田店／ACT4／アクトブックスサンカマタ／いけだ書店大森／龍文堂駅ビル店（世田谷区）博文堂下北沢店／オレンジ池尻大橋店／文教堂真中店／ブックメイツ経堂店／紀伊國屋玉川高島屋店／近藤書店／サンマーク書店／アイブックス祖師谷店／Booksレオ／書原上北沢店／エンゼル書房池之上店／啓文堂代田橋店（渋谷区）三省堂渋谷店／紀伊國屋渋谷店／大盛堂／旭屋渋谷店／パルコブックセンター渋谷店／放文社／全国書房／リブロ渋谷／ブックストア談原宿店／金港堂／青山学院大学生協／幸福書房代々木上原店／紀伊國屋書店笹塚店（中野区）オーブックス沼袋店／明屋／はた書店／雄峰堂書店新井薬師店／青林堂（杉並区）新正堂下井草／書原杉並店／書楽／新星堂荻窪店／ブックセンター荻窪／八重洲BC荻窪ルミネ店／明大和泉生協／サンブックス浜田山／浜田山書房桜上水店／ブックガーデン／西荻パームガーデン／高円寺文庫センター／湘南堂／今野書店／信愛書店／広和書店／現代書店（練馬区）青山堂／リブロ光ヶ丘／雄峰堂上石神井店／JBB練馬店／パルコブックセンター大泉店／パピロ練馬店（豊島区）リブロ池袋／パルコ三省堂／旭屋池袋店／芳林堂書店池袋店／書原椎名町店／武蔵書店／新栄堂本店／新栄堂アルパ店／成文堂巣鴨駅前店（板橋区）文教堂西台店／ブックタウン／博文堂書店大山店（北区）リブレール／日鳥書房／日鳥書房アピレ店／昭和堂（足立区）文教堂竹ノ塚店／近代書店／良文堂あやせ店／丸善ら・がぁーる／ぶっくらんど（葛飾区）詩泉堂／文教堂青戸店（江戸川区）弘栄堂書店小岩店／あゆみブックス瑞江店／明和書店／三猿堂西葛西店／東西書房葛西店（武蔵野市）弘栄堂／パルコBC吉祥寺店／紀伊國屋東急店／陽光ブックス／ブックス・ルーエ／伊勢丹ブックセンター（三鷹市）東西書房／三省堂三鷹店／中里書房三鷹店（小金井市）東西書房小金井店／かごや／文教堂小金井店／文教堂新小金井店（調布市）パルコBC調布店／真光書店本店／真光書店南口店／かもしだ書店／書原つつじヶ丘駅前店／ワールド西調布店（府中市）啓文堂府中店／啓文堂中河原店／ブックス・エナジー（国分寺市）三成堂国分寺店／Books隆文堂（国立市）東西書店／増田書店（田無市）田無書店／宮脇書店田無店（保谷市）正青堂本店（小平市）文教堂小平店／文教堂新小平店／一橋大生協店／朋文堂書店（東大和市）ブックスアルファ（東久留米市）ブックセンター滝山（東村山市）文教堂東村山店／丸山書房／あゆみbooks東村山店（立川市）オリオン書房本店／オリオン書房ルミネ店／BCリブレ若葉町店／ふたば書店立川店（日野市）啓文堂書店高幡店／ブックワールド鉄生堂豊田駅前店（八王子市）くまざわ書店／啓文堂八王子店／文教堂めじろ台店／ブックワールド鉄生堂／パル三成堂楢原店／ブックス・タマ八王子店／中央大学生協／啓文堂高尾店／ブックダム／パル三成堂めじろ台店／文教堂長沼店（福生市）文教堂福生店／ブックスタマ（青梅市）ブックス西東京（多摩市）啓文堂多摩センター店／くまざわ書店桜ヶ丘店／東西書房聖蹟桜ヶ丘／パル三成堂多摩ニュータウン店／文教堂多摩ニュータウン店／くまざわ書店永山店／内田屋書房永山店（町田市）有隣堂まちだ東急店／文教堂鶴川店／久美堂小田急店／久美堂東急ハンズ店／福家書店／文教堂南成瀬店／文教堂小川店／久美堂旭町店／久美堂本町田店／久美堂高ヶ坂店／文教堂つくし野店（昭島市）いけだ書店モリタウン店（稲城市）住吉書房稲城長沼店（羽村町）ブックスタマ小作店

神奈川

（横浜市）有隣堂イセザキ店／有隣堂西口ダイヤモンド店／有隣堂東口ルミネ店／横浜そごうブックセンター／丸善ブックメイツ横浜店／神奈川大学生協／横浜書店／文教堂青葉台南口店／キディランド横浜関内店／ブックスシーガル／ブックスキタミ港南台店／大蔵書店／天一書房綱島店／天一書房大倉山店／ブックスキタミ綱島店／有隣堂戸塚店／戸田書店能見台店／横浜市立大学生協／関東学院大学生協／横浜国立大学生協／慶応義塾大学生協日吉店／アーバン文華堂／文教堂栄上郷店／文教堂東戸塚店／文教堂三ッ境店／文教堂弥生台店／文教堂戸塚南店／文教堂すすき野店／文教堂横浜本牧店／天一書房鴨居店／上大岡ブックセンター／アシーネ金沢文庫／有隣堂たまプラーザ店／文教堂たちばな台店／文教堂港北ニュータウン店／グリーンブックス文教堂（川崎市）有隣堂川崎アゼリア店／文教堂溝ノ口店／大塚書店百合ヶ丘駅ビル店／リブロ川崎／有隣堂BE店／丸善ブックメイツ／文教堂麻生店／文教堂上作店／住吉書房登戸店／早川書店／ブックメイツ新百合ヶ丘店／有隣堂新百合ヶ丘店／あゆみブックス新百合ヶ丘店／住吉書房日吉店／住吉書房名店センター店／文教堂小杉店／中原ブックランド本店（横須賀市）平坂書房WALK店／平坂書房駅前店／リブロ横須賀／平坂書房本店（藤沢市）リブロ藤沢／コスタブックセンター／有隣堂藤沢店／文教堂六会店／文教堂書行店BCライオンズ／文教堂辻堂店／ブックセンターよむよむ藤沢湘南店（鎌倉市）島森書店／島森書店大船店／目耕堂／文教堂鎌倉店（茅ヶ崎市）川上書店ルミネ店／ブックセンターよむよむ茅ヶ崎店（平塚市）文教堂四之宮店／東海大学ブックセンター／サクラ中原店（伊勢原市）稲元書店／伊勢原書店（秦野市）伊勢原書店秦野店／内田屋書房秦野店／伊勢原書店渋沢店（小田原市）伊勢治書店／文教堂小田原店／スペース21／リブロ小田原（相模原市）B.アミ本店／新星堂相模原店／文教堂相模大野銀座通り店／文教堂星ヶ丘店／文教堂相模大野店／ブックメイツ相模原店／文教堂相模台店／啓文堂書店橋本店／文教堂橋本店／TSUTAYA相模原店／ブックスA（大和市）ブックスオオトリ大和店／文教堂高座渋谷店／文教堂中央林間店（厚木市）有隣堂厚木店／石村集文堂駅ビル店／内田屋書房本店（座間市）ワコー書店相武台店（綾瀬市）内田屋書房海老名第一支店／文教堂上土棚店（城山町）文教堂城山店／伊勢原書店城山店（葉山町）文教堂葉山店（大磯町）マイブックス平塚／文教堂大磯国府店

千　葉

（千葉市）パルコ改造社／中島書店／セントラルプラザ多田屋／キディランド／千葉大学生協／文教堂小倉台店／そごうブックセンター（市川市）アイブックス／大杉書店／くまざわ書店本八幡店／BCパティオ（船橋市）三省堂西船橋店／リブロ船橋／旭屋船橋店／弘栄堂／パルコ芳林堂津田沼店／文教堂金杉店／ときわ書房（習志野市）多田屋ブックス津田沼（松戸市）良正堂駅ビル店／堀江良文堂／ユーカリ書林／オークスBCきよしケ丘（柏市）新星堂／世紀堂／ウイングBC（市原市）文教堂市原店（佐倉市）ブックマートさくら（浦安市）文教堂浦安駅店／文教堂浦安店／アークブックセンター浦安（八千代市）文教堂八千代台店

埼　玉

（浦和市）須原屋／須原屋コルソ店／一清堂／埼玉大生協／岩淵書店（大宮市）押田謙文堂／新栄堂／ブックセンター押田／三省堂ブックポート（与野市）文楽書房／岩渕書店北与野店（蕨市）須原屋蕨店（上尾市）ロダン合格堂／明林堂上尾店（朝霞市）東武ブックス朝霞台店（新座市）ブックスキャメル／タナブックス（志木市）新星堂（川越市）マインブック／いけだ書店（所沢市）芳林堂／白樺書房／早稲田書房／パルコBC新所沢店／いけだ書店／ブックランドタンデム１／文教堂所沢店／B.Cよむよむ西狭山ケ丘店（狭山市）文教堂狭山店（入間市）文教堂入間店（大井町）ブックピア（坂戸市）雄峰堂坂戸店（越谷市）住吉書房南越谷店（春日部市）文教堂春日部店／酒井書店中央店／ブックス内田（秩父市）時習堂（川口市）文教堂東川口店／岩渕書店芝店／岩渕書店（東松山市）ブックス富士見（熊谷市）須原屋熊谷店（草加市）竹島書店／高砂ブックス（八潮市）竹島書店（三郷市）竹島書店（日高市）B.Cひまわり

北関東

（宇都宮市）amsブックセンター／新星堂／和光堂／ブックランドアレックス（小山市）進駸堂駅ビル店（前橋市）煥乎堂／リブロ前橋／文真堂問屋町店／文真堂下小出店／文真堂新前橋店／文真堂ベラ片貝店／ビブロス天川店／戸田書店前橋店／戸田書店日吉店／文真堂文京店（高崎市）戸田書店高崎店／高崎新星堂／サカヰ書店／ATOZ築縄店／改造社高崎店／すばる書店北高崎店／文真堂上大類店／文真堂六郷店／文真堂上中居店／文真堂井野店（太田市）文真堂新井店（藤岡市）戸田書店藤岡店（水戸市）川又書店／川又書店駅前店／ツルヤBC／リブロ水戸／AtoZ水戸店／ブックスポットマルゼン／ブックセンターパピエ（土浦市）白石書店駅ビル店／白石書店／白石書店モール店（牛久市）文教堂牛久店（勝田市）武石書店／ささもと書店／ボンベルタ伊勢甚（つくば市）友朋堂／リブロつくば／筑波大学丸善／ブックバーン筑波店（鹿島町）文教堂鹿島店（岩井市）文教堂岩井店（潮来市）文教堂潮来店（日立市）ボンベルタ伊勢甚日立店

北海道

（札幌市）富貴堂東急店／旭屋札幌店／弘栄堂札幌駅店／弘栄堂地下鉄店／弘栄堂パセオ店／明正堂そごう店／明正堂12号線／明正堂石狩街道店／北大学生書房クラーク店／北大学生書房教養店／リーブルなにわ／紀伊國屋札幌店／紀伊國屋書店厚別店／丸善南一条店／丸善新札幌店らがーるDUO／本の店岩本北野店／本の店岩本平岸店／五番館西武書籍／本の店岩本琴似店／本の店岩本新道店／ビブロス新琴似店／蔦屋清田店／ブックスメディアン（函館市）西武ブックセンター／魁文舎ブックセンター／ブックハウス大文堂／森文化堂（旭川市）三省堂／旭川富貴堂本店（苫小牧市）旭屋苫小牧店（帯広市）信正堂藤丸店／ザ・本屋さんパレット店／ザ・本屋さん東店（釧路市）釧路BC（室蘭市）室蘭工大（小樽市）ビブロス小樽朝里店（広島町）ブックプラザ北広島店（江別市）ブックプラザ江別

東　北

（青森市）成田本店／成田サンロード店／いけだ書店／成田本店つくだ店／ブックショップバズ観光通り店（弘前市）ブックス弘前／紀伊國屋弘前店／今泉本店／弘前大学文京店／ブックスイン城東／BOOK LAND王様／BOOK Max（盛岡市）東山堂ブックセンター／岩手大学生協（秋田市）あぶみ書房／秋田大学生協／キャッスルブックセンター（山形市）八文字屋／船山書店／山形大学生協／こまつ書店（仙台市）金港堂ブックセンター／金港堂泉店／丸善一番町店／アイエ駅前店／八重洲書房／髙山書店／髙山書店東一店／協同書店駅ビル店／ブックスなにわ／東北大生協文系店／東北大生協理薬店／東北大生協工学部店／東北大生協教養店／ブックスみやぎ／本のゴリラハウス・勾当台・花京院・宮城野店／オルモ鹿野・幸町店／いけだ書店仙台泉店／丸善141店／宝文堂本店／宝文堂加茂店／髙山書店南小泉店／ブックセンタースクラム（福島市）岩瀬書店コルニエツタヤ店／博向堂／博向堂鎌田店／岩瀬書店本町店（会津若松市）会津ブックセンター（郡山市）東北書店／郡山ブックストア

ー／見聞録／岩瀬書店安積店

中部・北陸

（甲府市）リブロ甲府／朗月堂書店／文教堂甲府店（伊那市）ニシザワ書籍部（松本市）松本駅改造社／ブックスロクサン／鶴林堂／パルコブックセンター／信州大松本生協／B.ロマン興文堂（長野市）平安堂長野店／平安堂吉田店／平安堂長野大橋店／長谷川書店／改造社/マガジンクラブ（須坂市）平安堂須坂店／バビロ須坂（岐阜市）自由書房本店／自由書房パルコ店／南陽堂／岐阜大学生協／自由書房鷺山店／大洞堂岐阜北店（美濃加茂市）丸圭書店／三洋堂みのかも店（多治見市）三洋堂多治見店（大垣市）大洞堂ブック258店／あおい書店大垣店（可児市）三洋堂可児店／三洋堂新カニ店（恵那市）三洋堂恵那店（中津川市）三洋堂中津川店（関市）三洋堂関店／ブックバーン関店（瑞浪市）三洋堂瑞浪（金沢市）金沢百番街うつのみや／うつのみや片町店／金沢大生協／福音館／北国書林香林坊本店／大和ブックセンター／ブック宮丸笠市店（福井市）勝木書店二宮店／福井大生協（野々市町）王様の本本店（新潟市）紀伊國屋新潟店／北光社／セゾン・ド・文信堂／萬松堂／新潟大生協／文信堂書店とやの店／日軽戸田書店／ブックマン（長岡市）ブックスアシタバ／ブックセンター長岡／覚張書店／貴光堂（上越市）JBB平安堂上越店（三条市）ブックスササハラ（富山市）清明堂書店／瀬川書店／清明堂マリエ店／booksなかだ本店／booksなかだ豊田店／booksなかだ五福店／booksなかだ奥田店／booksなかだ天正寺店／文苑堂根塚店（氷見市）booksなかだ氷見店（高岡市）文苑堂本店（敦賀市）千田書店

東　海

（一宮市）カルコスブック／文泉堂／文正堂昭和店／一宮三洋堂（春日井市）ルネック三洋堂／至誠堂アオキ／三洋堂岩成台（小牧市）三洋堂（尾張旭市）ブックスかまくら102（瀬戸市）サンヨー菱野（大府市）あのなん（津島市）津島書店（蟹江町）BH春峰堂（安城市）竹内書店（岡崎市）サン書房／あおい本店（刈谷市）ブックセンター名豊／三洋堂刈谷店／愛知教育大学生協書籍部（西尾市）三愛堂（碧南市）ヘキナン書房（豊橋市）精文館書店／豊川堂／コア豊橋（豊田市）三洋堂若林店／三洋堂梅坪店／豊田精文館／FAS精文館（津市）別所書店青谷店／別所書店サウスウエスト店／別所書店南郊店／別所書店11ビル店／三重大学生協（松阪市）別所書店船江店／別所書店松阪店（四日市市）白揚本店／シェトウ白揚／白揚ササガワ店／白揚追分店（鈴鹿市）シェトウ白揚スズカ（伊勢市）ジャスコ伊勢店（小俣町）古川書店度会橋店（桑名市）白揚西桑名店（春日町）ブックロード林（静岡市）江崎書店／静岡谷島屋／戸田書店SBS屋店／吉見書店／戸田書店曲金店（沼津市）宝塚マルサン書店／吉野屋沢田店（函南町）戸田書店函南店（長泉町）文教堂長泉店（大仁町）文教堂大仁店（富士市）戸田書店（富士宮市）戸田書店（清水市）戸田書店本店（焼津市）戸田書店／谷島屋大富店（藤枝市）藤枝江崎書店／戸田書店（吉田町）TANAKA BOOKS（袋井市）戸田書店（浜松市）山本書店有楽街店／谷島屋本店／草志社ニチイ店／谷島屋書店メイワンビル店／谷島屋中沢店／戸田書店幸店／エイチビー／戸田書店和田店／イケヤ文楽館／谷島屋毎日ボウル

名古屋

（北区）名鉄栄進堂／サンヨーB&D（東区）谷口正文館（昭和区）アスコ書苑／三洋堂本店（瑞穂区）新端有隣堂（中村区）三省堂名古屋店／近鉄星野／メルサ鎌倉文庫（中区）パルコブックセンター名古屋店／丸善（千種区）ちくさ正文館／池下三洋堂／ウニタ書店／名古屋大生協南部／名古屋大生協北部（名東区）白樺書房／ポランの広場（天白区）ヴィレッジバンガード／大洋書店天白店（熱田区）泰文堂日比野店（緑区）三洋堂鳴海店（港区）コア港

大　阪

（中央区）ヒバリヤナンバ店／ナンバブックセンター／旭屋ナンバ店／髙島屋書籍・鉢の木／心斎橋アセンス／丸善松坂屋店／トッパンセールズ／栗林ツインタワー店（北区）旭屋書店堂島地下街店／紀伊國屋梅田店／旭屋本店／清風堂／旭屋書店梅田地下街店／リブロ梅田／ハートブックス大阪駅店／大栄書店／旭屋ギャレ大阪店／みやざき書店（阿倍野区）ユーゴー書店／旭屋アベノ店／福家ベルタ店（天王寺区）髙坂書店デパート店（浪速区）BOOKSコスモナンバ店（淀川区）ブックストア談新大阪店（都島区）駸々堂京橋店／大阪書店／博文堂京橋／ブックス京橋／トーワブックス毛馬店／ブックフォーラム都島店／ブックス京橋（平野区）B.L.くるまや（天王寺区）髙坂書店デパート店（西淀川区）ブックスとおの（鶴見区）正和堂鶴見店（港区）キャップ書店オーク２番街店（吹田市）関西大学生協／文学館南千里店（池田市）らんぷや／アシーネ池田店（箕面市）大阪外語大生協／ブックセンターOS（豊中市）佐々木創文堂／緑風堂／大阪大学生協豊中店／ブックスRIZA／長野書店（茨木市）和作屋書店／ジャスコ新茨木店（堺市）旭屋堺東店／ブックスファミリア／B.L.くるまや初芝店／ブックランドはなだ／旭屋書店しんかなシティ店／ブックスアミ堺店／ビブロス泉ヶ丘／ブックセンターまるやま金田店（東大阪市）フタバ長瀬店／経法大書店／栗林レッド店／ヒバリヤ本社／近畿大学生協／ヒバリヤロンモール店（八尾市）リブロ八尾／ミヤコ書店／西川書店（富田林市）ブックフォーラム富田林店／ジャスコ金剛東店／ブックス・オリオン（枚方市）水嶋京阪デパート店／水嶋くずは店／水嶋枚方店／ブックスアミ枚方店／学運堂／ブックスハセイチ／蔦屋ベルパルレ店（泉佐野市）ブックス・パル／イワキ泉佐野店（羽曳野市）ブックスファミリア羽曳野店（和泉市）松屋書店（寝屋川市）水嶋寝屋川店／蔦屋書店寝屋川店（岸和田市）ブックスファミリア田治米店

関　西

（京都市）洛陽書店／洛陽女子大／同志社大生協今出川店／アオキ書店／美書房本店／大垣書店／立命館大生協／書房北山／丸山書店高野店／丸山書店北白川店／リーブル京都烏丸店／丸山書店千中店／リーブル京都本店／ヤサカメイト／春琴堂／リーブル銀閣寺店／京都大学生協中央店／ブックプラザ優／駸々堂京宝店／駸々堂三条店／駸々堂河原町店／オーム社河原町店／京都書院ヴァージョンB／ふたば書房河原町店／オーム社外大／サン書房／ブックストアー談京都店／ジュンク堂京都店／アバンティBC／いのしし堂／ふたば書房山科店／マルヤマ書店山科店／山科書店大学前店／ブックス新京都／オーム社竹田店／CAP桃山店（城陽市）オレンジポート城陽店（田辺町）同志社大生協田辺店（宇治市）駸々堂トライアングル／キャップ宇治店／ブックス新京都大久保店／ブックセンター万葉店／BSまるやま小倉店（八幡市）ビブロス八幡店（亀岡市）ビブロス亀岡店／ブックイン

（神戸市）ジャパンブックス／甲南大生協／南天荘メイン六甲店／神戸大学生協学館店／神戸大学生協LANSBOX店／ブックフォーラム伊川谷店／ジュンク堂三宮店／ジュンク堂ブックセンター／流泉書房三宮店／コーベブックスさんちか店／日東館書林／海文堂／コーベブックスデュオコゥベ店／ブックフォーラムメトロこうべ店／ブックフォーラムジョイプラザ店／すま書房／神戸市外国語大生協／流泉書房パティオ店／ジュンク堂学園都市店／ビブロス須磨友ケ丘店／ブックフォーラム西神中央店／アシーネオーパ店／ジュンク堂北町店／ジュンク堂住吉店／ブックフォーラム名谷店／ブックフォーラム舞子店／リブロハーバーランド店（芦屋市）ジュンク堂芦屋店（西宮市）ブックス171／ビブロス西宮店／関西学院大生協／ヤングタウンなるお（加古川市）ブックフォーラム加古川店／新興書房加古川店（明石市）トッパンセールズ（尼崎市）リブロ塚新／タイムブック（伊丹市）ブックスユートピア（姫路市）誠心堂本店／誠心堂書店辻井店／ブックスサンヨー田寺店／（奈良市）駸々堂奈良大丸店（大和郡山市）水嶋奈良店（生駒市）ジャパンブックス南（和歌山市）宮井平安堂／イワキ狐島／イワキ大浦店（大津市）リブロ大津／ビワコタワーBC／ブックス丸山瀬田店（近江八幡市）マイブック中村／ブックス八幡／ストロベリーフィールド近江八幡店（彦根市）CBワールドフジノ彦根店／ストロベリーフィールド彦根店（守山市）CBワールド守山店（長浜市）書店Aアカデミー

中国・四国

（岡山市）紀伊國屋岡山店／細謹舎／丸善岡山シンフォニービル店／泰山堂鹿田店／泰山堂本店／黎明書院／飛行船北方店／AZ岡南店／ビブロス岡山（倉敷市）BS啓文社／三友書房（津山市）津山BC本店／津山BC駅前店／津山BC志戸部店（広島市）紀伊國屋広島店／金正堂／廣文館本通り店／パル金正堂可部店／フタバラフォーレ／井口ブックセンター／啓文社コア店／フタバ図書八丁堀店／駅BC廣文館（廿日市市）啓文社廿日市店（東広島市）ブックセンターアオイ八本松店（福山市）啓文社福山店／BC啓文社／サントーク廣文館／そごうBC廣文館／啓文社コア店／啓文社キャスパ店／ビブロス福山木之庄店／啓文社サンピア店（出雲市）BCタケダ（松江市）今井書店本店／BC今井西津庄／BC今井学園通り店（米子市）今井書店米原店／今井書店本通り店／今井書店皆生店／今井書店安倍店（鳥取市）富士書店本店／定有堂／鳥取BC／ブックランド富士書店湖山駅前店／ブックランド富士書店吉成店／ブックランド富士書店田園町店／鳥取大学生協／BCコスモ岩吉店／BCコスモ吉成店（山口市）文栄堂山口大学前店／文栄堂大内店／五十部誠文堂（下関市）ブックス中野（宇部市）ブックワールド（高松市）宮脇本店／宮脇円座店／宮脇築港店／ポッポ宮脇／宮脇屋島店／宮脇駅前店／宮脇南店／宮脇西町店／宮脇勅使店（高知市）富士書店（南国市）片岡ブックス（徳島市）アダムと島書房／BC平惣／阿波屋書店／森住丸善昭和町店／小山助学館バイパス店（松山市）紀伊國屋松山店／明屋本店／明屋大街道店／明屋城北店／丸三書店／愛媛大学生協／松山大学生協

九　州

（福岡市）九州大学生協理系／明林堂箱崎店／紀伊國屋福岡店／積文館新天町／りーぶる天神／アニマート原／黒木書店七隈店／黒木書店片江店／福岡金文堂大橋駅／福家書店福岡店／明林堂野芥店／アニマート長住／明林堂奈多店（春日市）アニマート春日（二日市）福岡金文堂二日市店（那珂川町）アニマート那珂川（北九州市）宗文堂／福家書店北九州店／金栄堂／ナガリ書店／ブックセンター金山堂守恒店／小倉ブックセンター／明屋小倉店／北九州大学生協／旭屋北九州店／八幡井筒屋BC／九州工業大学生協／グリーンバレー／カルパーク平野／白石書店本城店（久留米市）たがみ書店／エマックスたがみ／ブックスあんとく（粕屋町）仲原ブックセンター（大牟田市）麒麟書店田隈店／明林堂南大牟田店／明林堂田隈店（三橋町）Book Cityやまと（田川市）ブックステーション（飯塚市）ブックステーション（長崎市）好文堂本店／ステラ好文堂／遊ING長崎本店／好文堂新大工町店／スペースエム城栄店（佐賀市）積文館ディトス店／積文館佐賀松原店／金華堂本店／北バイパス金華堂／明林堂佐賀北店／明林堂南佐賀店／明林堂嘉瀬田店（熊本市）紀伊國屋熊本店／まるぶん／明林堂武蔵ケ丘店／明林堂北部店／明林堂長嶺店／明林堂竜田口店／長崎書店（鹿児島市）春苑堂本店／鹿児島大中央生協／ブックスみすみ南港店／春苑堂ブックプラザ／ブックスシャトー／ブックセンターめいわ／ブックセンターふこく（大分市）ブックタウン・カク／ブックタウン・ヒジ／明屋書店大分本店／パルコBC／本の開書堂（別府市）明林堂別府本店／明林堂鶴見店／明林堂青山店（延岡市）銀河書店延岡浜町店（宮崎市）中央田中書店／銀河書店宮崎店／銀河書店浮ノ城店／りーぶる宮崎／ブックスたなか／宮崎戸田書店（清武町）見開読タナカ（那覇市）球陽堂／OBB壺川店／OBB末吉店／文教図書パレット店（浦添市）OBB牧港店／沖縄宮脇書店（宜野湾市）田園書房宜野湾店／宮脇書店（沖縄市）宮脇書店美里店／OBB登川店（西原町）琉球大学生協／西原球陽堂書房（北谷町）OBBハンビー店／OBB北谷店

別冊宝島184

お医者さま（仮）

「病院を出ればタダの人」のはずでも、
町を歩けば「まあ先生」、開業資金に節税対策、
出世、転勤、教授選、息子の教育、娘の見合い……
やっぱり仕事がついてくる。
やっぱりアナタはお医者さま。

Ⅰお医者さま自身が語る「職場としての病院」

☆不当な人事に憤慨する
☆教授選顛末記「そして半分がいなくなった」
☆出世のための七ヵ条

Ⅱ不測の事態！大パニック！

☆「もう大丈夫」といった患者の突然の死
☆飛行機のなかで「お医者さんはいませんか!?」
☆病院内殺人事件

Ⅲお医者さまの収支決算

☆勤務医の給与明細
☆新規開業物語
☆「手術のお礼」の相場

Ⅳ恋するお医者さま

☆ナースとの職場恋愛
☆男4,000円＋医師免許、女12,000円のねるとんパーティ

Ⅴドクターズ・ファミリー

☆息子を医者にする方法
☆娘だって楽じゃない
☆開業医の奥さまとお買物

8月5日発売予定
定価1010円（税込）



PART 1 まず、いま学校の何が問題なのかを洗いだそう!

PART 2 つぎに、改造を考える基礎作業として教育論の混乱を整理しよう!

PART 3 「すばらしい教育」というウソ

フツーの教師のフツーの教師によるフツーの教師のための

学校改造案とはこれだ!



PART 4 ところで、これまでの教育改革構想でうまくいくのか?

PART 5 さあ、いよいよ我れわれの改革案の出番だ!

別冊宝島一八三号 一九九三年八月二十三日発行 発行=宝島社



定価1010円(本体981円)
雑誌65986-88
T1065986881011